

5月20日(土)

口頭発表	A会場(17号館5階 510教室)		B会場(17号館5階 512教室)		C会場(17号館4階 411教室)	
司会	太田 陽子		鴻野 知暁		中川 奈津子	
13:30 14:10	A-1 p.1	思考動詞の自発的受身の 使用条件に関する一考察 —学習者の誤用を手掛かりに— 任 霞	B-1 p.31	中古和文における名詞述語の 肯否疑問文 藤原 慧悟	C-1 p.61	秋田方言のABAB型オノマトペに おける語基音の首韻連結と その特徴 工藤 真子
14:20 15:00	A-2 p.7	「の」と「が」の混用から みる学習者の名詞修飾と 主語の捉え方 孫 之依	B-2 p.37	フィクションにおける 役割語(女ことば)の通時的 変化 田野 聖一	C-2 p.67	北琉球語喜界島方言の トラスの補助動詞について 荻野 千砂子
司会	苅宿 紀子		池上 尚		澤村 美幸	
15:20 16:00	A-3 p.13	日本語受身文と中国語受 身文の対照研究 —属性づけと属性叙述から— 陳 曦	B-3 p.43	感情等を表す動詞および 形容詞の人称制限にお けるムード説の優位性 田中 悠介	C-3 p.73	福井県三国町安島方言に おける二項形容詞文の 格標示 松倉 昂平
16:10 16:50	A-4 p.19	「もの」の縮約形「もん」 とその文法的性質 新山 聖也	B-4 p.49	現代日本語における外 来語造語成分 王 雨	C-4 p.79	推量表現形式の選好性 に関する動態研究 —関東・関西地域を比較 して— 尾関 武尊
司会	苅宿 紀子		池上 尚		澤村 美幸	
17:00 17:40	A-5 p.25	デ格名詞句のスコープ解 釈と文構造 井上 恵利佳	B-5 p.55	漢語「透視」の展開 —専門語と一般語の関 係に着目して— 奥山 光	C-5 p.85	配慮の言語行動にお ける地域的志向 —話者の内省を手掛 かりに— 加順 咲帆

思考動詞の自発的受身の使用条件に関する一考察

—学習者の誤用を手掛かりに—

任 霞 (関西学院大学大学院)

1. はじめに

自発と受身の由来に関しては、山田(1936:318)では「自然勢は受身の一変態なり」¹、橋本(1969:276-282)では「自ら然る意味のものから受身のものが出た。(中略)受身の助動詞をつけたものが、一つの自動詞と似た意味をもつ」と指摘されており、主張が一致しないこともあるが、自発と受身が密接な関係にあることは否めない。また吉田(1971:121)、森田(2007:41)に指摘されているように、受身を表すか自発を表すかその境界線が明確でないこともある。仁田(1989:xxiv)は「故郷のことが懐かしく思われる」というような文を直接受身の種類として「自発的受身」と呼び、「直接受身と同様、能動文中に存在している非ガ格の必須構成要素のガ格への転換が起こっている」と指摘している。これに基づき、本発表では通常自発と呼ばれるものを自発的受身と呼ぶこととする。自発的受身の使用に関して、中国語母語話者日本語学習者の作文には次のような誤用²が数多く見られる。

(1) ネット、雑誌、図書館の利用カードなど、契約を結ぶとき、全部一年単位だ。今面白いこと<が思い出された→を思い出した>! フィットネスクラブのカードのことだ。

(日本語教員/学習歴 18 年半/作文)

(2) 「われわれは大きな象を避けることはできるが、小さな蠅を避けることはできない」という警句を聞くと、本当だと<思われる→思う>。(学部 2 年生/学習歴 1 年半/作文)

(1)~(2)において自発的受身より能動文のほうが適切である。なぜであろうか。

自発的受身の構文的制約に関しては、日本語記述文法研究会編(2009:283)では(3)~(5)のような文が挙げられ、「動詞が他動詞の場合、一般に [に, が] の文型をとり、文中では能動主体を表す名詞は「は」が付加されて、「~には」あるいは「~は」となるのが普通である」と指摘されている。

(3) この季節になると私{には/は}故郷の家が懐かしく思い出される。

(4) 昨日はなぜか故郷が懐かしく思い出された。

(5) [捜査会議で。若手の刑事が刑事部長に] 部長、私にはどう考えてみても、犯人は田中だと思われます。

(日本語記述文法研究会編 2009:286-287)

構文的には、(1)~(2)は(3)~(5)に類似し、対象を表すものがガ格、または思考の内容が「と」で表示されているため、自発的受身の構文的制約に違反しているわけではないと考え

¹ 「自然勢」は自発のことを指す。

² 誤用例は関西学院大学の于康氏によって開発された『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver. 11 から抽出したものであり、<誤用→正用>の形で表示される。

られる。

自発的受身の意味的特徴に関しては、日本語記述文法研究会編(2009:286)では「自発構文は、自然に起こる動きや思考、感情などを表す」と指摘されている。また自発的受身に使われる動詞の特徴については、「一般にこれらの思考・感覚・感情を表す動詞の意志性は高くなく、主体の意志を表す副詞『わざと』とは共起しないことから、意志性が低いことがわかる」と述べられている。ここから、自発に使用される他動詞自体に意志性が低いいため、能動表現でも自然に起こる動きや思考を表すことができるのではないかと考えられる。そうであるとすれば、自然に起こる動きや思考を表す思考動詞の能動表現と自発的受身との間どのような相違点があるのかという疑問が次に湧いてくる。これはなぜ(1)～(2)が誤用と見なされたのかという問題を解明するためにも明らかにすべき点であると考えられる。従って、自発的受身の使用条件について、上述した構文的制約のほか、意味的特徴からさらに掘り下げる必要がある。

そこで、本発表では学習者の誤用を手掛かりに、思考動詞の自発的受身の生起条件、能動文との相違を明らかにしたうえで、学習者の誤用メカニズムを解明することを目的とする。

2. 自発的受身の使用条件

自発的受身の使用条件について、渋谷(1993:28)では「動作実現のための条件が動作主体の外部にある」、「その外部条件が動作主体の意志の介入を全く許さないかたちで働く場合である」と述べられ、「外的強制条件」と呼ばれている。

(6)あの山をみると、いつも故郷のことが思い出される。(渋谷 1993:28)

(6)における「思い出される」は「あの山をみる」という要因によって、動作主体の意志の介入を全く許さないかたちで働き、自然と生起した動きや思考を表す。柴谷(2000)では同じ趣旨の指摘があり、能動態と自発態の意味の対立について次のように述べられている。

能動で表現するということは、動作主がその事態を意志的に引き起こしたのだ、また少なくとも、動作主は該当事態に対して、意志的コントロールができる立場にあった、という動作主主導による事態発生として該当事態を把握しているのである。それに対して、自発態を用いた場合には、動作主の意志的参与者としての関与を否定し、外的要因が事態発生の主導権を握っている、という形の事態把握を話者が行っている。(中略)動作主は関与するが、事態生起の根源は動作主の意志でなく、外的要因にある。(柴谷 2000:168)

つまり、自発の成立は外的要因が関与するということになる。この「外的要因」「外的強制条件」における「外的」は、渋谷(1993:28)では一見して「動作主体の外部」、例えば(6)における「あの山」、(3)における「この季節」のようなもののみを指すと思われやすいが、(7)のような用例も観察される。そこで、以下(7)を例にこの記述について検討を行うこととする。

(7) 自分の指先に目を落とすと、昨夜の行為が思い出され、恥ずかしくなった。(シドニイ・シェルダン(著)/中山和郎(訳)『ゲームの達人』)

(7)においては、「自分の指先」は動作主体の身体部位であり、動作主体の外部ではない。そのため、「動作主体の外部」よりもっと精密な記述が必要である。「NPが思い出される」という自発的受身は、動作主体が何かを見たりすることをきっかけに、主語に立つ対象が脳裏に浮かぶことを表す。従って、「外的要因」「外的強制条件」とは対象自体の内的性質などではなく、対象の外に存在する要因だと考えられる。つまり、結果状態からみると自動詞文と同じように、対象が自ら脳裏に浮かんでいることを表すものの、同時に何らかの要因が関与する事態であることも表す点においては、受身文にも類似していると考えられる。

一方、能動表現では何らかの要因が関与することもよくあるものの、必ずしも関与しなくても成立する。例えば(8a)や(9a)のような場合がその例として挙げられる。

(8)a. 風呂に入ってから缶ビールを飲み、ふと、ヒロ坊のことを思い出した。(嵐山光三郎『週刊朝日』)

b. この歌をうたうと、ちょうどこのころに結婚した大学時代の同級生の結婚式のことを思い出します。(徳永進『臨床に吹く風』)

c. 一緒に歌わせていただき、懐かしいあの日を思い出しました。(『筑波ウェブコーパス』)

d. 珍しく夜に母から電話がかかってきた。なかなか寝付けなくてゴロゴロバタバタしていたら、急に用事を思い出したのだという。(『毎日新聞』2014)

(9)a. 子どもへの取材が疎まれた。配慮は必要だと思う。(宮沢之祐『報道される側の人権』)

b. 鷗外読むと鷗外はエライなあと思うし、漱石読むと、漱石の方が上じゃないかと思う。(山田風太郎『風々院風々風々居士』)

(8a) (9a)においては必ずしも特別な要因が関与した結果、思い出したり思ったりしたわけではないと考えられよう。そして、このような事態は自発的受身で表現できない。一方、(8b) (9b)は「歌を歌ったり」「鷗外や漱石を読んだり」といった要因が関与している。そのような場合には自発的受身も自然な表現として成立する。ただし、(8c)における「思い出す」という行為は(8b)と同じように、「歌う」という行為とは関連しているものの、「一緒に歌わせていただき、懐かしいあの日が思い出されました。」という自発的受身が成り立たない。(8d)においても後件の事態は「～たら」で表される行為と関連するが、「なかなか寝付けなくてゴロゴロバタバタしていたら、急に用事が思い出された」という自発的受身は成立しない。従って、前件の事態は「思い出す」という思考行為と時間的に連続するだけでなく、「思い出す」という行為を直接引き起こす要因がならなければ、自発的受身は生起しにくいと考えられる。

以上を踏まえると、(10) (11)の自発的受身が成立するのは「花火を見ると」、「チャーチルの〇〇演説を読むたびごとに」という要因が関与しているためであると考えられる。

(10) 施設で母と一緒に、私がピアノを弾いて「七つの子」を歌うと、昔の姿が映像のように思い出されます。（『東京朝刊』2019）

(11) チャーチルの「完全なる絶対敗北」演説と「鉄のカーテン」演説を読むたびに、筆者にはなぜか、清澄な魂からほとぼしるバークの熱弁が、この時のチャーチルの言葉に蘇っているのではないかと思われてならない。（中川八洋『正統の憲法バークの哲学』）

それでは、以上、何らかの要因が関与する場合、能動表現と自発的受身の間にはどのような相違があるのであろう。続いてこの点を明らかにする必要がある。

3. 思考動詞の自発的受身と能動表現との意味的相違

思考動詞から構成される自発的受身は、自発の字義通り、自然に出来事が発生することができる。しかし、前述したように、「思い出す」「思う」といった思考動詞の能動文でも自然に起こる動きや思考を表すことができる。自発的受身文と能動文の両方とも成立する場合、どのような相違があるのであろうか。

「思い出す」「思う」の能動文と自発的受身を比べてみると、文の意味及び話者の事態の捉え方が異なるのではないかと考えられる。例えば、前掲した能動文の(8a)「風呂に入ってから缶ビールを飲み、ふと、ヒロ坊のことを思い出した」も、(8b)(8c)(8d)も、動作主体の思考行為は意志的に行うわけではないものの、動作主体が出来事を引き起こしたことを意味し、動作主体の思考行為が前景化されている。

一方、(10)「施設で母と一緒に、私がピアノを弾いて「七つの子」を歌うと、昔の姿が映像のように思い出されます」においては「思い出される」はもはや他動性を失い、自動詞と同じ資格で用いられ、動作主体の思考行為としての側面が捨象され、対象の変化を表す非対格動詞文と同じように対象の「昔の姿」が自ら脳裏に浮かぶという結果状態を表すことになる。つまり動作主体の思考行為ではなく、対象の変化した結果状態が前景化されている。このような考え方はこれまで認知言語学の領域において述べられてきた内容と関連する。

認知文法では事態に係わる参与者間の相互作用が、行為連鎖という認知モデルによって端的に表される。もっとも典型的なタイプの事態は、動作主が対象に何らかの働きかけを行い、それによって対象に何らかの状態変化が生じるというエネルギー伝達を介した有界的な事態である。影山(2001:5-8)は行為連鎖により動詞を他動詞、非能格動詞と非対格動詞に下位分類し、〈行為〉、〈変化〉、〈状態〉の角度からそれぞれの意味範疇を論じている。一般的には他動詞は〈行為〉、非対格動詞は〈変化〉または〈状態〉を表すものである。他動詞に対応する非対格動詞がある場合、つまり有対他動詞の場合、「切る/切れる」のように「有対他動詞は基本的に対象に変化を引き起こす動詞であり、有対自動詞は基本的に主体が変化することを表す動詞である」（日本語記述文法研究会編 2009:25）。しかし無対他動詞には対応する自動詞がないため、「他動詞に受身がついた形は、もはや他動性を失っており、自動詞と同じ資格で用いられている」（野村 1969:159）。そのため、「能動態では出来事に関与する〈動作主〉に焦点を当てて〈スル〉的な観点から表現する。一方、受動態では〈動作主〉的なものへ

の言及を避けて、起こったことを全体として捉えて〈ナル〉的な観点から表現する」³というように、能動文と受身文にそれぞれ話者のスル的な捉え方とナル的な捉え方が反映される。

以上を踏まえて、「(と) 思う」から構成される自発的受身と能動文の相違についても見てみよう。

能動文の(9a)「子どもへの取材が疎まれた。配慮は必要だと思う」においても、(9b)においても、動作主体の思考行為が前景化されている。それに、「ト思ふは個人的な意見である。(中略)そのため、文体的な制約ができる。(中略)公的に情報が発信される発話には、ト思ふのような個人情報への提示は不適切」である(森山 1995:175-176)。

一方、(5)「部長、私にはどう考えてみても、犯人は田中だと思われます。」と、(11)「～を読むたびごとに、筆者にはなぜか、清澄な魂からほとぼしるパークの熱弁が、この時のチャーチルの言葉に蘇っているのではないかと思われてならない。」では、動作主体の行為が背景化され、何らかの要因により思考の内容が自然と沸き起こることが表されている。これは「思われる」の「自分の意見を独断ではなく客観的に述べたり、主張を和らげたい場合に用いられる」(グループ・ジャマシイ 1998:58)という使用傾向とも一致する。

上述してきたように、思考動詞の能動文でも自発的受身でも自然に生じる動きや思考を表すことができる。しかし両構文に反映される話者の捉え方が異なる。すなわち、思考動詞の能動文では、動作主が意志的に行為を行うか否かにかかわらず、動作主体の思考行為が前景化され、話者のスル的な捉え方が反映されるのに対し、自発的受身は動作主体の行為が背景化されるとともに、何らかの要因により対象や内容が自然と脳裏に浮かぶという変化の結果状態が前景化され、話者のナル的な捉え方が反映されることで客観的な述べ方になる。

4. 学習者の誤用のメカニズム

『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver. 11 では、心理動詞の「(ら)れる」の過剰使用がもっとも多く観察された。中でも「感動する」「思う」「考える」「思い出す」という動詞が誤用の上位にある。そこで本発表では主に思考動詞に絞って自発の過剰使用を中心に考察を行う。学習者の産出した誤用は主に(1)と(2)のような自発の意味的制約に違反しているものである。以下、上述の使用条件をもとに分析し、考察を行った結果を示す。

(1)「今面白いことが思い出された→を思い出した！」では特定の要因が関与しないことから、自発的受身を使用すると、不自然な表現になる。(2)「『われわれは大きな象を避けることはできるが、小さな蠅を避けることはできない』という警句を聞くと、本当だなく思われる→思う。」においては、「〇〇という警句を聞くと」という要因が関与しているように思われるものの、「本当だな」という思考の内容は話者の個人的な意見であり、直接その要因が関与しているわけではなく、「思われる」を使用すると不自然な表現になる。

以上より、学習者は自然に起こる動きや思考などを表す際に、思考動詞の能動文を使用す

³ 池上(1981:226-227)による。

るか、自発文を使用するか、教科書や先行研究で述べられている自発構文の「自然に起こる動きや思考、感情などを表す」という意味機能だけでは判断しにくいために誤用が多発すると考えられる。従って、「何らかの要因により対象が自然と脳裏や心の中に生起する」のように、自発の意味機能をより精密的に述べ、対象の結果状態に記述の重きを置いたほうが理解しやすいのではないかと考えられる。

5. おわりに

本発表は学習者の誤用を手掛かりに、思考動詞の自発的受身の使用条件、能動文との相違、学習者の誤用メカニズムを考察してきた。その結果、次の3点が明らかになった。

- ①自発的受身の生起に何らかの要因が直接関与するという使用条件
- ②思考動詞の能動文と自発的受身の相違に関しては、能動文では動作主体の思考行為が前景化され、話者のスル的な捉え方が反映されるのに対し、自発的受身では動作主体の行為が背景化されるとともに、何らかの要因により、思考の対象や内容が自然と脳裏に浮かぶという変化の結果状態が前景化され、話者のナル的な捉え方が反映された客観的な述べ方になるということ
- ③学習者は非意志的行為を表す能動文と自発的受身との区別ができておらず、何らかの要因が関与するという自発的受身の使用条件、及び自発的受身に反映される話者のナル的な事態の捉え方が理解できておらず誤用が生じたということ

なお、思考動詞の「考える」においても「(ら)れる」の過剰使用が数多く観察されたが、自発・受身と可能の二つまたは三つにまたがっていたため、本発表では分析できなかった。これを今後の課題としたい。

参考文献

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店。
- 影山太郎(2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店。
- グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版。
- 仁田義雄(1989)「文型・文法情報についての解説」小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店。
- 日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法 2(第3部 格と構文・第4部 ヴォイス)』くろしお出版。
- 野村雅昭(1969)「近代語における既然態の表現について」土屋信一編『論集日本語研究 15 現代語』, 152-164. 有精堂。
- 橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店。
- 森田良行(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版。
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館。
- 吉田金彦(1971)『現代語助動詞の史的研究』明治書院。

「の」と「が」の混用からみる学習者の名詞修飾と主語の捉え方

孫之依^{ソノシイ}(関西学院大学大学院)

1. はじめに

本発表では中国語母語話者日本語学習者の作文コーパス『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver. 11¹ (以下、『YUK 作文コーパス』と略して表記する)における連体助詞「の」と格助詞「が」の混用現象について考察を行う。学習者の作文における「の」と「が」の使用について、以下のような混用例が抽出された。(〈誤用→正用〉)

- (1) みんなが立って, “Happy birthday to you…” を歌ってくれてびっくりしました。友達〈の→が〉プレゼントをくれて, 本当に幸せでした。そのとき, 私は世界で一番幸せな人だと思いました。(学部1年生/学習歴1年/滞日0/作文)
- (2) 六日はたいてい店〈の→が〉営業を始めます。特別な十五日は一家の団欒の楽しみのシンボルです。どの家でも必ず湯円を食べます。(学部3年生/学習歴2年半/滞日0/作文)
- (3) その日, 自分〈が→の〉部屋でいろいろと考えた。今までの人生を振り返った。(M1/学習歴4年半/滞日0/感想文)
- (4) これから見れば, 古代の中国人は創造性が強く, かつ, 独自の文化をほかの国々に広めて, 彼ら〈が→の〉開発を支援した。(学部4年生/学習歴3年半/滞日0/卒論)

(1)(2)は「の」から「が」に添削された用例であり、(3)(4)は「が」から「の」に添削された用例である。連体助詞「の」は、名詞が名詞を修飾する際に介するものであるのに対し、格助詞「が」がつく成分は、述語に関わる成分であり、主語と捉えるのが一般的である。このように、連体助詞「の」、格助詞「が」は異なる成分にも関わらず、誤用が現れている。しかも、『YUK 作文コーパス』における「の」と

¹ 誤用例は、いずれも于康による条件付きコーパスである『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver. 11からの引用である。添削者は、日本語母語話者2名である。添削者のうち1名は、日本語教育経験者、あるいは現役の日本語教員である。データの内訳は次の通りである。

①56校の大学(中国の大学は50校、日本の大学は6校)から収集した学部生、大学院生、日本語教員の作文(感想文、研究計画書、レポート、宿題、メール、翻訳、外交通訳の録音資料、卒業論文、修士学位論文、博士学位論文)と日本の大学や会社に在職中の教員と会社員の作文(数は少量)。

②日本語学習歴(使用歴を含む)は3ヶ月から38年まで。

③正用タグと文法タグ付き。

④ファイル数は4,909、文字数は6,428,034、タグ数は延べ234,936。

「が」の混用例をみてみると、学習歴1年といった初級レベルの学習者だけではなく、学習歴が10年以上の学習者の作文や大学の日本語専任教員の作文においても観察される。

これまで、連体助詞「の」に関する誤用研究は、「の」の過剰使用と不使用（奥野 2003 など）を中心とする考察が多く、「の」と格助詞の混用に関する先行研究はわずかしかない。しかしながら、「の」に関する誤用は、「の」の過剰使用と不使用以外、「の」と格助詞の混用も観察される。例えば、「の」と「が」「に」「で」「を」などとの混用である。

本発表は、「の」と「が」の混用を考察の対象とし、そのデータの分析をもとに、学習者の名詞修飾と主語の捉え方を考察する。「の」とその他の格助詞との混用は、他稿に譲ることとする。

2. 先行研究と問題点

日本語における「の」と「が」の選択について、奥津 (2007) を取り上げる。奥津 (2007) は、機能動詞文における格成分と連体・連用における「の」と「が」の使用に関して、以下のような例を取り上げている。

- (5) *今 太郎のジョギングを している。
- (6) 今 太郎が ジョギング (を) している。

(奥津 2007, p. 42)

(5) のように「太郎」の後に連体助詞「の」を付けることはできないことを (6) と比較して、奥津 (2007, p. 42) は「主語は機能動詞文において連体成分になれないのである」と結論づけている。しかしながら、機能動詞文だけでなく、一般述語文における「の」と「が」の使用条件についてはあまり触れられていない。

学習者の「の」と「が」の混用について、于・林編 (2017) は同コーパスから「の」と「が」の混用例を一部抽出し、分析を行っている。具体的な誤用例を以下に挙げる。

- (7) これらの問題は地球温暖化<の→が>原因でしょう。(学部1年生/学習歴1年/滞日0/作文)
- (8) 「ようだ」と「そうだ」が用いられる事態に対して話者の捉え方<が→の>違いと考えられる。(学部4年生/学習歴3年半/滞日0/卒論)
- (9) これを明らかにするため、まず、亀文化<が→の>中国での変遷を見てみよう。(M3/学習歴6年か6年以上/滞日0/修論)

(7)～(9) は、于・林編 (2017) で取り上げられていた用例である。(7) は「の」から「が」に添削されている用例であり、(8) (9) は「が」から「の」に添削されて

いる用例である。(7)については、「NP₁は+NP₂の原因だ」「NP₁は+NP₂が原因だ」という両構文において、前者は「NP₁」が原因であり、後者は「NP₂」が原因であるという相違を指摘している。(8)については、「違い」は構文上では動詞述語ではなく、名詞として使用されているため、「が」ではなく、「の」を使用すると述べている。(9)については、「NP₁+NP₂+での+NP₃+VP」構文における「の」と「が」の選択であり、「NP₁」は「VP」の主語として解釈できる場合、「が」がつき、「NP₁」は「NP₃」の名詞修飾成分しか解釈できない場合、「の」がつくという使い分けを指摘している。

このように、「の」と「が」の混用研究は、あくまでも被修飾成分の語彙的特徴や複数のNPに関わる構文上の制約性などの文法ルールに違反する誤用を中心に考察が行われてきた。しかしながら、一般述語文「NP₁+NP₂~+XP」において、「NP₁」と「NP₂」の間に、どのような場合「の」を使用するか、どのような場合、「が」を使用するか、学習者の作文において混用が観察され、その使用条件や学習者の捉え方についてはまだ深く掘り下げられてはいない。例えば、以下のような誤用例である。

- (10) みんなが立って、“Happy birthday to you…”を歌ってくれてびっくりしました。友達<の→が>プレゼントをくれて、本当に幸せでした。そのとき、私は世界で一番幸せな人だと思いました。(学部1年生/学習歴1年/滞日0/作文)((1)の再掲)
- (11) 六日はたいてい店<の→が>営業を始めます。特別な十五日は一家の団欒の楽しみのシンボルです。どの家でも必ず湯円を食べます。(学部3年生/学習歴2年半/滞日0/作文)((2)の再掲)
- (12) その日、自分<が→の>部屋でいろいろと考えた。今までの人生を振り返った。(M1/学習歴4年半/滞日0/感想文)((3)の再掲)
- (13) これから見れば、古代の中国人は創造性が強く、かつ、独自の文化をほかの国々に広めて、彼ら<が→の>開発を支援した。(学部4年生/学習歴3年半/滞日0/卒論)((4)の再掲)

(10)(11)は「の」から「が」に添削されている用例である。(10)(11)「NP₁<の→が>+NP₂~+XP」において、「友達のプレゼント」「店の営業」のように、名詞修飾構造「NP₁のNP₂」自体も成り立つと考えられるが、「の」の使用が誤用と判断され、「が」に添削された。(12)(13)は「が」から「の」に添削されている用例である。(12)(13)「NP₁<が→の>+NP₂~+XP」において、「自分が~考えた」「彼らが~支援した」のように、「NP₁」は述語「XP」に関わる成分としても文としては成り立つと考えられるが、「が」の使用が誤用と判断され、「の」に添削された。本発表は、このように、「NP₁の/が+NP₂~+XP」において、「の」と「な」の使用条件を明らかにした上で、学習者の名詞修飾と主語の捉え方を考察する。

3. 名詞修飾と主語の捉え方

3.1 「の」と「が」の使い分け

3節では、「の」と「が」の使い分けに基づき、「の」と「が」の混用例を踏まえ、学習者の名詞修飾と主語の捉え方について考察する。

連体助詞「の」を介する前後成分については、意味分類の一般的な説明を試みる先行研究として奥津(1978)、内間(1990)、西山(2003)などがあり、「NP₁」と「NP₂」の間に存在する意味の多様性や多義性について論じている。その中で、「の」の意味分類には名詞修飾成分「NP₁」が被修飾成分「NP₂」の主語を表す用法も存在している。例えば、日本語記述文法研究会(2017, pp. 107-108)は、連体助詞「の」を用いる名詞修飾には、大きく分けて「修飾名詞が被修飾名詞の所属先や性質、基準点を表すもの」「修飾名詞が事態を構成する補語にあたるもの」という2つのタイプがあると指摘している。その具体例は以下のようなものである。

(14) 私の家、ガラスのコップ、店の前

(15) 田中の参加、食品の製造、大阪での開催

(日本語記述文法研究会 2017, pp. 107-108)

(14)における「私の家」は修飾成分が被修飾名詞の所属先を表すものであり、「ガラスのコップ」は修飾成分が被修飾名詞の性質を表すものであり、「店の前」は修飾成分が被修飾名詞の基準点を表すものであると解釈されている。(15)における「田中の参加」は「田中が参加する」を表すものであり、「食品の製造」は「食品を製造する」を表すものであり、「大阪での開催」は「大阪で開催する」や「大阪で開催される」などの意味があると解釈されている。上述した例をみると、名詞修飾構造「田中の参加」は、連体助詞「の」を介し、名詞修飾成分と被修飾成分の間に存在する前後関係は被修飾成分の主語を表していることが観察される。つまり、「の」を介する前後成分の意味関係には多様性があり、修飾成分が被修飾成分の主語を表す場合も存在する。加えて、西山(2003, p. 49)は、「NP₁のNP₂」の意味解釈については、多義的な解釈も可能であると述べている。

例えば、「友達のプレゼント」は「友達買ったプレゼント」や「友達持っているプレゼント」「友達へ渡すプレゼント」など「友達」と「プレゼント」の意味関係は、多義性を有するものであり、「プレゼント」に「友達の」という名詞修飾成分がつき、「プレゼント」に関する情報を付加することが可能になる。一方、「が」を使用すると、構文は「NP₁がNP₂～+XP」になり、「NP₁」は「XP」に関わる成分であり、「NP₁」と「NP₂」の間に存在する多義性が存在しないことになる。「の」を使用すると、「NP₁」は「NP₂」を修飾し、「NP₁のNP₂」は多義的な表現になり、「NP₂」に関する情報を付加することになる。

これを踏まえると、「の」を介し、修飾成分が被修飾成分の主語などの複数の意味解

積が存在することが可能であり、多義性を有する表現である。格助詞「が」がつくと、述語に関わる主語の成分であり、一義的なものであると考えられる。

3.2 「の→が」

- (16) みんなが立って、“Happy birthday to you…”を歌ってくれてびっくりしました。友達<の→が>プレゼントをくれて、本当に幸せでした。そのとき、私は世界で一番幸せな人だと思いました。(学部1年生/学習歴1年/滞日0/作文)((1)の再掲)
- (17) 六日はたいてい店<の→が>営業を始めます。特別な十五日は一家の団欒の楽しみのシンボルです。どの家でも必ず湯円を食べます。(学部3年生/学習歴2年半/滞日0/作文)((2)の再掲)

(16) において、「友達のプレゼント」という名詞修飾構造自体は成り立つと考えられる。3.1節における「の」の多義性からわかるように、「友達買ったプレゼント」や「友達持っているプレゼント」「友達へ渡すプレゼント」などの意味関係が存在している。「友達」に「が」がつく場合、「友達がプレゼントをくれ(る)」という構造になり、「友達」が述語「くれ(る)」に関わる主語としての成分になり、「くれる」の主語を限定している。「友達」に「の」がつく場合、「くれ(る)」の主語を限定していない。

(17) において、「店の営業」という名詞修飾構造自体は成り立つと考えられる。「店の営業」は「店が営業する」などの意味になる。「店」に「が」がつく場合、「店が営業を始めます」という構造になり、「店」が述語「始めます」に関わる主語としての成分になり、「始めます」の主語を限定している。「店」に「の」がつく場合、「始めます」の主語を限定していない。

3.3 「が→の」

- (18) その日、自分<が→の>部屋でいろいろと考えた。今までの人生を振り返った。(M1/学習歴4年半/滞日0/感想文)((3)の再掲)
- (19) これから見れば、古代の中国人は創造性が強く、かつ、独自の文化をほかの国々に広めて、彼ら<が→の>開発を支援した。(学部4年生/学習歴3年半/滞日0/卒論)((4)の再掲)

(18) において、「自分」に「が」がつく場合、「自分」が述語「考えた」と関わるものになり、「自分」と「部屋」における多義性が存在しない。3.1節における「の」の多義性からわかるように、「自分の部屋」という構造は、「自分が所有している部屋」などの意味関係が存在し、「の」を使用すると、「自分」は「部屋」を修飾し、「自分の部屋」は多義的な表現になり、「部屋」に関する情報を付加することになる。

(19) において、「彼ら」に「が」がつく場合、「彼ら」が述語「支援した」に関わる

ものになり、「彼ら」と「開発」における多義性が存在しない。「彼らの開発」という構造になると、「彼らが開発する」などの意味になり、「支援した」の主語を限定していないことになる。

これを踏まえると、「の」と「が」の使用は文としてはいずれも成立可能と考えられる。学習者が「の」と「が」の使い分けを理解していないため、誤用が現れると考えられる。要するに、学習者は、どのような場合、名詞修飾を使用するか、どのような場合、主語を使用するか、学習者がその選択条件に混乱し、混用現象が起きていることが明らかとなった。

4. おわりに

本発表では、学習者の「の」と「が」の混用例に着目し、そのデータの分析をもとに、学習者の名詞修飾と主語の捉え方を考察した。その結果、「NP₁」が名詞修飾になり「NP₁のNP₂～+XP」になる名詞修飾構造と、「NP₁」が主語になり「NP₁がNP₂～+XP」という述語文は、いずれも構文的には成り立つと考えられる。

「NP₁のNP₂～+XP」において、「の」を介し、被修飾成分の主語などの複数の意味解釈が存在することが可能であり、多義性を有する表現である。「NP₁がNP₂～+XP」において、格助詞「が」がつくと、述語に関わる主語の成分であり、一義的なものであると考えられる。

学習者は、上述したような場合において、名詞修飾を使用すべきか、主語を使用すべきか、その選択条件に混乱し、混用現象が起きていることが明らかとなった。

今後の課題として、以下の2点を挙げる。学習者の誤用については、「NP₁がNP₂～+XP」以外の構文も存在し、考察する必要性がある。そして、「の」と「が」の混用以外に、「の」と「で」「に」「を」などの助詞との混用も観察されるため、「が」以外の格助詞との混用も考察する必要がある。

参考文献

- 于康・林璋編 2017 『日語格助詞的偏誤研究 中』浙江工商大学出版社。
内間直仁 1991 『沖縄の言語と共同体』社会評論社。
奥津敬一郎 1978 『「ボクハウナギダ」の文法—ノとダの文法—』くろしお出版。
奥津敬一郎 2007 『連体即連用?—日本語の基本構造と諸相』ひつじ書房。
奥野由紀子 2003 第二言語としての日本語習得過程における言語転移の研究：
「の」の過剰使用を中心として。広島大学博士学位論文。
西山佑司 2003 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房。
日本語記述文法研究会 2017 『現代日本語文法 2 第3部 格と構文 第4部 形態論』くろしお出版。(2009 初版)

日本語受身文と中国語受身文の対照研究
—属性づけと属性叙述から—

陳 曦 (立命館大学大学院生)

1. はじめに

日本語受身文と中国語受身文の対応関係に注目した研究には、大河内(1983)、飯嶋(2007)、中島(2007)、梅(2014)、楊(2018)がある。これらの研究では、被害を表すことが日本語受身文と中国語受身文が対応する典型的な要因であると指摘されている。

しかし、被害を表す文でなくても、日本語受身文と中国語受身文が対応することがある。以下の(1)がその例である(主語に当たる部分は一重下線、目的語に当たる部分は点線、動詞は二重下線、中国語の受動標識「被」は波線で示す。aは日本語受身文、bは対応する中国語訳文である)。

(1) a. 好むと好まざるとにかかわらず、君たちはここでそれぞれの役割を与えられることになる。(1Q84:318-319)

b. 一旦踏入，不管你们喜不喜欢，你们都将在这个世界中被分别赋予使命。(1Q84:118)

(1a)では「好む」と「好まざる」の両方の状況があるため、「役割を与えられる」ことは、主語「君たち」が被害を受けることとは言いがたい。しかし、中国語訳文(1b)は、受動標識「被」を用いた受身文になっている。

以上のように、被害という観点だけでは、日本語受身文と中国語受身文との対応関係を説明できない。そこで、本稿では、「動詞述語による属性付与」(益岡 2021)という理論的枠組みを用いて、属性という概念から日本語受身文と中国語受身文との対応関係について考察を加える。

2. 先行研究

本研究の発端は、梅(2015)である。梅(2015)は動詞の意味的特徴から日本語受身文と中国語受身文との対応関係を考察したものである。梅(2015:56-57)は動詞を「一般動作動詞」「生産動詞」「位置変化動詞」「心理動詞」「言語活動動詞」に分け、各意味タイプの動詞が日本語受身文、中国語受身文に用いられるかどうかを考察している。次に示すのは、「位置変化動詞」のうち授受動詞、非情物の位置変化を表す動詞が用いられた例である。

(2) a. 鶴川の家は東京近郊の裕福な寺で、学資も小遣も食糧も潤沢に家から送られ、ただ徒弟の修業を味わわせるために、…

b. 他住在东京近郊，是颇有名望的寺院之子，学费，零用和口粮都由家中充分供给，…

(3) a. 机の上に郵便物が二つのかごには置かれてある。

b. 桌上放有两个信函。梅(2015:58)

(2)(3)では日本語受身文と対応する中国語訳文が受身文になっていない。これについて、梅(2015:58)は、(2)では被害の意味が含まれず、受益の意味が含まれていること、(3)では他動性が低く、ほぼ結果状態を表していることが中国語で受身文に訳されないことの要因としている。このような例に基づき、梅(2015)は授受動詞、非情物の位置変化を表す動詞は日

本語受身文に用いられるが、中国語受身文には用いられないと主張している。

しかし、梅(2015)の主張には反例がある。授受動詞「贈る」「与える」、非情物の位置変化を表す動詞「所蔵する」「保管する」¹が、日本語受身文にも中国語受身文にも用いられることがある。(4)は授受動詞の例、(5)は非情物の位置変化を表す動詞の例である。

(4) a. 次郎は敢闘賞を贈られた。

b. 次郎被授予敢闘獎。²

(5) a. 日本のスーパーリアリズムを代表する作家として評価され、全国各地の美術館に作品が所蔵されている。(朝日新聞 2019/01/10)

b. 作为日本超写实主义的代表画家享有盛誉，他的作品被收藏在全国各地的美术馆里。(朝日新聞中文網 2019/01/16)

梅(2015)は、あくまで被害という観点から日本語受身文と中国語受身文との対応を捉えようとしているが、木村(1992:10)が指摘するように、中国語受身文の成立に必要なのは、主語に立つ対象が動作・行為の結果として被る何らかの〈影響〉を明示することである。この観点から見ると、被害は主語が被った影響の一つに過ぎない。

3. 本稿の立場

まず、本稿の理論的枠組みを提示する。(4)では、「敢闘賞を贈られる」は主語「次郎」が賞をもらったことを意味し、(5)からは、作家の作品に価値があると認められたことが読み取れる。本稿では、これらを「動詞述語による属性付与」(益岡 2021)に基づき、動詞述語による主語名詞句への属性付与と捉える。

属性は、人などを含む広義の存在が備えている特徴・特性を指す(益岡 2021:17)。動詞述語による属性付与の具体的な内容は、益岡(2021)に沿い、(6)に示す。

(6) 動詞述語による属性付与

A 属性叙述動詞による属性付与：性質属性(例：鯨は哺乳類に属する動物だ。)

B 事象叙述動詞による属性付与

B1 反復事象からの変容：習性属性(例：あの人はいつも朝早く起きる人だ。)

B2 パーフェクトからの変容

B2-1 性質属性(例：それは白く塗られた壁だ。)

B2-2 履歴属性(例：東洋学の泰斗の内藤湖南は新聞記者から京大教授に招かれた人であり、…)

益岡(2021:48-50)

(6)について益岡(2021:48-51)は以下のように説明している。「属する」などの動詞は事象が介在することはなく、本来的に属性を表すという点で形容詞的な性格を有するため、このような動詞による属性付与のタイプは「A 性質属性」である。「B1 習性属性」は繰り返し生起する事象を当該の対象に帰される習性で見做すものである。「B2-1 性質属性」は対象の状態変化を表す変化動詞と関係し、形容詞または形容詞的述語で言い換える。「B2-2 履歴属

¹ 志波(2015:248)では、「保管する」「収蔵する」が非情主語一項の受身構文に用いられる位置変化動詞とされている。

² (4a)は益岡(1991:118)から引いたもので、(4b)は筆者の訳である。

性」は過去に出現した事象を表す述語名詞句によって付与される。

最後に、本稿の立場を述べる。李(2017:86)は、属性叙述受身文³に注目し、中国語の属性叙述受身文は日本語のそれと並行的であり、対応する部分が多いと指摘しているが、本稿では、属性叙述受身文に限定せず、「動詞述語による属性付与」(益岡 2021)を参照し、属性のタイプを明示しながら、日本語受身文と中国語受身文が対応することを説明していく。

4. 属性による日本語受身文と中国語受身文との対応

4.1 授受動詞の場合

本節では、授受動詞が用いられる場合、属性づけにより、日本語受身文と中国語受身文が対応することを説明する。

授受動詞は送り手、受け手、贈り物に関わる。授受動詞が使用される場合、日本語受身文では、受け手または贈り物が主語になることがある。(7)(8)⁴は単なる物の授受を表す場合の日本語受身文と中国語受身文との対応関係を示す例文で、(7)は受け手が主語、(8)は贈り物が主語になる例である。

(7) a. 陽子は洋平から花束を贈られた。

b. *阳子被洋平送了一束花。

(8) a. 花束が洋平から陽子に贈られた。

b. *一束花被洋平送给了阳子。

(7)(8)いずれも中国語受身文が不自然である。その要因を考えると、単なる物を授受する場合、物の所有権が変わるが、そのことによって、主語に何の影響も与えない。そのため、中国語では不自然な受身文になると考えられる。

単なる物ではなく、賞状などの賞に関わる物の授受を表す文で、贈り物が主語になる場合、日本語受身文と中国語受身文との対応関係を示したのが(9)である。

(9) a. 授賞式に羽織袴で出席した川端にメダルと賞状が贈られた。

b. *奖章和奖状被授予了身着羽织袴出席了颁奖仪式的川端。

(9)でも中国語受身文が不自然である。それは、上に述べたのと同様、所有権の変更を表すことに留まるからである。

一方、賞に関する物の授受を表す文で、受け手が主語になる場合の日本語受身文と中国語受身文との対応関係を示したのが(10)である。

(10) a. 授賞式に羽織袴で出席した川端はメダルと賞状を贈られた。

b. 川端身着羽织袴出席了颁奖仪式，被授予了奖章和奖状。

(10)では日本語受身文と中国語受身文が対応している。それは、メダルと賞状の授受は、所有権の変更だけではなく、受け手が賞をもらったことを意味するからである。更に、賞をもらったことは受け手の受賞の経験である。このような受賞の経験は、「動詞述語による属性付与」のうち「履歴属性」(益岡 2021:48)に当たる。このように、(10)では、主語が新た

³ 益岡(2000:56)は「属性叙述受動文とは、ある対象が何らかの属性を有することを表すものであった」と説明している。

⁴ (7a)(8a)は仁田(2002:82)から引いたもので、(7b)(8b)は筆者の訳である。

な履歴属性を獲得していることにより、日本語受身文と中国語受身文が対応している。

本稿では、受身文で主語が新たな属性を獲得することは属性づけであると考えている。以上、属性づけにより、日本語受身文と中国語受身文が対応することが見られる。

4.2 非情物の位置変化を表す動詞

本節では、非情物の位置変化を表す動詞が用いられる場合、属性叙述により、日本語受身文と中国語受身文が対応することを説明する。

非情物の位置変化を表す動詞は、場所を表す表現と共起する。非情物の位置変化を表す動詞が「テーブル」のような単なる場所を表す表現と共起する場合、日本語受身文と中国語受身文との対応関係を示したのが(11)である。

(11) a. 鉢植えが近くのテーブルに置かれていた⁵。(1Q84:220)

b. *盆栽被摆在身旁的桌子上。(筆者訳)

(11)では中国語受身文が不自然である。それは、「テーブル」は鉢植えの存在場所のみを表し、主語「鉢植え」に対して影響をおよぼすことがほとんどないからである。

一方、「資料館」「美術館」は存在場所だけではなく、そこにある物は価値があるということも意味する。非情物の位置変化を表す動詞が「資料館」などのような場所を表す表現と共起する場合、日本語受身文と中国語受身文との対応関係を示した例文が(12)である。

(12) a. D51はJR追分駅近くにある旧鉄道資料館に保管されていた。(朝日新聞 2019/06/14)

b. D51曾被保管在位于JR追分站附近的旧铁道资料馆里。(朝日新聞中文網 2019/06/17)

(12)では日本語受身文と中国語受身文が対応している。その要因を考えると、「資料館」は、「D51」の存在場所を表すだけではなく、「D51」が代表的な蒸気機関車であることを示している。更に、代表的というのは、「動詞述語による属性付与」のうち「性質属性」(益岡 2021:48)に当たる。また、「D51」は代表的という性質属性を持つため、資料館に保管されるようになるので、「代表的」は主語「D51」の固有の性質属性であると考えられる。このように、(12)では、主語の固有の性質属性を叙述していることにより、日本語受身文と中国語受身文が対応している。

本稿では受身文における主語の固有の属性を叙述することは属性叙述であると考えている。以上、属性叙述により、日本語受身文と中国語受身文が対応することが見られる。

5. 被害を表す受身文と属性を表す受身文

前節では、日本語受身文と中国語受身文が対応する要因は、属性づけと属性叙述の2種類があることを明らかにした。本節では、属性を表す受身文と従来の被害を表す受身文との違いを明らかにするには、主語の有情性と動詞の特徴に注目し、比較を行う。また、属性に生じた変化が被害をもたらすことを示していく。

⁵ 志波(2015:248)では、「置く」が非情主語一項の受身構文に用いられる位置変化動詞とされている。

まず、被害を表すことにより、日本語受身文と中国語受身文が対応する例文(13)を見る。

(13) a. 撃ち合いになって、県警の警官が三人殺された。(1Q84:270)

b. 双方激战，县警察本部的警察被打死三人。(1Q84:341)

(13)では「殺された」ことが被害に当たる。また、(13)をみて、被害を表す受身文では、主語が有情物で、述語には「殺す」のような具体的な動作を表す動詞が使用されている。

次に、属性を表すことにより、日本語受身文と中国語受身文が対応する例文(14)を見る。

(14) a. オサガメは国際自然保護連合の絶滅危惧種に指定されている。(朝日新聞 2019/08/02)

b. 棱皮龟被世界自然保护联盟指定为濒危物种。(朝日新聞中文網 2019/08/02)

(14)では、絶滅危惧種に指定されることは、オサガメが絶滅リスクが高い種になることを意味する。絶滅リスクが高いことは、「性質属性」(益岡 2021:48)に当たるため、(14)では、主語「オサガメ」が新たな性質属性を獲得している。このように、属性づけにより、日本語受身文と中国語受身文が対応している。

更に、(14)では主語「オサガメ」が具体的な動物を指すのではなく、「オサガメ」という種を指すため、非情物主語であると考えられる。「指定する」は具体的な動作を表す動詞ではない。このことから、属性を表す受身文では、主語が有情物に限定されず、具体的な動作を表さない動詞を使用することができるのがわかる。

一方、(13)のような殺されて命がなくなることは被害のことであるが、属性に生じた変化は、受身文の主語に被害をもたらすことがある。(15)(16)がその例である。

(15) a. 小田氏治は最近、テレビや本で「戦国最弱の武将」などと紹介され、注目を浴びている。(朝日新聞 2018/11/23)

b. 最近，在电视剧和书中，小田氏治因被介绍成“战国最弱的武将”而受到瞩目。(朝日新聞中文網 2018/11/28)

(16) a. そうなれば、自分は勲章を剥奪され、職まで奪われるのではないだろうか。(裁判百年史ものがたり：9)

b. 这样的话，自己的军功甚至工作岂不是都要被夺走了吗？(与手枪的不幸相遇：13)

(15)では主語「小田氏治」は「戦国最弱の武将」という「性質属性」(益岡 2021:48)を獲得している。そのため、(15)では属性づけにより、日本語受身文と中国語受身文が対応している。また、「最弱の武将」と紹介されることは小田氏治にとって望ましくないことで、被害として捉えることもできる。このように、新たな性質属性を獲得する場合、被害をもたらすことが見られる。

(16)では「勲章を剥奪される」ことは、「勲章を持つ人」から「勲章を持たない人」になることを意味する。これは、勲章を持つという「性質属性」(益岡 2021:48)の喪失である。このような属性の喪失は、「財布を盗まれた」のような所持品の喪失と同じように、被害をもたらしている。

6. まとめ

従来の研究では、被害という観点から、日本語受身文と中国語受身文との対応を捉えている。本稿は「動詞述語による属性付与」(益岡 2021)を用いて、属性という概念から日本語受身文と中国語受身文が対応することを示した。具体的には、以下のことが明らかになった。

- ① 日本語受身文は授受動詞を用いる場合、中国語受身文と対応できないとされるが、「次郎は敢闘賞を贈られた」は中国語受身文と対応できる。それは、受身文で主語が新たな履歴属性を獲得したからである。
- ② 日本語受身文は非情物の位置変化を表す動詞を用いる場合、中国語受身文と対応できないとされるが、「この作品が美術館に所蔵される」は中国語受身文と対応できる。それは、受身文における主語の固有の属性を叙述しているからである。
- ③ 日本語受身文と中国語受身文は、属性づけと属性叙述の2種類の要因により、対応することができる。属性づけとは、受身文で主語が新たな性質属性や履歴属性を獲得することである。属性叙述とは、受身文における主語の固有の属性を叙述することである。
- ④ 被害を表す受身文と属性を表す受身文を比較した結果、主語の有情性と動詞の特徴に違いが見られる。被害を表す受身文では、主語が有情物で、述語には具体的な動作を表す動詞が使用されている。属性を表す受身文では、主語が有情物に限定されず、具体的な動作を表さない動詞を使用することができる。また、属性に生じた変化は受身文の主語に被害をもたらすことがある。

7. 参考文献

- 飯嶋美知子(2007)「論説文の訳文から見た受動文の日中対照研究—中国語母語話者への教育の一環として—」『早稲田大学日本語教育研究』10, pp. 17-30.
- 大河内康憲(1983)「日・中語の被動表現」『日本語学』2(4), pp. 31-38, 明治書院.
- 木村英樹(1992)「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』389, pp. 10-15, 内山書店.
- 志波彩子(2015)『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』和泉書院.
- 中島悦子(2007)『日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』おうふう.
- 仁田義雄(2002)『辞書には書かれていないことばの話』岩波書店.
- 梅佳(2014)「日本語受身文とその中国語対訳文の対照研究:「動作主なし」の直接受身文を中心に」『比較社会文化研究』35, pp. 53-60.
- 梅佳(2015)「日中受身文の構文分析:述語動詞の意味特徴を中心に」『地球社会統合科学研究』3, p55-62.
- 益岡隆志(1991)「受動表現と主観性」, 仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』pp. 105-121, くろしお出版.
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 益岡隆志(2021)『日本語文論要綱—叙述の類型の観点から—』くろしお出版.
- 楊凱榮(2018)『中国語学・日中対照論考』白帝社.
- 李藝(2017)「現代中国語の“被”受動文—日中対照研究からのアプローチ—」『神戸外大論叢』67(2), pp. 65-93

「もの」の縮約形「もん」とその文法的性質

筑波大学 非常勤研究員 新山聖也 (NIYAMA Seiya)

1. はじめに

モノは意味的・文法的に多様な用法を持っている。意味的には内容語として物質だけでなく人を表すことがあり、文法的には機能語として複合辞や終助詞などの用法を持つ。

- (1) a. 冷たいものが飲みたい。(物質)
- b. 最近の若いものは軟弱だ。(人)
- (2) a. 子供は外で遊ぶものだ。(複合辞)
- b. だってその本、つまらないもの。(終助詞)

更に、モノはモンという縮約形を持つ点で、形態的にもバリエーションを持つ。現代共通語におけるモンを取り扱う文法研究は多くないが、(3)のように、連体修飾の有無という統語論的条件によって蒙ンの出現が制限されることがある。

- (3) a. ゴミ捨て場から____ {もの/*もん} を拾ってくるな。
- b. ゴミ捨て場から汚い {もの/もん} を拾ってくるな。

このように、モノとモンは単に話しことばと書きことばという文体の違いだけでは説明できない、文法的性質に関する相違点を持つ。本発表では、このような縮約形蒙ンの文法的性質を明らかにすることを目的として分析を行う。

2. 研究の背景

2.1 縮約と文法化

まず、本稿では、モンについてモノの語末の母音である“o”が脱落した形式と考え、縮約形として捉える立場を取る (cf.近藤 2005、小原 2021)。

縮約形一般については、文体との関係のほかにも、史的研究において文法化との関係が指摘されている。小柳 (2018) は機能語生産という用語を用いるが、その特徴の一つとして「可能であれば形態が縮小する (小柳 2018 : 63)」という特徴を挙げる。例えば、テアリがタリになる過程ではテとアの融合、タリがタになる課程ではリの脱落という形で形態の縮小が起こる。内容語が機能語となる機能語化の段階のみならず、機能語から機能語への多機能化の段階においても形態の縮小は起こり得る。

また、三宅 (2005) の指摘する通り、現代語という共時態においても文法化を想定することで有効な分析が得られることがある。現代語における縮約形と文法化の関係について述べた研究として原田 (2015) が挙げられる¹。原田 (2015) はトイウカの用法を「言う」の意

¹ 原田 (2015) は現代語の共時態における文法化を積極的に想定しておらず、トイウカの史的文法化について今後の課題として取り扱うべき対象とする。しかしながら、現代語に共存する用法同士の関係を捉えようとしている点で、現代語における縮約形と文法化の関係を取り扱った分析としても位置付けられる。

味が残る発言改正用法と「言う」の意味が残っていない話題調整用法の2種類に分類し、発言改正用法と比べて話題調整用法においてテカ・ツカという縮約形が出現しやすいことを量的調査によって指摘している。原田は話題調整用法において「言う」が語彙の意味を失っている点と縮約が起こるといふ音韻現象を文法化の観点から関連づけ、意味の抽象化に伴って縮約が起こるものと述べている。なお、トイウカ自体が「言う」といふ本動詞に由来する機能語と考えられるが、前述の通り、形態の縮小は多機能化の段階にも見られる変化である。このように、現代語の共時態に共存する形式間の関係を取り扱う際にも、文法化を想定する枠組みは有効と考えられる。

2.2 名詞「もの」の位置付け

続いて、名詞としてふるまうモノに関する先行研究を確認する。名詞モノはしばしば形式名詞として扱われることがある。ただし、玉懸 (2016) が指摘する通り、従来、形式名詞と呼ばれるものには名詞として振舞わない形式も混在しており、形式名詞という分類が持つ問題点も指摘されている。そして、玉懸 (2016) と同様の問題点を指摘する藤田 (2019) は、物質を表すモノ (物) を実質名詞とみなし、人を表すモノ (者) だけを形式名詞と認める立場を取る。藤田 (2019) は、「連体修飾を承けて用いられるもの」「名詞性を持つもの」「実質名詞と異なる意味を持つもの」の3点に基づいて、形式名詞を捉えている。3点目の例として、ここでは「点」の例を確認する。

- (4) a. ここに点のように見えるのが、病原菌だ。
- b. 行傍に点を打って強調した。
- c. 彼女のよい点を挙げて下さい。 (藤田 2019 : 466)

(4a, b) の「点」は、単独で用いられる実質名詞「点」であり、「点々」と入れ替えても文が成立する。一方、(4c) の「点」は「点々」と入れ替えられず、単独で出現する「点」と異なる意味を持つ。実質名詞としての用法を持つ名詞に関して、藤田 (2019) は (4c) のように実質名詞との意味の棲み分けを持つものを形式名詞とみなしている。

これを踏まえて、藤田 (2019) におけるモノの取り扱いを見る。物は「もの (=物質) に対する執着を捨てよ (藤田 2019 : 465)」のような単独の用法を持つ。一方、者は (5) のように単独の用法を持たず、単独の用法を持つ物と異なる意味を持っている。

- (5) 公園に {人/*者} がたくさんいる。

このことから、藤田 (2019) は者が形式名詞である一方、物は形式名詞ではないとみなしている。一方で、藤田 (2019) においては縮約形モンについて考慮されておらず、名詞モノの位置付けについても一考の余地があると考えられる。

3. 「もん」の拘束性と名詞「もん」の位置付け

まず、モンの出現可否について (6) を確認する。(6b) のように名詞であっても、(6c) のように複合辞であっても、(6d) のように終助詞であっても、縮約形モンは容認される。一方、(6a) と (6b) の対立から、(6a) のように連体節を伴わない名詞においてはモンが容

認められないことがわかる。

- (6) a. ゴミ捨て場から____ {もの/*もん} を拾ってくるな。
 b. ゴミ捨て場から汚い {もの/もん} を拾ってくるな。
 c. 犬は散歩に行きたがる {もの/もん} だ。
 d. わたしは外に出たくない {もの/もん}。

この現象観察から、縮約形モンは拘束性を持っていると考えられる。つまり、(6b-d) においては下線部の連体節や文を伴っているが、(6a) においてはモノが前接形式を伴わず、単独で出現している。モンは拘束形式であり、単独で出現することができないため、(6a) のモノはモンに交替することができない。

この事実は、現代語に文法化を想定するような枠組みから説明できる。2.1 節で見た通り、モンは形態の縮小を起こしている点で、文法化の特徴を持っている。これに加えて、大堀 (2005) は文法化の基準の一つとして「形態素の拘束性」を挙げており、自由形式に対して拘束形式の方が文法化の度合いが高いとしている。つまり、(6) においてはモンの方が文法化の度合いが高く、そのため、一貫して「形態の縮小」「形態素の拘束性」という文法化の特徴を示していると整理することができる。

ここで、名詞としての用法に着目し、2.2 節の議論を振り返る。藤田 (2019) は物質を表すモノ (物) を実質名詞、人を表すモノ (者) を形式名詞とみなしていた。これは、物が単独の用法を持つのに対し、者が単独の用法を持たないためである。

これを踏まえると、モノとモンにも、同様の対立を想定することができる。すなわち、名詞モノは単独の用法を持つ自由形式であるが、名詞モンは常に連体修飾を承ける必要がある拘束形式である。藤田 (2019) の議論に従えば、名詞モノが実質名詞とみなされるのに対して、名詞モンは形式名詞であるとみなされる。この事実は表 1 のように整理できる。

表 1 名詞モノ・モンにおける統語・意味・形態論的性質の対応

	実質名詞	形式名詞		
統語	自由形式	拘束形式		
意味	物 (物質を表す)		者 (人を表す)	
形態	モノ	モン	モノ	モン

表 1 は、藤田 (2019) が指摘する「物」と「者」に関する意味論的対立に加えて、モノとモンに関する形態論的対立が存在し、それが実質名詞 (自由形式) であるか形式名詞 (拘束形式) であるかの違いに関与していることを示している。

3 節では、モンが拘束性を持つことを指摘し、蒙ンの拘束性がモノと比べて文法化の度合いが高いことに由来する特徴であることを述べた。そして、名詞として、モノが実質名詞としてふるまうのに対して、モンは形式名詞としてふるまうことを指摘した。いずれも縮約形のふるまいについて、文体的性質ではなく、文法的性質から説明ができることを主張した。

4. 有標・無標からみる「もの」と「もん」

縮約形は典型的に話しことばに出現しやすいと考えられる。表2はコーパスを調べ、語彙素「物」「者」「もの」(終助詞)の書字出現形が「もの」であるか、「もん」であるか、出現回数(割合)をまとめたものである。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)ではモンが全体の4%程度しか出現しないが、『日本語日常会話コーパス』(CEJC)ではモンが全体の67%程度の割合で出現しており、モンは話しことばに出現しやすいと考えられる。

表2 語彙素「物」「者」「もの(終助詞)」の書字出現形

	もの	もん
BCCWJ (書きことば)	262537 (約 96.1%)	10708 (約 3.9%)
CEJC (話しことば)	1797 (約 33.2%)	3617 (約 66.8%)

ただし、話しことばにおけるモノとモンの出現分布は、全ての用法において一様であるわけではない。4節では、有標・無標という観点から、話しことばの中でも名詞(内容語)と複合辞・終助詞(機能語)とで異なった性質を持つことを観察する。

ここでは、3種類のモノとモンについて、『日本語日常会話コーパス』(CEJC)で検索を行った。一つ目は名詞モノ、二つ目は複合辞モノダ、三つ目は終助詞モノである。終助詞については、品詞の小分類が「助詞-終助詞」の用例について検索を行った。名詞と複合辞については、まず、語彙素「物」+語彙素「だ」の用例について検索を行い、手作業で名詞と複合辞、判定できないものを分類した²。そして、語彙素「物」「者」の全体の用例数から、複合辞モノダの用例数を引き、名詞モノの用例数を計算した。

複合辞モノダについては、日本語記述文法研究会(編)(2003:220-223)を参照し、「本質・傾向」「当為」「回想」「感心・あきれ」の用法を持つものと「その他」とされる「～したいものだ」や「～しそうなものだ」などを複合辞モノダとして認定した³。(7)～(11)にCEJCに出現した各用法の実例を掲載する。

- (7) いーや誰でも親知らずは生えてくるものなんだってゆわれたよ。(本質・傾向)
- (8) 戦争なんかするもんじゃないね。(当為)
- (9) しょうがないから片手で抱いて片手でベビーカーを畳んで抱えてね立ってたもんだけどね。(回想)
- (10) ほんとにもうよくこんなんでも三年間持ったもんだよ。(関心・あきれ)

² 具体的には接続助詞相当の複合辞である可能性のある「もので」「ものだから」「ものなら」や会話における非流暢性のため文脈の読み取れないものを排除した。排除した用例は、モノが66件、モンが115件となった。

³ 以下の用例はCEJCの実例であるが、「汗」が主語となり「タオルで拭くもの」が述語となるような名詞述語文としても、「汗はタオルで拭く」という文に複合辞モノダが後接している文としても解釈できる。このように、名詞モノとも複合辞モノダとも判定しにくい例がみられたが、その場合は一貫して複合辞モノダと分類している。このため、表3のデータは、複合辞モノダを広くとったデータと言える。

- (i) 普通タオルで拭くものじゃないの、汗って。(CEJC)
 - a. [汗]は[タオルで拭くもの]だ。
 - b. [ふつう汗はタオルで拭く]ものだ

(11) それ研究してくれたってよさそうなもんだよ。 (その他)

以上の処理を行い、用法別のモノとモンの分布を調査したデータが表3である。

表3 CEJC (話しことば) における「もの」と「もん」の分布

	もの	もん
名詞モノ	1652 (約 74.0%)	579 (約 26.0%)
複合辞モノダ	26 (13.0%)	174 (87.0%)
終助詞モノ	53 (約 1.9%)	2,749 (約 98.1%)

表3からは、名詞においてはモノの割合が多いのに対し、複合辞や終助詞においてはモンの割合が多いことがわかる。つまり、話しことばにおいて、名詞ではモノが無標 (unmarked) な形式となり、縮約形モンは有標 (marked) な形式となるが、一方で、複合辞と終助詞においては反対であり、モンが無標な形式となり、モノが有標な形式となる。

名詞と複合辞・終助詞における有標・無標の対立は、文体的な性質とも関与している。(12) の名詞において、モンはぞんざいな話し方であるが、モノはあくまで中立的な話し方でありとりわけ丁寧という印象は受けない。一方、(13) の終助詞においては、むしろモノが丁寧な話し方であるのに対し、モンはあくまで中立的な話し方でありとりわけぞんざいな話し方ではない。このように、文体的性質からも、名詞においてはモノこそが無標である一方で、終助詞においてはモンこそが無標であるという対立が得られ、内容語であるか機能語であるかという文法的性質が縮約形の文体的性質に関与していることがわかる。

(12) 甘い {もの/もん} が食べたい。

(13) 君は頑張った {もの/もん} ね。

なお、(14) の複合辞モノダにおいては、モノであってもモンであっても、特別にぞんざいな印象や丁寧な印象は受けないと思われる。これを踏まえると、複合辞モノダは、名詞モノと終助詞モノの間間的な性質を持っているものと考えられる。実際、表3においても、複合辞モノダは終助詞モノほどモノの使用率が低くなく、間間的な性質を示している。

(14) 若いうちはそういうことでたくさん悩む {もの/もん} だよ。

以上の通り、名詞モノではモノが無標となるのに対し、終助詞モノでは縮約形モンが無標となる。この事実も、現代語に文法化を想定する枠組みによって捉えることができる。つまり、文法化の度合いがより低い名詞 (内容語) においては、形態の縮小が起こらないモノが無標である一方、文法化の度合いがより高い複合辞・終助詞 (機能語) ではむしろ形態の縮小が起こったモンが無標であると考えられる。

そして、複合辞と終助詞の間にある差については、名詞性に由来する違いと考えられる。日本語においては、「はずだ」や「ようだ」のように「名詞+だ」が助動詞相当の機能語として働くことがあり、この現象は「予定だ」や「様子だ」のような文末名詞文にも共通している。この事実を踏まえると、複合辞モノダは機能語であるものの、日本語の体系の中で一般に名詞が出現し得る位置にモノが生起している点で、わずかに名詞性を残しているものと

考えられる。この名詞性に関する対立から、相対的に名詞性を残している複合辞モノダは終助詞より文法化の度合いが低く、名詞と終助詞の中間的な性質を示すものと考えられる。

5. まとめ

本発表では、モノとモンに関して、話しことばと書きことばという文体の違いだけでは説明できない、文法的性質に関する対立を持つことを主張した。

3節と4節で述べたことをまとめると、単純にモノとモンという形態だけを比較した場合にはモンの方が文法化の度合いが強いと考えられる。しかしながら、蒙ンのふるまいはどの形式においても同様であるわけではなく、文法化の度合いが低い内容語と文法化の度合いが高い機能語で蒙ンのふるまいが異なることを指摘した。後半の議論は文体的性質とも関わるが、本発表は縮約形のふるまいについて文法的性質に注目して説明することを試みた研究として位置付けることができる。

調査資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

国立国語研究所『日本語日常会話コーパス』

参考文献

大堀壽夫 (2005) 「日本語の文法化研究にあたって：概観と理論的課題」『日本語の研究』, 1-3, pp.1-17.

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023) 「『日本語日常会話コーパス』設計と構築」『国立国語研究所論集』 24, pp.153-168.

小原雄次郎 (2021) 「東北地方の談話資料に見られる終助詞「モノ類」の形態的変異の地理的分布」『東北文化研究室紀要』 62, pp.1-14.

小柳智一 (2018) 『文法変化の研究』くろしお出版.

近藤雅恵 (2005) 「日本語の口語的変形」『人間文化論叢』 8, pp.289-296.

高橋雄一 (2021) 「「もの」「こと」を含む複合辞の広がり」『東アジア国際言語研究』 2, pp.1-12.

玉懸元 (2016) 「それは本当に形式名詞か：後件肯定の誤謬」『中京大学文学部紀要』 50-2, pp.1-17.

日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第8部モダリティ』くろしお出版.

原田幸一 (2015) 「若年層の日常会話における「トイウカ」の使用：縮約形「てか・つか」に注目して」『日本語の研究』 11-3, pp.16-31.

藤田保幸 (2019) 『複合助詞の研究』和泉書院.

三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化：内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』 1(3), pp.61-76.

デ格名詞句のスコープ解釈と文構造

いのうえりか
井上恵利佳

九州大学人文科学府

1. はじめに

日本語に関する議論において、しばしばスコープ解釈という現象が取り上げられる。

- (1) [4人の少年が][3人の少女を] 招待した。

4人の少年が>3人の少女を

*3人の少女を>4人の少年が

[Hoji 1985: 236, (53a)]

「4人の少年が>3人の少女を」というスコープ解釈は、「1人につき3人の少女を招待したということが当てはまる少年が4人いる」という解釈を表す。また、「3人の少女を>4人の少年が」というスコープ解釈は、「1人につき4人の少年が招待したということが当てはまる少女が3人いる」という解釈を表すが、この解釈は(1)のようなガヲV語順では容認されないとしばしば論じられてきた。

先行研究では、ガ格名詞句とヲ格名詞句など、項名詞句間のスコープ解釈が議論の中心であり、デ格名詞句など付加詞とのスコープ解釈については限られた観察しか報告されていない。本発表では、ガ格名詞句とデ格名詞句のスコープ解釈を中心に幅広く観察した結果をまとめて述べ、それに基づいてデ格名詞句が文中で取る構造的な位置についても論じる。

2. ガ格名詞句とデ格名詞句のスコープ解釈の観察

Hoji (1985: 245) は、ガデV語順の場合、ガ>デのスコープ解釈のみが可能であり、デガV語順の場合、デ>ガのスコープ解釈のみが可能だと述べている。確かに、ガデV語順に関しては、(2)に示すとおり、ガ>デのスコープ解釈しか容認されない。

- (2) ガデV語順:

[3人の先生が][4ヶ所の地方都市で] 講演会を開いた。

3人の先生が>4ヶ所の地方都市で

(1人につき4ヶ所の地方都市で講演会を開いた、ということが当てはまる先生が3人いた。)

?*4ヶ所の地方都市で>3人の先生が

[cf. 高井 2009: 109, (272)]

ところが、デガ V 語順の場合は、先行研究とは異なる観察結果が見つかった。具体的には、デガ V 語順の場合は、(3)のようにガ>デの解釈もデ>ガの解釈も可能な場合と、(4)のようにガ>デしか容認されない場合とがある。

(3) デガ V 語順：

[4ヶ所の地方都市で][3人の先生が] 講演会を開いた。

4ヶ所の地方都市で>3人の先生が

?3人の先生が>4ヶ所の地方都市で

(1か所につき3人の先生が講演会を開いた、ということが当てはまる地方都市が4ヶ所あった。)

[cf. 高井 2009: 110, (278)]

(4) デガ V 語順：

[4つの材料で][2人のコックが] 料理を作った。

*4つの材料で>2人のコックが

(容認されない*デ>ガ：1つにつき2人のコックが料理を作った、ということが当てはまる材料が4つあった。)

2人のコックが>4つの材料で

(1人につき4つの材料で料理を作った、ということが当てはまるコックが2人いた。)

本発表では、この違いは、デ格名詞句の意味役割にあるということを指摘したい。(5)は、(3)のようにデガ V 語順におけるデ>ガの解釈もガ>デの解釈も可能な例である。

(5) デガ V 語順：デ>ガ、ガ>デ

a. [3つの工場で][4人の職人が] 布を染めた。

3つの工場で>4人の職人が

(1つにつき4人の職人が布を染めた、ということが当てはまる工場が3つあった。)

4人の職人が>3つの工場で

(1人につき3つの工場で布を染めた、ということが当てはまる職人が4人いた。)

b. [5軒の住宅で][3人の引っ越し業者が] 荷物を片づけた。

5軒の住宅で>3人の引っ越し業者が

(1軒につき3人の引っ越し業者が荷物を片づけた、ということが当て

はまる住宅が5軒あった)
3人の引っ越し業者が>5軒の住宅で
(1人につき5軒の住宅で荷物を片づけた、ということが当てはまる引っ越し業者が3人いた。)

一方、(6)は、(4)のようにデガV語順におけるデ>ガが容認不可能であり、ガ>デのみが容認可能な例である。

(6) デガV語順：*デ>ガ、ガ>デ

a. [3回の喧嘩で][2人の不良が] 高校を退学した。

*3回の喧嘩で>2人の不良が

(容認されない*デ>ガ：1回につき2人の不良が高校を退学した、ということが当てはまる喧嘩が3回あった。)

2人の不良が>3回の喧嘩で

(1人につき3回の喧嘩で高校を退学した、ということが当てはまる不良が2人いた。)

b. [2種類の折り紙で][5人の生徒が] 作品を作った。

*2種類の折り紙で>5人の生徒が

(容認されない*デ>ガ：1種類につき5人の生徒が作品を作った、ということが当てはまる折り紙が2種類あった。)

5人の生徒が>2種類の折り紙で

(1人につき2種類の折り紙で作品を作った、ということが当てはまる生徒が5人いた。)

つまり、デガV語順におけるデ>ガのスコープ解釈は、デ格名詞句の意味役割がLocationの場合は容認可能だが、InstrumentやReasonの場合は容認不可能である。

以上のガ格名詞句とデ格名詞句のスコープ解釈に関する観察結果をまとめると、(7)のようになる。

(7) a. ガデV語順：

ガ>デ、*デ>ガ

b. デガV語順（デ格名詞句がLocationの場合）：

ガ>デ、デ>ガ

c. デガV語順（デ格名詞句がInstrumentやReasonの場合）：

ガ>デ、*デ>ガ

このように、ガ格名詞句は、ガデV語順でもデガV語順でもガ>デが可能であるのに

対して、デ格名詞句は、意味役割によってデ>ガが可能かどうか異なる。この観察結果は一体、何を意味しているのであろうか。本発表の後半では、論理的主体という概念を導入し、(7)の観察が日本語の文構造から導かれるという分析を主張したい。

3. 論理的主体とスコープ解釈

本発表ではスコープ解釈に注目してきたが、そもそもガ>デやデ>ガといった解釈が容認可能であるということは、何を意味するのだろうか。

生成文法では、(8a)における everyone と someone のような量化表現に(8b)のような量化詞繰り上げと呼ばれる統語操作を適用し、(8c)のような述語論理学の形式に対応させるという考え方が取られていることが多い。

(8) a. everyone loves someone.

b. LF 表示 : everyone_x [someone_y [t_x loves t_y]]

The diagram shows the LF representation of the sentence. 'everyone' is followed by a bracketed phrase containing 'someone' and another bracketed phrase containing 't_x loves t_y'. An arrow points from 'someone' to the left, crossing over 'everyone', indicating that 'someone' has moved to a position to the left of 'everyone'.

c. 論理表示 : $\forall x$ [$\exists y$ [x loves y]]

この場合、「スコープ」は全称量化子や存在量化子のような量化子が作用する範囲のことであり、「 $\alpha > \beta$ 」とは、量化子 α のスコープの中に量化子 β が含まれるということを表している。つまり、(8)の場合、量化詞 everyone のスコープの中に量化詞 someone が含まれているので、everyone > someone というスコープ解釈を表していることになる。

しかし、述語論理学の形式との対応を前提とする場合、デ格名詞句のような付加詞は項と同じように扱うことができない。述語論理学では、述語と項の関係は関数と項の関係として捉えられるが、述語と付加詞の関係をどのようなものとして捉えるべきか明らかではないからである。

これに対して、Kuroda (1969/1970) は subject という概念を用いて、いわゆるスコープ関係について語っている。まず、Kuroda (1969/1970) は(9)で subject という概念を説明した。

(9) one may introduce a kind of 'higher predicate' $S(,)$, where the first place is to be filled with a variable or constant and the second place with a usual type of predicate formula one of whose places is, however, left blank; for example, $S(a, P(-, b))$ is a well-formed formula in the proposed system and is intended to be interpreted as 'a is a subject of the property which says that between it and b the relation P holds'.

[Kuroda 1969/1970: 78]

その上で、(10a, b)のそれぞれの文の解釈を(11a, b)のように表示している。(ここで「 σ 」はサエを、「 δ 」はダケを表している。)

- (10) a. John sae S.S. dake o yonda [Kuroda 1969/1970: 85, (26)]
 b. S.S. dake wa John sae ga yonda [Kuroda 1969/1970: 86, (30)]
- (11) a. $S(\sigma\text{John}, Y(-, \delta\text{S.S.}))$ [Kuroda 1969/1970: 87, (34)]
 b. $S(\delta\text{S.S.}, Y(\sigma\text{John}, -))$ [Kuroda 1969/1970: 87, (37)]

以下では、混乱を避けるために Kuroda (1969/1970) の意味での subject を「論理的主部」と呼ぶことにする。(11a)では、論理的主部である「 σJohn 」の論理的述部「 $Y(-, \delta\text{S.S.})$ 」の中に「 $\delta\text{S.S.}$ 」が含まれているため、「ジョンさえ>S.S.だけ」という解釈に対応しており、同様に、(11b)は、「S.S.だけ>ジョンさえ」という解釈に対応することになる。

では、上述した本発表の観察結果である(7)が、この考え方でどのように再解釈されるかを見ていく。

- (7) a. ガデ V 語順：
 ガ>デ、*デ>ガ
- b. デガ V 語順 (デ格名詞句が Location の場合)：
 ガ>デ、デ>ガ
- c. デガ V 語順 (デ格名詞句が Instrument や Reason の場合)：
 ガ>デ、*デ>ガ

まず、ガデ V 語順とデガ V 語順の両方においてガ>デが容認可能であるということは、ガ格名詞句がデ格名詞句を論理的述部に含む主述関係の論理的主部になれるということの意味している。つまり、ガ格名詞句は必ず論理的の主部になれるということとなる。これに対して、デ>ガは容認不可能な場合もあるので、デ格名詞句は必ずしも論理的の主部になれるわけではない。(7b)に示すように、デガ V 語順においてデ>ガが容認可能であるということは、Location であるデ格名詞句は論理的の主部になれるということを表している。一方、(7c)に示すように、デガ V 語順においてデ>ガが容認不可能であるということは、Instrument や Reason であるデ格名詞句は論理的の主部になれないということの意味している。つまり、デ格名詞句は、デガ V 語順で意味役割が Location である場合にのみ、論理的の主部になれるということとなる。

まとめると、ガ格名詞句とデ格名詞句の文中における構造的な位置について、(12)のような結論が導かれる。

- (12) a. ガ格名詞句は、常に論理的の主部になれる。

- b. デ格名詞句は、デガ V 語順で意味役割が Location である場合にのみ、論理的な主部になれる。（意味役割が Instrument や Reason である場合は論理的な主部にならない。）

4. 終わりに

従来、スコープ解釈に関する研究は、ほとんどがガ格名詞句やヲ格名詞句のような項名詞句のみを扱ってきた。本発表では、付加詞であるデ格名詞句に注目し、ガ格名詞句とデ格名詞句のスコープ解釈は、(7)のように、従来の理論では説明できない形になっていることを示した。そして、この観察結果は、ガ格名詞句とデ格名詞句では、論理的な主部になれる条件が異なっており、論理的な主部になれる条件には、語順と意味役割の両方が関わっていると仮定することによって説明できると主張し、(12)のようにまとめた。

本発表では、スコープ解釈の記述を目標としているため、理論的なことには踏み込まなかったが、(12)のような結果が出た以上、日本語の統語論は(12)を説明できるような仕組みになっている必要があるということになる。また、論理的な主部という概念は必ずしも広く用いられているものではないが、言語的直観をよく反映している面があるため、今後も注目していきたいと考えている。

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2136 の支援を受けたものです。

参考文献

- Hoji, Hajime (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*.
Doctoral dissertation, University of Washington.
- Kuroda, S.-Y. (1969/1970) "Remarks on the Notion of subject with Reference to Words like *Also*,
Even or *Only*," *Annual Bulletin*, Research Institute of Logopedics and Phoniatics, University
of Tokyo, vol.3, pp.111-129, and vol.4, pp.127-152.
- 高井岩生 (2009) 『スコープ解釈の統語論と意味論』, 博士論文, 九州大学.

中古和文における名詞述語の肯否疑問文

藤原 慧悟 (國學院大學大学院)

1 本発表の目的

中古和文における疑問文については、磯部佳宏(1990・1992)、岡崎正継(1996)を始め、多くの先行研究がある。しかし、名詞述語の肯否疑問文という範疇に注目すると、どのような文型があるか、各文型にどのような意味の違いがあるかが、十分に明らかになってはいない。そこで本発表では、中古和文における名詞述語の肯否疑問文の体系を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究

名詞述語肯否疑問文として取り上げられることが多いのは、(1)「名詞ニヤ～」とその結びが省略された(2)「名詞ニヤ」、そして(3)「名詞カ」である。

(1) 世の中にあらぬところはこれにやあらんとぞ、かつは思ひなされける。

(源氏物語・浮舟、⑥304)

(2) まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ。

(源氏物語・夕顔、①168)

(3) 「こは宮の御消息か」とみなほりて、

(源氏物語・夕霧、④401)

磯部佳宏(1992)は、「～ニヤ～」はほとんどがム系助動詞で結ばれること、「～ニヤ」「～ニヤ」は「疑い」を表すこと、「～カ」は「問い」を表すことを指摘している¹。しかし、「～ニヤ」「～カ」以外にも、(4)や(5)のような名詞述語肯否疑問文の文型が存する。

(4) これや我が求むる山ならむと思ひて、

(竹取物語、32)

(5) 「あはれのこや。この姉君や、まうとの後の親」、「さなむはべる」と申すに、

(源氏物語・帚木、①96)

岡崎正継(1996)は、文末にム系助動詞がある疑問文は「疑い」を、ム系助動詞のない疑問文は「問い」を表すことを指摘している²。実際に、(1)(2)と(4)は「疑い」、(3)と(5)は「問い」の例である。しかし、(1)と(4)の違い、(3)と(5)の違いを説明するには、「疑い」「問い」以外の観点が必要である。そこで、まずは中古和文における名詞述語肯否疑問文の用例を集めて、文型を整理することから始める。

¹ 磯部佳宏(1990)では心内文の「疑問詞～ゾ」について「いわゆる自問自答の表現である」と述べていて、同(1992)はそれを受ける形で「～カ」が「疑問詞～ゾ」と共通する性格を持つと論じていて、また、岡崎正継(1996)も、「～カ」は会話文で「他問」を、心内文で「自問」を表すと述べている。

² 高山善行(2016)もモダリティ形式(ム・マシ・ラム・ケム・ベシ)が生起した疑問文と非生起の疑問文とを比較し、傾向として岡崎正継(1996)と同趣旨のことを述べている。

3 調査

用例の調査には国立国語研究所『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』（バージョン 2022.03）を用いる。コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて肯否疑問文の標識になるヤ・カを検索し³、名詞述語肯否疑問文の例のみを取り出す。疑問と反語は区別し、詠嘆は除くが、疑問・反語・詠嘆は連続的で、個別の例の解釈・判定には揺れのある可能性がある。得られた文型と用例数を表 1 に示す。

表 1 名詞述語肯否疑問文の文型と用例数

文型	疑問	反語	合計
ヤ名詞	12	1	13
ヤ名詞+ム系	18		18
ヤ名詞+非ム系	2	7	9
名詞ニヤ	202	5	207
名詞ニヤ+ム系	92	1	93
名詞ニヤ+非ム系	1	11	12
名詞ニハアラズヤ+ム系	1		1
名詞ニハアラズヤ	2	7	9
名詞ナリヤ		2	2
名詞ニオハシマスヤ	1		1
名詞カ	120	99	219
名詞ニカ	1		1
名詞ニカ+ム系		1	
名詞ナレヤ	28	2	30

本発表では、すべての文型・用例を綿密に吟味することはせず、例数の僅かな文型と反語に偏る文型⁴は本発表の考察の対象から除く。それらの文型・用例の検討は今後の課題としたい。また、「名詞ナレヤ」⁵は和歌でしか用いられず、ヤが已然形に後接し、補充疑問文に用いられる⁶など特殊な文型のため、これも考察の対象から除く。

考察の対象とする文型は、「述部がム系か否か」と「助詞が述部にあるか否か」によって整理することができる。結びが省略されている「名詞ニヤ」は「疑い」に偏ることから「名

³ 検索条件： 後方共起：((語彙素="や" OR 語彙素="か") AND 品詞 LIKE "助詞-係助詞%") ON 1 WORDS FROM キー IN subcorpusName="平安-仮名文学" AND core="true"

⁴ 反語に偏る文型には否定疑問文の例が多い。「名詞ニハアラズヤ」はもちろん、反語の「名詞ニヤ+非ム系」のうち6例（重出2例を含む）が「名詞ニヤハアラヌ」である。なお、「ヤ名詞+非ム系」はすべて「春や昔の春ならぬ」（古今和歌集 747）とその重出・引用であり、実質的には孤例である。

⁵ 「名詞ナレヤ」を含む「已然形ヤ」はすべてそこで切れるという説（佐伯梅友 1988）と、文末に係るものもあるという説（中村幸弘 2014）とがある。

⁶ 誰がために引きてさらせる布なれや世を経て見れどとる人もなき（古今和歌集 924）

詞ニヤ+ム系」と併せて「名詞ニヤ(+ム系)」とする。文型の整理を表2に示す。

表2 名詞述語肯否疑問文の文型の整理

	述部：ム系	述部：非ム系
助詞：述部	名詞ニヤ(+ム系)	名詞カ
助詞：非述部	ヤ名詞+ム系	ヤ名詞 ⁷

4 述部のタイプ——「疑い」と「問い」——

「名詞ニヤ(+ム系)」と「名詞カ」については磯部佳宏(1992)が多くの用例を示して詳細に論じているため、「ヤ名詞+ム系」と「ヤ名詞」の用例を確認する。先行研究から、述部がム系の「ヤ名詞+ム系」は「疑い」に、述部が非ム系の「ヤ名詞」は「問い」に傾くと考えられる⁸。

「ヤ名詞～ム系」は、和歌とその引用が8例、心内文(会話文中の心内文を含む)が8例、会話文が2例である。「ヤ名詞～ム系」は会話文においても聞き手に回答を求める積極的な「問い」の表現としては用いられていない。(6)(7)は「疑い」と考えられる。

(6) (夕霧→源氏)「……。想夫恋は、心とさしすぎて言出でたまはんや、憎きことにはべらまし、ものついでにほのかなりしは、をりからのよしづきて、をかしうなむはべりし。……」など聞こえたまふに、
(源氏物語・横笛、④367)

(7) (大君→中君)「ただ今、かく、思ひあへず、恥づかしきことどもに乱れ思ふべうは、さらに思ひかけはべらざりしに、これや、げに、人の言ふめるのがれがたき御契りなりけん。……」と御髪を撫でつくるひつつ聞こえたまへば、
(源氏物語・総角、⑤272)

体言を結びとする「ヤ名詞」は、和歌とその引用が9例、会話文が4例で、積極的な「問い」の表現として用いられた例がある。(8)は「問い」の表現であることが明らかである。また、(9)は聞き手が疑問に対して回答している。

(8) 中納言、「さて呼び返さざりつるさきは、いかが言ひつる。これやなほしたる定」と(使者ニ)問ひたまへば、
(枕草子、81)

(9) (源氏→紀伊守)「……。この姉君や、まうとの後の親」、「さなむはべる」と申すに、
(源氏物語・帚木、①96)

やはり、「ヤ名詞+ム系」は「疑い」に、「ヤ名詞」は「問い」に傾くと考えてよい。

⁷ 「ヤ名詞」は省略ではなく、体言を結びとする係り結び文と考える(川端善明1994、小柳智一2001)。

⁸ 傾向に反する例も存する。

・うちつけ目かとなほ疑はしきに、(源氏物語・浮舟、⑥120)

・「……、大臣の外腹のむすめ尋ね出でてかしづきたまふなるとまねぶ人ありしは、まことにや」と、弁少将に問ひたまへば、(源氏物語・常夏、③224)

5 助詞の位置——疑問の焦点——

続いて、助詞の位置に注目する。係助詞と焦点は密接な関係にあると考えられる（小川栄一 1989、野村剛史 2001、衣畑智秀 2014）。助詞が述部にある「名詞ニヤ(+ム系)」と「名詞カ」は主題を伴う例が多く、(10)～(13)はいずれも解説部分にあたる述部が疑問の焦点である。

(10) 春雨の降るは涙かさくら花散るを惜しまぬ人しなければ (古今和歌集 88)

(11) 「これは翁まるか」と見せさせたまふ。 (枕草子・七、41)

(12) 「……、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、……」とて、
(源氏物語・胡蝶、③186)

(13) 今宵は例の御遊びにやあらむと推しはかりて、兵部卿宮渡りたまへり。
(源氏物語・鈴虫、④383)

主題は顕在していなくても文脈から想定できる。(14)は「これは何か」、(15)は「あれは何か」、(16)は「あはれなり」と感じられるのは何故か」という疑念に対応していて、やはり述部が疑問の焦点である。

(14) いときよらなる朽葉の羅、今様色の二なく擣ちたるなど、ひき散らしたまへり。「(コレハ)中將の下襲か。御前の壺前裁の宴もとまりぬらむかし。……」などのたまひて、
(源氏物語・野分、③281)

(15) 「(アレハ)海賊の舟にやあらん、小さき舟の飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。
(土佐日記、100)

(16) 手さぐりの、細く小さきほど、髪のいと長からざりしけはひのさま通ひたるも、「(アレハレナリ)ト感ジルノハ思ひなしにやあはれなり。 (源氏物語・空蟬、①117)

「名詞カ」には反語の例も多いが、それも述部が疑問の焦点である。(17)は「兵衛佐は何者か」という疑念に対応していて、述部が疑問の焦点である。

(17) (新太政大臣)「わが兵衛佐、遅くなしたまふ」と申したまへば、(致仕太政大臣)「これは御子かは。翁の五郎に侍れば、何かは人のそしりにならむ。……」とのたまひて、
(落窪物語、340)

以上のように、助詞が述部にある「名詞ニヤ(+ム系)」と「名詞カ」は疑問の焦点が述部である。このように捉えることは、源氏物語における「名詞ニヤ(+ム系)」「名詞カ」が「対象事態へ適用する説明解釈の適否」に関する疑問文として用いられることがあるという近藤要司(2019)の指摘とも合致する。

助詞が述部でない「ヤ名詞+ム系」「ヤ名詞」の疑問の焦点はどうだろうか。(18)は「どれが蓬莱山か」、(19)は「御方々の実家の人々がいる中で、どれが弘徽殿からの退出か」という疑念に対応して、どちらも主語が疑問の焦点である。

(18) これや我が求むる山ならむと思ひて、 (竹取物語、32)

(19) (?→源氏)「……。御方々の里人はべりつる中に、四位少将、右中弁など急ぎ出でて送りしはべりつるや、弘徽殿の御あかれならむと見たまへつる。……」
(源氏物語・花宴、①359)

(20)も、「誰が紀伊守の継母(=伊予介の後妻)か」という疑念に対応して、これも主語が疑問の焦点である。

(20) (源氏)「あはれのことや。この姉君や、まうとの後の親、(紀伊守)「さなむはべる」と申すに、(源氏物語・帚木、①96)

(21)の馬頭の歌は「どれが貴方からのつらい仕打ちか」という疑念に、女の返歌は「いつが貴方と別れる時か」という疑念に対応していて、どちらも主語が疑問の焦点である。

(21) (馬頭→女)『手を折りてあひみしことを数ふればこれひとつやは君がうきふしえ恨みじ』など言ひはべれば、さすがにうち泣きて、
(女→馬頭)うきふしを心ひとつに数へきてこや君が手を別るべきをりなど言ひしろひはべりしかど、(源氏物語・帚木、①74)

以上のように、助詞が述部でない「ヤ名詞+ム系」「ヤ名詞」は疑問の焦点が主語である。

本発表の調査範囲に限っては、助詞の位置と疑問の焦点が対応している。ただし、疑問文全体では(22)のように助詞の位置と疑問の焦点が対応しないことがあり、中古における係助詞と焦点の関係はさらなる検討を要する。

(22)「少将の君やおはします」と問ひけり。「おはします」といひければ、(大和物語、415)

6 本発表の結論

本発表では、中古和文における名詞述語の肯否疑問文にどのような文型があるかを調査した。さらに、「ヤ名詞」「ヤ名詞+ム系」「名詞ニヤ(+ム系)」「名詞カ」について、述部がム系の文型は「疑い」に傾き、述部が非ム系の文型は「問い」に傾くという先行研究の指摘が当てはまることを確認した。また、助詞の位置に注目して、助詞が述部にある文型の疑問の焦点は述部であり、助詞が述部でない文型の疑問の焦点は主語であることを確認した。以上から、中古和文における名詞述語肯否疑問文の体系は表3のようである考えられる。

表3 中古和文における名詞述語肯否疑問文の体系

		述部：ム系	述部：非ム系
		「疑い」	「問い」
助詞：述部	焦点：述部	名詞ニヤ(+ム系)	名詞カ
助詞：非述部	焦点：主語	ヤ名詞+ム系	ヤ名詞

最後に、本発表で扱った名詞述語疑問文と関係する準体句述語疑問文について述べる。体言を結びとする「ヤ名詞」の存在から、準体句で結ぶ「ヤ準体句」という文型がありそうに思われるが、確実な用例を得るのが難しい。『新編日本古典文学全集』は(23)を「母屋の中柱のところ横向きになっている人が、自分の心寄せの人か」と現代語訳している。

(23) 母屋の中柱に側める人やわが心かくるとまづ目とどめたまへば、(源氏物語・空蝉、①120)

しかし、モノ準体句が述語になること、作用性用言がモノ準体句を作るとはまれであり⁹、河内本の「母屋の柱に側める人やわが心にかかる人ならん」を採る方が穏やかだろう。(24)は、詠嘆の可能性はある。

(24) これやこのわれにあふみをのがれつつ年月経れどまさりがほなき

(伊勢物語、164)

『新編日本古典文学全集』の頭注に「これがまあ…なのか」の意で、「まさりがほなき(人)」が応ずる」とあるが、現代語訳は「これがまあ、(中略)以前よりもよくなったようすもない人のありさまなのだなあ」とあり、注と訳が一致していない。本発表の結果を踏まえた準体句述語疑問文や名詞述語補充疑問文の調査・考察が、今後の課題となる。

調査資料

国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』(バージョン 2022.3, 中納言バージョン 2.5.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2022年8月24日確認)

参考文献

石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店

磯部佳宏(1990)「中古和文の要説明疑問表現—『源氏物語』を資料として—」『日本文学研究』26

磯部佳宏(1992)「『源氏物語』の要判定疑問表現—「——ニヤ。」形式を中心に—」『日本文学研究』28

岡崎正継(1996)『国語助詞論攷』おうふう

小川栄一(1989)「係結びと焦点」『福井大学教育学部紀要 第I部 人文科学(国語学・国文学・中国学編)』37

小田勝(2015)『実例詳解古典文法総覧』和泉書院

川端善明(1994)「係結の形式」『国語学』176

衣畑智秀(2014)「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」青木博史・小柳智一・高山善行(編)『日本語文法史研究 2』ひつじ書房

小柳智一(2001)「係結についての覚書——学史風——」『学芸国語国文学』33

近藤要司(2019)『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院

高山善行(2016)「中古語における疑問文とモダリティ形式の関係」『国語と国文学』93-5

中村幸弘(2014)『和歌構文論考』新典社

野村剛史(2001)「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1

⁹ コト準体句に比べて少ないが、モノ準体句が述語になる例は存する。

・二の町の心やすきなるべし(源氏物語・帯木、①56)

しかし、作用性用言によるモノ準体句の例は極めてまれである(石垣謙二1955)。

フィクションにおける役割語〈女ことば〉の通時的変化

静岡文化芸術大学 文化政策研究科 田野聖一 (Tano Seiichi)

1.はじめに

水本(2015)によると自然会話での女性文末詞の使用は減っていて、世代が下がるほど使われなくなってきている。一方で日本語教材の若い女性の女性文末詞使用率は「自然会話の7倍から15倍」と高い。女性文末詞の使用が多い教科書で練習した学習者は、実際とは異なる不自然な日本語をインプットされ、それが化石化してしまう可能性があり、実際女性文末詞を教科書通りに使用する傾向にもある(水本,2015)。これらを踏まえ水本は、日本語教科書中の女性の普通体によるカジュアルな会話の女性文末詞の扱いについて以下のように述べている(水本,2015,p.158)。

教科書で男女のことばづかひの違いを対比的に紹介する。ただし、その際に実社会においては若い世代の女性は女ことばを用いないことを明記し、文学やマンガなどの役割語としてキャラクターライズしていることを説明する必要がある。

「教科書で男女のことばづかひの違いを対比的に紹介」し役割語について説明するには、実際にフィクションで使われている役割語〈女ことば〉の使用傾向を知る必要がある。よって本調査では役割語〈女ことば〉の通時的変化を調べることを目的とした。

2.先行研究

2.1 文学作品の使用

鈴木(1998)は明治前期から昭和初期にかけての文学作品にある女性文末詞の調査をしている。昭和後期の初め頃、文学作品で多く使われていたワ・ノ・ネ型のうち、「わ」の優位性がその後揺らぎ、現在は女性の文末詞も多様化し男性化しつつあるとしている。

2.2 ジブリアニメの〈女ことば〉の変化

関口(2016)は1984年から2001年にかけてのジブリアニメ6本の、ヒロインが使う女性語の使用率を調べている。女性語の割合は1997年のサン(『もののけ姫』)から急激に低下している。

2.3 映画の女性文末詞の通時的変化

小原(2014)は映画『ゼロの焦点』の1961年度版と2009年のリメイク版の女性主人公2人と、映画『時をかける少女』の1983年度版と2010年のリメイク版に出てくる主人公とその母親が使う女性文末詞を比較している。80年代ころまでは「わ」系の衰退が現在よりも進んでいない、年代が新しい映画は女性文末詞使用が減少、「よ」と「ね」は衰退傾向が緩やかになっている。

2.4 ドラマ内での使用

水本・福盛・福田・高田(2006)は2005年4月から6月、および7月から8月にTV放映されたトレンドドラマ風のTVドラマ10本の中で使われる若い女性(20代、30代)25名のカジュアルな会話中での女性文末詞使用状況を調査し、実際に使われている会話と比較している。それによると、ドラマ中の女性文末詞の使用が実社会の女性達より5倍から30倍多いこと、特に「わ系」(「わ」「わよ(ね)」「わね」)の使用頻度が実際の会話に比べ75倍もあることがわかった。また、水本ら(2006)はドラマ内の女性文末詞使用状況から「多使用タイプ」(使用率50%以

上)「無使用タイプ」(使用率 10%未満)「時々スイッチ型(使用率 10%から 50%未満)の 3つのタイプに分けている。

2.5 先行研究まとめ

以上のように先行研究では、女性文末詞の使用が減少傾向にあることが指摘されている。しかし、以下の問題点が挙げられる。

鈴木(1998)の調査で昭和初期までの文学作品における〈女ことば〉の減少はわかったが最近の傾向がわからない。

関口(2016)はジブリ映画のヒロインの〈女ことば〉を調査し、時代が進むにつれ〈女ことば〉の使用が減っていることを指摘している。しかし役割語の特徴が顕著に出るのは、基本的に標準語(社会で認められている一般的な話し方)に近い話し方をする主人公ではなく、重要な脇役の方である(金水,2003)。また各ジブリ映画は物語が異なり、主人公が同一ではない。ストーリーによる違いも考慮されていない。

小原(2014)の調査では女性文末詞の使用回数のみを比較している。これは関口にも言えることだが、使用回数はシナリオや場面次第で女性文末詞を使うセリフが多いか少ないかにも影響される。実際にどの程度減少しているのかがわからない。そして 2010 年以降の変化もわからない。水本ら(2006)は 2005 年のドラマのみで通時的に調べていない。

先行研究の問題点を解消するため、本研究では同作品における重要な脇役女性に焦点を当て、女性文末詞の使用率を通し、通時の変化を調査する。

3.研究課題

研究課題として、RQ1:先行研究にあるように、フィクションで若い女性が使っている女性文末詞の使用率は減少傾向にあるのか。RQ2:フィクションで若い女性が使っている女性文末詞の使用にはどのような傾向が見いだせるのか、を設定した。

4.研究方法

4.1 調査対象

調査対象は『新世紀エヴァンゲリオン劇場版』(以下エヴァンゲリオン)と、『劇場版名探偵コナン』(以下コナン)に出てくる女性登場人物とした。エヴァンゲリオンとコナンは 1997 年から 2021 年にかけて映画が作られている。エヴァンゲリオンには主人公と深く関わる女性として、葛城ミサト(以下ミサト)、惣流(式波)・アスカ・ラングレー(以下アスカ)、綾波レイ(以下レイ)がいる。コナンには毛利蘭(以下蘭)がいる。1997 年と 2021 年の両作品に出てくる 4 人の女性登場人物の台詞を調査することで、20 年以上にわたる同一作品内に出てくる女性 4 人の女性文末詞の使用状況を、通時の変化で見ることができる。

4.2 調査する女性文末詞と、使用率の算出方法

調査する女性文末詞は水本・福盛・高田(2006)にならい、「かしら」「N(体言)ね」「N(体言)よ」「のよ(ね)」「わ」系(「わ」「だわ」「わよ」「わね)の 5 種とした。対象女性の台詞を文字化し、女性文末詞〈使用〉と〈不使用(ニュートラル使用)〉の数を計算した。女性文末詞の使用頻度を算出する分母の発話数は、水本・福盛・高田(2006)と同じく女性文末詞〈使用〉と〈不使用(ニュートラル使用)〉という対立する文末形式の出現数とした。女性文末詞〈使用〉と〈不

使用（ニュートラル使用）の例を以下に示す。

例1 「ね」「よ」は「だ」が出るか出ないか。「だ」がなければ女性文末詞使用。

〈女性文末詞使用〉 vs 〈不使用（ニュートラル使用）〉

a) 「N ね」（さすがね vs さすがだね）

b) 「N よ」（あの人よ vs あの人だよ）

例2 「わ」系は「わ」が出るか出ないか。「わ」があれば女性文末詞使用。「わ」がなければ不使用（ニュートラル使用）。

〈女性文末詞使用〉 vs 〈不使用（ニュートラル使用）〉

a) 「わ」（行くわ vs 行く）、

b) 「わね」（寒いわね vs 寒いね）、

c) 「わよ」（すてきだわよ vs すてきだよ）

※「わ」系は上昇イントネーションのみをカウントする。

5 調査結果

5.1 エヴァンゲリオン調査結果

時代と共に女性文末詞の使用率が下がっている（表1）。

「わ」の不使用（ニュートラル使用）回数が増えている（表2）。

1997年より2021年のほうが「わ」の使用率が低い。つまり、「わ」の不使用（ニュートラル）が増えている（表3）。

表1 年代別、女性登場人物別にみた女性文末詞の使用頻度

女性文末詞の使用回数/(女性文末詞の使用回数+女性文末詞の不使用回数(ニュートラル使用回数))

公開年「映画」	女性文末詞使用頻度 ミサト	女性文末詞使用頻度 アスカ	女性文末詞使用頻度 レイ
1997年「シト」	28/31(90%)	37/40(92%)	21/19(90%)
2007年「序」	86/100(86%)	登場場面なし	4/5(80%)
2021年「シン」	17/23(70%)	23/35(65%)	0/2(0%)

※「シト」=『新世紀エヴァンゲリオン劇場版 シト新生』、「序」=『エヴァンゲリオン新劇場版:序』、「シン」=『シン・エヴァンゲリオン劇場版:II』

表2 各女性登場人物の女性文末詞不使用（ニュートラル使用）回数（1997年と2021年の比較）

公開年・登場人物 女性文末詞	1997年 ミサト	2021年 ミサト	1997年 アスカ	2021年 アスカ	1997年 レイ	2021年 レイ
ね	0	0	0	0	0	0
わ	2	6	2	12	2	2
よ	0	0	0	0	0	0
かしら	1	0	1	0	0	0

表3 各女性登場人物の女性文末詞「わ」の使用率（1997年と2021年の比較）

女性文末詞「わ」使用回数/（女性文末詞「わ」不使用（ニュートラル使用）回数+女性文末詞「わ」使用回数）

公開年・登場人物	1997年	1997年	2021年	2021年
女性文末詞	ミサト	アスカ	ミサト	アスカ
わ	15/17(88%)	19/21(90%)	9/15(60%)	5/17(29%)

5.2 コナン調査結果

時代とともに女性文末詞の使用率が下がっている（表4）。

エヴァンゲリオンにはなかった「よ」の不使用がある（表5）。

「わ」の使用率には変化がなく、「よ」の使用率が減少している（表6）（表7）。

表4 年代別にみた女性文末詞の使用頻度

女性文末詞の使用回数/（女性文末詞の使用回数+女性文末詞不使用（ニュートラル使用）回数）

公開年「映画」	女性文末詞使用頻度 蘭
1997年「時計」	19/28 (67%)
2021年「緋色」	8/16 (50%)

※「時計」=『時計仕掛けの摩天楼』、「緋色」=『緋色の弾丸』

表5 蘭の女性文末詞不使用（ニュートラル使用）回数（1997年と2021年の比較）

公開年	1997年	2021年
女性文末詞	蘭	蘭
ね	0	0
わ	8	4
よ	1	4
かしら	0	0

表6 蘭の女性文末詞「わ」の使用率（1997年と2021年の比較）

女性文末詞「わ」使用回数/（女性文末詞「わ」不使用（ニュートラル使用）回数+女性文末詞「わ」使用回数）

公開年・登場人物	1997年	2021年
女性文末詞	蘭	蘭
わ	8/14(57%)	4/7(57%)

表7 蘭の女性文末詞「よ」の使用率（1997年と2021年の比較）

女性文末詞「よ」使用回数/（女性文末詞「よ」不使用（ニュートラル使用）回数+女性文末詞「よ」使用回数）

公開年・登場人物	1997年	2021年
女性文末詞	蘭	蘭
よ	12/13(92%)	4/8(50%)

5.3 調査結果まとめ

- (1) エヴァンゲリオン、コナンともに女性文末詞の使用率は減少傾向にある。
- (2) エヴァンゲリオンでは「わ」の使用減少があったが、コナンにはそれがない。
- (3) コナンにはエヴァンゲリオンでは見られなかった「よ」の不使用（ニュートラル使用）がある。

6.考察

6.1 (1) の結果から

水本・福盛・福田・高田(2006) はドラマ内の女性文末詞使用状況から「多使用タイプ」(使用率50%以上)「無使用タイプ」(使用率10%未満)「時々スイッチ型」(使用率10%から50%未満)の3つのタイプに分けている。エヴァンゲリオンの女性登場人物のうち2人の女性文末詞の使用率は97年から2021年にかけてそれぞれ90%→70%、92%→65%へと減少していた。コナンでも女性文末詞の使用率が67%→50%に減少していた。両作品において「多使用タイプ」(使用率50%以上)の女性の女性文末詞の使用が減少傾向にあることから、今後「多使用タイプ」の女性は「時々スイッチ型」(使用率10%～50%未満)に移行することが予想できる。

6.2 (2) と (3) の結果から

(2) と (3) の結果から2つの傾向が観察できる。

傾向1: 「多使用タイプ」の中でも、女性文末詞の使用率が低目の女性は、「わ」をあまり使わない。

傾向2: 女性文末詞の使用率が65%前後までは「わ」の使用が減り、その後は「よ」の使用が減る。

6.2.1 傾向1について

97年のミサト・アスカは「多使用タイプ」(使用率50%以上)の中でも女性文末詞使用率が高目だ(ミサト90%、アスカ92%)。97年から2021年にかけて2人の「わ」の使用は減少し、女性文末詞全体の使用が少なくなってきた(ミサト70%、アスカ65%)。蘭の97年の女性文末詞使用率は67%と低目で、ミサト、アスカの2021年の使用率と殆ど変わらない。蘭は多使用タイプだが97年から、「わ」の使用率が低い。「多使用タイプ」の中でも、女性文末詞の使用率が低目の女性は、「わ」をあまり使わない、という傾向がある。

6.2.2 傾向2について

ミサトとアスカは97年の女性文末詞使用率が90%前後だ。2021年の65%前後になる過程で「わ」の使用が減っている。蘭は97年の女性文末詞使用は67%でその後、2021年の50%

に変化する過程では「わ」の使用に変化がなかった。しかし 97 年から 2021 年にかけて「よ」の使用が減少している。蘭の 97 年の女性文末詞使用率は、ミサト、アスカの 2021 年の使用率と殆ど変わらない。女性文末詞の使用率が 65%前後までは「わ」の使用が減り、その後は「よ」の使用率が減る、という傾向が見える。

7 結論と今後の課題

7.1 結論

RQ1：先行研究にあるように、フィクションで若い女性が使っている女性文末詞の使用率は減少傾向にあるのか。

→減少傾向にある。「多使用タイプ」(使用率 50%以上)の女性の女性文末詞の使用が減少傾向にあることから、今後「多使用タイプ」の女性は「時々スイッチ型」(使用率 10%~50%未満)に移行することが予想できる。

RQ2：フィクションで若い女性が使っている女性文末詞の使用にはどのような傾向が見いだせるのか。

→エヴァンゲリオンでは「わ」の使用率が減少していた。コナンでは「わ」の使用率に変化がなく、「よ」の使用率が減少していた。エヴァンゲリオンとコナンでは同じ傾向が見られなかった。しかし、以下に述べる 2 つの傾向が観察できた。傾向 1:「多使用タイプ」の中でも、女性文末詞の使用率が低目の女性は、「わ」をあまり使わない。傾向 2 女性文末詞の使用率が 65%前後までは「わ」の使用が減り、その後は「よ」の使用が減る。

7.2 今後の課題

今回の調査では、エヴァンゲリオンとコナン、2 作品しか調べていない。分析結果の妥当性を高めるため、今後他の作品も調査したい。またフィクションにおける女性文末詞の使用が減少傾向にあることがわかったが、なぜ減少しているかがわからない。減少の要因についても研究したい。

参考文献

- 小原千佳(2014). 「話しことばの終助詞について - 映画に見る女性文末詞 - 」『日本文学ノート』40, 18-29.
- 金水敏 (2003). 『くもっと知りたい日本語』ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店.
- 鈴木英雄 (1998). 「現代日本語における女性の文末詞」佐々木峻・藤原与一編『日本語文末詞の歴史的研究』(pp. 139-164) 三弥井書店.
- 関口秋香 (2016). 「役割語の日英対照-ディズニー映画における「女性語」を中心に」『東京女子大学言語文化研究』25, 32-46.
- 水本光美・福盛壽賀子・福田あゆみ・高田恭子 (2006). 「ドラマに見る女ことば『女性文末詞』—実際の会話と比較して—」『国際論集』4, 51-70.
- 水本光美 (2015). 『ジェンダーから見た日本語教科書 - 日本女性像の昨日・今日・明日』大学教育出版.

感情等を表す動詞および形容詞の人称制限における ムード説の優位性

たなか ゆうすけ
田中 悠介 (福岡大学)

1. はじめに

感情や思考を表す日本語の動詞と形容詞は、主語が一人称でなくてはならない。例えば (1a) や (1b) のように、「嬉しい」や「思う」の主語が二人称や三人称の場合、文が不自然になる。この人称制限は一見、直接経験可能なのは自己の感情や感覚のみであるという認識論的な見方によって説明可能である (西尾 1972)。しかし、この説明は人称制限が普遍的であることを予測する一方で、英語のように人称制限を持たない言語が存在するという問題がある。

- (1) a. {私/*あなた/*彼} は嬉しい。
b. {私/*あなた/*彼女} は…と思う。

(国広 2001: 59)

上述の背景から、人称制限に対してムード (寺村 1971; 山岡 2000, 2014)¹ や語用論 (神尾 1990; 益岡 1997), 視点 (池上 2004; 甘露 2004; 国広 2001) に基づくアプローチが試みられてきた。本研究の目的は、人称制限が解除される 3 つの条件を根拠に、ムード説の優位性を示すことである。ムード説には問題点も指摘されているが (金水 1989), それに対する解決策も提示する。

2. 先行研究

本節では、感情や思考を表す動詞および形容詞の人称制限に関する先行研究とその問題点を概観する。

2.1. ムード

寺村 (1971) によれば、感情を表す一群の述語詞の現在形で終わる文のムードは「感情表出」であり、その人称制限は他者の感情は表出不可能であることに起因する。この説明の妥当性は、(2b) のような過去形の文が人称制限を受けないという事実によって裏付けられる。

- (2) 太郎は水が {a. *ほしい/b. ほしかった} 。

(寺村 1971: 279)

¹ 山岡 (2000, 2014) は「ムード」ではなく「文機能」という用語を使用しているが、本研究では同様の概念とみなし、ムード説の一種として扱う。

これは、過去形にすることでムードが感情表出から「主張」に変化するためである(寺村 1971)。この点については動詞も同様であり、(3a)では「思う」の主体が「彼」という解釈はできないが、(3b)ではそれが可能である。

(3) 彼は死ぬと {a. 思う / b. 思った}。

(寺村 1971: 281)

同様の説明は、山岡 (2014) にも見られる。(4a) と (4b) の対比に示されるように、動詞の人称制限はテイル形にすることで解除されるが、これはテイル形の文機能が感情表出ではなく「状態描写」なためである(山岡 2014)。

(4) 彼は腹が {a. *立つ / b. 立っている}。

(山岡 2014: 28)

しかし、ムード説には問題がある。金水 (1989) は、日本語の言表を「語り」と「報告」に分けた上で、過去形の文が人称制限を受けないのは語りの場合のみであると指摘している。ここで、語りは「小説や物語の地の文」、報告は「日常的対話で聞き手にある状況を知らせる行為またはその言表」と定義される。実際、(2b) は、日常的対話において太郎の様子を尋ねられた際の返答としては不自然である。人称制限をムードの問題とすると、報告では過去形でも人称制限を受けることが説明できない。

2.2. 語用論

神尾 (1990) によれば、直接形(確定的な断定の形を取る文形)の心理文が許容される基本的条件は、心理文が表す情報が話し手のなわ張りに属することであり、人称制限は他者の感情や感覚が話し手のなわ張りに属さないという事実に起因する。この説明では英語のような言語では人称制限が観察されないことを説明できないが、神尾 (1990) によれば英語にも人称制限はある。例えば“Jack feels lonely.”は常に容認可能ではなく、話し手が Jack と親しく、「Jack が孤独を感じている」という情報が話し手のなわ張りに属する場合にのみ容認される。

しかし、日本語では、「Jack は寂しい」は話し手と Jack の親密度に関わらず容認できない。つまり、日本語では他者の心理状態に言及することは英語よりも限られた条件下でしか容認されない。神尾 (1990) によれば、これは「状況が許す限り、直接形は避けよ」という語用論的な丁寧さの原則によるものである。益岡 (1997) も同様に、人称制限は「他者の私的領域を侵害することは適切ではないという語用論的な見方によって説明されるべきである」と主張している。

このような語用論に基づくアプローチの問題点として、「状況が許す限り、直接形は避けよ」という制約の曖昧さが挙げられる。また、(4b) が容認可能であることも問題である。(4b) のようなテイル形も直接形であるが、テイル形の場合は他者の感情に直接的に言及しても語用論的に問題ないのはなぜかという疑問が残る。

2.3. 視点

国広 (2001) によれば、英語では客観的な視点が取得されており、3 つの人称が平等に眺められるため、述語の語形がすべて同じになる。一方、日本語では主観的な視点が取得され、その視点から二人称と三人称を眺める。その結果、一人称とその他の人称が対立する。同様の説明は、甘露 (2004) にも見られる。

池上 (2004) の主観性による説明も同様のアプローチとみなすことができる。池上 (2011) によれば、事態把握には以下のように特徴づけられる「主観的把握」と「客観的把握」という 2 つの様式があり、日本語話者は前者を好むのに対し、英語話者は後者を好む。日本語話者は、自己の事態は主観的に把握する一方で、他者の事態は客観的に把握するため、他者の感情や感覚は直接的に言及することができない。それに対し英語では、自己が関わる事態も客観的に把握しているため、すべての人称が同じ形式で言語化される。

〈主観的把握〉：話者が言語化しようとする事態の中に身を置き、当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者はあたかもそこに臨場する当事者であるかのように、体験的に事態把握をする。

〈客観的把握〉：話者が言語化しようとする事態の外に身を置き、傍観者、ないし観察者として客観的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者はあたかもその事態の外に身を置いている傍観者、ないし観察者であるかのように、客観的に事態把握をする。

(池上 2011: 318)

ここで注目すべきは、主観的把握の記述の後半部分である。実際には臨場していない事態の中に身を置く（このような認知的操作を「自己投入」と呼ぶ）ことで、その事態を主観的に把握可能とされている。したがって、主語が他者の場合でも、自己投入によって主観的に事態把握すれば、人称制限がかかると予測される。実際、池上 (2004) は、自己投入によって人称制限が解除される例として (5) を挙げている。

(5) ある冬の日、夜明け前に外へ出てみると、ひどく寒い。

(池上 2004: 4)

池上 (2004) によれば、(5) は語り手による独白としても、語り手にとっては三人称に相当する他者について述べている文としても解釈可能である。後者の解釈では、語り手が他者の感覚に直接的に言及していることになるため、人称制限に違反している。それにも関わらずそのような解釈が可能であるのは、語り手が自己投入によってその人物の体験を主観的に把握しているためである。

しかし、以上の説明は語りという文脈が前提になっている。語りにおいて他者の感情や感覚を直接的に言及できるというのは、語り手がいわゆる「神の視点」を取得可能なためである。人称制限が主観的把握に起因するのであれば、自己投入をすることで報告でも人称制限が解除されなくてはならない。しかし、例えば「太郎は {悲しい／悲しかった}」は、どれだけ太郎に自己投入をしても報告では容認できない。

このような「視点取得」に関しては、甘露(2004: 98)も「視点は話し手の身体を離れて移動可能である」と述べている。したがって、親しい友人のような視点を取得しやすい人物が主語であれば、人称制限は解除可能であると予測される。しかし、親しい人物についての文であっても日本語では人称制限を解除できないというのは、神尾(1990)も述べていたとおりである。このような視点取得を無視した視点の議論は、視点という概念を場当たりの使用していると言わざるを得ない。

3. ムード説の優位性の論証

本節では、「ラシイやノダが付加された場合」と「副詞節・埋め込み節内」、「確信的未来の読みの場合」という3つの条件で人称制限が解除可能であることから、ムード説がもっとも妥当であるということを指摘する。

人称制限を解除可能な条件の1つ目は、ラシイやノダが付加された場合である。

(6) 太郎は水がほしい {a. らしい/b. のだ}。

(寺村 1971: 277-278)

寺村(1971)によれば、ラシイとノダはそれぞれ「推量判断」と「説明的判断」のムードを表す。つまり、ムード説を採用すれば(6)において人称制限が解除される理由を容易に説明することができる。逆に、視点説や語用論説を採用すると、特に直接形である(6b)の説明が困難である。すなわち、これらの説が妥当であれば、ノダを使用することで視点の制約が解除される、あるいは他者の感情や感覚に直接的に言及することが語用論的に問題なくなる、ということになる。しかし、ノダの機能を「説明」という用語で記述する研究は複数存在する一方で(Alfonso 1966; 久野 1973; 益岡 1991)、視点や語用論に関する機能の指摘は、管見の限り存在しない。

人称制限を解除可能な条件の2つ目は、「副詞節・埋め込み節内」である。(7)と(8)に例示されるように、副詞節や埋め込み節では人称制限が生じない。なお、(7)は著者の作例である。

(7) a. 彼女が辛いとき、私はいつも彼女のそばにいてあげた。

b. 彼女が信じるなら、私も信じるよ。

(8) a. 彼がああ男を無罪だと思っるのは当然だ。

b. 彼が新車が欲しいとは知らなかった。

(外崎 2006: 150)

これは、感情表出のムードは主節でのみ成立するものであり、副詞節や埋め込み節のムードは感情表出と解釈されないためであると考えられる。これに関しても、視点説や語用論説による説明は困難である。すなわち、副詞節や埋め込み節内では視点の制約が解除される、または他者の感情や感覚に直接的に言及しても語用論的に問題ないといった事実が存在するとは考え難い。例えば、久野(1978)が提示しているさまざまな視点に関する制約は、主節に限られるものではない。

人称制限を解除可能な条件の3つ目は、「確信的未来の読みの場合」である。主節における直接形であっても、(9)のように人称制限が生じない場合が存在する。

(9) 男がいつまでも過去のことにとらわれたら彼女は辛いですよ。

(<https://oshiete.goo.ne.jp/qa/8382210.html>, 2023年1月31日閲覧)

この例は、「確信的未来」の読みであるためムードが「予測」になり、その結果人称制限が解除されると説明できる。確信的未来とは、確信的なニュアンスをもって発話時以降に事態が成立することを断定するというものであり、この場合のムードは「予測」であるとされる(畠山 2012)。例えば(10)は、「イライラする」と「困る」の主語が三人称だが、確信的未来の読みであるためムードが予測になることで容認される。

(10) a. 後輩の子達、全然練習進んでないねー。明日、合流する真希たち、イライラするよねー。

b. 全然準備できていないじゃないか。明日来る田中君が、困るよ。

(畠山 2012: 74)

これらの例についても、確信的なニュアンスをもって発話時以降に事態が成立することを断定する場合、視点の制約が解除される、あるいは他者の感情や感覚に直接的に言及しても語用論的に問題ないという説明が合理的とは考え難い。

まとめると、上述の3つの条件で人称制限が解除されるのはムードが感情表出でないためであり、人称制限がムードの問題であることが裏付けられる。

4. ムード説の問題点の解消

ムード説の問題点として、過去形にしても報告では人称制限が解除されないことが指摘されていることは2.1節で述べたとおりである。本研究は、過去形のムードも感情表出とみなすことでこの問題の解決を図る。

(11b)のような過去形の文は、寺村(1971)ではムードが「主張」、山岡(2014)では文機能が「事象描写」とであるとされている。しかし、感情が(11a)では表出されているが(11b)ではされていないというのは、直感的に理解し難い。

(11) お会いできて {a. 嬉しい/b. 嬉しかった} です。

また、山岡(2014)は事象描写という文機能の詳細を述べていないが、山岡(2000)によれば、事象描写には感情表出にはない真理値がある。つまり、(11a)にはない真理値が、(11b)にはあるということである。しかし、発話時の感情は検証不可能であるが過去の感情は検証可能というのが妥当であるとは考え難い。

そもそも、なぜ過去形のムードは感情表出とみなされないのだろうか。これはおそらく、表出可能なのは発話時に抱えている感情のみということであろう。しかし山岡(2000)は、感情表出の機能は実際にその感情を抱いていなかったとしても、発話をすれば必ず発動すると述べている。例えば(11a)の場合、実際には嬉しいと感じていなくても、(11a)を発話することで嬉しいという感情を表出可能ということである。換言すれば、感情表出の機能は「発話時に実際に抱えている感情の表出」ではなく「任意の感情の表出」である。したがって、発話時に抱えているわけではない過去の感情が表出対象となることは可能であると考えられる。

加えて、「ホッとした」や「くたびれた」のように、過去形で感情表出になる例が報告されている(山岡 2000)。そのような例も考慮すると、過去形のムードも感情表出とみなすこと可能であり、(2b) のような過去形の文が報告では不自然というムード説の問題点は解決される。

5. おわりに

本研究では、感情等を表す動詞と形容詞の人称制限に対するもっとも妥当なアプローチはムードに基づくものであることを論証した。人称制限は「ラシイやノダが付加された場合」と「副詞節・埋め込み節内」、「確信的未来の読みの場合」という3つの条件で解除可能であり、この3つの条件を説明可能なのはムード説のみである。また、ムード説の問題点とされていた、報告では過去形でも人称制限がかかるという問題は、過去形のムードも感情表出とみなすことで解決可能であることを述べた。

参考文献

- Alfonso, A. (1966) *Japanese Language Patterns: A Structural Approach, Vol. 1*. Tokyo: Sophia University.
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (2)」山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎編『認知言語学論考 No. 4』pp. 1-60. 東京: ひつじ書房.
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」『人工知能学会誌』26: 317-322.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論: 言語の機能的分析』東京: 大修館書店.
- 甘露統子 (2004) 「人称制限と視点」『言葉と文化』5: 87-104.
- 金水敏 (1989) 「「報告」についての覚書」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』pp. 121-129. 東京: くろしお出版.
- 国広哲弥 (2001) 「場面・視点・言語表現」『語用論研究』3: 59-70.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』東京: 大修館書店.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』東京: 大修館書店.
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能: アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」岩倉具実教授退職記念論文集出版後援会編『言語学と日本語問題』pp. 244-289. 東京: くろしお出版.
- 外崎淑子 (2006) 「日本語の主語の人称制限」*Scientific Approaches to Language* 5: 149-160.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』東京: 秀英出版.
- 畠山真一 (2012) 「感情表出動詞の人称制限と変化後の局面の二重性」『尚絅学園研究紀要 A. 人文・社会科学編』6: 63-77.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (1997) 「表現の主観性」田窪行則編『視点と言語行動』pp. 1-11. 東京: くろしお出版.
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』東京: くろしお出版.
- 山岡政紀 (2014) 「文機能とアスペクトの相関をめぐる一考察: テイル形の人称制限解除機能を中心に」『日本語日本文学』24: 27-39.

現代日本語における外来語造語成分

オウ 雨 (東北大学大学院生)

1. はじめに

外来語造語成分とは、「外国原語では自立形式の形態素であるものの、外来語として日本語に取り入れられると自立性を失い、結合形式になるもの」を指す(林2013:13)。具体例としては、以下のようなものが挙げられる(下線部が外来語造語成分である)。

(1) シャワーとバスタブが分かれているので日本のお風呂感覚でバスタタイム! (OY05_05419,830) ¹

(2) 老人ホームでは、一人住まいの老人と老夫婦の世帯には「緊急通報システム」を導入している。

(LBg3_00055,14130)

上記の例文において、外来語造語成分とは、「バスタタイム」「老人ホーム」といった合成語の中にある「タイム」「ホーム」のような外来語結合形式のものを指し、これらの外来語は、原語においては単独で使われる自立形式であるが、日本語においては合成語の要素となる結合形式として多く使われる。

しかし、実際にコーパスで検索してみると、外来語造語成分が結合形式以外にも自立用法として用いられる以下のような例がある。

(3) 結果は下記のとおりです。小学生チームはチームとして過去最高のタイムで入賞を果たしました。

(OP53_00002,63490)

(4) そもそもどのタイミングで盗塁してよいのでしょうか?ピッチャーがホームへの送球時にプレートを外すか、外さないかによって違います。

(OC06_02196,1160)

上記の(3)の「タイム」は〈競技における時間のこと〉を、(4)の「ホーム」は〈競技におけるホームベース〉を意味し、自立形式として使われる。このように、外来語造語成分において、結合の程度性に違いがあることが分かる。

そこで本発表では、コーパスで用例を収集し、外来語造語成分にはどのようなものがあるのか、外来語造語成分の結合形式と自立形式はどのように日本語として使われるのかなど、結合形式と自立形式の関係を明らかにすることで、外来語造語成分の特徴を考察していく。

2. 先行研究と問題点

これまで日本語の語構成要素に関しては、和語や漢語についての記述が盛んになされてきたが(野村(1998)、山下(2008)、斎藤(2016)など)、外来語造語成分を研究対象として取り上げているものとしては、山下(2006)、林(2013)などがあるものの、分析・研究は限定されている。

山下(2006)は国語辞典を資料として作成した「造語成分データベース」に基づいて、すでに定着している外来語造語成分の概略を述べたが、外来語造語成分を原語においても結合形式であるものも含めたものとして広く捉えている。また、林(2013)は、外来語造語成分を「外国原語においては自立形式の語基であるものの、日本語に入ると結合専用のものになるもの」と定義した。そのうえで、山下(2006)などの先行研究で辞書から取り上げられた外来語造語成分の32例に基づき、それらは原語における文法性、および在来語の成分との意味的な対応によって造語成分となっていると述べている。しかし、外来語造語成分は自立形式となる場合もあり、その程度は形式によって異なるという問題については考察されておらず、この点について量的な側面から検討する必要がある。

¹ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の用例は、サンプルIDと開始番号を示す。

そこで、本発表では、自立形式なるより結合形式に多くなる語を外来語造語成分として扱い、先行研究を継承しながら、BCCWJを利用して外来語造語成分を収集し、造語成分の使用率、結合率という指標を用いて、それらがどのように分類できるのか、また品詞や意味、結合位置などの面から考察する。

3. 調査対象と分析方法

BCCWJでの検索条件は、「短単位検索」で「検索対象」を「コア」とし、「キー」を「語種-外来語」として用例を収集した。その結果、英語の表記、記号、数字を除くと、延べ語数は33089例、異なり語数4252例を得られた。そのうち、頻度が上位1000位（使用頻度7以上）までの語を調査対象（延べ語数25911例）とした。また、本発表では、結合用法が自立用法より多い形式を結合形式とする。そのため、用例の結合率50%以下が自立用法であるもの（例：「テレビ」「ドラマ」「ボランティア」など）を除く²。さらに、元の原語において接辞であるもの（例：「アンチ」「インター」「ミニ」など）、「パソコン」「エアコン」の「コン」のような同形異義語を除くと、延べ語数2701例、異なり語数89例が得られ、その89例の語の使用率、結合率の割合を算出した。

3.1 使用数と使用率

外來語造語成分がどのように使われているのかを把握するため、使用数と使用率という指標を用いる。それぞれ以下のように定義する。

(5) 使用数：対象とする造語成分のコーパスの中での出現数の総計。

(6) 使用率：対象とする造語成分の、外來語造語成分全体における割合。「使用率＝使用数÷外來語造語成分全体の延べ語数×100」とする。たとえば、外來語造語成分「マン」の使用数は89語であり、外來語造語成分全体の延べ語数は33089語であるため、使用率は「 $89 \div 33089 \times 100 = 0.27\%$ 」となる。

3.2 結合数と結合率

外來語造語成分には自立用法も存在するため、結合の程度に差がある。齋賀（1957）は「語が単独に用いられる場合」を自立用法、「語が結合の部分として用いられる場合」を結合用法とし、結合用法の比率を「語の結合力」と述べる。それに従い、造語成分の結合数と結合率を以下のように定義する。

(7) 結合数：対象となる造語成分の、コーパスの中で結合形式として使われる場合の出現数の総計。

(8) 結合率：対象となる造語成分の、外來語造語成分全体における割合。「結合率＝結合数÷その形式の延べ語数×100」とする。たとえば、外來語造語成分「マン」の結合数は89語であり、コーパスにおける「マン」の延べ語数も89語であるため、結合率は「 $89 \div 89 \times 100 = 100\%$ 」となる。

4. 外來語造語成分の分類結果と考察

本節では、収集した結果（延べ語数2701例、異なり語数89例）を結合率から分析することで、外來語造語成分を「結合専用類（100%）」「結合類（80%以上100%未満）」「準結合類（50%以上80%未満）」の三つのタイプに分類する。その結果を表1に示す³。

² この割合は3.2節で示す結合率であり、算出方法は(8)の通りである。

³ 結合率は連続的に変化する値であるため、たとえば、準結合類の中にも結合類に近く値をもつものもあるが、本発表では整理のため3つに分けた。

表1 結合率に基づく外来語造語成分の分類

結合専用類 (100%)	結合類 (80%以上100%未満)	準結合類 (50%以上80%未満)	合計
42	27	20	89

4.1 結合専用類 (100%)

結合専用類は全部で42例あり、三つのタイプの中で最も多いことが分かる。その42例を使用率の高い順に並べたものと表2として示す。本分類は本来自立形式である形態素が、自立用法から離れ、結合用法としてのみ使われるようになり、「造語成分」として機能しているものである。

品詞的には、「キャンプカー」「サラリーマン」のような名詞型が29例と多く、続いて「ニュータウン」「マイカー」のような形容詞型が11例、「フライドチキン」の動詞・形容詞兼用類が1例、「ホームラン」の動名詞型が1例ある。名詞型では、「データバンク」「バスルーム」など原語、外来語ともに名詞であり、品詞性がそのまま保持された非常に単純なタイプであるといえる。形容詞型も「ゴールデンタイム」「プチトマト」などは原語でも形容詞であり、後接要素に対して連体修飾的な機能を持つ。結合専用類全体で使用率が高い上位5語は「マン・マイ・カー・ルーム・バンク」であり、名詞型が4つ、形容詞型が1つとなる。原語の品詞性でいえば、原語では外来語造語成分は複数の品詞にまたがることが多いが、外国語と日本語の文法性の差異から、日本語に入った後に他の品詞性が失われ、名詞として機能する語例が多く見られた⁴。

意味の面では、「アメリカンガール」「ビジネスマン」などの6語は人間の属性、「スポーツカー」「ブックカバー」などの8語は具体物、「ニューワールド」「ホームタウン」などの10語は空間、「サービスデー」「サマーキャンプ」などの3語は時間、「フラワーデザイン」「バードウォッチング」の2語は生物、「消費者マインド」「ニューフェイス」などの13語は抽象的關係を表し、抽象的關係を表す語が最も多いことが分かる。在来語との対応について、上位5語「マン・マイ・カー・ルーム・バンク」はそれぞれ在来語の「人・私の・車・部屋・銀行」と意味的に対応する。つまり、これらの語は日本語の在来語と共存しつつ、合成語の一部として意味添加の役割を担う。

結合位置については、42例において前項にのみ位置する例は18例、前項と後項両方に位置する例は16例ありそのうち7例が前項に位置することが多く、後項にのみ位置する例は8例あるため、この類は前項に位置しやすいといえる。この結合位置は品詞性と関わっており、名詞型は修飾と被修飾要素になりうるため、前項と後項両方に位置できるが、形容詞型は後接要素に対する限定修飾となるため、前項にのみ位置することが多い。

4.2 結合類 (80%以上100%未満)

結合類とは結合率が80%以上100%未満のもので、結合率の高い順に並べたものを表3に示す。これらは27例見られ、収集した89例全体の30.3%となる。たとえば、「ホーム」は全276のうち7例

表2 結合専用類

語例	語例
マン	ストア
マイ	インフォームド
カー	サマー
ルーム	ロイヤル
バンク	セラー
ワールド	プチ
タウン	フット
グランド	ウオーター
ブック	フライド
ガール	アイランド
ニュー	ナイト
ラン	マインド
ゴールデン	ハンド
マリン	スノー
デー	バード
アーバン	ソーシャル
シティ	フラワー
スカイ	ソング
アイ	メート
セカンド	フレンド
タワー	ウーマン

⁴ たとえば、「マン」は英語では名詞（例：an advertising man 広告マン）、動詞（例：He manned himself for the ordeal. 彼はその試練に耐えようと気を引きしめた.）、間投詞（例：My (good) man! おい!（目下の者に言う））の品詞性を持つが、日本語に取り入れられた後には、動詞と間投詞の品詞性を失い、名詞型の外来語造語成分となる。

が自立形式、269 例 (97.46%) が結合形式である。

使用率と結合率の関係では、「ワーク・ホーム」は結合率・使用率ともに高いが、「ハウス・サイド」は使用率が高く結合率が低い。すなわち使用率と結合率に相関がないことを意味する。

品詞的には、本類は名詞型が多い点は結合専用類と同様だが、品詞性は多様である。「ホームドラマ」「フリーペーパー」など名詞型が 18 語、「オールナイト」「ナショナルチーム」などの形容詞型が 7 語、「セルフトーク」のような副詞型が 1 語、「チームワーク」のような動詞型と名詞型兼用類が 1 語見られる。

意味については、「ハイレベル」「ロングドライブ」など 12 語は抽象的關係を、「ビニールハウス」「ファーストフード」など 10 語は具体物を、「ドッグフード」「バンカープラント」など 3 語は生物を、「ゴールドデンウィーク」「フルタイム」の 2 語は時間を表し、抽象的關係を表す語が多い。ところで、造語成分はどのような意味の場合に自立するのか。この点について、(9)～(11)を例に造語成分の自立形式について検討する。

(9) 古典的なサイドプレーであるが、防御側のスクラムハーフのいないサイドを攻める合理的なプレーである。

(LBI7_00029,61420)

(10) 老人福祉法から見ると、四つの老人ホームの形態があるがぼけ老人が入居できるのは二つのホームである。

(LBI4_00018,14730)

(11) 奨学金の支給が決定してから知ったのですが、一学期の成績がオール Aでないと、たちまち支給停止になるそうです。

(PM11_00226,26380)

(9)の「サイド」は、スポーツの分野における〈陣地〉を、(10)の「ホーム」は、外国から来た新しい事物を表す〈収容施設〉を、(11)の「オール」は、〈全て、全部〉という抽象的意味を表す場合には結合形式になりやすいようである。したがって、①スポーツなどの専門用語である場合、②新しい事象を表す場合、③抽象的意味より具体的な意味を表す時は自立しやすいことが分かる。

結合位置については、27 例のうち前項のみに位置するタイプは 8 例、後項のみに位置するタイプは 2 例見られる。また、前・後項両方に位置するタイプは 17 例で、そのうち前項に位置する傾向が強いものが 9 例見られた。以上から、本類は前・後項両方に位置することが多いといえる。たとえば、「ホーム」は 209 例 (77.7%) が前項、60 例 (22.3%) が後項、前・後項両方に位置するタイプで、前項に位置する傾向が強い。「ホーム」が前項 (非主要部) に位置する場合、「ホームバー」のように「ホーム」の〈家〉という実質的な意味が薄くなり、〈家にある、自家用〉という抽象的な意味を表す。さらに、後接要素「バー」という主要部に対して限定修飾する要素となり、合成語に意味添加を行い、「ホーム」が表す具体物という概念が弱まる。一方、「ホーム」が後項 (主要部) に位置する場合、「老人ホーム」のように「ホーム」

表 3 結合類

語例	結合率	使用率
ワーク	98.54%	0.62%
ホーム	97.46%	0.83%
ハイ	94.87%	0.24%
ペーパー	94.74%	0.06%
シー	93.75%	0.05%
ロング	92.86%	0.04%
アメリカン	92.31%	0.04%
ボーイ	92.00%	0.08%
ワード	90.38%	0.16%
ダスト	90.00%	0.03%
ドッグ	90.00%	0.03%
キー	89.36%	0.14%
ハウス	89.16%	0.25%
オール	88.00%	0.08%
セルフ	87.50%	0.02%
マネー	87.50%	0.02%
サイド	85.71%	0.11%
ナショナル	85.71%	0.02%
ウィーク	85.71%	0.02%
エア	85.29%	0.10%
ノー	83.33%	0.09%
マイクロ	83.33%	0.04%
ビッグ	83.33%	0.04%
ファースト	83.33%	0.04%
タイム	82.41%	0.33%
フード	82.35%	0.05%
プラント	80.00%	0.03%

は〈収容施設〉という実質的な意味を担い、被修飾要素になる。「老人ホーム」という合成語は「青少年ホーム」とは概念的に区別され、収容施設（ホーム）の中の〈老人介護収容施設〉という細分類の一つであり、結合形式は他の要素と結合することで、より具体的な意味を表す。

4.3 準結合類（50%以上 80%未満）

準結合類とは、表4に示すように、結合率が50%以上80%未満で、結合率は低く、自立用法の比率が高い。

表4 準結合類

使用率と結合率の関係を見ると、「サービス・ポスト・スーパー」は結合率が低く使用率が高い一方、「アート・ミラー・馬拉ソン」は結合率が低く使用率が比較的低いため、これは結合類と同様に使用率と結合率に相関関係がないことを意味する。

品詞的には、本類は名詞型が多く、「ルームライト」「ヘッドライト」などのような名詞型が15例ある。また原語では形容詞とされる「スーパーウーマン」「ベストセラー」などは形容詞型として5例見られ、日本語でも形容詞としての品詞性を保っている。

意味については、「ミドルレンジ」「自己ベスト」などの10語は抽象的關係を、「ダストボックス」「抹茶アイス」などの7語は具体物を、「スクールゾーン」「サマースクール」などの3語は空間を表し、抽象的關係を表す語が多い。本類の「ポスト」は「郵便ポスト」の〈郵便〉と、「ポストモダン」の〈以後〉という複数の意味を表し、同様の例はほかにも多く見られた。本類は意味用法が多く、日本語での定着度が高い略語である場合は自立形式になりやすい。また、造語成分は複数の意味がある場合は、その中の具体的な意味を表す時には自立形式で、抽象的意味を表す場合は、結合形式で使われる傾向がある。次の(12)(13)に示す。

語例	結合率	使用率
ミドル	78.57%	0.04%
ボックス	75.00%	0.06%
フル	75.00%	0.05%
ゾーン	75.00%	0.05%
プラザ	72.22%	0.05%
ライト	71.79%	0.12%
ナイス	71.43%	0.04%
ベスト	70.69%	0.18%
アイス	68.75%	0.05%
スクール	68.42%	0.06%
ファミリー	66.67%	0.06%
ヘッド	64.00%	0.08%
スーパー	64.00%	0.22%
アート	63.64%	0.03%
ミラー	62.50%	0.02%
ポスト	62.16%	0.22%
ラウンド	61.90%	0.13%
セールス	60.00%	0.03%
サービス	57.82%	0.89%
馬拉ソン	50.00%	0.03%

(12) どこにも連れて行ってやれない罪滅ぼしに近所のSM（ショッピングモール）にアイスを食べにきました！
(OY14_01203,570)

(13) a.へんな子どもは、その二つにわかれたポストの中へは行っていききました。
(PB29_00013,5330)

b.そういう意味ではここに言うポストモダンに改めての定義を要する新しい概念なのかもしれません。
(PM21_00086,29320)

(12)は、「アイスクリーム」の略語として使われており、自立形式になる。(13)は、(13a)のように〈郵便物を入れるための箱〉という具体的な意味である場合は自立形式、(13b)のように〈以後〉という抽象的意味を表す場合は結合形式で使われる。

結合位置については、本類は前・後項両方に位置することが多い。20例の中で前項のみに位置するタイプは4例、後項のみに位置するタイプは3例ある。前・後項両方に位置するタイプは13例あり、そのうち前項に位置する傾向が強い例が8例あることが確認された。

4.4 結合に関する考察

以上、89例の外来語造語成分の品詞や意味、結合位置を調査した。外来語造語成分がどのような語種の要素と合成語を形成するのかについて造語成分ごとに検討したところ、外来語との

結合比率の平均値は 90.14%であった。つまり、合成語を形成する際に、在来語（和語・漢語）より外来語と結合しやすいため、合成語の造語成分として取り入れられるのだと考えられる。

外来語が名詞型として多く借用される理由には、外国から日本にはない概念が輸入されたときに、それを表す語が必要になるということが考えられる。自立形式ではなく結合形式として借用することは、新しいことを表す際に日本語の中に同じ意味の在来語が既に存在し、直接表す語は必要ないが、結合要素を修飾して補充するという意味添加機能を働かせることで使用され、在来語と競合しながらも棲み分けている。

5. おわりに

本発表では、外来語造語成分を量的に調査し、どのようなものがあるのか、そして結合形式が自立形式とどのように日本語として使われるのかを考察した。結論として、以下のようにまとめられる。

- 1) 外来語造語成分は結合率によって、「結合専用類（100%）」「結合類（80%以上 100%未満）」「準結合類（50%以上 80%未満）」の三つのタイプに分類でき、結合の程度差がある。
- 2) 造語成分の結合率は意味と関連している。すなわち、スポーツなどの専門用語および新しい事象を表す場合、自立形式であることが多い。抽象的な意味を表す時に結合形式になることが多い。また、略語である場合は自立することが多い。
- 3) 外来語造語成分の品詞性は名詞型、形容詞型が多い。また、前項に位置しやすく、修飾限定の機能を持つ。くわえて、合成語を形成する際に在来語（和語・漢語）より外来語と結合しやすいため、合成語の造語成分として取り入れられる。よって、造語成分は必ずしも新しい意味を表すわけではなく、むしろ合成語において意味を付加する機能や、意味の変化をもたらす機能があることを示唆している。

参考文献

- 斎賀秀夫（1957）「語構成の特質」『講座現代国語学IIことばの体系』筑摩書房（斎藤倫明・石井正彦編『日本語研究資料集 1-13 語構成』ひつじ書房 1997 に再録） pp.24-45
- 斎藤倫明（2016）「語構成の文法的側面についての研究」ひつじ研究叢書
- 野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告 61 電子計算機による国語研究 IX』 pp.102-138、秀英出版
- 野村雅昭（1998）「結合専用形態の複合字音語基」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 11、 pp.149-162、早稲田大学日本語研究教育センター
- 山下喜代（2006）「現代日本語の語構成要素—外来語を中心にして」『青山学院大学紀要』 48、 pp.95-110、青山学院大学文学部
- 山下喜代（2008）「現代日本語の語構成要素—和語を中心にして—」『青山学院大学紀要』 49、 pp.141-158、青山学院大学文学部
- 林慧君（2013）『現代日本語造語の諸相』日本語学研究業書 6 國立臺灣大學出版中心

用例検索サイト

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

https://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/（2023 年 3 月 20 日確認）

漢語「透視」の展開 ―専門語と一般語の関係に着目して―

おくやま ひかる
奥山 光 (東京大学学生)

1. 研究背景と目的

近代漢語研究において専門語の研究は重要な領域であるが、未だに研究の蓄積が薄い分野が存在する。発表者のミクロな視点での研究目的は、そのような分野の漢語の語誌を記述することで、近代漢語研究の空隙を埋めることである。また、ある分野で専門語として用いられる語が、一般語として、あるいは他の分野の専門語として用いられる場合がある。マクロな視点での目的は、そうした専門語と一般語の関係について個別的な研究の蓄積のもとに論じることである。

本発表で対象とする「透視」は近代に成立した漢語であり、「透視図(法)」のように図学用語として用いられる。図学分野の漢語研究は手薄であるように思われるため、上記のミクロな視点での目的に合致する。また、「透視」は一般語用法を持つほか、他の分野でも専門的な文脈で用いられるため、単なる図学用語研究の枠を超えた、マクロな視点での研究にも結びつく語である。

2. 先行研究：辞書の記述

はじめに、『日本国語大辞典』（第二版）および中国の近代漢語辞書である『近現代漢語辞源』の記述と、明治期から大正期の英和辞典・国語辞典類における「透視」および「透視」を含む見出し語の記述を確認する。各辞書の意味分類と初例年をまとめると、表1ようになる。

表1 辞書類における「透視」の意味と初例年

意味	『日本国語大辞典』	『近現代漢語辞源』	その他の辞書
一般語：透かして見る	「透視」(1) 初例 1881 年	「透視」(1) 初例 1623 年	山田美妙『大辞典』 1912 年
図学用語：透視図法	「透視図」「透視図法」他 初例 1914 年	「透視」(2)・他 初例 1903 年	島田豊『 ^{再訂} 増補和訳英字彙』 1891 年
超心理学 ¹ 用語：超能力	「透視」(2) 初例 1901 年	「透視」(3) 初例 1941 年	上田万年・松井簡治 『大日本国語辞典』 1915-1919 年
光学 ² 用語：X線	「透視」(3) 用例なし	「透視」(3) 初例 1925 年	

各辞書の用例³を見ると、『近現代漢語辞源』所載の 1623 年の例が最も早い。この例の出典は艾儒略『職方外紀』で、当該箇所は渾天儀について記述された部分である。

(1) 其儀以玻璃為之、重重可透視、真希世珍也。(艾儒略『職方外紀』)

『近現代漢語辞源』の語釈は「通過透明的物質察看」となっており、「透明なものを通して向こう側を見る」という意味の一般語として理解できる。

『日国』所載の用例中最も早いものは、欧米の植物学の概説書を纂訳した教科書である『植物小学』だが、ここでの「透視」は植物学用語として用いられているわけではない。

¹ いわゆるテレパシーなど超能力による現象を扱う分野を指す。

² 本発表では、X線自体の研究の文脈を尊重して光学用語として扱う。X線は当初専ら医学に応用されたが、のちに様々に活用された。用例(15)参照。

³ 以下、引用にあたっては下線を私に付し、旧字体および簡体字は通行の字体に改めた。

(2) 河流を透視するに底に蒼々の色あるは水草其中に繁茂するなり(松村任三纂訳『植物小学』)

佐藤(2007)には、同様に翻訳専門書中に見られる一般語例として1876年にファン=カステールによって訳された教育学専門書『彼日氏教授論』の例が挙げられている。

(3) 校室ノ四方ヲ通ジ、外ヨリ透視スルコトヲ得シメ、(ファン=カステール訳『彼日氏教授論』)

この例は「教室の壁は透明にすべきである」という文脈であり、(1)の「玻璃」や(2)の「河流」と同様に「透明なものを通して向こう側を見る」と解釈できあがる。

ところで、(1)と(2)(3)の間には時代的な隔りがある。『植物小学』『彼日氏教授論』がともに翻訳資料であるという点を踏まえると、幕末から明治初期には「透視」の語がすでに一般語として用いられていたという蓋然性があるが、この間に国内で「透視」の語は見られるのだろうか。この点については、3.1で考察する。

図学用語としては島田豊^{増訂}『和訳英字彙』の1891年版に *Perspective* の訳語として「透視画法」が見られるが、図学用語「透視」の成立年はさらに遡るものと思われる。超心理学用語や光学用語についても表1の初例が初出とは限らないため、用例調査をする必要がある。

3. 用例調査

3.1 幕末まで

中国先秦から民国期までの文献を収録している「中国基本古籍庫」を用いて検索を行った限りでは、『職方外紀』より古い用例は見出せなかったが、近い時期の1637年『天工開物』にも「透視」の一般語例が確認できた。

(4) 凡観火候、從窰門透視内壁、土受火精、形神揺蕩、若金銀鎔化之極。(宋応星『天工開物』)

「火加減を見る時は、窰の入り口から炎を通して内壁を見る」と解釈できる。「形神揺蕩」とあるのは、物理的には揺れて見える炎あるいは陽炎のことを指すと思われ、(1)と同様に「透明なものを通して向こう側を見る」という意味で説明できそうである。

『職方外紀』や『天工開物』は日本国内に持ち込まれて、付訓されており、国文学研究資料館鶴飼文庫蔵の『職方外紀』1799(寛政11)年写本、国立国会図書館蔵『天工開物』1771(明和8)年刊本にも「透視」の語が確認できる。これらの付訓資料では「透視」の二字の間に音合符が認められ、「透視」が二字漢語として受容されたことがわかる。

1833(天保4)-1835(天保6)年の宇田川榕菴『植学啓原』には、次のような例が見られる。

(5) 水仙・葱蒜之苞ハ薄キコト蟬翼ノゴトク、内花ヲ透視ス。(宇田川榕菴『植学啓原』)

この例は薄い苞(はかま)を通して内花を見ると解釈でき、(1)(4)と同様に理解できる。

以上のことから、「透視」はもと中国明代の宣教師による漢訳洋書中に用いられ、それらの資料が1720年の漢訳洋書輸入の禁緩和に伴って国内にもたらされたことで、知識人の間で次第に共有されていったと考えられる。これら幕末までの用例はいずれも「透明なものを通して向こう側を見る」という一般語の意味で説明可能であり、これが「透視」の基本義と考えられる。

3.2 明治期以降の一般語

明治期以降昭和戦前期までの一般語例を収集するために、「日本語歴史コーパス」「朝日新聞クロスサーチ」「新聞記事文庫」を用いて検索を行い、それぞれ8例、81例、186例が得られた⁴。以下、各用例の末尾にそれぞれ「歴・」「朝・」「新・」と記した上で、出典を示す。

最も目立った用法は、幕末以前の一般語例と同様「透明なものを通して向こう側を見る」という意味のものであった。

(6) 火室の中部の前壁に、雲母を張りたる小さき窓ありて、内部に於ける火の焚え方如何を透視し得る様になしある事 (歴・石原笠軒「煖室法の種類」60M 太陽 1901_02035)

(7) 游泳すべき場所は清澄にして少くとも水面下約三尺の場所を透視し水底は遠浅なる砂地を選ばざるべからず (朝・朝日新聞 1906.7.4)

一方で、次のように視線が何かを透過するという要素が読み取れないものもある。

(8) バイロンは此時尚ほ壯にして其の心想事成漸く詩情より実動を渴望するの域に進み、其書架を、其寢牀を、其医師を、其従者を載せて、富豪なる貴族の華奢を尽してアルプス山を越え、自ら詩界のナポレオンを以て許さんとし、峰巒を疾呼し、懸瀑を号令し、閃電暴雷を指揮し、崇巖なる自然を透視し、其幽玄なる至境に向つて万斛の熱涙を傾瀉し去つて凱旋のシイザルに似たる意気を以て三寸筆頭に迸洩せしもの即ちこのマンフレッドなり。(歴・島崎藤村「亡友反古帖」60M 女雑 1895_10014)

この記事は島崎藤村によるものであるが、当該箇所は1890-91年頃の北村透谷『マンフレッド及ひフオースト』の引用である。ここでの「透視」は「見渡す」「見晴らす」といった意味であろう。同様の例は、新聞記事中にも見受けられる。

(9) 因みに夏期の調査は樹葉の鬱着して前路を透視し得ざると虫類の襲撃とに依つて非常の困難を感じつつあり (新・北海タイムス 1912.8.15 鉄道 01-075)

(10) 此潜航艇の第一の欠点とも称すべきは其海底深く沈降せる時、能く遠距離を透視する能わざる事これなり。(新・神戸新聞 1915.3.25 軍事(国防) 03-071)

これらの用例については、「透明なものを通して向こう側を見る」という基本義の「向こう側を見る上で遮蔽するものがない」というところから転じたものと解釈し得るが、連続した意味変化と言えるかという点については検討の余地がある。このような用法はやがて抽象化し、「物事の全容を見通す」「本質を捉える」といった意味で用いられるようになった。

(11) 護謨価格の前途に就ては何人も明確に透視する者はない (新・台湾日日新報 1915.7.29 護謨工業 01-060)

(12) 此に於てか吾人は終始事物の外観に遮蔽せられず其真相を透視することを専一としなければならぬ。(新・法律新聞 1915.11.8 議会政党および選挙 04-028)

3.3 明治期の図学用語

⁴ 専門語用法のものを含む。

今日「透視図法」と呼ばれている技法を用いて描かれた図画は、江戸末期にはすでに見られる。秋田蘭画で知られる佐竹曙山の「写生帖」（秋田市立千秋美術館蔵）はその代表例で、西洋画法の理論がまとめられた手記や、透視図法を用いて描かれた図画が収められている。しかし、その技法の名を明記した箇所は見られない。

明治初年の図学教科書には、同図法を指す **Perspective** についての説明が見られるが、最初期の教科書ではその訳語が一定していなかった。例えば、1871 年の川上冬崖『西画指南』前編には次のような記述が見られる。なお、同書は翻訳資料である。

- (13) ^{ベルスペクティブ} 照景法 [此法ハ屋宇器物及山水ノ遠近或ハ映影反射等ヲ幾何学ニ拠リ写真スルー画科ノ名目ナリ] (川上冬崖『西画指南』 []内は割注)

Perspective に対して「照景法」という語を当てているが、これは川上の造語と思われる。これ以降の主な図学教科書における **Perspective** の訳語は、表 2 の通りである。

表 2 主な図学教科書における **Perspective** の訳語

年	資料名	著訳者	Perspective の訳語
1871	西画指南	川上冬崖	照景法
1876	百科全書 画学及彫像篇	内田弥一	遠景写法
1878	小学画学教科書	中野保	遠景写法
1879	画学照景法	小坂皆起	照景法
1880	図法一斑	多賀章人	配景法
1882	用器画法	平瀬作五郎	透視画法
1885	写景法解説	石丸三七郎	写景法
1886	透視画法	宮島鎗八	透視画法
1890	配景図法	中村達太郎	配景法
1892	透視画法	印藤真楯・岡村増太郎	透視画法
1893	光線並写真化学	小川一真	透視画法
1895	中等用器画法	井汲陸二郎	透視画法
1895	中等教育用器画法	竹下富次郎	遠近投象法
1901	中学用器画法解説	松井昇	照鏡画法 (透視画法)

これを見ると、**Perspective** に対応する専門語にはゆれがあることがわかる。「透視」の語は1882 年の『用器画法』に見られたのち、1890 年代になって多く見られるようになっている。「透視」以外の語のうち「遠景法」「配景法」「照鏡画法」などは、英華辞典・英和辞典類において **Perspective** の訳として見られる語である。

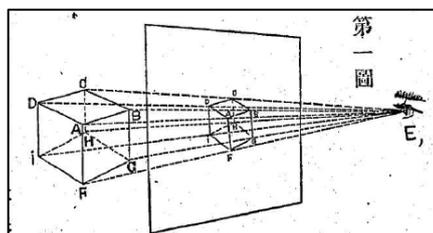


図 1 宮島鎗八『透視画法』より

なお、この画法に対して「透視」の語が用いられた理由については、図 1 を見ると明らかである。「透明なものを通して向こう側を見る」という基本義に沿った訳語と言えよう。

3. 4 明治期以降の光学用語

「透視」の語は、光学の分野においても用いられた。1895 年にドイツでレントゲンが X 線を発見すると、現地に留学していた長岡半太郎によってすぐに日本にも報告され、多くの再現実験

が行われた⁵。この時期の関連資料の中で、1896年の8月に村岡範為馳が行ったX線についての講演の内容をまとめた『X放射線の話』には「透視」の語が用いられており、管見の限りではこれが最も早い光学用語「透視」の例である。

(14) 此簡單なる器械の(ab)なる処に眼を当て、クルクス管の前に居る患者に向つて見る時は、能く其患処を透視する事が出来る (村岡範為馳『X放射線の話』)

新聞記事中にも、光学用語の「透視」はしばしば見られた。

(15) 最初は主として身体の内部を透視するに頗る重宝であったから専ら医術に用いられて居たが、現在では金剛石の真偽を判かつにも、古画の加筆を許くにも用いられる。(新・報知新聞 1921.11.12 文化 02-105)

ここで注目すべきは、X線の発見とその活用によって、言わば「透明でないものを通して向こう側を見る」ことが可能になったということである。

3. 5 明治期以降の超心理学用語

超心理学用語「透視」は、1910年に当時東京帝国大学にいた福来友吉がおこなった研究に由来するものと思われる。福来が発表した論説のうち、「透視」が用いられるものは、管見の限り『哲学雑誌』第25巻第282号に掲載されたものが最初であり、題目はそのもの「透視の実験研究」というものである。冒頭部分を引用する。

(16) 本年四月、余が今村博士と熊本市に出張して共同的に研究したる事實は、古来天眼通或は千里眼として言ひ伝えられたるものに類似する、世にも一種稀代の能力を具ふる一婦人なり。但し天眼通或は千里眼なるものは、數百里或は數千里外の遠隔地の事情出来事を見る作用に名けたるものなるに、右婦人に付きて吾人の研究したる所は、器物の内に封入し置かれたる事物を、嚴封の儘にて見る作用なれば、天眼通或は千里眼の名称を用いずして、暫く表題の如く透視の名称を以て婦人の精神能力を呼ぶこととせり。(福来友吉「透視の実験研究」)

「透視」は「器物の内に封入し置かれたる事物を、嚴封の儘にて見る作用」を表し、単に遠くにあるものを見る作用である「天眼通」「千里眼」と区別して定義されたものである。ここでの「透視」はやはり「透明でないものを通して向こう側を見る」ことであり、このような能力を持つという人物が突如として現れたこと自体にX線透視の影響が垣間見える。

福来の一連の研究は、再現実験におけるトラブル等もあって多くの論争を巻き起こし、新聞等でも連日報道された⁶。やがて透視実験に対する懐疑派も現れ、双方の主張や透視能力を持つ本人の反駁なども掲載された。

透視の実験に関する話題が冷めても、新聞記事中には超心理学用語の含みを持った一般語例がしばしば見られた。

⁵ 詳細な経緯は天野(1995)に詳しい。

⁶ 表1にある『大日本国語辞典』が超心理学用語の意味のみを立項していることも注目される。

(17) 千里眼ならずとも其の心中を透視するに難からず (新・大阪毎日新聞 1913.10.13 政治 08-022)

(18) 生れながら身体動作の敏捷であるが為に、窃盗犯人となることを促す場合は無くはない。又熟練するに従って、感覚も鋭くなり、運動も敏捷となって、恰も透視でもするが如く、適当に品物に見当がつき、巧に手にするようになる。掏摸などに之を見る。(新・大阪毎日新聞 1918.7.11 犯罪,刑務所および免囚保護 02-039)

(17) の「千里眼」との共起や (18) の比喩的な用法を見るに超心理学用語としての背景を踏まえた表現であると考えられ、当時の社会に超心理学がもたらした影響の大きさを窺わせる。

4. 専門語と一般語の関係について

「透視」の語は、『職方外紀』をはじめとする漢訳洋書の舶来とともに日本に持ち込まれ、幕末には知識人に知られていたと考えられる。そこでこの用法はいずれも「透明なものを通して向こう側を見る」という意味の一般語であった。やがて、その基本義をもとにしながら図学・光学・超心理学の各分野で専門語として用いられるようになり、その中で、X線や透視能力といった新発見を通して「透明なもの」という制約が失われていった。

国立国語研究所 (1981) にはすでに、知識の常識化によって専門語が一般語化することがあるとの指摘が見られる。この「知識の常識化」によって一般語に (17) (18) のような「本来感知できない (し難い) ものを感知する」といった用法がもたらされた。新聞という媒体を通して人々に知れ渡ったという点に加え、福来の実験の話題性が重要な要因と考えられる。

このように、「透視」を専門語と一般語の関係という観点から見ると、両者の関係が双方向的であるという点、一般語の中での意味変化だけでなく、複数の分野で専門語となる中で意味の拡張を起しているという点で特徴的である。近代漢語における専門語と一般語の関係が、必ずしも一対一の、あるいは一方通行のものとは限らないということを示す興味深い語である。

5. 参考

【参考文献】国立国語研究所(1981)『専門語の諸問題』国立国語研究所報告 68, 秀英出版/天野良平(1995)「日本におけるX線学研究のあけぼの—医学利用前史:物理学者が果たした役割—」『保健物理』30, pp.113-116. 【参考資料】艾儒略(1623)『職方外紀』国文学研究資料館鶴岡文庫蔵 1799年写本/宋応星(1637)『天工開物』国立国会図書館蔵 1771年刊本/佐竹曙山(1786)『写生帖』/宇田川榕菴『植学啓原』松村任三(1881)『植物小学』/ファン＝カステール(1876)『彼日氏教授論』/村岡範為馳(1896)『X放射線の話』/福来友吉(1910)「透視の実験研究」『哲学雑誌』25(282), pp.1-95. 【図学・幾何学教科書】川上冬崖(1871)『西画指南』文部省/内田弥一(1876)『百科全書 画学及彫像篇』文部省/中野保(1878)『小学画学教授書』/小坂皆起(1879)『画学照景法』/多賀章人(1880-1882)『図法一斑』/平瀬作五郎(1882)『用器画法』中近堂/石丸三七郎(1885)『写景法解説』/宮島鎗八(1886)『透視画法』三田印刷所/中村達太郎(1890)『配景図法』/印藤真楠・岡村増太郎(1892)『透視画法』博文館/小川一真(1893)『光線並写真化学』/井汲陸二郎(1895)『中等用器画法』金港堂/竹下富次郎(1895)『中等教育用器画法』松近堂/松井昇(1901)『中学用器画法解説』日黒書房・成美堂 【戦後に刊行された辞書類】日本国語大辞典第二版編集委員会編(2000-2002)『日本国語大辞典 (第二版)』小学館/羅竹風主編(1990-1993)『漢語大詞典』漢語大詞典出版社/黄河清(2020)『近現代漢語辞源』上海辞書出版社/佐藤亨(2007)『現代に生きる 幕末・明治初期漢語辞典』明治書院 【英和辞典】島田豊(1891)『^{増補}和訳英字彙』大倉書店 【国語辞典】山田美妙(1912)『大辞典』高山堂/上田万年・松井簡治(1915-1919)『大日本国語辞典』金港堂書籍 【データベース】朝日新聞クロスサーチ/神戸大学経済経営研究所「新聞記事文庫」/国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」/国立教育政策研究所教育図書館「近代教科書デジタルアーカイブ」/国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022.10. 中納言バージョン 2.7.0 <https://clrd.ninjal.ac.jp/shj/>) /国立国会図書館デジタルコレクション/次世代デジタルライブラリー/中央研究院近代史研究所「英華字典資料庫」/中国基本古籍庫/広島大学図書館「教科書コレクション画像データベース」

【付記】 本発表は、2021年度日本語学会秋季大会学生セッションでのポスター発表「漢語「透視」の展開」(G-21)の内容を発展させたものです。

秋田方言の ABAB 型オノマトペにおける語基音の音韻連結とその特徴

工藤真子 (東北大学大学院生)

1. はじめに

方言オノマトペについては、様々な角度から共通語オノマトペとの差異が論じられてきている。齋藤(2007)などによって方言オノマトペには地域差があることが知られているが、未だその詳細については明らかになっていない部分が多い。

オノマトペの研究にあたっては、語基とよばれる単位を設定し、それによって研究を行うのが主流である。すなわち、オノマトペを「語基」と「派生素素」にわけて考える方法である。このうち、地域差に関する研究では派生素素に関する研究が盛んで、共通語であまり見られない「語基の超過反復」や「ラ接辞」などが方言オノマトペを特徴づけていることが分かってきている。

一方語基に関する研究で地域差を扱ったものは少なく、こうした研究を行うことはオノマトペの地域差を解明する上で重要な手がかりをもたらすと期待される。

語基に関する研究には、音と意味の関係を明らかにしようとする音象徴という考え方のもとで個々の音韻に焦点を当てたものや、音韻の組み合わせに着目して研究を行っているものがある。発表者は後者をより基本的な課題と捉え、本研究では語基の組み合わせに着目する。本研究で対象とするのは秋田方言の ABAB 型オノマトペである。今回は地域差を扱う先駆けとして、主に共通語のオノマトペと比較して秋田方言オノマトペの特徴を明らかにすることを試みる。

2. 研究の方法

2.1. 語基音の組み合わせを扱う理由

本研究では、浜野(2014)の手法を参考に、2音節語基 CVCV のそれぞれの音に $C_1V_1C_2V_2$ のように番号をふる。

この語基音の組み合わせについて、小野(2009)では、「ア行では、オノマトペのもととして、『アラ』『ウラ』『エラ』『オラ』が、少なくとも現代では、まだ一般に使われていない、ということになる。[中略]けれども、実は、手つかずの部分は、わざわざ見つけるまでもなく、まだまだたくさん残っている、ということもわかってきたように思う。オノマトペのもととして使われているのは、ほんのわずかなのである」(pp.34-36)と述べる。このことから、共通語オノマトペでは語基音の組み合わせには一定の制限があり、あり得ない音配列が存在すると分かる。

宮沢賢治の特徴的なオノマトペについて扱った田守(2009)では、賢治のオノマトペは、慣習的なオノマトペから無声化・有声化の2種類の子音交替、硬口蓋化、破擦音化、摩擦音化、非硬口蓋化、母音交替、モーラ交替などの音韻プロセスを経て派生したと仮定できるとしている。また、同じく宮沢賢治のオノマトペについて研究した川越(2005)では、賢治のオノマトペは、東北方言で日常的に用いられるオノマトペと特徴が類似していること、そしてさらにそれらの中にはオノマトペ語基のバリエーションが共通語と異なる点で特徴的となっているものがあることを述べている。川越(2005)は以下の4つの観点から賢治のオノマトペと共通語オノマトペの語基の違いについて述べている(下線が賢治のオノマトペ)。

- ① 語基に用いられる濁音の位置が、1拍目と2拍目で入れ替わっている、もしくは清音になっている(例：ぐびぐび→くびくび)
- ② 語基の子音までが同じであるが、母音に違いが見られる(例：ぐっすり→ぐっさり)
- ③ オノマトペの語型は共通語のものと同じだが、語基そのものが共通語と違いを持つ(例：

かぶかぶ、ツアラツアラン、どぎどぎ)

④ 語基が反復される間に、半濁音だった語音が濁音になる (例：パチパチ)

これらは、田守 (2009) で挙げられる種々の音韻プロセスと関連している。賢治のオノマトペが東北方言のオノマトペと類似しているということは、東北方言のオノマトペを特徴づけているものには田守 (2009) で挙げられる種々の音韻プロセスが関わってくるのではないだろうか。

また工藤 (2022) では東北方言オノマトペに特徴的に現れる、語基の C_2 に現れる濁音についての考察を行った。工藤 (2022) では、共通語オノマトペでは一般的でない「 C_1 、 C_2 がともに有声阻害音となっているもののうち、 $C_2 \neq [b]$ のもの」「 C_1 = 有声阻害音、 C_2 = 無声阻害音となっているもののうち、 $C_2 = [p]$ のもの」が秋田方言オノマトペに現れるとしている。これは、田守 (2009) の有声化の子音交替に関わると見ることができる。

こうした先行研究から、発表者は小野 (2009) で述べられるような、共通語における「まだ手つかずのオノマトペのもと」が、宮沢賢治のオノマトペや方言オノマトペには現れ、それがこれらのオノマトペの特徴につながっているのではないかと考えている。すなわち、語基音の組み合わせに着目することによって秋田方言オノマトペの特徴が明らかになるのではないかと考え、本研究を行った。

本研究では、秋田方言オノマトペのうち、語基を反復した形である CVCV-CVCV 構造 (ABAB 型) となっているオノマトペを対象として、語基の音の組み合わせを観察する。

対象とするオノマトペは、AB 型を反復したオノマトペ (ABAB 型) ならびに ABAB 型に派生要素 (長音・促音・撥音・リ・ラ・コ) が付加して派生したオノマトペである。これらは Waida (1984) 等で述べられるように日本語のオノマトペの中でもっとも多い割合を占める典型的なものであり、オノマトペ語基の音の組み合わせの特徴を考察するのにふさわしいと考えた。また、小林 (1965) においても ABAB 型オノマトペを対象としており、対応する上でも都合がよい。

2.3. 対象とするオノマトペの地域とオノマトペの収集方法

本研究では秋田方言オノマトペを対象として研究を行う。本研究では以下に示す 3 種の資料を用いて対象となるオノマトペを収集した。それぞれの資料におけるオノマトペの収集方法についても以下に示す。

① 昔話資料 秋田県内の昔話が検索できるウェブページ「秋田の昔話、伝説、世間話一口承文芸検索システム」を利用し、このデータベースに掲載されている方言形で記された昔話のうち計 399 件の昔話 (ウェブ上から 181 件、書籍から 218 件) から、411 語 (のべ)、233 語基 (異なり) を対象とした。

② 方言辞典 秋田県の方言辞書『秋田のことば』からオノマトペを抜き出し、102 語 (のべ)、89 語基 (異なり) を対象とした。

③ 先行研究によるオノマトペのリスト 昭和 50 年当時の学生のレポートをもとに秋田方言のオノマトペのリストを作成した北条 (1995) の成果を利用し 268 語 (のべ)、256 語基 (異なり) を対象とした。

最終的に対象になった語基数は 483 語基となった。これらのオノマトペの語基 CVCV 部分について、 C_1 、 C_2 、 V_1 、 V_2 それぞれの音素を表に整理した。

音素表記は小林 (1965) を参考にし、次のように表記することにした。小林 (1965) では母音を /a, i, u, e, o, ya, yu, yo/、子音を /p, b, h, t, d, k, g, s, z, m, n, r, w, y/ によって表記している。本研究では基本的にはこの記号を用い、方言特有と思われる音韻が観察された場合は適宜補った。

3. 結果

3.1. 結果と先行研究との比較

2.3 節で示した資料から抽出し、分析の対象として設定できたオノマトペ語基は次に示すものである。

■秋田方言のオノマトペ語基一覧

アオ アカ アガ アザ アンダ アバ アン イガ イギ イチ イヘ イロ ウオ ウサ ウジャ ウチャ ウヂャ ウチュ
 ウル ウン エカ エガ エコ エンジャ エチャ エヘ エラ エン オイ オエ オギヤ オン ガエ ガオ カキ ガキ
 ガギ ガグ カサ ガサ ガシ ガジ カタ ガタ ガダ カチ ガチ ガヂ カチャ ガチャ ガツ ガデ カバ ガバ ガフ
 ガブ ガブ カホ カボ ガホ ガボ ガボ カヤ ガヤ カラ ガラ ガリ ガワ カン ガン キガ キカ キチ ギチ
 ギヂ ギチャ ギチョ ギト ギド ギナ キヤ ギャロ キャン キャン キョロ キラ ギラ キリ ギリ キロ ギロ
 キン グキヤ グシ グジ グショ グズ グズ クタ グダ グヂ クチャ グチャ グヂャ グヂョ グツ グヅ クツヤ
 グデ グナ クニャ グフ クラ グラ グリ クル グル グレ グワ グワチ グワチャ グワヤ クワラ グワリ
 グワン グン ゲアロ ゲチャ ゲチャ ゲテ ゴイ ゴウン ゴエ ゴガ コク ゴク ゴシ コソ ゴソ コチ コチャ
 コチョ ゴチョ ゴヂョ コテ ゴデ コト ゴナ ゴニャ ゴブ コベ ゴヘ ゴベ ゴベ ゴボ ゴモ ゴヤ ゴヨ ゴリ
 コロ ゴロ コン ゴン
 シク ジグ シク シタ ジタ ジト ジド シナ ジナ ジバ ジバ ジャガ ジャク ジャグ ジャブ ジャボ ジャラ
 ジャン ジョキ ショパ ジョロ ジラ ジリ ジロ スカ スク スタ ズタ ズブ スポ ズボ スラ スル ズル ズン
 セカ ソコ ゴシ ソヨ ゴヨ ソロ ゴロ ダオ ダキ ダク ダゴ タチ タチ タブ ダブ ダブ ダボ ダラ ダン
 チカ チカ チガ チガ チト チナ チバ チヤ チヤカ チヤガ チヤキ チヤク チヤブ チョキ チョコ チョベ
 チョロ チョン チラ チリ チン ツコ ツラ ツル テカ テガ デカ デガ デンガ デク テコ テタ デダ テラ
 デラ テロ デロ テン デン トカ トガ トガ トキ トク トク トコ トド トド トド トド トド トド トド トド
 ドヤ トロ ドロ トン ドン ニカ ニグ ニコ ニタ ニチャ ニヤ ニャオ ニョロ スタ スト スラ スル ネコ
 ネタ ネット
 バシャ バジャ バタ バダ バタ ハチ バチ パチ パチャ バフ バホ バヤ パヤ バン パン ヒエ ヒカ ビカ
 ビガ ビカ ヒク ビク ビク ピジ ヒタ ビダ ピタ ビチ ヒッペア ピョン ヒラ ビリ ピン フカ プガ プカ
 ブク ブグ ブク ブサ フシ ブツ フニャ ブヨ フラ ブラ フリ ブリ ブル フワ フン ブン ブン ヘコ ベタ
 ベタ ヘチャ ベド ヘナ ヘニャ ヘラ ベラ ベラ ヘロ ベロ ベロ ホエ ホカ ホガ ボガ ボカ ボカ ポキ
 ホク ホグ ボゴ ボソ ポソ ホダ ボタ ボダ ボチ ポツ ポト ポポ ホヤ ボヤ ボリ ポロ ポロ ボン ボン
 マカ マク マグ マジ マズ マチャ マヤ マル マン ムカ ムク ムシ ムタ ムニャ ムヤ ムリ メタ メチャ
 メチョ メラ メロ モカ モグ モコ モシヤ モジヤ モソ モゾ モタ モチャ モツ モンド モヤ モロ モン ヤイ
 ヤエ ヤグ ヤサ ヤホ ヤワ ヤン ユク ユグ ユス ユチ ユラ ユル ヨイ ヨカ ヨグ ヨタ ヨチ ヨチャ ヨニャ
 ヨボ ヨラ リン レロ ワイ ワカ ワグ ワサ ワタ ワチ ワチャ ワヤ ワラ ワリ ンジャ

これらのオノマトペ語基について、以下ではその音配列について検討していく。最終的には子音と母音の組み合わせについても調査したいが、今回は整理の複雑さや先行研究との対比のしやすさ等を考慮し、子音・母音それぞれの音配列について整理した。

3.2. C₁-C₂について

まず、子音の組み合わせについて考察する。3.1 節で示したオノマトペ語基から子音を抜き出し、その組み合わせを整理すると【表 1】のようになる。表 1 でハイフンで表した行・列は C₁、C₂のいずれかを欠いた語基である。

【表 1】秋田方言オノマトペ語基の子音の組み合わせ

C ₁ \ C ₂	k	g	~g	s	z	~z	ts	t	d	~d	n	h	b	p	m	y	r	w	-	計
k	2	1	1	2			1	11			1	1		3		2	9		4	38
g	3	3		7	3			15	14		4	4	6	3	1	4	14	2	10	93
s	7							3			1			3		1	4	1	2	22
z	4	5		2				3	1		1		5	1		1	9		3	35
t	12	2						2						4			8		4	32
d	7	6	1	1				3	2		1	1	5	1		2	4		4	38
n	4	1		1				8					1	1		1	6		2	25
h	7	2		1				3	1		3			1		1	5	1	3	28
b	5	5	1	4	1			8	4			2		1		3	7		3	44
p	7			1	1			6								1	4		6	26

m	6	2		3	3	1		8		1	1				3	5		2	35	
y	2	3		2				4			1	1	1			3	1	4	22	
r																1		1	2	
w	1	1		1				3							1	2		1	10	
-	3	5		1	3	1		4	1	1		2				3		8	33	
計	70	36	3	26	11	2	1	81	23	2	13	11	18	19	1	20	84	5	57	483

これに対して、共通語のオノマトペについて小林 (1965) の整理したものを示せば【表 2】のようになる。

【表 2】 共通語オノマトペ語基の子音の組み合わせ

$C_1 \backslash C_2$	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m	y	r	w
k			○		○	○	○		○			○	○	
g	○		○	○	○		○		○		○	○	○	○
s	○	○			○		○		○	○		○	○	○
z	○		○		○				○				○	○
t	○			○		○			○				○	
d	○		○		○				○			○	○	
n	○		○		○				○			○	○	
h	○		○		○		○					○	○	○
b	○		○		○							○	○	○
p	○		○		○							○	○	○
m	○	○	○	○	○							○	○	
y					○				○				○	
r														
w	○						○							

小林 (1965) では、上記音配列の【表 2】から子音の組み合わせについて次の 3 点を挙げている。

- (1) $C_1=/r/$ となるものはない。
- (2) $C_1=/h/$ となるものはない。
- (3) $C_1=C_2$ となるものはない。

浜野 (2014) も同様の立場だが(2)のみは異なり、 $C_1=/h/$ のオノマトペは「ゴホゴホ」のみ存在するとしている。これは、秋田方言ではどうなっているだろうか。まず (1) については、【表 1】で $C_1=/r/$ のオノマトペは 2 例となっている。具体的には「リンリン」と「レロレロ」であるが、いずれも共通語オノマトペにも存在すると考えられるものである。小林(1965)、浜野(2014)でこのように述べたのは、オノマトペの収集方法の違いや、オノマトペ語基の認定方法の違いに由来するものと考えられる。事実、下でも述べるように田守・スコウラップ (1999) では共通語オノマトペとして「れろれろ」について言及している。

次に (2) について、【表 1】では $C_2=/h/$ のオノマトペは 11 例と共通語より非常に多いことがわかる。具体的には「バフッバフッ」「バホバホ」「ドフドフ」「グフグフグフッ」「ガフガフ」「ガホガホ」「ゴヘラゴヘラ」「カホカホ」「ヤホヤホ」「イヘイヘ」「エヘラエヘラ」である。

最後に (3) については、表では $C_1=C_2$ のオノマトペは 18 例あることがわかる。具体的には「アオアオ」「アンアン」「ウオーウオー」「ウンウン」「エンエンエン」「オイオイ」「オエンオエン」「オンオン」「カキカキ」「ガギラガギラ」「ガグガグ」「ゴガゴガ」「コクリコクリ」「タチタチ」「テタテタ」「デダデダ」「ドダドダ」「レロレロ」である。上であげた田守・スコウラップ (1999) ではこうしたオノマトペは「レロレロ」の 1 例しかないと述べており、浜野 (2014) では、「カッキリ」「クッキリ」のように $C_1=C_2$ となるのは/k/に限られると述べている。浜野

であげられたオノマトペは A ッ B リ型だが、 $C_1=C_2=/k/$ である「カキカキ」「コクリコクリ」、また共通語と同形の「レロレロ」を除いても、方言特有の語基をもつオノマトペが多数見られることがわかるだろう。中には「ガギラガギラ」「ガグガグ」「ゴガゴガ」「デダデダ」「ドダドダ」といった、特に工藤（2022）で述べられるような C_1 、 C_2 のいずれもが有声阻害音となっているオノマトペも見られる。このように、共通語オノマトペでは存在しない配列が秋田方言オノマトペでは存在することがわかる。

続いて、配列から個々の音に目を移すと、 $/ts/$ の音や入り渡り鼻音・鼻濁音といった方言特有の音を使用したと思われるオノマトペが存在する。具体的には、「クツャクツャ」「ボカ° ラボカ° ラ」「デンガデンガ」「キカ° キカ° 」「マンジマンジ」「モンドモンド」「アンダアンダ」「エンジャエンジャ」である。

3.3. V_1 - V_2 について

ここでは、母音の組み合わせについて考察する。3.1 節で示したオノマトペ語基から母音を抜き出し、その組み合わせを整理すると【表3】のようになる。

【表3】秋田方言オノマトペの母音の組み合わせ

$V_1 \setminus V_2$	a	i	u	e	ea	o	ya	ye	yu	yo	N	計
a	38	25	16	3		13	8		1		8	112
i	35	14	7	4	1	11	2			1	4	79
u	25	9	24	2		6	12		1	2	6	87
e	24		1	2		13	8	1		1	3	53
ea						1						1
o	25	14	14	9		34	8			3	9	116
ou											1	1
wa	2	2					1				1	6
ya	4	1	5			3					3	16
yo	1	2		1		5					2	11
N							1					1
計	154	67	67	21	1	86	40	1	2	7	37	483

これに対して、共通語のオノマトペについて小野（2008）の整理したものを示せば【表4】のようになる。

【表4】共通語オノマトペの母音の組み合わせ

$V_1 \setminus V_2$	a	i	u	e	o	計
a	20	16	1	5	32	74
i	25	7	1	14	25	72
u	11	29	7	8	39	94
e	5	3	2	12	20	48
o	21	16	12	41	29	119
計	82	71	23	80	145	407

小野（2008）では、 $C_1V_1C_2V_2$ 語基をもつオノマトペの V_1 、 V_2 の配列を調査しており、その結果として次の4点がある。

- (一) $V_1=V_2$ となるものが高頻度で出現する。
- (二) V_1 、 V_2 それぞれ $/e/$ となるものは少ない。
- (三) $V_2=/a/$ の場合の数値が極めて高い (V_1 が $/i/$ 、 $/u/$ 、 $/e/$ の場合においてこの点が顕著)。
- (四) $V_1=/o/$ の場合全体的に数値が高い。

【表 3】と比較すると、概ね小野 (2008) の結果と一致する。(一)について、小野 (2008: 337) は $V_1=V_2$ のオノマトベについて「後述する /e/ を除いて、/o/ と /a/ についてはこの線上の数値が最も大きく、/i/ と /u/ については第 2 母音が /a/ である場合を除いてやはりこの線上の数の数値が最も大きい」と述べる。【表 3】では /u/ も $V_1=V_2$ の数が最も多いが、それ以外は小野の結果と一致する。また(二)、(三)、(四)についても、小野の結果と一致するといつてよい。

続いて、配列から個々の音韻に目を移すと、/ye/ や /ea/、/wa/ といった方言特有の音を使用したと思われるオノマトベが存在する。具体的には「ネチエネチエ」「ゲアロゲアロ」「ヒツペアヒツペア」「グワチグワチ」「グワチャグワチャ」「グワヤグワヤグワヤ」「グワリグワリ」「グワングワン」「クワラクワラッ」である。

4. まとめと今後の課題

本研究では、秋田方言の ABAB 型オノマトベにおける語基音の組み合わせと共通語オノマトベと比較した特徴を分析した。その結果大きく分けて次の 2 点が明らかになった。

- ①秋田方言オノマトベは C_1 、 C_2 について共通語には見られない $C_2=/h/$ 、 $C_1=C_2$ となる語基が一定数存在する。また、共通語では用いられない /ts/ の音、鼻音の使用等も観察される。
- ②秋田方言オノマトベは V_1 、 V_2 について $V_1=V_2$ となるものが高頻度で現れることや、 V_1 、 V_2 が /e/ となるものが少ないこと等共通語オノマトベと概ね一致する特徴を有する。一方で共通語では用いられない /ye/、/ea/、/wa/ 音の使用が観察される。

東北方言のオノマトベはそのバリエーションが豊富であると言われている。今回の秋田方言オノマトベについての検討は、そうしたバリエーションを形作る一つの要因として、オノマトベ語基における子音・母音それぞれの組み合わせ方の多様さ、および、用いられる音の種類が多さが挙げられることが明らかになった。今後は C_1-V_1 、 C_2-V_2 ならびに $C_1-V_1-C_2-V_2$ の組み合わせについてさらに検討を行い、田守 (2009) で挙げられる種々の音韻プロセスとの関係に関しても考察していく予定である。また、今回の研究では ABAB 型とその派生オノマトベに限って分析したが、他の型についても今後調査したい。最終的には、他地域の調査結果と比較し、語基の組み合わせについての地域差についても明らかにしようと考えている。

付記

本研究は JST 科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 JPMJFS2102 の支援を受けたものです。

調査資料

今村義孝・今村泰子編 (1959) 『日本の昔話 9 秋田むがしこ (第 1 集)』無明舎出版。
今村義孝・今村泰子編 (1968) 『日本の昔話 12 秋田むがしこ (第 2 集)』無明舎出版。
昔話・伝説・言い伝えなどによる地域活性化事業実行委員会 (2021) 「秋田の昔話、伝説、世間話一口承文芸検索システム」, 秋田県庁, <http://namahage.is.akita-u.ac.jp/monogatari/>, 参照 2021-12-20.

参考文献

小野浩司 (2008) 「 CV_1CV_2 オノマトベにおける V_1 と V_2 の配列」, 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 13(1), pp.335-341.
小野正弘 (2009) 『オノマトベがあるから日本語は楽しい—擬音語・擬態語の豊かな世界』, 平凡社新書。
川越めぐみ (2005) 「東北方言オノマトベの特徴についての考察—宮沢賢治のオノマトベの場合」, 言語科学論集, 9, pp.37-48.
工藤真子 (2022) 「秋田方言オノマトベの母音間に現れる p と b」, 言語科学論集 26, pp.39-51.
小林英夫 (1965) 「擬音語と擬容語」, 言語生活, 171, pp.18-29.
齋藤ゆい (2007) 「方言オノマトベの共通性と独自性—宮城県旧小牛田町と高知県安芸郡奈半利町との比較」, 高知大國文, 38, pp.51-73.
田守育啓 (2009) 「宮澤賢治特有のオノマトベ—慣習的オノマトベから音韻変化により派生した非慣習的オノマトベ」, 人文論集 44(1・2), pp.65-97.
田守育啓・ローレンス=スコウラップ (1999) 『オノマトベ—形態と意味』, くろしお出版。
浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトベ 音象徴と構造』, くろしお出版。
Toshiko, Waida (1984) English and Japanese Onomatopoeic Structures, 女子大文学 外国文学篇, 36, pp.55-79.

北琉球語喜界島方言のトラスの補助動詞について

福岡教育大学 ^{おぎのちさこ} 荻野千砂子

1 発表の目的

北琉球語喜界島方言で授与を表す本動詞 k'uriiN (以下、クレルと呼ぶ) は、「やる」「くれる」の両方の意味を持つ。補助動詞 eNk'uriiN (以下、テクレルと呼ぶ) は「てくれる」で用いられるが、「てやる」は、eNturasiN (以下、テトラスと呼ぶ) と eNk'uriiN の両形式が用いられる。そのため、「てやる」はテトラスとテクレルに分化しているように見える。そこで、それぞれのどのような用法があるのか、また、本動詞 k'uriiN と turasiN (以下、トラスと呼ぶ) との関係はどのようになっているのかについて、明らかにすることを目的とする。

2 調査地点と調査の概要

調査地点は、喜界島南部の上嘉鉄 (かみかてつ)、中部の中間 (なかま)、坂嶺 (さかみね)、北部の志戸桶 (しとおけ)、小野津 (おのつ) の五集落で、テトラスに関わる調査は、2019年2月以来、上嘉鉄22回、中間8回、坂嶺17回、志戸桶13回、小野津13回行っている。話者の生年と性別は、上嘉鉄 (S11 男性、S19 女性)、中間 (S13 男性)、坂嶺 (S8 女性)、志戸桶 (S11 女性、S14 女性)、小野津 (S12 女性、S20 女性) である。二人の意見が異なるときは、方言で相談をして、一つの意見に決めることが多い。調査方法は、話者に共通語を翻訳してもらう方法と、発表者が作成した喜界島方言を文法判断してもらう方法を併用した。

用例は、一行目に簡素な音素表記で書く。成節鼻音はN、促音は子音を重ね、長母音は母音を重ねて表記する。二行目に文法情報を、三行目に共通語の直訳を書き、非文法的な用法は×を付す。接語境界は=で示し、接辞境界は-で示す。喜界島方言では、語頭にのみ有気音と無気音の音韻的な区別があるので、語頭の無気音に'を付す。用例は、主として上嘉鉄方言を用いる。

3 共通語に見られる人称制約について—テヤルとテクレル—

共通語の本動詞「やる」と「くれる」には、(1) (2) のように人称制約がある。補助動詞の「てやる」と「てくれる」にも (3) (4) のように人称制約が見られる。

- (1) 1人称→2人称 : 私が あなたに 本を やる (あげる)。
- (2) 2人称→1人称 : あなたが 私に 本を くれる。
- (3) 1人称→2人称 : 私が あなたの荷物を 持ってやる (てあげる)。
- (4) 2人称→1人称 : あなたが 私の荷物を 持ってくれる。

4 補助動詞テトラスとテクレル

私 (発表者)・花子・香・和子を同い年だと設定した。「XがYの荷物を持って {やる/くれる}」の文を用い、テトラスが許容されるか、人称関係ごとに調査を行った。1人称→2人称では、場面によって許容度が異なる。通常、一方的な意志では (5) のように補助動詞を使用しない。しかし、2人称のYが (6) のように、「重たいなあ」と呟き手伝いが欲しいことを匂わせたり、依頼を明言したりすると、(7) のようにテトラスが使用できる。また、平叙文で (8) のように、「(他の人ではなく) 私が持ってあげたよ」と訂正する文で使用できる。そこで、①一方的な意志、②匂わせの後の申し出、③依頼の後の申し出、④訂正の平叙文の4つに分け、加えてテクレルの許容状況も調査した (表1と表2)。「言える」は○、「言えないことはない」は△、「言えない」は×で答えてもらった。△×は、その間の許容度であることを示す。

- (5) waN=nu {mut-oo=ja / muc-i-mi}?
私=主格 {持つ-意志勧誘=終助詞 / 持つ-非過去-肯否疑問 2}
「私が持とう。」
- (6) ubussa=jaa. (muc-eN k'uri-raN=na?)
重たい=終助詞 (持つ-継起 クレル-否定=肯否疑問 1)
「重たいなあ。(匂わせ) (持ってくれないか。(依頼))」
- (7) {mut-a=dii / muc-eN turas-a / muc-eN k'uri-ra}.
{持つ-意志=終助詞 / 持つ-継起 トラス-意志 / 持つ-継起 クレル-意志}
「持っであげるよ。」
- (8) waN=nu {muc-ca / muc-eN tura-ca / muc-eN k'uri-ta}-hoo=jo.
私=主格 {持つ-過去 / 持つ-継起 トラス-過去 / 持つ-継起 クレル-過去} -確認要求=終助詞
「私が持っであげたよ。(訂正)」

表1 テトラスの許容範囲

	人称	番号	例文	上嘉鉄	中間	坂嶺	志戸桶	小野津
遠心方向	1→2	①	私がお前の荷物を持っであげるよ。(意志)	×	×	×	×	○
		②	(重たいなあと言われた)持っであげるよ。	△	×	○	×	○
		③	(依頼された)私を持っであげるよ。	○	×	○	○	○
		④	私がお前の荷物を持っであげたよ。(訂正)	○△	△×	○	○	○
	1→3	⑤	私が香の荷物を持っであげたよ。	○	○	○	○	○
	2→3	⑥	花子、香の荷物を持っであげたら?	○	○	○	○	○
	3→3	⑦	香が和子の荷物を持っであげたって。	○	○	○	○	○
求心方向	2→1	⑧	私の荷物を持っであげないか?	×	×	×	×	×
		⑨	お前が私の荷物をもっであげたよ。(訂正)	△	×	×	○	○
	3→1	⑩	香が私の荷物をもっであげたよ。	△	×	×	○△	○
	3→2	⑪	香がお前の荷物をもっであげたか?	△	×	×	○	○

表2 テクレルの許容範囲 (○/△の記号は、一人が○、一人が△と答えたもの)

	人称	番号	例文	上嘉鉄	中間	坂嶺	志戸桶	小野津
遠心方向	1→2	①	私がお前の荷物を持っであげるよ。(意志)	×	○	×	×	△
		②	(重たいなあと言われた)持っであげるよ。	○	○	△	×	○
		③	(依頼された)私を持っであげるよ。	○	○	△	○	○
		④	私がお前の荷物を持っであげたよ。(訂正)	△	○	○	○	△
	1→3	⑤	私が香の荷物を持っであげたよ。	○	○	○	○/△	△
	2→3	⑥	花子、香の荷物を持っであげたら?	○	○	○	○	△
	3→3	⑦	香が和子の荷物を持っであげたって。	○	○	○	○	○
求心方向	2→1	⑧	私の荷物を持っであげないか?	○	○	○	○	○
		⑨	お前が私の荷物をもっであげたよ。(訂正)	○	○	○	○	○
	3→1	⑩	香が私の荷物をもっであげたよ。	○	○	○	○	○
	3→2	⑪	香がお前の荷物をもっであげたか?	○	○	○	○	○

表1より、テトラスは求心方向で使用されにくいことが分かる。中間と坂嶺では、使用不可となっている。また、全集落で2人称→1人称では使用できない。一見、人称制約が生じているように見えるが、⑨の平叙文では許容する集落もある。表2より、テクレルは、①の一方的な意志以外は、ほぼ許容されることが分かる。表1と表2を合わせると、小野津では、テトラスは遠心方向で使用されやすく、テクレルは求心方向で使用されやすいと言える。ここでも、人称制約が生じつつあるように見える。しかし、テクレルは基本的にどの場合でも使用できるため、文法的に人称制約はないのだろう。ただ、1人称→2人称では、テクレルよりテトラスの方が優勢ではある。理由を聞くと、テクレルを用いた場合、自分が威張っているように聞こえる、恩着せがましく聞こえる、ということであった。だが、相手が「持つテクレルか」と依頼すれば、「持つテクレヨウ」と答えることができる。

テトラスとテクレルの違いを確認するため、(9) (10) の、2人称→3人称「お前が香の荷物を持ってあげたら？」での相違点を尋ねた。(10)のテクレルは、話し手の私が感謝を表すと説明される。テクレルは、恩恵を表すようだ。そこで、本動詞のクレルの用法を調査した。

(9) 香=nu nimutu muc-eN turas-iba.
 香=属格 荷物 持つ-継起 トラス-条件
 「香の荷物を持ってあげたら (≡持つてあげて)。」

(10) 香=nu nimutu muc-eN kuri-riba.
 香=属格 荷物 持つ-継起 クレル-条件
 「香の荷物を (私のために) 持ってくれたら (≡持つてくれ)。」

5 本動詞クレル

クレルは上位者→下位者の授与で使用できる。そのとき上位者主語だとしても、主語尊敬を表す補助動詞が必要ない(荻野 2021)。例えば、村上先輩を与え手と仮定したとき、村上先輩が上位者なので、(11)のようにクレルをそのまま使用できる。

(11) murakamisaN=nu koori=eN tamana k'uri-taN = doo.
 村上さん=主格 香=与格 キャベツ くれる-過去=終助詞
 「村上さんが香にキャベツをくれたよ。」

同位者同士でも使用ができる。私が責任者の場合、友人の花子に(12)のように言える。1人称→2人称の授与である。また、(13)のように友人から好きなお土産の一つ選んでいいと言われたときもクレルが使用できる。2人称→1人称の授与である。クレルの人称制約を調べるため、「与え手Xが受け手Yに本を {やる/くれる}」の文で調査した(表3)。表3より、人称制約はないことが分かる。本動詞クレルは、 $X \geq Y$ の関係で、与え手Xから受け手Yへの物の授与を表すとまとめられる。

(12) kutusi=nu oboNjasume=e tookakaN k'uri-iN=doo.
 今年=属格 お盆休み=主題 十日間 クレル-非過去=終助詞
 「今年のお盆休みは十日間あげるよ。」 1人称→2人称

(13) waN=eN {k'uri-ri! / k'uri-raN=na?}
 私=与格 {クレル-命令 / クレル-否定=肯否疑問1}
 「私に {くれ! / くないか?}」 2人称→1人称

表3 クレルの許容範囲：1人称「私」、2人称「花子」、3人称「香・和子」

方向	人称	X	Y	例文	上嘉鉄	中間	坂嶺	志戸桶	小野津
遠心 方向	1→2	私	花子	私はお前に本をあげたかな？	○	○	○	○	○
	1→3	私	香	私は香に本をあげたよ。	○	○	○	○	○
	2→3	花子	香	お前は香に本をあげるか？	○	○	○	○	○
	3→3	香	和子	香が和子に本をあげたって。	○	○	○	○	○
求心 方向	2→1	花子	私	私に本をくれないか。	○	○	○	○	○
	3→1	香	私	香が私に本をくれたよ。	○	○	○	○	○
	3→2	香	花子	香がお前に本をくれたか？	○	○	○	○	○

本動詞クレルは物の授与を表し、それは「有り難い」行為であるため、テクレルで恩恵の授与を表せるのだろう。また、テクレルは本動詞の $X \geq Y$ の性質も受け継いでおり、XをYよりも高く位置づけることが可能で、1人称主語が避けられる傾向にあるのだろう。しかし、場面によっては許容されたため、文法的に禁止されているわけではないと考える。

6 本動詞トラス

本動詞トラスは、動詞「取る」に使役接辞「す」が後接し、一語化した動詞だと考えられる。受け手にトラスセルわけなので、原義は「渡す」という意味ではないかと考える。(14)は、私が留守にするので、先生に私の本を花子に渡して欲しいと頼んだ後、電話で花子に確認する場面である。この場合、授与ではないので、クレルは使用不可となる。

- (14) da=eN hoN {×k'uri-ti / tura-ci}=na?
 お前=与格 本 {クレル-過去/トラス-過去=肯否疑問1}
 「(田中先生は) お前に本を渡したか？」

また、トラスは「やる(あげる)」に近い意味も持つ。話者は「お土産のようにお金をかけた大事なもの」はクレルで、トラスは使用できないと説明する。だが、形見のように大事なものでも一時的な所有物であるためか、トラスが使用できるようだ。(15)は相続を考えているとき、二人の孫が家を欲しがった場面である。祖父は太郎に家をあげて、次郎に畑をあげることを決める。このとき、祖父が「何が欲しいか」と尋ね、二人が「家が欲しい」と明言すると、トラスしか使えないと言う。(16)は花子が、責任者の私に「十日間のお盆休みが欲しい」と言った場合である。(11)のクレルとの違いは、花子が欲しいものを要求した点である。(16)と比較すると、(11)は私の有給を分けてあげるようにも聞こえるという。つまり、トラスには、要求を受けて物を「渡す」意味があり、所有権の移動を表す授与動詞ではないと考える。トラスでも「XがYに休みを{やる/くれる}」の文で人称制約を調査した(表4)。

- (15) da=eN ama=nu hatee turas-iN=doo.
 お前=与格 あちら=属格 畑 トラス-非過去=終助詞
 「お前に向こうの畑をあげるよ。」

- (16) kutusi=nu oboNjasume=e tookakaN turas-iN=doo.
 今年=属格 お盆休み=主題 十日間 トラス-非過去=終助詞
 「今年のお盆休みは十日間あげるよ。」

表4 トラスの許容範囲 ○はトラス、□はクレル。(表3と同じ人物関係)

方向	人称	X	Y	例文	上嘉鉄	中間	坂嶺	志戸桶	小野津
遠心 方向	1→2	私	花子	私はお前に休みをあげよう。	○□	○	○	○□	○
	1→3	私	香	私は香に休みをあげたよ。	○□	○	○	○□	○□
	2→3	花子	香	お前は香に休みをあげるか？	○	○	○	○□	○
	3→3	香	和子	香が和子に休みをあげたって。	○□	○	○	○□	○
求心 方向	2→1	花子	私	私に休みをくれないか。	○□	○	○	○□	○
	3→1	香	私	香が私に休みをくれたよ。	○□	○	○	○□	○
	3→2	香	花子	香があなたに休みをくれたか？	○□	○	○	○□	○

表4より人称制約はないことが分かる。ここで、トラスとテトラスの関係を考える。テトラスは、全集落で2人称→1人称「お前が私の荷物を持つテトラセ」が使用不可であった。その理由は、2人称への命令になるためだと説明された。テクレルでは2人称→1人称で依頼表現になり、2人称から1人称への恩恵を表せるが、テトラスでは恩恵が表せない。本動詞トラスには1人称→2人称の場合、2人称Yの要望を受けて物を渡すという用法があった。本動詞の用法を一部継承し、「XがYのために～テトラス」において、補助動詞テトラスはYの要望を叶えようとするXの心情を表すのではないかと考える。そうすると、2人称→1人称では、「Yである1人称の要望を叶えよ」という命令になるため、使用不可になるのだろう。しかし、表1では2人称→1人称の⑨平叙文の場合、使用可能とする集落もあった。よって、文法的な人称制約が生じているのではなく、語用論的に人称制約のようなものが生じているのだと考える。

Yの要望が必要となるため、テトラスでは、Xの一方向的な意志が表せない。劇でおおかみが子ヤギに「おまえを一口で食べてやろう」と言うとする。(17)でテトラスを用いると、子ヤギが「僕を食べて」と言っているように聞こえるから変だ、と話者は言う(用例では鼻濁音を大文字で表す)。また、恩恵を与えないため、テクレルの使用も不可である(表5)。

- (17) wa=Ga cukuci=zi kam-oo. ×ka-di {turas-a / k'uri-ra}. (小野津)
 私=主格 一口=具格 食べる-意志勧誘 食べる-継起{トラス-意志/クレル-意志}
 「おれが一口で食べてやろう。」

表5 一人称の一方向的な意志を表すテヤル

例文	語形	上嘉鉄	中間	坂嶺	志戸桶	小野津
一口で食べてやろう	テクレル	×	×	×	×	×
	テトラス	×	×	○	×	×

7 本動詞ヤース

ヤースは、動詞「やる」に使役接辞「す」が後接した形式だと考えられる。方向の格助詞 kaci (へ) を取り (18) のように人や物の移動を表す。ヤースに補助動詞用法はない。

- (18) waNnaa jaa=kaci jaas-iba.
 私達除外 家=方向格 やる-条件
 私達の家(その人を)よこせば(≡よこしなさい)。

8 日本語史との関連

古代語の「くる（くれる）」は、近世期以降、「やる」と「くれる」に分化した。その理由として、「くれる」は物の授与で基本的に与え手が上位者となるため、一人称主語の場合に使用がしにくくなり、「やる」が発達したためではないかという見解がある（日高 2007、森 2016、2019 など）。古代語の「やる」は話し手から遠心方向への物や人の移動を表していたが、次第に授与動詞化した（古川 1995、日高 2007、荻野 2007 など）。「とらす」は「やる」以前に現れており、「てとらす」も若干見られる。「とらす」は、「与え手上位」の側面に意味の重点があり、(19)のように話し手の尊大意識が認められるという指摘がある（澤田 2020）。

(19) 伊賀国の住人名張八郎とて、名譽の大力のありけるが、「いで渡して取らせん」とて

（太平記（1370年頃）・巻第14箱根竹下合戦事）

喜界島方言では、本動詞クレルに人称制約がなく、ヤルが移動動詞で補助動詞が生じていないという状況下で、補助動詞テクレルとテトラスが用いられている点で、中世語の状況と酷似していると言える。

9 まとめ

喜界島方言では、本動詞クレルは所有権の移動を表す授与動詞であり、補助動詞テクレルは恩恵の授与を表す。ともに人称制約はない。本動詞トラスが授与動詞化していない状況で、補助動詞テトラスが生じている。恩恵の授与を表すテクレルに対し、テトラスは、「XがYのために〜テトラス」において、Yの要望を叶えようとするXの心情を表す用法を持つのではないかと考えた。特定のモダリティを表すために、テトラスが発達したと考えられ、本動詞から補助動詞へという文法化を考えると、テトラスは文法化の反例とも言えるのではないかと考える。

付け加えになるが、北琉球語の首里方言では、利益性を表す補助動詞テクレルとテトラスがあるが、使用自体は少なく人称制約も見られないとの指摘がある（當山 2018、崎原 2018）。今後、北琉球語で人物間の上下差など、詳細な検証が必要ではないかと考える。

【参考文献】

- 荻野千砂子（2007）「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』 3-3, 1-16.
荻野千砂子（2021）「北琉球語喜界島方言の授与動詞」『筑紫語学論叢III』 風間書房, 左 1-33.
古川俊雄（1995）「授与動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要（第二部）』 44, 193-200.
崎原正志（2018）「琉球語沖縄首里方言のモダリティ：叙述・実行・質問のモダリティを中心に」琉球大学博士論文
澤田淳（2020）「日本語の直示授与動詞「やる／くれる」の歴史」『国立国語研究所論集』 18, 149-180.
當山奈那（2018）「首里方言の授受動詞の補助動詞用法と利益性」『南島文化』 40, 55-68.
日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』 ひつじ書房
森勇太（2016）『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』 ひつじ書房
森勇太（2019）「日本語授受表現の歴史変化・再考」『NINJAL シンポジウム 日本語文法研究のフロンティアー 文法史研究・通時的対象研究を中心にー』 39-46.
グロスに関しては、以下の論文を参考にした。白田理人（2016）「奄美語喜界島上嘉鉄方言のテンス・アスペクト・モダリティ」『琉球諸語 記述文法』 3, 47-74。 白田理人（2019）「北琉球奄美喜界島小野津方言の疑問文末標識と言語行為—話し手の行為遂行に関する疑問文を中心に—」言語学会第 159 回大会 発表予稿集。白田理人（2022a）「北琉球奄美喜界島方言における 動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー」『プロソディー研究の新展開』 214-235。 白田理人（2022b）「北琉球奄美喜界島北部方言の確認要求表現—視覚動詞命令形由来の形式を中心に—」『西日本国語国文学』 9, 44-30。 白田理人（2022c）「北琉球奄美喜界島方言における文法化—疑問文末形式を中心に—」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド言語学ワークショップ：第 21 回文法研究ワークショップ「言語記述と文法化をめぐる諸問題」

【付記】

本研究は、JSPS 科研費 16K02683, 20K00547 の研究助成を受けています。

福井県三国町安島方言における二項形容詞文の格標示

松倉 昂平 (国立国語研究所)

1. 概要・目的

福井県坂井市三国町安島（あんとう）は、福井市街の北およそ24kmに位置する人口約1000人の漁村である。日本海に突き出た岬の先端にあり、内陸との交通は険しい海岸地形（東尋坊）と木深い丘陵に阻まれている。このような地理的孤立のためか、特に音声・音韻面で周辺方言とは全く異なる特徴が観察される「言語の島」が形成されていることが知られる（2.1節参照）。発表者は安島方言の記述的研究を進めているが、音声・音韻面だけでなく文法面でも、周辺方言と異なる現象が多く存在することが明らかになりつつある。

そのような現象の一つが、動詞と同様に対格項や与格項を要求する形容詞¹の存在である。共通語や周辺方言では「私はお前が怖い」「私はある人が憎い」のように専ら主格で標示される刺激項が、安島方言では(1)~(3)のように対格や与格でも標示され得る。

(1)	ンダ ^A	ワレ{カ° /オ/ニ} ^C	オトロシー ^A
	私は	お前{が/を/に}	怖い
(2)	ンダ ^A	アレ{カ° /オ/*ニ} ^B	ニクタラーシー ^A
	私は	あの人{が/を/*に}	憎い
(3)	ンダ ^A	アントベン{カ° /*コ° ² /ニ} ^B	ハッカシー ^A
	私は	安島弁{が/*を/に}	恥ずかしい

オトロシー〈怖い〉は3通りの格標示を許容する一方、ニクタラーシー〈憎い〉は与格標示を許容せず、ハッカシー〈恥ずかしい〉は対格標示を許容しないように、どの格標示を許容するかは形容詞ごとに異なる。本発表では、2つの項を取る形容詞文について、どの形容詞がどのような条件下でどの格フレームを許容するのかを、形容詞の意味、項同士の意味的關係の観点から記述・分析する。また2通り以上の格標示を併用する場合、それぞれの表す意味の違いについても予備的な考察を加える。

2. 先行研究

2.1 安島方言の音声・音韻について

安島方言の独自性を特徴付ける *abba* 〈油〉、*ssoi* 〈白い〉、*maffa* 〈枕〉、*avva* 〈あるわ〉、*amɲa* 〈編むわ〉等の特異な重子音と唇歯音 ([f][v][m]) の存在が新田 (2011) や松倉・新田 (2020) で報告されている。アクセント体系も安島方言固有のもので、本土方言では珍しい「三型アクセント」に分類される体系である³ (松倉・新田2016など)。

¹ 本発表では形容名詞も含めて形容詞と呼ぶこととする。「形容詞文」も同様に形容名詞述語文を含む。

² =コ° は対格助詞 (=オ) の、撥音に後続する場合の異形態。

³ 三型アクセントは上野 (1984) によるアクセント体系の類型の一つで、語の長さが増えても型の対立数が一定数 (=3種類) 以上に増えていかない体系。安島方言では、アクセント単位末 (=文節末) から数えて2音節以内に下降が生じないA型、高から中への小さな下降が生じるB型、高から低への大きな下降が生じるC型、の3種の声調が区別される (松倉2022: 59)。2音節A型はLH、3音節以上のA型は典型的には末尾から数えて3音節目が高く1,2音節目が低く実現する (...HLL)。B型は文中 (非文末) では...HLに実現しC型との対立が中和することが多い。

2.2 二項形容詞文の格標示について

二項形容詞文が【主格－主格】に加えて【主格－与格】という格フレームも許容する現象（以下先行研究にならぬと与格交替と呼ぶ）は、様々な文献中の断片的な記述から、西日本を中心として各地に存在する（or存在した）ことが確認されている（下地ほか2018, 2022）。この与格交替について網羅的に調査・記述されている方言としては、宮崎県椎葉村尾前方言（下地ほか2018, 2022, 松岡2019）、佐賀県武雄市北方方言（松岡2019）、鹿児島県甑島里方言（久保蘭2019）、八丈語末吉方言（三樹2019）等がある。これらの先行研究では下地ほか（2018）に基づき二項形容詞文を「他動形容詞文」と「二重主語文」と「暫定二重主語文」（下地ほか（2022）では「準二重主語文」）に分類し各構文でどのような格標示が可能かを記述している（4）。さらに下地ほか（2018, 2022）では形容詞の種類・意味の関与も踏まえて、与格交替の発生条件に関する（5）のような階層を提唱している。

(4) 二項形容詞文の分類（下地ほか2022: 158–161）

- 他動形容詞文： 「通常の他動詞文と同様、述語が2つの項を要求する文」
「第一項（主語）の意味役割は経験者、第二項の意味役割は刺激（知覚を引き起こす原因）」
(例： 俺は水が欲しい／俺は花子が好きだ／俺は親が怖い)
- 二重主語文： 「第一項（外主語：トピック標示）と第二項（内主語：主格標示）が全体・部分、所有・被所有、主体・関連物の関係にある」
(例： 俺は頭が痛い／俺は親が病気だ／俺は背が高い)
- 準二重主語文： 「「上手だ」「下手だ」「得意だ」という形容詞を述語に取る文」
「第二項は、第一項の属性であると解釈可能」であり2つの項が広義の所有関係を結んでいる「二重主語文の下位分類」
(例： 友達は絵が上手だ)

(5) 左側ほど与格交替が生じやすい（下地ほか2022: 167）

- a. 他動形容詞文 > 準二重主語文 > 二重主語文
b. 心情述語 > 感覚述語
c. ネガティブな刺激 > ポジティブな刺激

二項形容詞文が【主格－対格】という格フレームを取る現象については、上記の九州諸方言に加えて、埼玉県東南部方言（原田2016: 219–222）、福島県中通り北部方言（松岡2020）など東日本にも報告されている。

また松岡（2020: 172–173）では他動形容詞文を含む心情述語文に【主格－対格】と【主格－与格】の2つの格フレームが併存する要因について、相対的に他動性が高い文では前者、低い文では後者が選択されるのではないかという見通しを示している。そして他動性に影響を与える変数の例として「経験者の意図性」を挙げているが、その影響の有無は未検証のまま（今後の研究課題）とする。

3. 表記・調査方法

本発表では安島方言の例文をカタカナを用いた音韻表記で示す。カ°、キ°、ク°…は軟口蓋鼻音 /ŋ/ ([ŋ])、ツファは /Qhwa/ ([ffa]) に対応する表記とする（Qは促音）。アクセント単位末尾（≒文節末）には上付き文字でアクセント型（A, B, C）を記載しておく。また簡略的なピッチ表記として高く発音される音節を太字にして示した。

本稿中の用例は2022年9月、2023年1月、3月に実施した共通語文翻訳式の調査で収録した。調査協力者は安島生え抜きの1941年生女性、1942年生女性の2名である。

4. データ

4.1 他動形容詞文

(1) のオトロシー〈怖い〉と同様に刺激項に3通りの格標示を許容する例を挙げる。

- | | | | |
|-----|------------------|--|----------------------|
| (6) | ワレ ^C | ナン{カ° /コ° /ネ ⁴ } ^C | オトロシンジャ ^A |
| | お前は | 何{が/を/に} | 怖いんだ |
| (7) | ンダ ^A | ホレ{カ° /オ/ニ ^A } | ハカ° カッタ ^C |
| | 私は | それ{が/を/に} | 悔しかった |
| (8) | オヤノ ^B | メンドー ^A ミルノ{カ° /オ/ネ ^C } | モノコ° イ ^A |
| | 親の | 面倒 見るの{が/を/に} | つらい |

(9)~(10) は (2) のニクタラシー〈憎い〉と同様に主格・対格標示を許容する例、(11)~(14) は (3) のハッカシー〈恥ずかしい〉と同様に主格・与格標示を許容する例である。

- | | | | |
|------|-------------------|--|---|
| (9) | ンダ ^A | へビ{カ° /オ/*ニ ^C } | スキヤ ^B /キライヤ ^A /イヤヤ ^B |
| | 私は | 蛇{が/を/*に} | 好きだ/嫌いだ/嫌だ |
| (10) | ンダ ^A | アコノ ^C コ{カ° /オ/*ニ ^A } | ウザッファシー ^A |
| | 私は | あの子{が/を/*に} | 鬱陶しい |
| (11) | ンダ ^A | アレノ ^B ユーコト{カ° /*オ/ネ ^A } | ウレシカッタ ^C |
| | 私は | あの人の言葉{が/*を/に} | 嬉しかった |
| (12) | ンダ ^A | アレノ ^B ユーコト{カ° /*オ/?ネ ^A } | ハカ° カッタ ^C |
| | 私は | あの人の言葉{が/*を/?に} | 悲しかった |
| (13) | シトツダ ^C | オルノ{カ° /*オ/ネ ^B } | サブシ ^A サブシー ^{A5} |
| | 一人で | 居るの{が/*を/に} | 寂しい |
| (14) | ココラ ^C | クンマノ ^A オト{カ° /*オ/ネ ^B } | ヤカマシー ^A |
| | ここは | 車の音{が/*を/に} | うるさい |

また別のパターンとして、主格標示のみを許容する形容詞もある。

- | | | | |
|------|-----------------|-------------------------------|---|
| (15) | ンダ ^A | ガッコー{カ° /*オ/*ニ} | オモッソカッタ ^C ナー |
| | 私は | 学校{が/*を/*に} | 面白かったなあ |
| (16) | ンダ ^A | オンセン{カ° /*コ° /*ニ} | オモイデヤッ ^B タ |
| | 私は | 温泉{が/*を/*に} | 気持ち良かった |
| (17) | | {ミツザ/*ミツゾ/*ミズニ ^A } | チツタイ ^A チツタイ ^A ナー ⁵ |
| | | {水が/*水を/*水に} | 冷たいなあ |

さらに、形容詞文に典型的な【主格—主格】という格フレームを共有せず、対格標示のみ許容する形容詞もある。

- | | | | |
|------|-----------------|-----------------------------|--------------------|
| (18) | ンダ ^A | ワレ{*カ° /オ/*ニ ^C } | ケナルイワ ^A |
| | 私は | お前{*が/を/*に} | 羨ましいわ |

⁴ =ネは与格助詞 (=ニ) の異形態。両者に機能差はない。後舌母音の直後で=ネになる傾向がある。

⁵ 安島方言では形容詞・副詞の完全豊語が頻用される。ある基準時（大抵は発話時）において話し手が直接体験・目撃した（or体験・目撃している）事態を表すようだがその機能はまだ十分明らかでない。

- (19) ワレ^C {*ミツザ/ミツゾ/*ミズニ}^A ホシンカ^B
 お前は {*水が/水を/*水に} 欲しいのか

下表1にまとめた通り、他動形容詞文では多くの形容詞が第二項の対格・与格標示を許容する。主格標示しか許容しない形容詞は調査の範囲内ではオモッセ〈面白い〉と、チッタイ〈冷たい〉、オモイデヤ〈気持ち良い〉等の感覚形容詞に限られる⁶。ほとんどの形容詞が主格標示を許容する一方、ケナルイ〈羨ましい〉、ホシー〈欲しい〉の2語は対格標示のみを許容する。与格標示専用の形容詞は見つかっていない。また対格標示と与格標示のみ許容するパターンも見つかっていない。

表1 二項形容詞の第二項の格標示

形容詞の分類	語例	対格標示	主格標示	与格標示
心情形容詞	オトロシー〈怖い〉、ハカ [°] イ〈悔しい〉、モノコ [°] イ〈つらい〉	○	○	○
	ケナルイ〈羨ましい〉、ホシー〈欲しい〉	○	×	×
	イヤヤ〈嫌だ〉、ウザッファシー〈鬱陶しい〉、キライヤ〈嫌いだ〉、シンパイヤ〈心配だ〉、スキヤ〈好きだ〉、ニクトラシー〈憎い〉、モツケナイ〈可哀そうだ〉	○	○	×
	オモッセ〈面白い〉	×	○	×
	ウレシー〈嬉しい〉、サブシー〈寂しい〉、ハカ [°] イ〈悲しい〉、ハッカシー〈恥ずかしい〉	×	○	○
感覚形容詞	ヤカマシー〈うるさい〉	×	○	○
	オモイデヤ〈(肉体的に)気持ち良い〉、カヤイ〈痒い〉、チッタイ〈冷たい〉、マブシー〈眩しい〉	×	○	×

4.2 二重主語文・準二重主語文

二重主語文と準二重主語文では与格交替が生じず第二項には主格標示のみ許容される。

- (20) アノ^A センセーワ^B カオ{カ[°]/*オ/*ネ}^A オトロシカッタ^C
 あの先生は 顔{が/*を/*に} 怖かった
- (21) アコノ^C モンカ[°] ^B エ{カ[°]/*オ/*ニ}^C ンマイ^Bナー
 あそこの者は 絵{が/*を/*に} 上手いなあ

4.3 まとめ・問題点

下地ほか(2018, 2022)が提唱した与格交替に関する階層(5)には矛盾しない結果が得られた。安島方言では、他動形容詞文である(2つの項が所有関係にない)ことと、述語が心情述語であることが与格交替の生じ得る条件となる。

残された問題は、複数の格標示を許容する場合そこに何らかの意味の違いはあるのか、そして形容詞ごとにどの格標示を許容するかが異なるのはなぜか、である。二項形容詞文に3種の格フレームが併存する要因を考察していく。

⁶ 感覚形容詞に分類したうち唯一ヤカマシー〈うるさい〉は与格標示を許容するが、これは〈耳障りで不快だ〉という感情の変化までを含意する語であるとする心形容詞に分類すべき語かもしれない。

5. 考察

5.1 異なる格標示の使い分けに対する話者の内省

(1) *ンダ ワレ{カ° /オ/ニ} オトロシー* 〈私は お前{が/を/に} 怖い〉について話者に3通りの格標示の使い分けを尋ねると、対格標示は相手に面と向かって言うにはとても失礼な言い方、与格標示はまだ優しい言い方、という回答が得られた。主格標示と与格標示には差がないかあるとしても内省が難しい差のようである。また、(6) *ワレ ナン{カ° /コ° /ニ} オトロシンジャ* 〈お前は 何{が/を/に} 怖いんだ〉については、「お前が怖いものは何？」と相手の怖いものを尋ねる場面では主格・対格標示、怖がっている様子の相手に対して「何を怖がっているの？」と尋ねる場面では与格標示の使用が想起されるという（ただしどちらの場面でも全ての格標示が使用可能ではあり明確な使い分けはない）。

(7) の主格・与格標示 (*ンダ ホレ{カ° /ニ} ハカ° カッタ* 〈私は それ{が/に} 悔しかった〉) をめぐっては、主格標示には「今はもう悔しくない」「他人事のように捉える」、与格標示には「今も悔しい」という含意がある。

上記の内省報告を解釈するに、主格・対格標示される刺激項は《経験者の意志的な感情の対象》を表し、与格項は《経験者の非意志的・受動的な感情の原因》を表すようである。対格標示 (*ワレオ オトロシー* 〈お前を怖い〉) が失礼にあたるのは、経験者が自覚的にそのような態度を取っていることが含意されるためであろう。また与格標示は経験者への心的影響が大きいことを含意するようである。

5.2 形容詞の意志性と格標示の対応

刺激項を対格標示するが与格標示は許容しない形容詞はいずれも《追求・願望》《好悪》《憂慮》といった能動的・自覚的な感情を表す。反対に、与格標示を許容する形容詞はどちらかと言えば無自覚的に湧き上がる感情を表すように思われる。前節も踏まえた結論として、安島方言の他動形容詞文における3種の格フレームの選択に関与する主な要因は、松岡(2020)の見通しに一致して(2.2節参照)、経験者の意志性(意図性)の有無ではないかと考えられる。下表2に述語の意志性と刺激項の格標示の間に成り立つ対応・階層性を示す。意志性が高いほど対格標示を受けやすく、逆に意志性が低いほど与格標示を受けやすい。主格標示は対格・与格標示どちらとも併用され、両者の中間に位置付けられる。

表2 意志性と格標示の相関⁷

	語例	対格標示	主格標示	与格標示
意志性 高	〈欲しい〉	←→		
∨	〈憎い〉	←→→		
∨	〈怖い〉	←→→→		
意志性 低	〈寂しい〉			←→

5.3 各種格フレームの存立基盤

他動性(被動性)が低く、典型的な他動詞文の格フレーム(【主格-対格】)を通常は取らないタイプの文・述語においても、意志性がある場合にはこの格フレームを取り得る、これが一部の形容詞における刺激項の対格標示を支える動機と考えられる⁸。

⁷ 主格標示のみ許容するオモッセ(面白い)の位置付けは保留する。

⁸ これと同様の現象は共通語にも存在する。通常は【与格-主格】という格フレームを取る、能力や知識を表す文(例: 太郎に英語が分かる)が、意志性があることを明示すると【主格-対格】という格フレームを取るようになり、【与格-主格】は不可になる(例: 太郎が英語を分かろうとした/*太郎に英語が

他動形容詞文の刺激項が与格標示され得る背景については、そもそも安島方言の与格には心情述語文以外においても《刺激》ないし《知覚を含意する原因》を表す用法があるという点のみ、指摘しておく⁹(22)。

- (22) ノタ^B オトネ^B ネラレナンダ^A
波の音に 寝られなかった (=波の音で寝られなかった)

6. まとめ

本発表では、安島方言において多数の心情形容詞がその刺激項の対格・与格標示を許容する事実を報告し、対格と与格どちらで標示するかは経験者の意志性の有無に基づくのではないかという考察を示した。二項形容詞文の刺激項が主格に加えて与格を取り得る「与格交替」は従来九州方言に偏って記述されてきた現象であるが、今回、近畿以東の北陸方言にも同様の現象が存在することが明らかになった。

未だ課題は多く残されている。今回取り上げた内容の中では、複数の格標示の使い分け(5.1節)に関する調査は不十分である。さらに文脈を整えた質問文を用意する必要がある。

また先行研究では項の有生性も格標示に影響を与えることが指摘されている(三樹2019, 久保蘭2019など)。安島方言に関しては手持ちのデータの範囲内ではそのような傾向は見られないが、網羅的な検証を行う必要はある。

謝辞

本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」及びJSPS特別研究員奨励費(課題番号19J00755)の研究成果の一部です。また本発表に係る現地調査では「日琉諸方言における心情述語文格標示の調査票」(松岡葵氏作成)(<https://doi.org/10.5281/zenodo.7314959>)を利用しました。

参考文献

- 上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題2 記述的研究篇』167-209. 東京: 明治書院
- 久保蘭愛(2019)「甌島方言の二格・バ格標示の形容詞」『第159回日本言語学会大会予稿集』368-373.
- 下地理則・松岡葵・井上郁菜・宮岡大(2018)「与格項形容詞構文について～宮崎県椎葉村尾前方言を中心に～」第43回九州方言研究会発表資料
- 下地理則・松岡葵・宮岡大(2022)「宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示」木部暢子・竹内史郎・下地理則編『日本語の格表現』157-174. 東京: くろしお出版
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』東京: くろしお出版
- 新田哲夫(2011)「福井県三国町安島方言におけるmaffa等の重子音について」『音声研究』15(1), 6-15.
- 原田伊佐男(2016)『埼玉県東南部方言の記述的研究』東京: くろしお出版
- 松岡葵(2019)「九州方言における形容詞経験者構文の非典型格標示—宮崎県椎葉村尾前方言と佐賀県武雄市北方方言を中心に—」九州大学文学部卒業論文
- 松岡葵(2020)「日琉諸方言における心情述語文の格フレーム: 意味的結合価・意味役割・述語の品詞に着目して」『日本語文法』20(2), 158-174.
- 松倉昂平・新田哲夫(2016)「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20(3), 81-96.
- 松倉昂平・新田哲夫(2020)「福井県三国町安島方言におけるhadderu《外れる》等の重子音の生起条件について」第六回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会発表資料
- 松倉昂平(2022)『福井県嶺北方言のアクセント研究』東京: 武蔵野書院
- 三樹陽介(2019)「八丈語の二格形容詞」『日本語学会2019年度秋季大会予稿集』105-112.

分かろうとした)(角田2009: 89)。

⁹ 知覚を含意しない原因は共通語と同じくデ格で表す: ハナビオ アメ{デ/*ニ} ヤメタンニャワ〈花火は雨で中止したんだよ〉。

推量表現形式の選好性に関する動態研究

—関東・関西地域を比較して—

おぜき たける
尾関 武尊 (関西大学学生)

1 はじめに

本発表は、船木(2017)が国立国語研究所の『方言文法全国地図』(調査時期:1979~1982年)と「全国方言分布調査」(調査時期:2010~2015年)との比較によって述べる、伝統的な推量表現形式の減少傾向と「第三の形式」(否定疑問形式や「~と思う」による形式など)の増加傾向という指摘を踏まえ、関東と関西の若年層(10代後半から20代)と高年層(50代以上)に対して実施したアンケート調査をもとに、推量表現形式の選好性に関する動態について分析・考察するものである。

船木(2017)の指摘を踏まえると、推量の「ダロウ」の用いられる場面が限られ、「ダロウ」以外の形式にその位置を譲っているのではないか、という仮説が立てられる。なお本発表では、ダロウ類(関東方言「ダロウ・デショウ」/関西方言「ヤロウ」)・トオモウ類・否定疑問類(関東方言「ンジャンイ・ンジャンネ」/関西方言「ンチャウ」)の3類を取り上げる。

2 先行研究

2.1 ダロウ類についての先行研究

まず「ダロウ」について、三宅(1995)は推量を「話し手の想像の中で命題を真であると認識する。」と定義し、この意味を表すのは「ダロウ」だけであると述べる。また「ダロウ」の語用論的な機能について安達(1997)は、言い切りで用いた推量の「ダロウ」は「不確かな事態であるにも関わらず、話し手が一方的に強い主張を行っているといったニュアンス」を持つため、「聞き手への配慮を欠いた発言となってしまふ点で、対話では容認性が低くなる」ことを指摘する。この不安定性を避けるために、終助詞「ネ」の付加による心的チェックの表示や、「トオモウ」の補文へ埋め込むことで「聞き手に対する配慮」を表す方略が用いられるとする。また、推量する事態の情報が聞き手と話し手で共有されている場面では「ダロウ」が言い切りで容認されやすいことも指摘している。

推量の「ダロウ」の話し言葉での使用実態を調査したものに庵(2009)がある。庵(2009)は会話データベースをもとに丁寧体「デショウ」の用例が推量ではなく確認に偏っていることを指摘する。また書き言葉では、馮(2019)がBCCWJを用いて、「ダロウ」の意味を「推量」「確認」「疑い」に分けた上で用法の分布を調査している。その調査から「話し言葉と違ってBCCWJにおける推量のダロウは「言い切り」の形で多用される。」「確認用法は対話性が強いので、BCCWJにおける出現率は低く、ほとんど文学作品の会話文に現れる。」と述べている。これらから、現代日本語では、推量の「ダロウ」は会話文では使いにくくなっており、対して書き言葉の中では推量の専用形式としての位置を保っていると言える。

2.2 トオモウ類についての先行研究

次に「トオモウ」について、文末の「トオモウ」が推量のように機能することが指摘されている。森山(1992)では文末の「思う」の基本的な意味を「個人情報の表示」とし、下位分類として「主観明示用法」「不確実表示用法」に分ける。「不確実表示用法」が「ダロウ」と近似するが、それは「話し手の個人的な見方を表す」ことで「不確実なこととして述べる」ために生じる機能であるとする。また、「思う」の展開を通

時的に分析した研究に渡辺(2007)がある。渡辺(2007)は「思う」の意味を①願望表現・②意志表現・③感情表現・④推量表現・⑤判断・⑥事象の6つに分類した上で中古から近代までの作品を調査し、「推量表現」は「近代以前にも散見されたものの、近代に入り急増した」と述べており、推量に近い用法は比較的新しいと言える。さらに、文末の「思う」の語用論的な機能の研究に小野(2001)・牧原(2015)がある。小野(2001)は文末の「思う」について、「話し手にとって不確実という断定するに足りない知識状態」を表示することで「聞き手に積極的に同様の思考を求めたり、あるいは、聞き手に思考・判断を求めるといふ、聞き手の持つ知識への働きかけ」が生じ、聞き手に対する配慮が生まれると述べる。また牧原(2015)は、主張を表す文で文末に用いられる「思う」は聞き手に対するFTA(フェイス脅かし行為)を緩和しポライトネスを高める機能を持つが、「話者の知識状態を表明するに止まる」ことによる効果であるため、他の蓋然性判断のムード形式¹に比べるとFTA緩和機能は弱いと指摘する。

2.3 否定疑問類についての先行研究

最後に本稿で取り上げる「ンジャナイ/ンチャウ」の形式は、否定を表す一形式である。これに「カ」を後接した「ンジャナイカ/ンチャウカ」は否定疑問の表現となる。否定疑問文については田野村(1988)が、その意味機能を3分類し、三宅(1994)がさらに下位分類を行っている。本発表と関わるのは三宅(1994)の分類するデハナイカⅡ類である。三宅(1994)によれば、デハナイカⅡ類は「ダロウ」で表される推量の意味と極めてよく似るが、ダロウよりも弱い見込みであり、その意味を、「推測」「話し手の想像の中で命題を、弱い見込みではあるが、真であると認識する」と定義する。デハナイカⅡ類はこの推測の意味から派生して命題確認要求の意味を持つ。さらに牧原(2015)による発話機能とムード形式の共起の分析では、「ノデハナイカ」は主張の文におけるFTA緩和にも用いることができると指摘される。

また、本研究では関西方言の否定疑問の形式として「ンチャウ」を取りあげる。関西方言の否定形式について触れた研究に高木(2005)、松丸(2018)がある。高木(2005)は関西の若年層で、否定疑問の形式が「〈否定〉〈同意要求〉をジャナイ(カ)、〈推測〉をチャウ(カ)、〈認識の再形成〉をヤンカが担う」ように変化していると指摘する。また松丸(2018)は関西方言にある名詞・形容動詞述の否定の形「(ヤ)ナイ」「(ヤ)アラヘン」「(ト)チガウ」を比較・分析し、「(ヤ)ナイ」が〈否定〉〈非存在〉〈否定疑問〉〈推測〉すべてを担っていたものを、用法と形式が分化して「(ト)チガウ」は〈推測〉を多く担うようになっていると述べる。以上のような先行研究を踏まえた上で、推量表現形式の選好性に関して、世代と地域による傾向の違いを調査した。

3 調査方法

3形式の使い分けを調べる上で、関東圏・関西圏の若年層(10~20代)と高年層(50歳以上)を対象²にアンケート調査を行った。アンケートの設問は大きく次の二つである。

¹ FTAを緩和する機序は次の通りである「①意見を表明するという行為が、異なる意見を持つ人にとってはFTA(フェイス脅かし行為)に該当する可能性がある。②そのため、蓋然性判断、及びそれに準じる文末形式を使用することで自らの意見が正しくない可能性を示し、FTAを緩和する。」(牧原 2015)

² 内訳は次の通り。

関東若年層 92名:茨城県(1)、栃木県(3)、群馬県(1)、埼玉県(4)、千葉県(11)、東京都(23)、神奈川県(49)

関西若年層 85名:三重県(3)、滋賀県(9)、京都府(19)、大阪府(34)、兵庫県(15)、奈良県(3)、和歌山県(2)

関東高年層 27名:茨城県(1)、栃木県(2)、群馬県(2)、埼玉県(7)、千葉県(3)、東京都(6)、神奈川県(6)

関西高年層 26名:三重県(1)、滋賀県(1)、京都府(10)、大阪府(7)、兵庫県(6)、奈良県(1)、和歌山県(0)

調査 A:それぞれの形式を使ったときの事態の実現可能性の認識(以下、確信度と呼ぶ)の調査

調査 B:場面設定し、各場面でのどの形式を使いやすいかの調査

まず、調査 A では「来るだろ(う)/来るでしょ(う)」「来ると思う」「来るんじゃない?/来んじゃない?」³と表現するとき、「B さんが来る」という事態の実現可能性をどの程度だと認識しているかを、「100%・90%・80%・70%・60%・50%・40%以下・使わない」から選択してもらった。

次に、調査 B では、事態の実現可能性・聞き手と話し手の情報の均衡性という二つの軸から表 1 のように 4 つの場面を設定した。回答形式については、表 2 に挙げたように全ての場面でそれぞれの形式について選択肢の中から評価してもらった。なお、表 1 は若年層を対象としたものであり、高年層に対しては場所を「公民館での連続 5 回の公開講座」とした。アンケートには google form を用いた。

表 1 若年層調査に用いた場面設定(調査 B)

	共通場面	個別設定	可能性	情報量
I	登場人物はあなた、Aさん、Bさんです。 3人は同じゼミに 所属しています。Bさんは今日のゼミに来ませんでした。Aさんから「Bさん、来週は来るかなあ?」と聞かれたときの回答について、選択肢からあてはまるものを選んでください。	Bさんが来週のゼミで発表が当たっている(来る可能性が高い)ことを、あなたもAさんも知っているとき。	高	均衡
II	登場人物はあなた、Aさん、Bさんです。 あなたとBさんは同じゼミに 所属しています。AさんからBさんを紹介してほしいと頼まれましたが、Bさんは今日のゼミに来ませんでした。Aさんから「Bさん、来週は来るかなあ?」と聞かれたときの回答について、選択肢からあてはまるものを選んでください。	Bさんが普段からゼミをさぼりがちである(来るかどうかははっきりしない)ことを、あなたもAさんも知っているとき。	中～低	均衡
III	登場人物はあなた、Aさん、Bさんです。 あなたとBさんは同じゼミに 所属しています。AさんからBさんを紹介してほしいと頼まれましたが、Bさんは今日のゼミに来ませんでした。Aさんから「Bさん、来週は来るかなあ?」と聞かれたときの回答について、選択肢からあてはまるものを選んでください。	Bさんが来週のゼミで発表が当たっている(来る可能性が高い)ことを、あなたは知っていて、Aさんは知らないとき。	高	不均衡
IV	登場人物はあなた、Aさん、Bさんです。 あなたとBさんは同じゼミに 所属しています。AさんからBさんを紹介してほしいと頼まれましたが、Bさんは今日のゼミに来ませんでした。Aさんから「Bさん、来週は来るかなあ?」と聞かれたときの回答について、選択肢からあてはまるものを選んでください。	Bさんが普段からゼミをさぼりがちである(来るかどうかははっきりしない)ことを、あなたは知っていて、Aさんは知らないとき。	中～低	不均衡

表 2 場面設定の調査での各語類の形式と回答選択肢(調査 B)

	ダロウ類	トオモウ類	否定疑問類
関東	来るだろ(う)/来るでしょ(う)	来ると思う	来るんじゃない?/来んじゃない?
関西	来るやろ(う)	来ると思う	来るんちゃう?

選択肢:a.言う b.言わないがおかしくない c.言わないしおかしい

4 調査結果

まず確信度の調査(調査 A)から図 1 の結果が得られた。ここから先行研究にあるように、否定疑問類はダロウ類よりも弱い見込みであることが確認できる。また、世代・地域に関わらず、各語の基本的な意味は、確信度という観点からダロウ類・トオモウ類・否定疑問類の順に低くなる事が確認できる。

また関西の高年層において、「トオモウ」の確信度が「ヤロウ」と同程度の箇所には山があるが、一方で「使わない」の回答が 15.4%存在し、他の層と比べて多い。このことから関西の高年層では、「トオモウ」の推量的な場面での「不確定表示用法」の使用が比較的少ないと考えられる。

³ 関西出身者に対する質問文では語形を「来るやろ(う)」「来ると思う」「来るんちゃう?」とした。

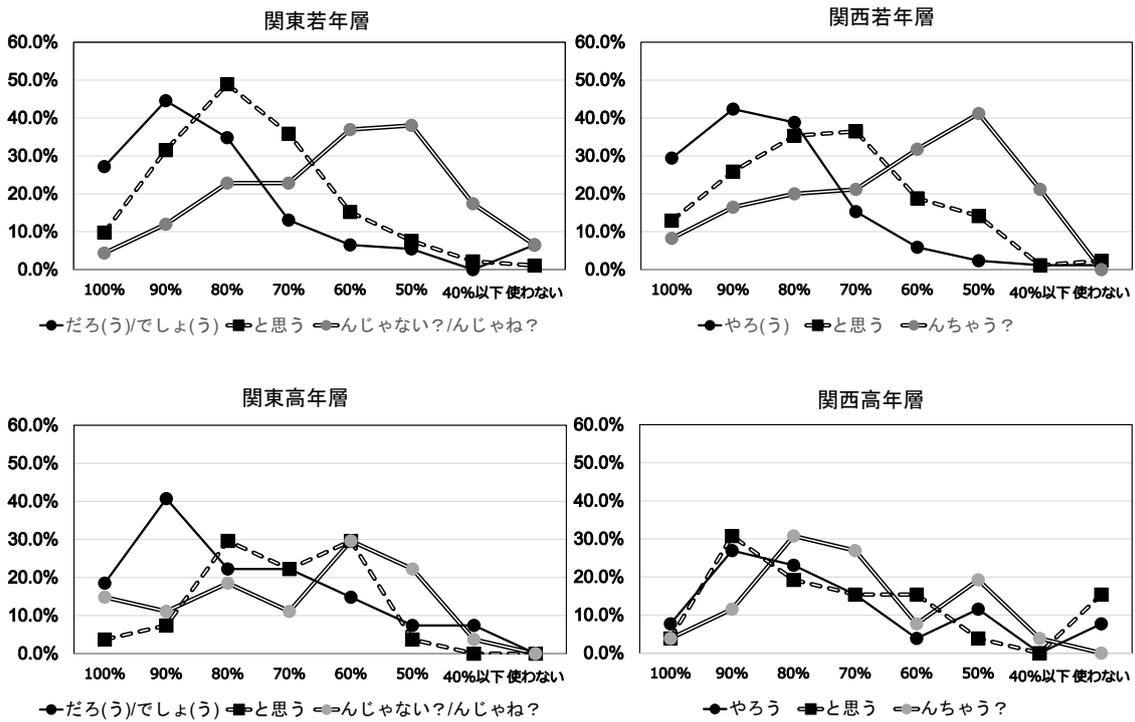


図 1 文末形式の確信度の認識(調査 A)

次に表 3 は、調査 B の結果をまとめたものである。表中の数字は、それぞれの形式を「言う」と回答した人数を、属性ごとの回答者数で割ったものである。これを、形式ごとにまとめると次の表 4 のようになる。

表 3 場面設定による各形式の選好性(調査 B)

回答者の世代		若年層				高年層			
		均衡		不均衡		均衡		不均衡	
話し手と聞き手の情報量の均衡性		高	低	高	低	高	低	高	低
事態の実現可能性		高	低	高	低	高	低	高	低
関東	来るだろ(う)/来るでしょ(う)	70.7%	19.6%	42.4%	9.8%	63.0%	22.2%	37.0%	7.4%
	来ると思う	78.3%	15.2%	88.0%	22.8%	59.3%	14.8%	77.8%	18.5%
	来るんじゃない?/来んじゃない?	82.6%	65.2%	50.0%	42.4%	74.1%	44.4%	55.6%	37.0%
関西	来るやろ(う)	88.2%	20.0%	48.2%	14.1%	57.7%	15.4%	34.6%	15.4%
	来ると思う	49.4%	22.4%	80.0%	30.6%	30.8%	15.4%	53.8%	19.2%
	来るんちゃう?	85.9%	71.8%	63.5%	54.1%	80.8%	57.7%	38.5%	38.5%

表 4 各形式の場面ごとの選好性(調査 B)

形式	ダロウ類				トオモウ類				否定疑問類			
	若年層		高年層		若年層		高年層		若年層		高年層	
	関東	関西	関東	関西	関東	関西	関東	関西	関東	関西	関東	関西
I 情報均衡・可能性高	71%	88%	63%	58%	78%	49%	59%	31%	83%	86%	74%	81%
II 情報均衡・可能性低	20%	20%	22%	15%	15%	22%	15%	15%	50%	64%	44%	58%
III 情報不均衡・可能性高	42%	48%	35%	37%	88%	80%	78%	54%	50%	64%	56%	38%
IV 情報不均衡・可能性低	10%	14%	7%	15%	23%	31%	19%	19%	42%	54%	37%	38%

調査 B の結果から以下のことが指摘できる。

- (ア) ダロウ類は各世代・地域でⅠの場面で最も使いやすい。
- (イ) ダロウ類は「実現可能性が高い」場合、情報が不均衡よりも均衡なとき使いやすい。
- (ウ) Ⅱの場面でダロウ類は使われにくく代わってトオモウ類が使われる。

これは、安達(1997)の指摘する、聞き手と話し手で「認識が共有されている」場面では「自分の述べる意見や情報が聞き手にとっても受け入れやすいと考えられる」ため、言い切りの「ダロウ」が容認されやすいことと重なる。さらに、地域差・世代差について次のことが言える。

- (エ) 若年層のⅠの場面でのダロウ類の使用は、関東よりも関西が多い。
- (オ) 若年層のⅠの場面でのトオモウ類の使用は、関西よりも関東が多い。
- (カ) Ⅰの場面でのダロウ類以外の使用は、高年層から若年層にかけて増加している。

さらに、否定疑問類については次のことが言える。

- (キ) 可能性の低い場面では否定疑問類が最も使われやすい。
- (ク) 否定疑問類の中で比較したとき、可能性の低い場面より高い場面で使われやすい。

この結果から、ダロウ類は従来から使われる場面で使えなくなっているわけではないが、トオモウ類・否定疑問類が同場面で多く用いられることで、相対的にその位置を譲って見えるものと考えられる。

5 各形式の選好性について

上記ア～クを受け、各形式の選好性について考察する。トオモウ類は世代・地域に共通してⅢの場面で最も使いやすく、これは森山(1992)の述べる、「思う」の「個人情報の表示」の意味により聞き手配慮性が生じるため、聞き手と話し手で情報が不均衡なときに用いるのが基本のようである。関東若年層ではさらに、表4中、Ⅰの場面においてもトオモウ類を有意に多く用いる。この場面は本来であれば安達(1997)の指摘するように「ダロウ」でも容認される場所であり、関西若年層ではダロウ類で表せている。しかし関東若年層ではトオモウ類の方を選択しやすい。この差について二つの側面から説明を試みる。

一つは、確信度の調査において関西高年層に「思う」を使わないという回答が約15%存在することと、渡辺(2007)の述べるように「思う」の推量的な用法は近代に急激に拡大したということから、「思う」の基本的な意味を「個人的な情報の表示」としたとき、推量に近い用法である「不確実表示用法」としての使用に地域差がある可能性である。もう一つに、3形式の確信度の認識に地域差は無かったが、文脈を与えると選択傾向が異なることから、意味論的意味が違うのではなく、語用論的な次元での違いがあると考えられる。関東若年層で、Ⅰの場面においてトオモウ類を使う傾向は、高年層の世代と比較して増加している。一方で図より、関西若年層はⅠの場面ではダロウ類の使用が多く、関東若年層と比べても有意に多い。Ⅰの場面でのダロウ類の使用は、安達(1997)によれば、自分の意見が「相手にも受け入れられやすいと見込まれる」ときに「聞き手の考えに配慮する方向」での使用である。したがって、関東若年層は、Ⅰのような場面にも聞き手に配慮する意識が強まっており、関西では「聞き手の考えに配慮する方向」でダロウ類を用いる傾向があると考えられる。

4節の(キ)・(ク)より、否定疑問類は、実現可能性が低い場合には、情報の均衡性によらず最も選択されやすい。この点は「ダロウ」より弱い見込みを表すことと重なり、確信度の認識とも一致する。一方で実現可能性の高い場合にも否定疑問類は多く使われ、推量した内容を聞き手に配慮して伝達するものと考えられる。否定疑問類は全般に高年層よりも若年層で回答が多く、推量の場面での使用は拡大して

いると言える。

6 おわりに

本発表では、事態の実現可能性と聞き手と話し手の情報均衡性という観点から、推量表現形式の選好性を調査し、その動態について考察した。調査の分析から、以下のことが指摘できた。関東では聞き手との情報共有を前提とする「ダロウ」の「押しつけがましさを避け「トオモウ」による消極的配慮を優先させるのに対し、関西では「ヤロウ」による積極的配慮を優先させるという、ポライトネスの方略の違いが表れていると考えられる。また否定疑問形式は全般的に「言う」の回答率が高く、その傾向は高年層よりも若年層のほうで顕著であることから、否定疑問形式の推量の場面での使用が拡大していることが明らかになった。ポライトネスの方略の違いについて本調査だけでは十分に説明することができていないため、他の言語現象でのポライトネスの方言差と併せて考察していくことが今後必要である。

参考文献

- 安達太郎(1997)「「だろウ」の伝達的な側面」『日本語教育』95,pp.85-96,日本語教育学会
- 庵功雄(2009)「推量の「でしょう」に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」『日本語教育』142,pp.58-68,日本語教育学会
- 小野正樹(2001)「「ト思う」述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』110,pp.22-31,日本語教育学会
- 高木千恵(2008)「大阪方言における動詞チガウに由来する諸形式の用法」『国文学』92,pp.369-382,関西大学国文学会
- 田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」『国語学』152,pp.123-109,日本語学会
- 船木礼子(2017)「推量表現形式の分布とその変化—地域共通形式への収斂と脱推量形式化—」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』,pp.106-127,朝倉書店
- 牧原功(2015)「文法のムード形式とポライトネス」阿部二郎編『文法・談話研究と日本語教育の接点』,pp.79-98,くろしお出版
- 松丸真大(2018)「関西方言における名詞・形容動詞述語否定形式—ヤナイ・ヤアラヘン・トチガウの諸用法—」藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』,pp.443-462,和泉書院
- 三宅知宏(1994)「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1,pp.15-26,大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座
- 三宅知宏(1995)「「推量」について」『国語学』183,pp.86-76,日本語学会
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞「思う」をめぐって—一文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』11-9,pp.105-116,明治書院
- 渡辺由貴(2007)「「と思う」による文末表現の展開」『早稲田日本語研究』16,pp.37-48,早稲田大学日本語学会

配慮の言語行動における地域的志向—話者の内省を手掛かりに—

かじゆん さきほ
加順 咲帆 (東北大学大学院生)

1. はじめに

配慮の言語行動の地域差については近年研究が活性化し、多様な様相が明らかになりつつある。例えば、尾崎 (2006)、小林 (2021) などは受益表現、恐縮表現といった配慮的な表現、および、それが先行して現れる発話構成が東日本より西日本の方でよく見られることを報告している。また、小林 (2021) は依頼場面で命令形式を用いる非配慮的表現が東日本に観察されることを指摘する。さらに、小林・澤村 (2014) は「言語的発想法」の一つとして「配慮性」という志向を提案するが、その「配慮性」は近畿で強く東北で弱いことを主張している。

こうした研究からは、配慮的な西日本・非配慮的な東日本という対比的な把握が可能となるが、配慮の様相を果たしてそのように一面的にとらえてよいものであろうか。「配慮」のあり方は多様であり、さまざまな角度から言語行動の様相を照らし出したうえで、あらためて地域の特徴を把握してもよいのではなかろうか。また、研究者の観察のみに頼る分析はどうしても主観的にならざるを得ない面があり、方法論的な工夫も必要となるところである。

以上のような立場から、本研究では配慮の言語行動の地域的特徴について、新たな調査方法を提案することであらためて検討してみたい。対象地域は先行研究で言語行動の対比的な特徴が報告されている東北地方と近畿地方とし、各地域の代表地を気仙沼市・大阪市とした。

2. 話者の言語感覚を手掛かりとした分析の方法

従来の研究の多くは分析が研究者の言語感覚のみに依るゆえに、得られた結論が実際の話者の言語感覚に一致するかどうかは不明な部分が残っている。本研究では、話者の言語感覚に基づく言語行動の志向を得るため、話者自身の内省を分析に用いる方式を提案する。話者の内省は話者の言語行動選択の意図を映し出す。内省を分析の手掛かりとすることで、話者が持つ言語感覚により近い志向を抽出することができると思われる。

具体的には、気仙沼市と大阪市の話者に、それぞれもう一方の地域の会話を見せ、反応を記録するという方法を取った。言語行動に注目してもらうため、話者には標準語訳を中心に観察してもらい、以下の点を指摘していただいた。

(i) 「自分ならこう言わない」「相手からこう言われると変だ」と感じる言語行動

(ii) その指摘した箇所について話者にとっての自然な言語行動

(i) (ii) の差を「違和感」と呼び、さらに、「過剰」「不足」に分類した。その言語行動を行わないことが自然であるにもかかわらず行うことが不自然だという違和感が「過剰」、その言語行動を行うことが自然であるにもかかわらず行わないことが不自然だという違和感が「不足」である。(1) は「過剰」の例、(2) は「不足」の例である。

(1) 気仙沼会話：(A は B と道で偶然出会ったとき、以前貰ったお土産のお礼を伝える)

A: コナイダワ オミヤゲ イタダイデ アリガトゴザリシタ。<この間は お土産 いただいて ありがとうございます。>

B: ヤマガタノ マンジューネ。ドータッタッス。<山形の饅頭ね。どうでしたか。>

- 大阪話者の指摘：Bが相手への関心を示す表現「ドータッタッス」を言うことが不自然である。そのように言わないことが自然である。

(2) 大阪会話：(Aが自宅で採れたナスを持ってBを訪ね、おすそ分けする)

A: チョット オスソワケオ ショーカ オモテ モッテキタデスワ。<ちょっとおすそ分けをしようかと思っけて持ってきたんですわ。>

B: アリガトゴザイマスー。ワタシ ナスビガ ダイスキデネ ヨバレマスー。<ありがとうございます。私 茄子が大好きでね いただきます。>

- 気仙沼話者の指摘：Bが自身の心情を伝える表現を言わないことが不自然である。「ワタシ ナスビガ ダイスキデネ ウレシーワ イタダキマス。」と自身の心情を伝える表現「ウレシーワ」を言うことが自然である。

(1) は大阪話者がその場面で相手の様子を尋ね量る表現「ドータッタッス」を言わなくてよいと考えていることを、(2) は気仙沼話者がその場面で自身の心情を表す表現「ウレシーワ」を言う方がよいと考えていることを表す。つまり、「過剰」はその言語行動に消極的である、「不足」はその言語行動に積極的であるという話者の志向を反映していると考えられる。

3. 調査の概要

インフォーマントは各地域で生え抜きの60~80代5名ずつ(計10名)である。以下ではこの10名を出身地域ごとに気仙沼話者I、気仙沼話者II、大阪話者I、大阪話者IIなどと表す。

調査に用いる方言会話は、気仙沼方言は『生活を伝える方言会話一宮城県気仙沼市・名取市方言一[資料編]』から20場面を選んだ。一方、大阪方言ではそれと対応する会話データがないので、気仙沼市と場面・話者の条件を揃え筆者が新たに収録した。ただし、話者によって一部の場面しか調査できなかった場合があり、気仙沼話者IVで10場面、同Vで5場面、大阪話者IVで6場面、同Vで8場面であった。調査場面数の合計は気仙沼で75場面、大阪で74場面となる。

4. 分析

4.1. 分析対象

ここでは、「配慮表明」を3種類に分類する。すなわち、①「立場調整」による配慮、②「心的接近」による配慮、③「表現操作」による配慮の3つである。このうち、「立場調整」による配慮とは、会話の進行による一時的な上下関係を、対等、もしくは話し手の方が下位になるように調整する言語行動である。これについては加順(2021)において、気仙沼話者に消極的な志向が、大阪話者に積極的な志向が見られることを明らかにした。今回は残る「心的接近」による配慮と「表現操作」による配慮の志向を分析する。

分析では「過剰」「不足」の、(違和感数) / (調査場面数)によって求められた数値に注目する。数値は小数第三位以下を四捨五入して示した。

4.2. 言語行動の志向の分析

4.2.1. 「心的接近」による配慮」の志向

「心的接近」による配慮とは、自身や相手の心情に関して言語的に働きかけることで相手への同調を示す「配慮表明」である。以下の4つの種類に分類できる。

- [a] 相手への好意的な心情を伝え、相手を認める言語行動（相手からのおすそ分けをするという申し出に「嬉しい」と言うなど）
- [b] 相手の心情を量り、相手への関心を示す言語行動（相手に呼びかけられて「何かあったの」と言うなど）
- [c] 相手の心情を推定し、それに合う行為を勧める言語行動（重そうな荷物を運べないでいる相手に「休んだら」と言うなど）
- [d] 相手の心情を伺い、自身との一致を確認する言語行動（町内会の役員をやってもらいたいときに「お願いできますか」と言うなど）

上記の(1)(2)はそれぞれ「心的接近」による配慮」の[b]の「過剰」、[a]の「不足」の例である。また、次の(3)は[c]の「過剰」の例、(4)は[d]の「不足」の例である。

(3) 気仙沼会話：(Bの荷物を運ぶのを手伝ってほしいという依頼をAが断って)

A：ゴメンネー。ホンデ ユックリ ヤラインヨー。<ごめんね。それでは ゆっくり やりなさいよ。>

- 大阪話者の指摘：Aが相手に行為を勧める表現「ホンデ ユックリ ヤラインヨー。」を言うことが不自然である。そのように言わないことが自然である。

(4) 気仙沼会話：(AがB宅を訪れ、BがAに家に入るよう勧めて)

A：ンデ アガラセテモラウガラ。<では 上がらせてもらうから>

- 大阪話者の指摘：Aが「アガラセテモラウガラ」と自身の行為を宣言し、相手の心情を伺わないことが不自然である。「デワ アガラセテモラッテイイカナ。」と相手の意向を確認する表現「～テイイカナ」を言うことが自然である。

まず、話者ごとの結果を図1に示す。下部の表の数値は、得られた違和感の実数である。

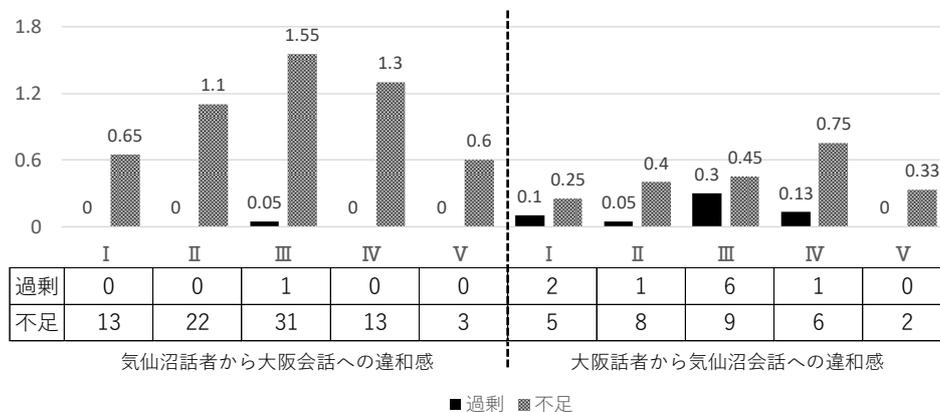


図1 「心的接近」による配慮」についての違和感

「過剰」は気仙沼話者では5名中1名からしか得られず、その1名の数値も大きくない。よって、大阪会話に対する「過剰」は気仙沼話者の地域的特徴とみなすことはできない。対照的に大阪話者では、「過剰」は5名中4名から得られた。その数値は大きくはないものの、相対的に見て大阪話者の地域的特徴と言えそうである。一方、「不足」は気仙沼話者で5名全員から得られ、数値も大阪話者と比べて大きい。このことから、両地域の比較において、「心的接近」による配慮は、気仙沼話者が大阪話者に比べてより積極的な志向を持つと言える。ただし、大阪話者でも「不足」が一定程度得られていることから、大阪話者が消極的な志向を持つとは言えない。

この点をより詳細に分析するために、「心的接近」による配慮の [a] ~ [d] の分類で結果を見てみよう。[a] ~ [d]

表 1 [a] ~ [d] の違和感数

	[a]		[b]		[c]		[d]	
	気仙沼	大阪	気仙沼	大阪	気仙沼	大阪	気仙沼	大阪
過剰	0	0	0	2	0	8	1	0
不足	36	8	28	13	18	1	0	8

について、地域ごとの得られた違和感数を表 1 に示す。

これを見ると、気仙沼市と大阪市で異なった傾向が現れていることがわかる。特に [a] と [c] の不足の違和感が気仙沼市で顕著である。自身の好意的な心情を伝えたり、相手の心情を推し量りそれに合う行為を勧めたりする言語行動は気仙沼市で好まれると言える。これに対して、[d] は逆の傾向を示す。すなわち、相手の心情を伺い、自身との一致を確認する言語行動は大阪市を特徴づけるものとみなしてよい。図 1 からは、「心的接近」による配慮について、大阪市より気仙沼市に優位な傾向が見られたが、その種類まで見ると、両地域で異なった方法が志向されることも明らかになった。

4.2.2. 「表現操作」による配慮の志向

「表現操作」による配慮とは、相手を侵害する可能性がある本心を直接言わず示唆に留める「配慮表明」である。これは以下の2つの言語行動に分類できる。

[e] 伝えたいことを直接言わず婉曲に言う言語行動（手料理を食べてほしいとき「食べてください」という依頼は直接言わず「お口に合うかわかりませんが。」と言いきし表現を使う、「～てみる」「～と思う」のようなぼかし表現を使うなど）

[f] 自身の心情や現実と異なることをあたかも本心・現実であるかのように偽装的に言う言語行動（依頼を引き受けるとき自身が恩恵を与える側であるのに「～させていただけます。」とあたかも自身が恩恵を受ける側であるように言うなど）

次の (4) は [e] の「過剰」の例、(5) は [f] の「不足」の例である。

(4) 大阪会話：(A が自宅で採れた野菜を B におすそ分けに持ってきて)

A: チョット オスソワケオ ショーカ オモテ モッテキタンデスワ。 <ちょっと おすそ分けを しようかと 思って 持ってきたんですわ。 >

●気仙沼話者の指摘：A が「オスソワケオ ショーカ オモテ モッテキタンデスワ」とぼかし表現「オモテ<思って>」を用いて言うことが不自然である。「オモテ」を言わず、「オスソワケ モッテキタンデスワ。」と言うことが自然である。

(5) 気仙沼会話：(A が貰い物の魚を B におすそ分けする)

A : Bサンモ ハンブン モッテッテケライン。<Bさんも 半分 持って行ってください。>

- 大阪話者の指摘：Aが「Bサンモ ハンブン モッテッテケライン。」と言うことが不自然である。「ハンブン」ではなく「Bサンモ スキナダケ モッテッテケライン。」とBが望むだけ譲るつもりであるように偽装的に言うことが自然である。

まず、話者ごとの違和感の数値を図2に示す。

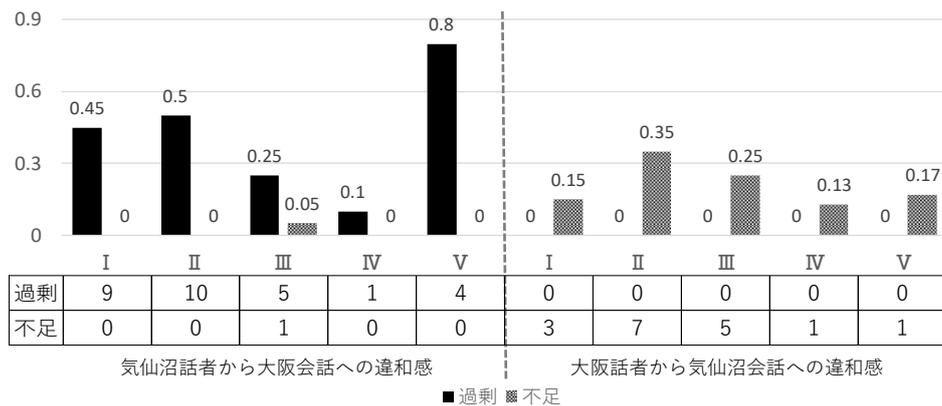


図2 「「表現操作」による配慮」についての違和感

「過剰」は気仙沼話者では5名全員から得られた。気仙沼話者Vをはじめとしてその数値が大きいがわかる。一方、大阪話者では「過剰」は全く得られなかった。これに対して「不足」は気仙沼話者で1名からしか得られず、その数値も大きくない。一方、大阪話者では「不足」は5名全員から得られた。その数値は大きくないものの、気仙沼話者から「不足」がほとんど得られなかったことと比較すると、地域的な対立が浮かび上がる。すなわち、気仙沼話者に「過剰」が、大阪話者に「不足」が多いことは明確である。したがって、両地域の比較において、「表現操作」による配慮は気仙沼話者が消極的な志向を、大阪話者が積極的な志向を持つと言える。なお、この結果は図2からすでに明らかのように、[e][f]の区別なくあてはまるものである。

5. 結論

本研究では、「心的接近」による配慮」「表現操作」による配慮について、気仙沼市と大阪市の違いを見て来た。その結果、次のことが明らかになった。

- ① 「心的接近」による配慮については、大阪話者に比べて気仙沼話者の方がより積極的に志向する傾向がある。ただし、その種類まで見ると、大阪話者は気仙沼話者と異なる方法を好むという一面も見られる。
- ② 「表現操作」による配慮については、気仙沼話者が消極的な志向を、大阪話者が積極的な志向を持ち、両者の違いは明瞭である。

「心的接近」による配慮で気仙沼話者に積極的な志向が見られたことは、小林・澤村(2014)の「配慮性」が東北で弱いという報告の例外にあたる。「言語的発想法」の「配慮性」は敬語や依頼・申し出場面での受益表現、恐縮表現、感謝表現を用いた、相手と距離を取る「配慮表明」

に着目し抽出されたものである。一方、「心的接近」による配慮」は相手への働きかけ、つまり近づこうとする言語行動であるため、「配慮性」の観点からは捉えられなかったと考えられる。

また、「心的接近」による配慮」は心情に言及する言語行動であるのに対し、「表現操作」による配慮」は表現方法を扱う配慮である。さらに、加順（2021）で扱った「立場調整」による配慮」は、会話中で変化する人間関係を扱う配慮であった。大阪話者に積極的な志向が見られるこの2つの言語行動は、心情という人間の内面には直接関わらない、言い回しや立ち位置といった言語行動の外殻的な部分において相手への配慮を伝えるものである。以上をまとめると、「配慮表明」において、人間の内面に入り込む気仙沼話者と、言語行動の外殻を扱う大阪話者という特徴付けが可能である。このことは東北と近畿で「配慮表明」の方法が基本的な部分で異なる可能性を示唆する。

さらに、これらをポライトネス理論から考えると次のように言える。「心的接近」による配慮」は相手と同調する「配慮表明」である点で、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一種として位置付けられる。対して、「立場調整」による配慮」や「表現操作」による配慮」は相手と距離を取るネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの一種である。陣内（2010）が「おそらく関西は、ポライトネスに関して、全国で最もポジティブであろうとする地域だと思われる。」（p.103）と述べるようにポジティブ・ポライトネスは関西ないし近畿に代表的であると思われるが、実際は今回の結果が示すように、東北においてもポジティブ・ポライトネス志向が見られると言える。また、近畿は言語的振る舞いの根底にポジティブ・ポライトネス志向を持ちながらも、時と場合により臨機応変にネガティブ・ポライトネス志向を優先させるという機微を持つことも指摘できそうである。

以上の点については、またあらためて考えてみることにしたい。

使用資料・参考文献

- 加順咲帆（2021）「言語行動選択における意識の東西差」日本方言研究会「日本方言研究会第112回研究発表会」（2021年5月21日開催）発表資料
- 尾崎喜光（2006）「依頼・勧めに対する受諾における配慮の表現」国立国語研究所編『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版,pp.55-88
- 小林隆（2021）「言語行動の地理的傾向—本書のまとめとして—」小林隆編『全国調査による言語行動の方言学』ひつじ書房,pp.327-338
- 小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』岩波書店
- 陣内正敬（2010）「ポライトネスの地域差」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見—知られざる地域差を知る—』ひつじ書房,pp.93-106
- 東北大学方言研究センター（2019）『生活を伝える方言会話—宮城県気仙沼市・名取市方言—資料編』ひつじ書房

『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス（2023年 NCRB 連動完成版）』の NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 上での公開、及び、 その活用法

宇佐美まゆみ（東京外国語大学）

1. はじめに

『BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス（2023年 NCRB 連動完成版）』（以降、前身コーパスも含めて、「BTSJ コーパス」と呼ぶ）とは、「2名によるシナリオがない自発的な会話」を述べ 1000 人分収録した世界最大規模の日本語自然会話コーパスである。その前身となるコーパスは、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）』¹であり、東京外国語大学にて 2002 年に内部限定公開を始め、2005 年以降一般にも公開・無料配布するとともに、随時拡充してきたものである。この度、延べ 1000 人分の話者の会話の収録という目標を達成したことから、名称を『BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス（2023年 NCRB 連動完成版）』²と改訂し、「完成版」とした。この完成版では、初めて NCRB (Natural Conversation Resource Bank)³という「共同構築型多機能データベース」であるオンライン・プラットフォームに本コーパスを格納し、NCRB 上からデータ検索や、トランスクリプト・音声のダウンロード、動画の視聴ができるようにした。本稿では、本コーパス構築の目的、趣旨、特徴、NCRB 上での活用法などの最新情報を紹介する。

2. 本コーパス構築の目的・趣旨

1980 年代後半、言語学、及び、その関連分野において語用論が隆盛を極め、「話しことば」の分析が多く知見をもたらすことが明らかになると、以前は「言葉のくずかご」と呼ばれていた「自然会話データ」の有用性が叫ばれるようになった。しかし、自然会話データの収集や文字起こしなどには膨大な時間と労力がかかることもあり、自然会話の分析は、少数データの質的分析にとどまらざるを得ない状況にあった。そのような状況の中、自然会話データは研究者間で共有することによって、各研究者の負担を軽減し、自然会話データを用いた研究、特に言語使用、相互作用を重視した「語用論的研究」を促進することが必須だと考え、コーパス構築を企図した。

コーパスの必要性を実感した 2002 年当時は、まだ、公開されている「自然会話コーパス」というものはなかった。特に、会話の内容をテキスト化して量的分析を行うというアプローチとは異なり、笑いや沈黙、同時発話、あいづち等の自然会話に特徴的な現象を、質的、量的両方の観点から語用論的に分析するのに適したコーパ

スは皆無であった。そのため、これまで存在しなかった「相互行為としての会話」の対人コミュニケーション論、語用論的分析、量的分析にも適したコーパスを構築することを目的とした。

もう一つの目的は、「質的分析」に重きをおいた「語用論的研究」の妥当性や信頼性を高めるために、より多くの条件統制されたデータでその知見を計量的にも検証できるようにすることによって、自然会話データの分析結果の科学的な信頼性を高め、人間の相互作用、言語運用に重きをおく「語用論的研究」の幅を広げることである。つまり、本コーパスの構築によって、大量データの形態素解析に基づく言語形式の量的な分析だけではなく、実際の言語運用と人間関係の構築に極めて重要な上下、親疎などの話者同士の関係の情報を提供し、文レベルを超えた談話の流れ(文脈)を可視化して十分に考慮しつつ、且つ、量的分析を可能にすることによって、自然会話の量的な語用論的分析を促進することも大きな趣旨の一つであった。

3. 本コーパスの特徴

上記2. を踏まえた本コーパスには、以下の4つの特徴がある。

- ① 「言語社会心理学的アプローチ」(宇佐美 1999)、「総合的会話分析」(宇佐美 2008, 2015a) の方法論に基づき、会話参加者の年齢、性別、話題などを統制して収集し、「録音された会話以外の社会的要因」の分析も重視する。そのため、各会話グループのデータ収集条件や話題、話者の年齢・性別・職業、その他の属性の情報も提供する。
- ② 発話の重なりや沈黙、笑いなど、多くのコーパスでは提供されていない語用論的分析に不可欠な情報を記して相互作用の細やかな質的分析を可能にする。
- ③ 「基本的な文字化の原則」(BTSJ : Basic Transcription System for Japanese) によって文字化したトランスクリプトを収録することによって、各研究者が独自の観点から分析項目を設定し、コーディングできるようにし、研究の観点の独自性を重視する。
- ④ コーディングした分析項目の集計が特別のプログラミング・スキルがなくてもできるようにしたツールである『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット (2015年改訂版)』(宇佐美, 2015b) を連動させている⁴。

このように、当コーパスに収録された会話は、グループごとに、収集の目的や、会話の条件が統制されているため、グループごとの目的・条件を確認し、研究目的に応じて、話者の属性(年齢、性別等)や対話相手との関係など、話者の話し方に大きな影響を与える社会的要因を考慮に入れた分析が可能である。これが、本コーパスの最大の特徴である。

改めてまとめると、本コーパスは、年齢や性を条件統制して収集した「シナリオのない自発的な自然会話」を、母語場面、接触場面ごとに、初対面会話、友人同士の会話（コア会話）としてまとめ、その他にも、教師と学生の論文指導場面、電話会話などのサブ・グループごとにまとめたもので、1 会話 15～20 分程度の会話、514 会話、約 127 時間（述べ話者数 1028 人）が収録されている。

その主な基礎統計情報は、総語数：1,701,555 語、異なり語数 18,691 語、話者数（延べ 1028 人）である。また、独自の特徴としては、コーパスの文字化と連動している分析集計ツールである『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』も提供していることがある。このシステムセットについては、宇佐美・山崎（2018）にまとめた。

4. 本コーパスに同胞されている文書・データの活用法⁵

本コーパスには、会話本体（トランスクリプト・音声）以外にも、以下の情報データシートなどが同胞されている。特に、3.の「データの情報一覧」というエクセルファイルを利用すると、コーディングをしていない段階のデータの集計・分析ができる。本コーパスの特徴を大まかに掴むためにも重要なので、是非、活用してほしい。以下、順に説明する。

1.はじめにお読みください。（PDF ファイル）

文字通り、「ファイル名が意味する原則」など、はじめに確認しておくべき重要な内容が記されて

いるので、必ず最初に目を通されたい。

2. 本コーパス公開の目的、会話データの概要（PDF ファイル）

本コーパスの公開の目的、会話の種類や内容の特徴が、より詳しくまとめられているので、確認されたい。

3.本コーパスに収録されている会話データの情報一覧（excel ファイル、4 つのシート）

「2. 本コーパス公開の目的、会話データの概要」でまとめた会話データの概要よりも、より詳しいデータ収集者の会話収集の目的（例）「いかに反論するかの男女差の検証等」や、会話収集条件などの情報が記載されている。この情報一覧のエクセルファイルには、以下の 4 つのシートがある。

- (1) 「①会話フォルダ情報」…各フォルダ内の会話収集条件等の情報
- (2) 「②個別会話情報」…各会話の時間や話者数などの情報
- (3) 「③話者情報」…各会話ごとの話者の性別、年齢、出身、社会的属性などの情報
- (4) 「③話者情報の注_話者記号の説明」…話者記号の意味の説明

4.本コーパスのトランスクリプト・音声（フォルダ）

このフォルダには、本コーパスに収録されている 514 会話（約 127 時間）のトランスクリプトと音声（384 会話分、うち動画有が 167 会話）が収められている。トランスクリプトのファイル名は、以下のルールに基づいている。例えば、「001 01 JM001 JM002」の場合、最初の「001」は、会話の通し番号である。会話の通し番号は 001 から 514 までである。次の「01」は、会話グループ番号である。会話グループは同じ条件で統制されている会話のまとまりであり、会話グループ番号は 01 から 32 までである。最後の「JM001 JM002」は話者 2 名のそれぞれの話者記号である。話者記号の意味については、「3.本コーパスに収録されている会話データの情報一覧」にある「③ 話者情報の注（話者記号の説明）」シートを参照されたい。音声ファイル名とトランスクリプトのファイル名は同じである。

本コーパスを利用する際には、上記の「2. 本コーパス公開の目的、会話データの概要」を理解した上で、「3.本コーパスに収録されている会話データの情報一覧」の内容を確認しながら、必要に応じて、excel ファイルの情報から、条件別に集計するなどして、会話データを使用することを推奨する。

これら 32 のフォルダ内には、同一条件に基づいて収集されたデータがまとめられているので、なんらかの比較のためには、各フォルダ内のデータを比較するというデータ利用法を推奨する。

5. 本コーパスの NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 上での公開、及び、その活用法

『BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス（2023 年 NCRB 連動完成版）』の最大の特徴は、これまでの前身となるコーパスとは異なり、「自然会話リソースバンク (NCRB: Natural Conversation Resource Bank) 上でも公開したことと、167 会話については、NCRB 上で動画が視聴できるという点である。NCRB とは、様々な場面における自然会話を録音・録画し、それらを蓄積・データベース化して構築されたシステムで、新しいタイプの「共同構築型多機能データベース」である。

NCRB には「研究部門（自然会話研究データを使った研究）」と「教材部門（自然会話を素材とする教材）」の 2 つの入り口がある。2 つの入り口は、それぞれ「1-1. 研究データの登録」、「1-2. 研究データの利用」、「2-1. 教材の登録・作成・編集」、「2-2. 教材の利用」に分かれるため、合計 4 つの入り口がある。この NCRB 上から、新規ユーザー登録を行い、「認証キー」を取得した後は、目的に応じて各自が自由に活用できる。

現在は、「研究部門」には、BTSJ コーパスの 514 会話のみが搭載されており、データ追加は控えているが、この研究部門に入ると、通常のコーパス申し込みサイトから申し込んでコーパスをダウンロードする形とは異なり、NCRB 上の検索機能を使って、自分が興味のある会話を検索して利用する会話のみをダウンロードしたり、NCRB 上で「会話グループ」を作成し、そのグループの中に、自分が興味のある会話のみを保存しておくなど、必要なデータを自分が作成した「会話グループ」として保存しておくことや、「お気に入り」としてマイページに保存することもできる。また、NCRB 上では、動画データを公開しているデータについては、動画を視聴できるので、マルチモーダルな分析も可能になった。

BTSJ コーパスとは直接は関係がないが、動画があるデータについては、「教材部門」に「自然会話を素材とする教材」を作成する「教材作成支援機能」があるため、BTSJ コーパスの動画データや、別途、教材用としてアップロードされた動画データなどの既存の動画のトランスクリプトの一発話ごとに、「内容」「表現」「会話ストラテジー」「ポライトネス」「文化」の観点から「発話の解説」が入力できる。また、Q&A として、選択問題と記述問題を「作成」することが可能である。教材作成については、本稿の趣旨ではないので、詳細は、別稿に委ねるが、このように、NCRB は、「自然会話コーパス」と、「共同構築・利用型 WEB 教材」が一体となった「共同構築型多機能データベース」であるので、是非、活用されたい。NCRB のシステムを通して作成された教材は、国内外を問わず広く日本語教育の現場で利用していただくことを想定している。自然会話を素材としているため、あいづち、フィラー、言いよどみ、笑い、間、沈黙、スピーチレベルのシフトなどを、学習者が WEB 上で独習するのみならず、授業の中で、日本語会話の音調、間合いなどの学習や討論の材料として扱うなど、場面や人間関係に応じたコミュニケーション・ストラテジーについての気づきを促し学習に結びつけることや、学習者同士の質問や議論につなげることも可能になっている。

6. おわりに

以上、『BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス (2023 年 NCRB 連動完成版)』の特徴をまとめた。今後、各研究者が、本コーパスを利用する際には、本稿で紹介したように、同梱の excel ファイルの「3.本コーパスに収録されている会話データの情報一覧」などを活用して、各フォルダや会話の条件を明確にして、各人の研究目的に適合する会話を抽出して分析することを奨めたい。そのためには、NCRB 上の検索機能や、お気に入りのマーク、会話のグループ化などの機能が有効であろう。今後は、NCRB という共同構築型多機能データベースの機能や、そこで視聴できる動画データを活用する形で、自然会話の分析方法や解釈の質を高めていくことができたら幸いである。

【謝辞】

本研究は、科研費 18H03581「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的な研究」（研究代表者：宇佐美まゆみ）（2018-2022）、及び、国立国語研究所の機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明」（2016-2021）の成果の一部である。集計に際しては、国立国語研究所の山崎誠氏の協力を得た。記して謝意を表す。

【引用文献】

- 宇佐美まゆみ（1999）「談話の定量的分析 - 言語社会心理学的アプローチ -」『日本語学』18(11), 明治書院: 40-56.
- 宇佐美まゆみ（2008）「相互作用と学習 - ディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西郡仁朗編『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』, ひつじ書房: 150-181.
- 宇佐美まゆみ（2015a）『『総合的会話分析』の趣旨と方法 - 量的分析と質的分析の必然的融合 -』特集『日本語教育の研究手法 - 「会話・談話の分析」という切り口から -』『日本語教育』162号, 34-49.
- 宇佐美まゆみ(2015b)『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット（2015年改訂版）』
- 宇佐美まゆみ・山崎誠（2018）「『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018年版』の紹介と『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』を用いた分析法」, 『計量国語学会第62回大会予稿集』: 1-6.

¹ 2016年度以降は、国立国語研究所より公開。

² 『BTSJ 1000人日本語自然会話コーパス（2023年 NCRB 連動完成版）』は、以下から申し込める。

https://isplad.jp/btsj_corpus_2023/

https://isplad.jp/lab/btsj_corpus_2023/

³ 共同構築型多機能データベース NCRB (Natural Conversation Resource Bank) は、以下からアクセスできる。

<https://ncrb.jp>

⁴ 『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット（2015年改訂版）』は、以下からオンライン・チュートリアルを受講することによって、無料で入手できる。

https://isplad.jp/btsj_tutorial/

https://isplad.jp/btsj_tutorial/online_lesson/

⁵ 本コーパスの同梱文書における説明と重なるところもある旨をお断りする。

近世日本漢字音研究が近代に及ぼした影響について

なかざわのぶゆき
中澤信幸 (山形大学)

いしやまゆうじ
石山裕慈 (神戸大学)

いわきひろゆき
岩城裕之 (高知大学)

かとうだいかく
加藤大鶴 (跡見学園女子大学)

0 はじめに

本研究は、近世日本漢字音研究によって人為的に整備された「字音仮名遣い」等の日本漢字音が、近代の日本および海外でどのように受け継がれたのかという点について、ジャイルズ、小川尚義、そしてカールグレンの研究を見ることで明らかにするものである。

まず、ジャイルズ (H. A. Giles) は、その著『A Chinese-English Dictionary』において、漢字に中国語諸方言音および朝鮮・日本・ベトナム漢字音を付している。この日本漢字音が、近世日本漢字音研究の影響をどの程度受けているのか考察する。

次に、台湾総督府の編修官だった小川尚義は、日本語と台湾語との対訳辞書を多数編纂した。その一つが『日台大辞典』であるが、その「緒言」では『韻鏡』の枠組みに基づいて漢字を排列し、それぞれに日本漢字音、中国語諸方言音および朝鮮・ベトナム漢字音を付している。引用文献としてジャイルズおよび太田全斎『漢吳音図』を挙げているが、これらの影響をどの程度受けているのか考察する。

最後に、カールグレン (B. Karlgren、高本漢) は、その著『Études sur la Phonologie Chinoise』(『中国音韻学研究』)において、中国語諸方言音および外国借音(日本・朝鮮・ベトナム漢字音)をもとに中国語中古音の音価推定を行っている。そこでは引用文献としてジャイルズを挙げているが、このジャイルズの影響をどの程度受けていたのか、そして近世日本漢字音研究の影響をどの程度受けていたのか考察する。

1 ジャイルズ『A Chinese-English Dictionary』

1.1 書誌情報と編者

表紙(図1)によれば、編者はジャイルズ(H. A. Giles)で、その属性として寧波領事(H. B. M. Consul at Ningpo)とある。出版地はロンドン(London)とあり、その後に住所が記される。出版者はケリーアンドウォルシュ有限会社(KELLY AND WALSH, LIMITED)、出版年は1892年である。

1.2 構成

この表紙の後に、同じ作者の他の著作(BY THE SAME AUTHOR)1ページ、序文(PREFACE)9ページ、文献解説(PHILOLOGICAL ESSAY)33ページが続き、その後辞書本編が続く。本編は1,354ページである。その後、表(TABLES)31ページ、部首索引(RADICAL INDEX)30ページが続き、最後に正誤表

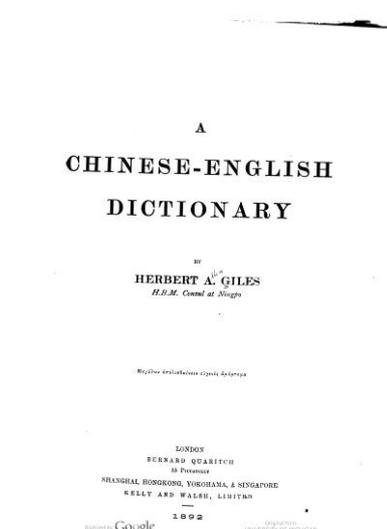


図1 ジャイルズ表紙

(ERRATA, ETC.) が付けられる¹。

2 ジャイルズにおける近世日本漢字音研究の影響

2.1 各地域漢字音の注釈

本書では、見出し漢字の右側に英語による注釈、また熟語に対する注釈が記される。(図 2)そして、見出し漢字の下には、韻(「R.」、rhyme の略)に続いて、それぞれの中国語諸方言音(広東、客家、福州、温州、寧波、北京、中部中国、揚州、四川)、朝鮮・日本・ベトナム(安南)漢字音がアルファベットで記される。(図 3~6)²

2.2 日本漢字音について

本書では、中国語諸方言音とともに日本漢字音(「J.」)も記される。例えば、「保」は「hō」(図 3)、「毛」は「mō, bō」(図 4)、「女」は「djo, nyo」(図 5)、「閉」は「hi」(図 6)と記される。これらの漢字音が何に拠ったのかは、必ずしも明記はされていない³。これらの漢字音であるが、江戸時代の太田全斎『漢吳音図』(1815、文化 12 年成)⁴と対照してみよう。(図 7~10。掲出字の右側が漢音、左側が呉音。いずれも内側が「原音」、外側が「次音。」「保」(「寶」が小韻代表字)については、ジャイルズはオ段長音の開合の区別をしていない(当時の実際の発音を反映している)ので、太田全斎との関係は不明確である。「毛」についても、ジャイルズは開合の区別をしていないものの、頭子音だけを見れば太田全斎の「次音」と一致する。(ただしジャイルズは漢音・呉音を明記していない。)⁴「女」については、太田全斎の「原音」と一致する。(ただしジャイルズの漢音・呉音の位置は、「毛」とは逆である。)⁴「閉」については、太田全斎の「次音」と一致する。ここで(実際の発音であるはずの「へイ」ではなく)「ヒ」としているのが気になるが、あるいは(太田全斎の「次音」のような)理論的な発音に引かれてしまったのであろうか。以上の用例からは、ジャイルズにおける近世日本漢字音研究の影響が垣間見られる。



図 2 ジャイルズ p. 864

¹ HathiTrust Digital Library の web サイトに掲載される画像による。
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015086589044&view=1up&seq=13&skin=2021>

² 序文 (PREFACE) p.vii では、方言 (The Dialects.) として以下のものが列挙される。
the Cantonese, Hakka, Foochow, Wenchow, Ningpo, Peking, Mid-China, Yangchow and Ssüch'uan dialects, as well as in Korean, Japanese, and Annamese,

辞書本編の見出し漢字の下に記される記号は、これらの方言名のイニシャルである。
³ 序文 pp.xxx-xxxii では、日本の漢音と呉音に関連した以下のような記述がある。

Both the *kan-on* and the *go-on* are usually given under this scheme, for all characters, when there really are two forms: usually the *kan-on* is printed first, but I am sorry to say that I did not set out by adhering to this arrangement: students must guess for themselves which is which. This is partly because I do not always know which is which myself, and partly because the Japanese dictionaries are not always consistent. It does not follow that both forms are actually used in Japan: the information given is purely theoretical. Both forms are in the large majority of cases taken from a Japanese work called the 山東玉篇, but occasionally also from HEPBURN or from memory. (下線は発表者による。)

この記述に出てくる「山東玉篇」は山東直砥増補『新撰山東玉編英語挿入』(1878 年刊、明治 11)、「HEPBURN」はヘボン (J. C. Hepburn) 『和英語林集成』を指すのであろう。したがって、ジャイルズはこれらの書を参照していたものと考えられる。

⁴ 人間文化研究機構国立国語研究所蔵本 (Web サイト公開の画像) による。

広州、温州、寧波、北京、および朝鮮、ベトナム（安南）の音はジャイルズにより、上海、南京の音はウィリアムズ『漢英韻府』（A Syllabic Dictionary of the Chinese Language）によったということである。また、日本漢字音については、太田全斎（太田方）の『漢吳音図』によったことが明記されている。これらをもとに、「緒言」では東アジア漢字音の対照研究が展開される。（図 11）⁵

3.2 「緒言」における対照研究

ここでは 2.2 で挙げた 4 字についての、「緒言」での記述を見てみよう。（図 12～15）まず福州、客家といった中国語諸方言音、および朝鮮、ベトナム漢字音については、ほとんどがジャイルズと一致している。一方、日本漢字音については、「保」（「寶」が小韻代表字）「毛」は太田全斎の「次音」と、「女」「閉」は太田全斎の「原音」と一致する。これを見ると、「緒言」ではジャイルズ、太田全斎等の先行文献を忠実に引用していることが見て取れる。近世漢字音研究の成果（と言うには議論の余地があるが）は、近代にも受け継がれているのである。

なお、『日台大辞典』の巻末に付載される「日台字音便覧」の冒頭には、「俗音」に関する記述があるが、これも太田全斎『漢吳音図』の「俗音」を承けているものと考えられる。ここから、後世の「慣用音」へのつながりも指摘できるのである⁶。

4 カールグレンに見られるジャイルズおよび近世日本漢字音研究の影響

4.1 カールグレン『Études sur la Phonologie Chinoise』について

カールグレン（B. Karlgren、高本漢）の『Études sur la Phonologie Chinoise』（1915～1926 年）⁷は、中国語中古音の音価推定を行ったパイオニアとして、つとに著名である。その手法は、「反切系聯法」によって導き出された枠組みや、『韻鏡』の枠組みに、中国語諸方言音、さらには外国借音（日本漢字音、朝鮮漢字音、ベトナム漢字音）を当てはめる

安南	朝鮮	北京	南京	寧波	温州	上海	廣州	客家人	福州	泉州	漳州	廈門	保
lan	p'o	nan	pa'o	poa	pōe, boe	po	pou	pai	poa	po	pou	pou	保
													補地切 ハ ワ

図 12 緒言「保」（pp. 104-105）

安南	朝鮮	北京	南京	寧波	温州	上海	廣州	客家人	福州	泉州	漳州	廈門	毛
lan	ho	nan	mao	moa	mōe	mo	nou	man	moa	mō, y, ming	mō	mō, y, ming	毛
													明地切 モ ワ

図 13 緒言「毛」（pp. 105-106）

安南	朝鮮	北京	南京	寧波	温州	上海	廣州	客家人	福州	廈門	女
hi	nyé	nī	nī	ngā	ngū, zū	nī	noī	ni	nī	nī	女
											尼呂切 漢音 ニ ヨ

図 14 緒言「女」（p. 25）

安南	朝鮮	北京	南京	寧波	温州	上海	廣州	客家人	福州	廈門	閉
be	pie	ī	pī	pī	pī	pī	pai	pī	pīe	pī	閉
											博地切 四 ハ イ

図 15 緒言「閉」（p. 74）

⁵ 「緒言」とその引用文献との関係については、曾若涵（2014）に詳細な考察がある。また、「緒言」については中澤（2020）で、ジャイルズ等の引用文献との関係については中澤（2023）でも考察している。

⁶ 日本における「俗音」の変遷については、中澤（2019）参照。

⁷ 趙元任・李方桂による中国語訳『中國音韻學研究』（1940 年刊、商務印書館）による。

というものである⁸。この諸方言音や各漢字音を並べる手法は、ジャイルズや小川尚義を想起させるが、カールグレンの研究はこの両者より後世のものである。

本書の「緒論」には、以下のような記述がある。

但是一直到現在，在所有發刊過的中國語言的說明當中，最“像煞有介事”而結果是最錯的，就是 Parker 在 Giles 大字典裏頭每個字所注的十二種方音（廣州，客家，福州，温州，寧波，北京，漢口，揚州，四川，高麗，日本，安南）。二十年來這個字典大家既然認爲中國方言知識的主要材料，那麼現在就應當給它稍微詳細審查一下，好讓這個東西的價值縮小到它的真尺寸。（『中國音韻學研究』p.9、下線は原本通り。）

これによれば、カールグレンはジャイルズの字典について、世間からは過大評価されており、さらに詳細な研究が必要であると感じていたようである。

4.2 「方言字彙」における対照研究

本書の「第十八章 方言字彙」では、韻ごとに漢字を並べ、その下に朝鮮（高麗）・日本（漢音・吳音）・ベトナム（安南）漢字音、および中国語諸方言音を記している。（図 16）この緒論では典拠について以下のように述べられる。

此下我用的材料不是上述的那幾種書，乃是我近來得到的兩部我認爲於現在的工作更合適的書：Adam Grainger. *Western Mandarin*, (1900), 跟 D. MacIver, *A Hakka index to the Chinese English dictionary of H. A. Giles and the syllabic dictionary of S. W. Williams*, Shanghai, 1904. 下面字彙關於這兩處方言有些地方跟前幾章的聲母比較表不同，就是這個原故。

關於日本譯音我用的是漢和太辭林跟漢和太字典。（我們得時常記住那些音讀大都是理論上的讀音，好些讀法是現在口語不用的）。（『中國音韻學研究』pp.541-542、下線は原本通り。）

ここでもやはりジャイルズの名が、ウィリアムズ『漢英韻府』などととも挙げられている。日本漢字音については「漢和大辭林」および「漢和大字典」によっているという⁹。

それでは、2.2 で挙げた 4 字についての、「方言字彙」での記述を見てみよう。（図 17～20）まず朝鮮およびベトナム漢字音であるが、4 字ともジャイルズとほぼ一致する。（一部表記方法が異なるものもあるが。）中国語諸方言音については、一致するものもあれば一致しないものもある。カールグレンがジャイルズ以外にもさまざまな書を参照していることの表れであろう。

一方、日本漢字音であるが、「保」（「寶」が小韻代表字）「毛」については、ジャイルズ

効 攝 平 上 去 858

例字 古音	66 曹 tɕ'au	69 早 *dɕ'au	71 掃 sau	76 保 pau	80 袍 p'au	81 暴 b'au
高麗	tɕ'o	tɕ'o	so	po	p'o	p'o
漢音	soi	soi	soi	hoi	hoi	hoi
吳音	soi	soi	soi	hoi	hoi	hoi
安南	tau	tau	tau	tau	tau	tau
廣州	tɕ'ou	tɕ'ou	soi	pou	p'ou	p'ou
客家	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
福州	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
温州	tɕ'o	tɕ'o	so	po	p'o	p'o
上海	zɕ'o	zɕ'o	so	pɕ'o	bɕ'o	bɕ'o
北京	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
開封	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
懷慶	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
歸化	tɕ'o	tɕ'o	so	po	p'o	p'o
大興	tɕ'o	tɕ'o	so	po	p'o	p'o
太原	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
興縣	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
太谷	tɕ'o	tɕ'o	so	po	p'o	p'o
文水	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
襄台	tɕ'o	tɕ'o	so	po	p'o	p'o
蘭州	tɕ'o	tɕ'o	so	po	p'o	p'o
平涼	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
西安	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
三水	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
四川	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au
南京	tɕ'au	tɕ'au	soi	pau	p'au	p'au

[dɕ'au]: 67 槽, 68 漕; '槽' 吳音 谷文 te, 羅 so; '漕' 羅 dzo; 汕文谷 te* (應酌又切 dɕ'au); —[dɕ'au]: 70 造, —[sau]: 72 振, 78 賑, 74 隄, 75 艘; '振' 客 漢 山西 陝山 甘肅 te; '賑' 歸同原典谷派西三 te; '隄' 羅 tɕ'o*, 謝山西 (除徐文谷) 蘭三京* -te'; '艘' 吳音 au: (併作 au-u), 安未詳, —[pau]: 77 裏, 78 寶, 79 報; '寶' 羅 p'o, 羅 pou*, —[b'au]: 82 袍; '暴' 日本 bo: 寫作 ba-u '袍' 廣 p'ou, 汕 p'au, —[mau]: 84 茂, 85 貿, 86 帽。

- (1) 漢音 -o: 寫作 -a-u, 吳音 -oi 寫作 -o-u.
 (2) 汕頭 '高第街青樓告' ko', '高樓快' o', '好樓' ho', '橋橋半' lɕ'o', '刀割陶造' 道' to', '對' 菊鏡' t'o, '集精' 造' tao', '草音' t'o'o', '艘' so', '保寶報' po', '袍' p'o', '毛' mo', '帽' bo', -au, -o 並存附 -au 是文音。

図 16 カールグレン p. 653

⁸ 中古音の音価推定の方法については、李思敬 (1987) pp.105-139 参照。

⁹ 「漢和大辭林」は郁文舎刊の『漢和大辭林』(1906、明治 39 年刊)、「漢和大字典」は三省堂刊の『漢和大字典』(1903、明治 36 年刊) のことか。

と同様オ段長音の開合の区別をしていない。漢音・呉音については太田全斎の「次音」と一致する。「女」はジャイルズとはスペリングが異なるが、示している音は同じようである。こちらは太田全斎の「原音」と一致する。「閉」は太田全斎の「原音」と一致する。ジャイルズは理論的な発音に引かれてしまったと考えられるのに対して、こちらはより現実の発音を反映していると言える。4.1 で述べたカールグレンのジ

例字古音	76 保 pau
高麗 ¹	po
漢音 ¹	hoi
吳音 ¹	hoi
安南州 ¹	bau
客家 ¹	pou
汕頭 ²	pau
福州 ²	pə
温州 ²	pə
上海 ²	pe
北京 ²	pau
開封 ²	pau
懷慶 ²	pau
歸化 ²	po
大同 ²	po
太原 ²	pau
興縣 ³	paɿ
太谷 ³	pə
文水 ⁴	pau
鳳台 ⁴	po
蘭州 ⁴	po
平涼 ⁴	pau
西安 ⁴	pau
三水 ⁴	pau
四川 ⁴	pau
南京 ⁴	pau

図 17 カールグレン「保」(p. 653)

例字古音	83 毛 mau
高麗 ¹	mo
漢音 ¹	boi
吳音 ¹	mo:
安南州 ¹	mau
客家 ¹	mou
汕頭 ²	mau
福州 ²	mə
温州 ²	mə
上海 ²	mə
北京 ²	mau
開封 ²	mau
懷慶 ²	mau
歸化 ²	mo
大同 ²	mo
太原 ²	mau
興縣 ³	mbau
太谷 ³	mə
文水 ⁴	mbau
鳳台 ⁴	mo
蘭州 ⁴	mo
平涼 ⁴	mau
西安 ⁴	mau
三水 ⁴	mau
四川 ⁴	mau
南京 ⁴	mau

図 18 カールグレン「毛」(p. 654)

例字古音	50 女 nɿ ^o
高麗 ¹	nie
漢音 ¹	ɕzo
吳音 ¹	nio
安南州 ¹	ŋw
客家 ¹	nəy
汕頭 ²	ŋi
福州 ²	dzu
温州 ²	ny
上海 ²	ny
北京 ²	ny
開封 ²	ny
懷慶 ²	ny
歸化 ²	ny
大同 ²	ny
太原 ²	ny
興縣 ³	ny
太谷 ³	ny
文水 ⁴	ny
鳳台 ⁴	ny
蘭州 ⁴	ny
平涼 ⁴	ny
西安 ⁴	ny
三水 ⁴	ny
四川 ⁴	ny
南京 ⁴	ly

図 19 カールグレン「女」(p. 676)

例字古音	51 閉 piei
高麗 ¹⁶	p ^h ie
漢音 ¹⁶	hei
吳音 ¹⁶	hai
安南州 ¹⁷	be
客家 ¹⁸	pai
汕頭 ¹⁹	pi
福州 ²⁰	pi
温州 ²⁰	pi
上海 ²⁰	pi
北京 ²⁰	pi
開封 ²⁰	pi
懷慶 ²⁰	pi
歸化 ²⁰	pi
大同 ²⁰	pi
太原 ²⁰	pi
興縣 ²⁰	pi
太谷 ²⁰	pi
文水 ²⁰	pi
鳳台 ²⁰	pi
蘭州 ²⁰	pi
平涼 ²⁰	pi
西安 ²⁰	pi
三水 ²⁰	pi
四川 ²⁰	pi
南京 ²⁰	pi

図 20 カールグレン「閉」(p. 578)

ャイルズに対する評価も、あるいはこのようなところから来ているのかも知れない。

5 おわりに

以上、近世日本漢字音研究が近代に及ぼした影響について、太田全斎からジャイルズ、小川尚義、そしてカールグレンへと至る流れの中で考察した。ジャイルズは現実の発音を記そうとしていたが、理論的な発音に引かれてしまうこともあった。日本人である小川は、理論的な日本漢字音（字音仮名遣い）を忠実に受け継いでいた。カールグレンはさらに多くの典拠によることで、現実の日本漢字音を記していたことがあきらかになった。

引用文献

曾若涵 (2014) 「小川尚義〈日臺大辭典緒言〉所引文献之相關問題探析」『台湾學誌』9、pp.47-81、台北：国立台湾師範大学台湾語文学系

中澤信幸 (2019) 「「俗音」考」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』16、pp.59-70 (右 pp.1-12)、山形：山形大学大学院社会文化システム研究科

中澤信幸 (2020) 「「日台大辭典緒言」について」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』17、pp.69-80、山形：山形大学大学院社会文化システム研究科

中澤信幸 (2023) 「關於明治時期的東亞漢字音對比研究的檢査和證實」、陳麗君主編『多聲道的台灣共同體 跨語域交織的主體性和創造性』、pp.3-25、台南：成大出版社

李思敬 (1987) 『音韻のはなし —中国音韻学の基本知識—』(慶谷寿信・佐藤進編訳)、東京：光生館

付記 本研究は令和3年度～令和5年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金、基盤研究(C)（一般）、研究課題名：明治期における東アジア漢字音対照研究の検証と日韓台漢字音変遷の比較、課題番号：21K00520、研究代表者：中澤信幸、研究分担者：石山裕慈、岩城裕之、加藤大鶴）による研究成果の一部である。

「略字・俗字」の使用意識に関する経年調査

たかだ ともかず やりみず かねたか
高田 智和 鎌水 兼貴 (国立国語研究所)

1. 目的と背景

「𠂔𠂔𠂔」などのいわゆる「略字・俗字」は、学校教育では教えられなかったり、漢和辞典に載っていないかったりする文字であるが、手書きのメモや街路の看板・張り紙などで使用されることがあり、日常生活で目にする文字である[1][2]。規範的には「誤字」とされるためか、文字・表記研究で扱われることは稀である。しかし、生活の中の文字と位置づけられる「略字・俗字」を手がかりに、文字使用の実態（使用範囲、使用層、使用場面）、使用意識、伝承の経路の解明することは、現代の文字生活の全体像を描くことに寄与するものであろう。

発表者は、2007年に「略字・俗字」を対象とした意識調査（Web調査）を行い、世代が下がるにしたがい接触率・理解率・使用率も下がることから、「見かけ上の時間（apparent time）」[3]によって「略字・俗字」は衰退傾向にあるとの結論を得た[4]。また、「略字・俗字」が使用範囲を狭めていると指摘した[5]。この調査以降、スマートメディアの普及など文字生活には変化があった。国語に関する世論調査では、平成16年度と平成24年度との間で、はがきや手紙などの本文で11ポイント、報告書やレポートなどの文章で16ポイント、それぞれ手書きをする割合が減少している[6][7]。その傾向は続いているものと思われ、「略字・俗字」の衰退がさらに進んでいるものと予想される。そこで、2022年に再び意識調査を行った。本発表は、2007年と2022年に実施した「略字・俗字」の使用に関する意識調査（経年調査）について報告するものである。

2. 調査の概要

2007年調査はヤフー・バリュー・インサイト社のインターネット・リサーチを利用した。同社に登録しているパネルに対して、調査依頼のメールをランダムに配信し、調査に応じたパネルが調査用のWebページにアクセスして回答する方式である。調査期間は2007年8月28日から30日までである。大阪府・京都府・兵庫県・奈良県在住の男女各世代（20代・30代・40代・50代）50名ずつの計400名から回答を得た。

2007年調査の調査対象文字は以下の10文字である（通行の字体を添えて示す）。いずれも、中型規模以下の漢和辞典に採録されていないが、住基ネットでは比較的使用件数の高い文字である。

傘（傘） 卓（点） 𠂔（職） 𠂔（第） 𠂔（権・權） 𠂔（協） 𠂔（器）
𠂔（職） 𠂔（曜） 𠂔（関・關）

2007年調査の質問項目は次のとおりである。調査対象文字の一々に対して回答を求めた。

【Q1】この文字を見たことがありますか。それぞれの文字について、お答えください。〔選択回答〕見たことがある／見たことがない

【Q2】（Q1で「見たことがある」を選んだ人に対して）どこで見ましたか。それぞれについてご記入ください。〔自由回答〕

【Q3】この文字の読み方や使い方を知っていますか。それぞれの文字について、お答えくだ

さい。〔選択回答〕知っている／知らない

【Q4】(Q3で「知っている」を選んだ人に対して)読み方や使い方を具体的に教えてください。それぞれの文字について、ご記入ください。〔自由回答〕

【Q5】この文字をご自身で書いたことがありますか。

〔選択回答〕書いたことがある／書いたことがない

【Q6】(Q5で「書いたことがある」を選んだ人に対して)どんな時に書きましたか。それぞれの文字について、あてはまるものを、選択肢から選んでください(複数回答可)。〔選択回答+自由回答〕

1.急いでいる時に使う／2.めんどうな時に使う／3.メモをとる時に使う／4.ノートをとる時に使う／5.親しい友人に手紙を書く時に使う／6.先生に手紙を書く時に使う／7.申請書などの書類を書く時に使う／8.いつでも使う／9.その他(自由記述)

【Q1】と【Q2】は、調査対象文字が回答者にとって「接触文字」であるか否か、【Q3】と【Q4】は、調査対象文字が回答者にとって「理解文字」であるか否か、【Q5】と【Q6】は、調査対象文字が回答者にとって「使用文字」であるか否かを確認する質問である。外来語定着度調査に倣って設計した[8]。また、上記の質問において、【Q1】で「見たことがない」とする回答者に対して、続く【Q3】【Q5】を回答してもらうことにした。「見る」という行為に、自分自身が書いた文字を含めない回答者がいる可能性や、読み方や使い方を理解していなくても、とりあえず写して「書く」といった行動も想定されるからである。

2022年調査はアイブリッジ社のリサーチプラスを利用した。2007年調査と同様、同社のパネルから回答者を募り、調査用のWebページより回答する方式である。調査用ページは2007年調査に似せて作成した。調査期間は2022年10月14日から18日までである。大阪府・京都府・兵庫県・奈良県在住の男女各世代(15歳から74歳までの5歳刻み)25名ずつの計600名から回答を得た。

2022年調査では、2007年調査の10文字に「卒(卒)」「駅(駅)」を加えて、調査対象文字を12文字とした。また、単字に関する質問項目は2007年調査と同じであるが、読み書きに関する以下の言語生活項目を加えた。

【Q7】あなたは昨日、次のようなものを読みましたか。あてはまるものを、選択肢から選んでください。(複数回答可)〔選択回答+自由回答〕

1.新聞・雑誌・書籍／2.手紙・はがき／3.Webの記事／4.Eメール・SNS／5.その他(具体的にお答えください)／6.読んでいない

【Q8】あなたは昨日、次のようなものに書かれた手書きの文字を見ましたか。あてはまるものを、選択肢から選んでください。(複数回答可)〔選択回答+自由回答〕

1.手紙・はがき／2.メモ・ノート／3.掲示・張り紙／4.板書／5.その他(具体的にお答えください)／6.手書きの文字は見えていない

【Q9】あなたは昨日、次のようなものを書きましたか。あてはまるものを、選択肢から選んでください。(複数回答可)〔選択回答+自由回答〕

1.日記／2.手紙・はがき／3.メモ・ノート／4.署名・宛名／5.職場や学校の文書／6.その他(具体的にお答えください)／7.書いていない

【Q10】あなたは昨日、次のような筆記用具・道具を使用しましたか。あてはまるものを、選択肢から選んでください。(複数回答可)〔選択回答+自由回答〕

1.鉛筆／2.万年筆／3.筆／4.シャープペンシル／5.ボールペン／6.サインペン／7.パソコン／8.スマートフォン／9.タブレット／10.タッチペン／11.その他(具体的にお答えください)／12.筆記用具・道具は使っていない

3. 調査結果と考察

3-1. 接触率・理解率・使用率

選択回答の全体集計を表1に示す。表中の各字について、左側が2007年調査、右側が2022年調査である。

表1：選択回答の全体集計（%）

	全		卓		転		才		杈		悛		器		恥		旺		崗		卒		駅	
	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22
見たことがある	44	10	85	22	66	24	83	30	38	11	33	9	74	24	44	14	76	31	93	37	/	23	/	36
読み方や使い方を 知っている	24	8	73	25	38	17	71	22	15	6	32	14	72	27	7	9	31	15	87	32	/	14	/	32
書いたことがある	8	3	35	10	19	8	56	16	8	3	3	2	32	11	4	3	12	6	74	25	/	8	/	13

2007年調査と2022年調査とを比較すると、どの文字でも接触率、理解率、使用率ともに激減している。15年間で「略字・俗字」の使用が大きく衰退したことを示している。この背景には、「略字・俗字」の社会的な生産量・流通量の低下が想定される。生産・流通が減少したため接触機会が減り、そのため読み方や使い方を習得する機会も減り、あるいは読み方や使い方を忘れてしまい、やがて書くこともなくなっていくのであろう。

3-2. 世代差

次に、選択回答の世代別集計を表2に示す。表中の数字は百分率である。表2をみると、どの字も2007年調査から2022年調査にかけて、接触率・理解率・使用率が大きく減少していることがわかる。今回新しく調査対象になった、1988-2007年生まれの世代では、すべて低い割合となっている。

2007年調査では、世代差の解釈はあくまで「見かけ上の時間（apparent time）」によるものであったが、今回2022年調査は、質問手法と対象地域が同一の「経年調査」となっており、「実時間（real time）」による比較が可能となった。

2022年調査では、接触率・理解率・使用率ともに、上の世代で高く、下の世代で低くなっている。しかし2007年調査と比較すると、同一世代の接触率・理解率・使用率は、どれも大幅に低下している。これは2007年からの15年間で「略字・俗字」の社会的な流通が著しく減少したことを示唆している。

2007年調査ではどの世代でも接触率が9割を超えていた「崗」であっても、2022年調査では全世代平均で接触率が4割を下回っている。

最も使用率の高い「崗」について、接触率・理解率・使用率を世代ごとにプロットしたグラフを図1に示す。各調査の各世代を線でつないでいるが、各調査の同世代の値を比較することにより、同一世代の実時間の変化も見るができる。

「崗」は2007年調査ではどの世代も接触率・理解率・使用率のいずれもが高く、世代差の少ない文字であった。しかし2022年調査では世代差が生じている。どの世代でも実時間での割合の減少がみられるが、世代によって衰退の程度の差に違いがみられる。

表 2：選択回答の世代別集計

見たことがある	全		卓		転		才		杈		椀		器		恥		旺		肉		卒		駅	
調査年	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22
1998-2007年生	3	3	5	17	8	2	2	8	17	12	5	19												
1988-1997年生	5	8	11	23	7	5	8	9	21	17	7	17												
1978-1987年生	30	7	77	16	42	6	79	26	27	6	14	4	56	9	29	7	72	19	91	30	6	27		
1968-1977年生	32	4	83	21	57	22	85	24	34	9	22	3	64	21	48	18	78	30	91	39	16	29		
1958-1967年生	51	15	90	40	81	44	85	35	40	14	42	16	83	47	51	25	77	46	92	56	45	56		
1948-1957年生	63	28	90	41	84	54	84	53	52	23	53	21	92	59	49	18	80	52	97	69	57	69		

読み方や使い方を 知っている	全		卓		転		才		杈		椀		器		恥		旺		肉		卒		駅	
調査年	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22
1998-2007年生	1	2	1	3	3	3	4	0	3	8	2	6												
1988-1997年生	0	5	4	10	2	2	10	7	7	16	3	16												
1978-1987年生	10	1	55	11	21	3	63	13	8	0	16	4	51	12	8	3	39	4	80	19	1	19		
1968-1977年生	21	4	69	21	35	10	68	18	18	2	23	10	59	28	22	10	48	16	87	30	8	30		
1958-1967年生	28	12	80	48	57	35	81	35	16	8	37	24	86	43	22	11	55	22	91	50	23	52		
1948-1957年生	41	27	88	61	74	51	83	51	36	21	53	41	92	67	29	25	49	38	91	68	44	70		

書いたことがある	全		卓		転		才		杈		椀		器		恥		旺		肉		卒		駅	
調査年	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22	07	22
1998-2007年生	0	1	0	2	1	1	1	2	1	1	1	2	2	8	1	2								
1988-1997年生	0	1	2	5	0	0	2	0	0	7	0	3												
1978-1987年生	2	0	18	6	7	1	42	4	3	0	1	0	20	0	4	0	11	1	67	13	1	6		
1968-1977年生	7	2	29	4	11	5	48	11	7	1	2	0	17	11	5	4	17	6	72	26	4	13		
1958-1967年生	12	4	52	19	26	11	68	29	9	4	4	3	32	15	6	3	20	11	74	40	12	16		
1948-1957年生	11	11	52	28	43	29	69	43	13	11	5	8	59	34	9	6	23	18	84	58	30	35		

3-3. 使用場面

自身で書いたことがあるとした回答者に対しては、その文字の使用場面について尋ねている。2007年時点でも、多くの文字で当時の若年層での使用率が低く、使用場面について分析することが困難であった。

「肉」の場合、2007年調査では使用場面に世代差がみとめられた[5]。若年層は「急いでいる時（以下「急いで）」」「めんどろな時（以下「面倒）」」「メモをとる時（以下「メモ）」」「ノートをとる時（以下「ノート）」など一時的、非公式の使用であるの対して、高年層は「いつでも使う（以下「常に）」」の回答が多く、「略字・俗字」が決して特殊なものではないという認識があった。

2022年調査では、ほとんどの文字で使用者が著しく減少しており、使用場面差の比較が難しくなった。使用率の高い「肉」については使用場面差の比較が可能であるため、図2に2007年調査と2022年調査を比較したグラフを示す。

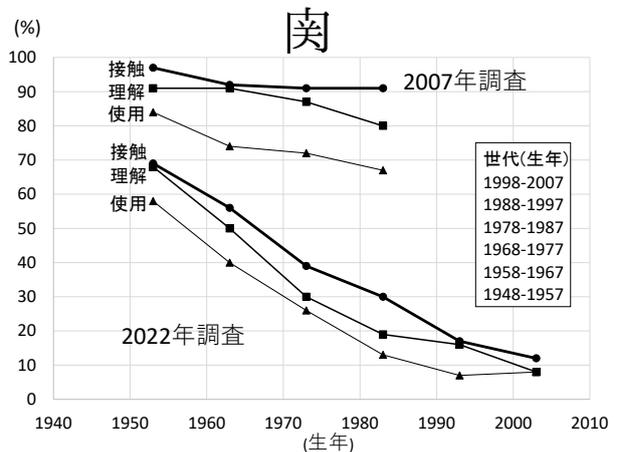
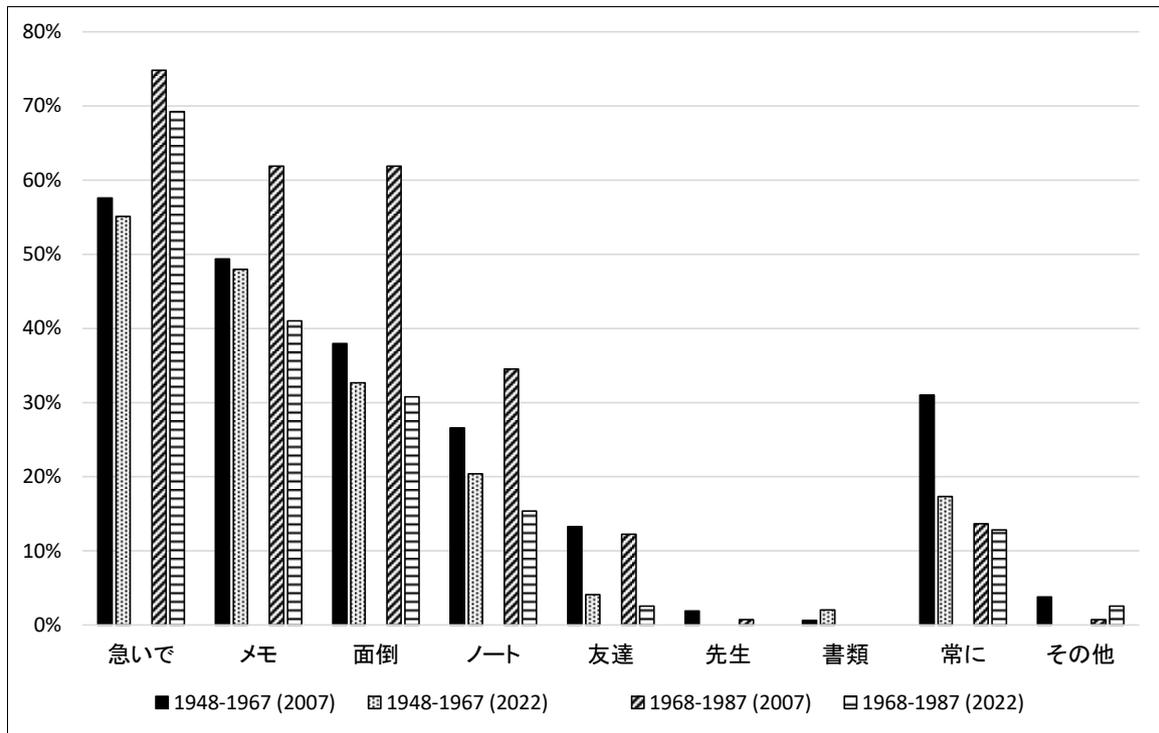


図1：「肉」の経年比較

図2：使用場面の世代差の経年比較（「𠄎」）



2007年調査と2022年調査で大きく変化した場面をみると、1948-67年生まれでは「常に」が減少し、1968-87生まれでは「メモ」「面倒」「ノート」が減少した。その結果、2世代の差がほとんどなくなってしまった。

2022年調査において、1968-87年生まれでは「急いで」の割合だけがあまり変化しなかった。「急いで」は、個人的使用場面の中では、筆記時間の短縮という問題であり、社会における「𠄎」の流通が減った結果、「略字・俗字」の本質的部分が残ったといえるだろう。

一方、1948-67年生まれでは、「常に」が減少したことによって、2007年調査での1968-87年生まれのように、「急いで」「メモ」「面倒」「ノート」場面が増加することが予想された。しかし1968-87年生まれと同程度の割合にとどまっている。割合が増加しないことは、15年間で使用率全体の低下も関係していると思われる。

3-4. 言語生活項目

2022年度調査では言語生活項目も調査している。本研究では言語生活に関する4質問において、「手書きの文字は見えない」「書いていない」「筆記用具・道具は使っていない」「読んでない」という項目の結果を示す。

表3は言語生活4質問における「していない」という項目の回答者について、「𠄎」の使用率を示したものである。20年ごとの3世代区分で示している。4質問とも、各世代の使用率を下回っていることが分かる。参考として日記を書くとき回答した人の結果を示したが、逆になんらかの手書きや活字の文字を読んだり、筆記用具を用いて書いたりする行動をしている人は、「𠄎」の使用率が高くなることを示している。「略字・俗字」の使用が日常の文字使用と関係していることが

わかる。

表3：言語生活項目別にみた「𪛗」の使用率

𪛗	全世代	1998-2007 年生	1978-1997 年生	1948-1967 年生
全体	25	8	20	49
読んでいない	5	3	4	21
手書きの文字は見えていない	20	2	13	43
書いていない	15	2	10	38
筆記用具・道具は使っていない	7	0	5	35
(参考) 日記を書く	46	17	53	76

4. おわりに

本研究では、2007年の「略字・俗字」の使用に関する意識調査について、2022年に実施した経年調査の結果とあわせて分析した。接触率・認知率・使用率の結果から、「略字・俗字」の流通が著しく減少しており、「略字・俗字」の存在の認識自体が困難になっていることがわかった。また「𪛗」について、使用場面の分析から、「略字・俗字」の使用場面が2007年よりもさらに狭くなっていることがわかった。言語生活項目の分析からは、日常生活における文字使用が「略字・俗字」の使用と関係することが明らかになった。

Web調査という手法や、質問方法の問題などもあり、改良すべき点もあると思われる。しかし2022年調査の1978年以降生まれの世代では、「略字・俗字」の接触がほとんどなくなっており、今後の経年調査は難しいことが予想される。

付記

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト（基幹型）「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」の成果の一部である。

参考文献

- [1] 読売新聞社会部編（1975）『日本語の現場第一集』読売新聞社
- [2] 笹原宏之・横山詔一・エリク=ロング（2003）『現代日本の異体字—漢字環境学序説—』三省堂
- [3] Labov, William. (1994) Principles of linguistic change: vol. 1: Internal factors. Oxford: Blackwell
- [4] 高田智和・鎌水兼貴（2008）「『略字・俗字』の使用に関する意識調査」『日本言語学会第136回大会予稿集』、pp402-407、学習院大学
- [5] 鎌水兼貴（2014）「使用場面からみた『略字・俗字』の衰退と個人文字化」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』、pp. 148-164、彩流社
- [6] 文化庁文化庁国語課（2005）『平成16年度国語に関する世論調査』
- [7] 文化庁文化庁国語課（2013）『平成24年度国語に関する世論調査』
- [8] 外来語定着度調査 https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_yoron/

作文に見られる逆接の接続表現の誤用

一中・韓国人日本語学習者を比較して一

朱雅蘭^{しゅがらん} (名古屋大学大学院生)

1. はじめに

接続表現とは、「主に文頭に立ち、先行文脈を踏まえて、後続文脈に来る内容を予告し、読み手の理解を助ける表現の総称」(石黒等, 2009)のことを指す。適切な接続表現を用いることで、文章全体の流れが読みやすく、後文を予測しやすと言われる。しかし、接続詞や接続助詞などの不適切な多用と欠落が日本語学習者の作文で度々見られる。その中でも、逆接型の接続表現が習得しにくい文法項目の一つである。

本稿では、作文コーパスを用いて、中国人日本語学習者(CN)と韓国人日本語学習者(KN)の逆接型の接続表現の使用実態を学習レベル(初級、中級、上級)によって分け、比較分析する。更に学習者の母語訳と対照しながら、接続表現の誤用を分析し、その要因について考察したい。

2. 先行研究

接続表現の使用状況に関する先行研究は主に接続詞に関する研究が多い。浅井(2003)は、日本語母語話者(JP)30名とCN(上級レベル)32名を対象に、800字程度の意見文「ゴミ問題の現状と解決法」を作成してもらい、文頭に現れた接続詞の使用頻度と機能類型を分析し、それぞれの接続詞の使用の相違点を考察した。その結果、JPはある事柄を拡充して展開していく方法を接続詞を用いて示す傾向(「添加」>「逆接」>「同列」)があるのに対し、CNは文章の論理的関係を接続詞で明示的に示すこと(「添加」>「逆接」>「順接」)が多いということが分かった。

一方、コーパスを用いた研究として、金(2017)が挙げられる。金(2017)は「YNU書き言葉コーパス」を用いて、JP、CN、KNの接続詞の使用状況、特にKNの逆接に焦点を当て、比較し分析を行った。その結果、JPとCNは「添加」、KNは「逆接」の接続詞の使用が最も多く、前者は「意見」から「理由」、後者は「意見」、「しかし」を用いた反論または条件、「理由」の展開となっているものが多いということがわかった。

以上の研究は、母語別による接続詞の使用状況に焦点を当てていることが多いが、接続助詞を含んだ分析が少ない。本稿では接続詞より大きい単位とする接続表現を考察し、それぞれの学習段階での使用状況、特に誤用を中心に考察したい。

3. 研究方法

本研究で用いたデータは、「日本語学習者作文コーパス(JC Corpus)」に収録された中国人日本語学習者(CN)、韓国人日本語学習者(KN)の作文「外国語が上手になる方法について」(192本)である。本コーパスにおける学習者と作文の内訳として、初級31名、中級100名、上級61名となり、それぞれの作文が300~800字程度で、手書きによって作成していた。

本研究の分析の手順については、董(2020)を参照し、以下の通りである。

①CNとKNの作文で使われている逆接の接続表現(接続詞、接続助詞)を初級、中級、上級によって形態別にまとめる。

②①から逆接の接続表現の形態別使用率と誤用率を算出し、母語別に記述する。

③②の結果をもって、学習者の母語訳と対照しながら、その要因を母語の影響から考察する。

4. 逆接型の接続表現の使用傾向

前述した研究方法に基づき、CN と KN の作文における逆接型の接続表現（接続詞、接続助詞）の使用頻度を分析した結果は、表 2、表 3 の通りである。

表 2 CN の作文における逆接型の接続表現の使用頻度

段階	接続詞				接続助詞					
	でも	しかし	だが	合計	けど	けれども	が	ても	のに	合計
初級	8	12	1	21	1	0	5	0	0	6
	29.6%	44.4%	3.7%	77.7%	3.7%	0.0%	18.6%	0.0%	0.0%	22.3%
中級	10	25	5	40	7	3	30	25	3	68
	9.3%	23.1%	4.7%	37.1%	6.5%	2.8%	27.7%	23.1%	2.8%	62.9%
上級	10	12	2	24	8	2	9	13	0	32
	17.9%	21.4%	3.6%	42.9%	14.3%	3.6%	16.1%	23.1%	0.0%	57.1%

表 3 KN の作文における逆接型の接続表現の使用頻度

段階	接続詞				接続助詞					
	でも	しかし	だが	合計	けど	けれども	が	ても	のに	合計
初級	7	0	0	7	4	2	12	1	0	19
	26.9%	0.0%	0.0%	26.9%	15.4%	7.7%	46.2%	3.8%	0.0%	73.1%
中級	20	6	1	27	22	3	26	22	5	78
	19.0%	5.7%	1.0%	25.7%	21.0%	2.9%	24.5%	21.0%	4.9%	74.3%
上級	12	18	2	32	9	2	32	17	2	62
	12.8%	19.1%	1.5%	34.0%	9.6%	2.1%	34.0%	18.1%	2.2%	66.0%

4.1 初級における逆接型の接続表現の使用傾向

初級の場合、CN の接続詞の使用率が 77.7% で、接続助詞の使用率が 22.3% である。その中でも接続詞「しかし」の使用率が最も高く、44.4% で半数近くを占めている。一方、KN の接続詞の使用率が 26.9% で、接続助詞の使用率が 73.1% である。その中でも接続助詞「が」が最も多用され、使用率が 46.2% に達している。それに対し、接続詞の場合、「でも」のみが使用されていた。

以下の (1) が CN、(2) が KN の使用例である。

(1) 「CG035」(初級 2 年以上 5 年未満)

外国語が嫌いなら、外国語を聞けば注意しなくなる。しかし、外国語が好きなら、平素でよく注意し、復述し、だんだんうまくなる。

(2) 「KG087」(初級 2 年以上 5 年未満)

そして兵役が終わって自ら勉強しようか思いましたががやっぱり一人では文法とかはむりだと思って学院に通うことを決めました。

両者を比較すると、初級段階において、CN も KN も接続詞と接続助詞両方の産出が見られたが、CN は接続詞、KN は接続助詞の産出が高いことが分かった。このような使用傾向が見られた要因として、学習順序と母語による影響だと考えられる。接続詞「しかし」を使用した CN の学習歴が全員、2 年以上 5 年未満である。日本語力が初級レベルでも、シラバスでは既に「でも」と「しかし」両方を導入しているため、作文に用いる逆接の接続詞の場合、話し言葉の「でも」より書き言葉の「しかし」を使いやすいからだと考えられる。更に、中国語の文法体系だと、構成要素の接続の仕方の方が複文で重要視されている(中川, 1995) であるため、接続助詞より接続詞を選択しやすいと考えられる。それに対し、KN の場合、

学習歴が2年未満と2年以上5年未満の学習者もいるが、韓国語の場合、日本語の接続助詞にあたる連結語尾で複文を繋いでいることが多いため、接続助詞のほうが多く使用されていると考えられる。

4.2 中級における逆接型の接続表現の使用傾向

中級の場合、CNの接続詞の使用率が37.1%で、接続助詞の使用率が62.9%である。その中でも接続助詞の「が」(27.7%)、接続助詞「ても」(23.1%)、接続詞の「しかし」(23.1%)が多く使用されていた。一方、KNの接続詞の使用率が25.7%で、接続助詞の使用率が74.3%である。その中でも接続助詞「が」(24.5%)、「けど」(21.0%)、「ても」(21.0%)が最も多用されている。

以下の(3)(4)がCN、(5)(6)がKNの使用例である。

(3) 「CG063」(中級 2年以上5年未満)

中国人のわたしにとってたいへん簡単なことかもしれないが、会話の方面から見ると、あまり難しくと思う。

(4) 「CG040」(中級 2年以上5年未満)

趣味がなければ、どんなに外国語勉強に工夫しても、うまくにはいけない。

(5) 「KG022」(中級 2年以上5年未満)

たとえ文法や語彙の部分では実力が伸びるかもしれないが、それが限界かもしれない。外国語は外国人との疎通のために習うものではないか。

(6) 「KG002」(中級 2年未満)

外国に行っているいろいろな外国人に遭って話したらうまくなると思うけどやっぱりお金がたくさんかかるからちょっと無理だと思う。

両者を比較すると、CNは接続詞の使用が低下するかわりに、接続助詞の使用が上昇し、特に、接続助詞「が」の使用が向上していた。恐らく日本語力が向上するとともに、複文を接続助詞で結びつくことを意識するようになったと考えられる。一方、KNは初級と同じように接続助詞「が」の使用率が最も高いが、「けど」や「ても」のような話し言葉的な表現も習得している傾向が見られ、接続助詞の使用の多様化が見られた。

4.3 上級における逆接型の接続表現の使用傾向

更に上級の場合、CNの接続詞の使用率が42.9%で、接続助詞の使用率が57.1%である。接続詞と接続助詞の使用がほぼ同じ頻度である。中では接続詞の「しかし」(21.4%)、接続助詞の「ても」(23.1%)の使用が多く見られた。一方、KNの接続詞の使用率が34.0%で、接続助詞の使用率が66.0%である。中では、接続詞「しかし」(19.1%)の使用率が上昇し、接続助詞の場合は「が」(34.0%)が多用されていた。

以下の(7)(8)がCN、(9)と(10)がKNの使用例である。

(7) 「CG013」(上級 2年以上5年未満)

勉強のやる意気満々である。しかし、英語を深く勉強した後、外国語がそんな簡単に掌握できないと思う。

(8) 「CG038」(上級 2年以上5年未満)

相手の話を聞こえると、うまく交流できなくても困らない。

(9) 「KG026」(上級 2年以上5年未満)

役で日本でも‘韓流’のために韓国に対して関心が高くなって韓国語を習いたがる人が多くなっている。しかし、こんなに文化的要素のみを接しては外国語の学習能力が向上するにはある程度限界がある。

(10) 「KG011」(上級 2年以上5年未満)

しかし、聞き取りは出来ましたが、話しが出来なかったんです。

全体の傾向からみると、CNもKNも、書き言葉にふさわしい接続表現の使用が向上し、学習者の文体意識が強くなったと考えられるが、特に「でも」と「しかし」の文体選択が難しいようだ。ただ、KNの場合、接続詞の「しかし」と共起し、後文に接続助詞「が」を使用するが多い。

以上のように、CNの初級では接続詞の多用、特に「しかし」の使用が多く見られた。それに対し、KNはどの段階でも接続助詞が多用されており、特に「が」の多用が見られた。学習レベルの向上とともに、話し言葉的な表現が多く使用される一方、書き言葉にふさわしい接続表現の選択を習得しつつある傾向が見られた。

5. 逆接型の接続表現の誤用

CNとKNの作文における逆接型の接続表現（接続詞、接続助詞）の誤用率を分析した結果は表4、表5の通りである。

表4 CNの作文における逆接型の接続表現の誤用率

段階	接続詞				接続助詞					
	でも	しかし	だが	合計	けど	けれども	が	ても	のに	合計
初級	1	2	1	5	1	0	0	0	0	1
	4.7%	9.6%	4.7%	19.0%	16.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.6%
中級	6	2	1	9	0	0	6	4	0	10
	15.0%	5.0%	2.5%	22.5%	0.0%	0.0%	8.8%	5.9%	0.0%	14.7%
上級	5	0	0	5	0	0	1	1	0	2
	20.8%	0.0%	0.0%	20.8%	0.0%	0.0%	3.1%	3.1%	0.0%	6.2%

表5 KNの作文における逆接型の接続表現の誤用率

段階	接続詞				接続助詞					
	でも	しかし	だが	合計	けど	けれども	が	ても	のに	合計
初級	2	0	0	2	2	1	1	0	0	4
	28.6%	0.0%	0.0%	28.6%	10.5%	5.3%	5.3%	0.0%	0.0%	21.1%
中級	1	0	1	2	0	0	3	1	0	4
	3.7%	0.0%	3.7%	7.4%	0.0%	0.0%	3.8%	1.3%	0.0%	5.1%
上級	1	1	2	4	0	1	1	0	0	2
	3.1%	3.1%	6.3%	12.5%	0.0%	1.6%	1.6%	0.0%	0.0%	3.2%

5.1 初級における逆接型の接続表現の誤用

初級でCNに見られた誤用の多くは、逆接表現で文の前後の関係を示すべきところに、使用していないことである。(11)がCNの誤用の一例である。

(11) 「CG060」(初級 2年以上5年未満)

単語と文法は外国語の骨だ。(しかし)文法を覚ってばかり、自分の感想を発表できない。

(文法和単語是外语的核心。光背语法，不能恰如其分地表达自己的想法。)

ここでは、学習者が前文と後文の意味関係から接続詞を用いなくても、文脈がわかると考えられ、母語訳でも日本語でも逆接の接続詞で逆接関係を明示的に示していなかった。恐らく中国語では接続詞を用いなくても、文中の他の要素によって互いの関係を表すことができるため、母語による影響が大きいと考えられる。

一方、KNに見られた誤用の多くは、「その他の接続詞との混用」である。(12)が学習者の誤用例で、順接関係を逆接関係で捉えた一例である。

(12) 「KG001」 (初級 2年以上5年未満)

私ができる外国語は、日本語と英語があった。でもちょっとだけでも自分がある外国語は日本語と言うことができる。(⇒そのうち)

(내가 할 수 있는 외국어는, 일본어와 영어가 있다. 그래도 조금이라도 자신이 있는 외국어는 일본어라고 말할 수 있다.)

学習者の母語訳からみると、前節では自分のできる外国語には英語と日本語があると述べられ、後節には日本語のほうが上手であると書かれていた。その前後の意味関係を「그래도 (それでも)」で表している。「그래도」は前節の内容は認めるが、後続の文が必要である場合に用いられ、一般的には日本語の「それでも」と対応しているが、この文では順接の接続詞「そのうち」のほうが適切である。この場合、接続詞の選択には母語による影響が大きい。

5.2 中級における逆接型の接続表現の誤用

中級でCNとKNが観察された誤用の多くは、「その他の接続詞との混用」である。(13) (14)が学習者の誤用例である。

(13) 「CG025」 (中級 2年以上5年未満)

交流できるように会話と聴力を高めることは一番必要なことである。が、外国語は勤勉しか勉強しないと思う。(⇒結局)

(因此为了交流而提高听力和会话十分关键。我觉得外语是只有通过勤勉才能学好的。)

(14) 「KG025」 (中級 2年以上5年未満)

しいて外国に行かなくて、外国で生活するようにできる。(⇒行かなくても)

(굳이 외국에 나가지 않아도 외국에서 생활하는 것처럼 가능하다.)

(13)では初級のCNの誤用例と同じく、帰結関係を表す語のかわりに逆接の「が」を使用した。学習者は先行文には、日本語で話すとき、スピーキングとヒヤリングが大事であり、後続文には外国語を勉強するときに大事なものは勤勉であると書かれ、逆接の接続詞「が」で文脈を示していた。しかし、母語訳からみると、文と文の間に明示的な言語的手がかりがないが、文脈から推測すると、両者の関係が逆接ではなく帰結関係であるため、帰結と逆接の接続詞の混用が見られた。

一方、(14)では並列と逆接の接続助詞の混用が見られた。KNの母語訳では「지 않아도 (しなくても)」が用いられ、逆接関係を表していた。しかし、日本語の文では「て」を用いることで、「外国にいない」という事実と並列、またはその理由のもとで、自身が「(まるで)外国で生活しているような感じがする」という並列関係を表していた。恐らく「지」には「並列」と「理由提示」という二面性があるため、逆接の接続表現の選択に影響を及ぼしたと思われる。

5.3 上級における逆接型の接続表現の誤用

上級でCNに見られた誤用の多くは、「接続助詞と接続詞の混用」である。一方、KNに見られた誤用の多くは、「その他の接続詞との混用」である。(15) (16)が学習者の誤用例である。

(15) 「CG058」 (上級、2年未満)

わたしは日本語の勉強のキーワードは「日々の努力の積み重ね」だと私思う。でも、きっと日本語はうまくなるはずだ。(⇒努力しても)

(我学习日语的关键词是“日复一日学习积累，那么就能学到很多”我是这么认为的。这样子日复一日练习应该能到最后学好这门外国语。)

(16) 「KG062」 (上級、2年未満)

その人たちも一つのテキスト中で2～3個くらいのときだと限っている。しかし推定よりよいほうほうは暗記だ。(⇒だから)

上級レベルに達すると、様々な接続詞と接続助詞を身につけるとともに、混用が見られやすいと考えられる。特に接続詞の「でも」「しかし」と接続助詞の「ても」が中国語訳が「但」、「但是」に対応し、文法面では接続詞と接続助詞両方に対応できる。一方、韓国語訳の「그래도(でも)」に対応し、その影響が一部の誤用例では見られたが、典型例に母語訳が付いていないため、母語による影響を分析できなかった。

6. おわりに

本稿は、中国人日本語学習者(CN)と韓国人日本語学習者(KN)の作文における逆接型の接続表現の習得状況を学習レベル別に比較し、使用頻度と誤用を中心に考察を試みた。

まず、逆接型の接続表現の使用頻度について、全体の傾向からみると、CNの初級では接続詞、特に「しかし」が多く使用されていた。それに対し、KNはどの段階でも接続助詞、特に「が」が多用されている。更に学習レベルの向上とともに、話し言葉的な表現が多く使用され、書き言葉という文体にふさわしい接続表現の選択を習得しつつある傾向が見られた。

次に、逆接型の接続表現の誤用について、CNに見られた誤用の多くは逆接表現で文の前後の関係を示すべきところに使用していないことである。それに対し、KNは「その他の接続詞との混用」が多く見られた。母語の影響から分析すると、CNの場合、母語では明示的に先行文と後続文の関係を接続表現で示していないため、実際に接続表現の欠落が多く見られた。一方、KNの場合、母語と対応する表現がある場合、例えば「それでも」と対応している「그래도」など、それによって影響される可能性が大きいと考えられる。

しかし、今回の調査では、学習レベル別に一定の習得状況がわかるようになったが、学習者の誤用例が少なく、母語による影響を一般化することが難しい。今後は学習歴、更に学習環境の差異から分析し、接続表現の選択への影響を考察していきたいと考えている。

参考文献

- 浅井美恵子(2003)「論説的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較—」『言葉と文化』4,pp.87-97
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋(2009)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12,pp.73-85
- 石黒圭(1999)「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198,pp.129-114
- 金蘭美(2017)「YNU書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の使用について—韓国語母語話者の「逆接」関係の接続詞に注目して—」『横浜国大言語研究』35,pp.79-93
- 寺村・佐久間・杉戸・半澤編(1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- 董芸(2020)「中国人日本語学習者の作文における逆接型の接続表現の習得」『中国語話者のための日本語教育研究』11,pp.128-141 日中言語文化出版社
- 中川千枝子(1995)「漢語並列構造における接続詞と副詞の接続機能」『中国語学』242,pp.79-87
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6 複文』くろしお出版

使用コーパス

日本語学習者作文コーパス (<http://sakubun.jpn.org>)

ワークショップ0

コミュニケーションとしての日本語の研究の広がり

かばや ひろし
蒲谷 宏 (早稲田大学)

とくまはるみ
徳間晴美 (明治学院大学)

くまがいともこ
熊谷智子 (東京女子大学)

りてい
司会 李 婷 (日本大学)

趣旨

日本語を、言語の構造や体系としてだけではなく、具体的な社会生活におけるコミュニケーションとして捉え直すことの重要性を改めて提示したい。こうした考え方に基づく研究は、語用論、社会言語学などにおいても進められてきているが、「ことば」の研究を、人と人との「人間関係」や「場」の認識に基づくコミュニケーション行為の研究として捉えることによって、日本語研究そのものの射程の広がりを考える機会となるだろう。

今回のワークショップでは、具体的なテーマとして、「待遇コミュニケーションという捉え方—「イタダク系表現」の重要性」(蒲谷宏)、「日本語学習者にとっての敬語コミュニケーション」(徳間晴美)、「日本人大学生にとっての敬語コミュニケーション」(熊谷智子)の三つを取り上げ、「敬語」や「敬語表現」をコミュニケーションとして捉え直すことで、日本語の研究や教育への広がりを検討する。

待遇コミュニケーションという捉え方

—「イタダク系表現」の重要性—

かばや ひろし
蒲谷 宏 (早稲田大学)

0. 待遇コミュニケーションの基盤となる言語観

「待遇コミュニケーション」という捉え方の基盤になる言語観は、「〈言語=行為〉観」である。「〈言語=行為〉観」というのは、言語とは、音声・文字を媒材とした表現行為・理解行為、すなわちコミュニケーション行為そのものである、と規定する言語観である。

1. 待遇コミュニケーション

「待遇コミュニケーション」については、蒲谷(2013:5)において、以下のように規定している。

「待遇コミュニケーション」というのは、従来の「待遇表現」に、「待遇理解」という観点を加えて「コミュニケーション」を捉えようとするものであり、言い換えれば、コミュニケーションを「待遇」という枠組みにより捉えようとするものである。

「待遇」というのは、コミュニケーション主体(表現主体・理解主体)が、そのコミュニケーションにおいて、自己と他者との関係(上下親疎、立場・役割などの関係)—「人間関係」—をどのように認識し、位置づけようとするのか、自己がコミュニケーションを行う経緯(時間的位置)や状況(空間的位置)—「場」—をどのように認識するのか、という観点のことである。

したがって、待遇コミュニケーションとは、コミュニケーション主体が、人間関係と場—それらを総称した「場面」—をどのようなものと認識し、それをどう表現行為、理解行為—それらを総称したコミュニケーション行為—に反映させようとするのか、そして、そのコミュニケーション行為を通じて「場面」をどう変容させていこうとするのかということに重点を置いて、コミュニケーションを捉えたものになるわけである。

待遇コミュニケーションを考えるための枠組みとしては、次のようなものがある。(詳細については、蒲谷2013、蒲谷他2022などを参照)

- ・コミュニケーション主体・・・「表現主体」・「理解主体」の総称
- ・【前提】・・・ 個々のコミュニケーション主体が持つ、コミュニケーションの基盤となる、動態的な「知・情・意の集積」

- ・【場面】・・・「人間関係」と「場」の総称
 - ・意識・・・ 待遇意識・意図など「きもち」
 - ・内容・・・ 題材・内容など「なかみ」
 - ・形式・・・ 媒材(音声・文字)、語、文、文話(文章・談話の総称)など「かたち」
- それぞれは、すべてがコミュニケーション行為として連動しており、図式的に示すと、次のようになる。

【前提】—コミュニケーション主体—【場面】(人間関係+場)—意識—内容—形式
「—」は連動を示すが、それぞれが互いに他のすべてと連動している。

2. 行動展開表現

ここで中心的に扱うのは、「行動展開表現」と名づけた表現群である。行動展開表現を規定すると、次のようになる。(蒲谷2013:222)

「行動展開を意図とする表現行為」というのは、表現主体が自らの感情や意思、認識、何らかの知識、情報などを内容として、それを他者としての相手に理解してもらい、さらに、相手あるいは自分、または相手と自分が、その内容を基に何らかの行動に展開することを意図として、表現する行為のことである。

行動展開表現には、宣言、確認、許可求め、申し出、忠告・助言・勧め、依頼、許可与え、指示・命令、誘いを意図とした表現群がある。二者間における行動展開表現は、「行動」「決定権」「利益・恩恵」という観点により、類型化される。(蒲谷2013、2021:330などを参照)

表1 表現主体から見た行動展開表現の基本的構造

意図	行動	決定権	利益・恩恵	典型的な文末表現
宣言	J	J	J/A	シマス・シテアゲマス
確認	J	J/A	J/A	シマスネ・シテモイデマスネ
許可求め	J	A	J	シテモイデスカ
申し出	J	A	A	シテアゲマシヨウカ・シマシヨウカ
忠告・助言 勧め	A	A	A	シタホウガイデマスヨ・シマセンカ
依頼	A	A	J	シテクレマスカ・シテモラエマスカ
許可与え	A	J	A	シテモイデマスヨ
指示・命令	A	J	J/A	シナサイ・シテクダサイ
誘い	JA	A	JA	シマセンカ

J=自分、A=相手、JA=両者、/=あるいは

行動展開表現における「丁寧さ」の原理については、次のように考える。

「行動」=自分(が動くほうが丁寧)、「決定権」=相手(に渡す・委ねるほうが丁寧)、「利益・恩恵」=自分(が受けて有難いと捉えるほうが丁寧)

このように考えると、許可求めを意図とする表現は、「行動」=自分、「決定権」=相手、「利益・恩恵」=自分という構造を持つものであり、最も丁寧な表現だといえることができる(反対に命令や許可与えの表現は、「丁寧さ」からは遠い表現となる)。「丁寧さ」という観点から行動展開表現を捉えると、「許可求め表現」の重要性が浮かび上がってくる。

3. 行動展開表現における「イタダク系表現」の重要性

「イタダク系表現」というのは、次のようなものである。これらは、待遇コミュニケーションにおける「敬語表現」の形式として重要なものとなる。

イタダク、～テイタダク、オ・ゴ～イタダク、イタダケル、～テイタダケル、オ・ゴ～イタダケル
(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク、(オ・ゴ)～(サ)セテイタダケル

日本語学につながる待遇コミュニケーション研究の一例として、「イタダク系表現」の重要性、特に、ここでは、よく採り上げられる「(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク・イタダケル」について検討していく。

「敬語の指針」(文化庁2007:40)には、次のような解説がある。

【解説1】「(お・ご)……(さ)せていただく」といった敬語の形式は、基本的には、自分が行うことを、ア)相手側又は第三者の許可を受けて行い、イ)そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に使われる。したがって、ア)、イ)の条件をどの程度満たすかによって、「発表させていただく」など、「…(さ)せていただく」を用いた表現には、適切な場合と、余り適切だとは言えない場合とがある。

この解説は、要するに、「(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク・イタダケル」という形式は、1. 自分の動作、2. 許可を受ける、3. 恩恵を受ける、という条件(2、3は、事実だけでなく、そのような認識がある場合)を満たすかどうかによって適否が決まる、ということを述べているわけである。

その上で、【解説2】として、①「コピーを取らせていただけますか。」、②「それでは、発表させていただきます。」、③「本日、休業させていただきます。」、④「私は、新郎と3年間同じクラスで勉強させていただいた者です。」、⑤「私は、〇〇高校を卒業させていただきました。」という表現の適否について記述している(文化庁2007:40-41)。

「(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク・イタダケル」については、すでにいろいろな観点からの研究がなされているが、ここでは、待遇コミュニケーションの観点から検討するとどのようなことが見えてくるのかについて、述べてみたい。

上の例で用いられている動詞(自分の動作)は、①「(コピーを)取る」、②「発表する」、③「休業する」、④「勉強する」、⑤「卒業する」である。これらの動詞は、「オ・ゴ～スル」という、いわゆる謙讓語を作る形式にはできない・しにくいタイプのものである。したがって、謙讓表現にする場合には、「オ・ゴ～スル」に代わる形式として、「イタス」か「～(サ)セテイタダク」を用いるしかない。つまり、「取ラセテイタダク」「発表イタス」「休業イタス」「勉強サセテイタダク」「卒業イタス」などという形式を用いることになるのである。「～(サ)セテイタダク」が多用される一つの理由として、「オ・ゴ～スル」という形式が使えない場合の代替として用いられる、すなわち、謙讓語の体系を補うためということが挙げられる。(蒲谷他1998、椎名他2022など)

ただし、「説明スル」のような語の場合には、「ゴ説明スル」、「説明サセテイタダク」「ゴ説明サセテイタダク」、「説明イタス」、「ゴ説明イタス」のすべてが使えるので、それぞれの違いを明らかにする必要もあるといえよう。

以上のことは、待遇コミュニケーションの枠組みで述べると、「(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク・イタダケル」に関する【前提】に入るものである。こうした文法的な知識や、どの形式を用いようとするかの考え、この形式に対する好悪なども含まれ、個々のコミュニケーション主体の【前提】を形成している。それらが、実際の【場面】における表現、理解の行為にも影響を与えることになる。つまり、そうした【前提】が、実際の表現・理解における、【場面】の認識や、意識—内容—形式と連動してくるということである。

「(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク・イタダケル」という形式は、これがどのような表現において用いられ、そこでどのような意味や働きをしているのかに着目する必要がある。待遇コミュニケーション研究では、これがどのような意図とつながる表現として、【場面】—意識—内容—形式とどのように連動し、どのような役目を果たしているのか、という点から検討するわけである。

その要点の一つを述べると、「宣言表現」の場合と、「許可求め表現」の場合では、「(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク・イタダケル」を用いる意味が異なり、さらに「依頼表現」の形式も絡んでくることで、より複雑な様相を呈する、ということである。

例えば、「オ・ゴ～スル」にできない動詞として「使う」を例に見ていくと、以下のようなになる。

- A 「(私が)使います。」(宣言表現)→「使わせていただきます。」
- B 「(私が)使ってもいいですか。」(許可求め表現)→「使わせていただいてもよろしいですか。」(許可求め強化型表現)
- C 「(私が)使ってもいいですか。」(許可求め表現)→「使わせていただけますか。」(形は依頼表現・意図は許可求めの「依頼型許可求め表現」)

ここでは、それぞれの表現の適否というよりも(上述の、2. 許可を受ける、3. 恩恵を受ける、という事実や認識があるかについて検討するのではなく)、それぞれの表現における「(オ・ゴ)～(サ)セテイタダク・イタダケル」が表す重点が異なるのではないか、という点を指摘しておきたい。

Aの宣言表現では、謙譲表現にするためには、この「～セテイダク」という形式を用いるしかないので、重点は、「謙譲表現にして相手を高く待遇しようとする事」にあると考えられる。

Bは、許可求め表現を敬語化するにあたり、自分が使えるかどうかだけでなく、使えることが有難いという、「利益・恩恵」=自分、を強調することに重点があると考えられる。

Cは、自分が使うことについて、依頼表現の形式を用いることで、「相手が使わせる決定権を持っていることを強調していること」に重点があると考えられる。

これらのことは、個々のコミュニケーション主体が表現しようとしている、意識—内容—形式の連動と関連し、さらに言えば、そのことが、【前提】—コミュニケーション主体—【場面】の認識と連動してくること、それによって、なぜそうした表現形式が用いられるのか、どういう待遇表現としての意味が表されるのかにもつながってくる、ということ強調しておきたいと思う。

つまり、こうした観点からすると、同じように「(オ・ゴ)～(サ)セテイダク・イタダケル」が用いられている表現ではあっても、「宣言表現」、「許可求め強化型表現」、そして「依頼型許可求め表現」のそれぞれで、用いるための理由や重点が異なっているといえるわけである。

このような点を【前提】に取り込むことによって、「(オ・ゴ)～(サ)セテイダク・イタダケル」が用いられた表現に対する認識が変わってくる。ただ単に「させていただく」の適否や好悪を指摘するだけではない、様々な待遇表現のあり方を理解することにつながってくるのだと考える。

そのための理論的な枠組みの一つが、行動展開表現における、「行動」、「決定権」、「利益・恩恵」なのである。こうした【前提】が、実際の待遇コミュニケーションにおいて、意識—内容—形式の連動に反映し、許可を求めるとはどのような表現行為なのか、依頼の形式を用いるのはなぜなのか、相手の「決定権」を重視するのはなぜなのか、相手を尊重するのか、むしろ責任逃れなのか、「丁寧さ」の意味や意義とは何なのか、等々、待遇コミュニケーションのあり方を実際の社会生活、言語生活と関連づけながら考えていくことになる。そうしたことが、日本語(言語=コミュニケーション行為)の研究や教育においても重要になってくるのだといえるだろう。

【参考文献】

蒲谷宏(2013)『待遇コミュニケーション論』大修館書店

蒲谷宏(2021)「待遇コミュニケーションにおける「行動展開表現」の位置づけ」『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集 第2冊 言葉のはたらき』早稲田大学日本語学会

蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店

蒲谷宏・アドゥアヨムアヘゴ希佳子・李址遠・任ジェヒ・徳間晴美(2022)「待遇コミュニケーションの理論的枠組み(2021年度版)」『待遇コミュニケーション研究』第19巻、待遇コミュニケーション学会

近藤泰弘・澤田淳編(2022)『敬語の文法と語用論』開拓社

椎名美智(2021)『「させていただく」の語用論—人はなぜ使いたくなるのか—』ひつじ書房

椎名美智・滝浦正人(2022)『「させていただく」大研究』くろしお出版

文化庁(2007)「敬語の指針」文化審議会答申

日本語学習者にとっての敬語コミュニケーション

徳間 晴美 (明治学院大学)

1. はじめに

日本語のコミュニケーションには、「待遇」という観点¹が常に関わっており、それぞれのコミュニケーション主体が人間関係や場を捉えながら、各場面にふさわしいと判断した表現や方法を主体的に選択している。「待遇」の中でも、プラスの方向である人間関係や場においては、敬語やそれに類するあらたまった表現が用いられ、社会生活での上下関係や親疎関係を含む複雑な関係が調整されている。敬語使用の有無やその用い方は、コミュニケーション主体が相手や話題の人物をどのように位置づけているかを表すものであるため、理解する側は、その位置づけられ方を自分なりに解釈して受け止める。この調整の繰り返しにより、人間関係が構築されていくのである。

また、日本社会では、敬語の使用が社会的成長と結び付けられていることは否定する余地がない。この現状においては、「場面に応じて敬語も使える自分」を自覚しながら日々のコミュニケーションに臨めるようになることが重要となる。そのためには、単に敬語の知識や使えるフレーズを増やすのではなく、複雑で多様な人間関係から成る社会に身を置くにあたり、自分の敬語コミュニケーション観¹を軸にしながらかつて実社会での経験を重ねることが重要であると言える。

このように、「敬語コミュニケーション」は人間関係の構築および社会的成長と深く結びついているが、決して短期間で身につけられるものではない。本発表では、日本語教育に携わる立場から、日本語学習者という人々の捉え方を述べた上で、日本語の授業内外で日本語学習者は敬語コミュニケーションにどのように接し、どのような学びを得る可能性があるかについて事例を紹介する。

2. 日本語学習者という人々の捉え方

日本語学習者であるすべての人にとって、「日本語学習者である」という側面はその人の一面に過ぎない。しかも、それは日本語学習に出会った時を境に帯びることとなった一面に過ぎず、日本語に出会うまでも、生まれ育った国あるいは移動した国での歩みがある。これは、母語・母文化やその後の経験を通して形成されたコミュニケーション観や価値観が個々に内在していることを意味している。よって、目の前にいる日本語学習者は、その延長線上の時間・空間としての今、日本語でのコミュニケーションに挑戦していると捉えることが自然であろう。

日本語を母語とするかしないかに関わらず、人は「このようなコミュニケーションがしたい」「このような人だと思われたい」「このような自分でありたい」といった自分の在り方に対する欲求がある。日本語学習者も、「日本語学習者でもある自分」を「私」の一部として自覚しつつ、そのような欲求

¹ コミュニケーション主体の敬語コミュニケーションに関する認識。待遇コミュニケーション(蒲谷 2013)における5つの要素(人間関係と場、意識、内容、形式)を連動させる、すなわち選択や判断を司る「待遇コミュニケーション観」(徳間 2009)に内包されるもの。

を持ち、成長を続ける存在なのである。敬語を敬語コミュニケーションとして学ぶことで、日本語学習者は、日本語においても相手を尊重する気持ちや相手との関係の認識を表現および理解することができ、人としての欲求を満たすコミュニケーションが実現できるようになると考える。

3. 授業内での学び:「敬語コミュニケーション 6」の実践例から

日本語学習者が敬語を学ぶ場として、まず日本語の授業がある。発表者が以前担当した科目である「敬語コミュニケーション6」での実践例を挙げ、履修者のうちの一人の意識および認識の変容を紹介し、敬語をコミュニケーションの中で考える授業実践の可能性を見ていく。

科目の目標は、(1)「敬語コミュニケーション」を捉える観点や概念を理解する、(2)それぞれの敬語がどのような敬語的性質を持っているかを理解する、(3)「私の敬語コミュニケーション」に対する意識を深める、という3つである。主な授業実践内容を表1に示す。

表1 授業実践内容

週	授業実践内容	
1	オリエンテーション(クラス概要、講義内容、教材、評価法の説明)	
2	4月シート記入 → 私の「敬語コミュニケーション史」を振り返る活動 「敬語コミュニケーション」とは何か(待遇コミュニケーションの5つの要素を確認)	
3	「場面(人間関係と場)」の捉え方を意識させる活動 *スキット使用后、実際の経験を題材に	
4	グループ作り ²	グループ活動① 敬語(1)尊敬語/場面練習
5		前週の場面練習の復習 敬語(2)謙譲語 I・II/場面練習
6	5月シート記入	前週の場面練習の復習 敬語(3)尊敬語と謙譲語 I・II/場面練習(録音)
7	「発表の敬語コミュニケーション」	前週の場面練習の復習(スクリプト使用) 敬語(4)丁寧語・美化語
8		敬語(5)総復習/場面練習(録音)
9	グループ活動⑥	前週の場面練習の復習(スクリプト使用)
10	* グループ発表 1・2・3	
11	* グループ発表 4・5 → 6月シート記入	
12	発表の振り返り → グループディスカッション(テーマ:日本人に敬語が使われなかった場合の応じ方)	
13	ディスカッションの振り返り → お礼の敬語コミュニケーション(メール)1	
14	お礼の敬語コミュニケーション(メール)2	
15	発表の録画 DVD を見て内省	

²関心の近い2~4人でグループを作った。敬語コミュニケーションについて自信が持てないことなど、調べることによってその後の自分の敬語コミュニケーションに役立つことをテーマ決めの条件とした。インタビューおよび発表を行い、インタビュー協力者にお礼のメールを書くという活動につなげたもの。

「敬語コミュニケーション6」は、中上級レベルの週1回1コマ90分(全15週)の授業で、履修者は17名³であった。母国での学習を含め敬語を学んだ経験はあるが、日本に来てからあらためて敬語の重要性を感じたという留学生や、日本語を学ぶ上で敬語は本当に重要なのかを考えたいという留学生たちで、日常生活や就職活動の面接も意識しながら、この授業を履修していた。

履修者の一人である韓国人留学生 S を分析対象とした徳間(2011)のうち、3か月分の内省シートを振り返った期末レポートから、S の意識および認識の一部を紹介する。S は、敬語のイメージが「時間が経つにつれて怖い存在からかっこいい存在に変わっていった」ことに気付き、その理由について、「敬語と仲良しになれたからではないか」と表現していた。グループ活動を行った5月の内省シートには、敬語が魅力的だと表現され、敬語の必要性について、「ただ自分の価値を上げるためであったのが、私が相手のことを尊敬しているという気持ちを伝えたいから上手になりたいと思うようになった」と書いている。学期末の時点で、「相手や場のレベルがいくら高くても自信感を持って私の意見をはっきりいいながら気持ちを伝えるようになるまでは一生懸命頑張りたいと思う」と、自分の敬語コミュニケーションの学習や実践に対する意欲を示していた。敬語が日本語のコミュニケーションの中でどのような重要性を持つかについてクラスメートと話したり、日本人学生にインタビューしたりしたことで、コミュニケーションの中での敬語の魅力を感じることができたことが窺える。

4. 授業外での学び: 留学生のアルバイト経験の分析例から

口頭能力が高いと感じる留学生に出会った際、生活面について聞いてみると、日本人の友達がたくさんできたという話や、アルバイトをしているという話を聞くことがよくある。日本人の友達ができることで日本語でのコミュニケーションに慣れ、緊張感なく友達とのやりとりに参加できるようである。一方、アルバイトをしている留学生の場合、接客で使う表現をフレーズとして覚えることに加え、アルバイト先の人間関係における敬語の使い方を日々の経験を通して学んでいる様子が見られる。一例として、小学校でアルバイトをしている留学生を対象に、アルバイト先での待遇コミュニケーションに関する学びを調査した事例(徳間 2023)を取り上げる。

ここで紹介する中国人留学生 T は大学3年生で、1年生の頃から小学校でアルバイトをしていた。低学年クラスの教員補助を経験後、小学校内の放課後学童スタッフとして子どもたちや職員などと接していた。T の待遇コミュニケーションに関する学びを捉えることを目指したインタビュー調査データを質的分析方法により分析した結果、その学びを生んでいるものとして、次の4つが捉えられた。

- | |
|--|
| ①瞬時のスピーチレベル調整の実践 ②頼りにでき、見習うことができる人の存在
③多様な距離感が生まれる人間関係 ④相手レベルを考えて工夫した同じ「内容(なかみ)」の説明 |
|--|

①は、子どもと遊んでいる時に急に学童の主任に呼ばれて返事をするなど、スピーチレベル調整が瞬時に求められる場面などである。②は、小学校教員や保護者対応時の言葉遣いについても教えてくれる主任の存在を指している。③は、同年代のアルバイトスタッフ間でも話す頻度などによって人間関係が築かれていることや、対応に注意すべき相手である保護者でありながらも、同年

³ 韓国5名、中国5名、アメリカ3名、台湾1名、香港1名、ドイツ1名、シリア1名の学部・大学院の正規留学生および別科生

代の保護者の一人とは親しくなり、「です・ます」を使わない人間関係を築いていたことなどである。最後の④は、自分の前で起きた出来事を主任や保護者、子どもたちといった異なる相手に説明する際に、人間関係と場を考え、敬語に気をつけたり簡潔さを優先したりと、様々な表現が必要となった場面などである。

考察としては、第一に、アルバイト経験を積む場には、「そこに実在する自分」との間に継続性を持って築かれる人間関係があり、それが固定的ではなく動的であることを捉える機会や環境があること、第二に、その人間関係における待遇コミュニケーションの実践が重ねられ、他者のふるまいの観察を通して実践能力向上の自覚につながる経験をj得ていると考えた。つまり、アルバイト経験をを通して、待遇コミュニケーションにおいて重要だとされる5つの要素の連動について、他人事として眺める立場で考えるのではなく、「そこに実在する自分」と「目の前で自分の言葉を待つ相手」の間でやりとりを生み出し、紡ぐ経験が重ねられることが、T の豊かな学びにつながっていると考えられる。①から④のすべてに敬語が関連しており、授業外のアルバイト経験をを通して敬語コミュニケーションを実践的なコミュニケーションの中で学んでいることがわかる。

5.まとめ

日本語母語話者が社会的成長と共に敬語コミュニケーションを実践していくのと同様に、日本語学習者である留学生も、授業内で敬語をコミュニケーションの中で考え、また授業外でもコミュニケーションの中で敬語に関連する諸要素を実践的に学んでいる事例を見てきた。授業内と授業外では、学びの質と方法が異なり、その関係を日本語教育においてどう捉え、扱うかはまた別の課題であるが、今回は、敬語に焦点を当てて考えた場合、具体的な人間関係と場のあるコミュニケーションとして考えて授業で実践することが重要であること、また、授業外でも日本語学習者はその内省が促される機会に遭遇していることを示せたと考える。

敬語を含むことばは、具体的な人間関係と場において生まれ、さらにそれは、コミュニケーション主体に内在するコミュニケーション観や意図、欲求などが絡み合う中で生まれる。日本語の既習者である留学生が、「敬語の種類は習いましたが、どんな時に誰に対して使うのかはよくわかりません」と振り返ることがよくあるが、これは、敬語をコミュニケーションの中で捉える重要性を物語っていると言えよう。

【参考文献】

- 蒲谷宏(2013)『待遇コミュニケーション論』大修館書店
- 徳間晴美(2009)「待遇コミュニケーション観の形成に関する考察」『日語日文学研究』第69輯, 韓国日語日文学会, pp.47-61
- 徳間晴美(2011)「授業実践を通して見られた学習者の敬語コミュニケーション観の変容—韓国入学習者の事例分析—」『日語日文学研究』1(76), pp.181-202
- 徳間晴美(2023)「アルバイト経験をを通して得ている待遇コミュニケーションに関する学び—小学校でアルバイトをする留学生 T の事例分析—」『社会言語科学会第47回大会発表論文集(電子版)』pp.171-174

1. はじめに

敬語は、教育や社会経験を通じて習得していくものであり、その運用力や適切さの基準も人によって異なる。敬語使用には、表現や文法の習得だけでなく、相手や状況に応じた判断と使い分け能力が必要とされる。

日本語学習者と異なり、日本人大学生は母語としての日本語能力や日本社会で育った経験をもっている。しかし、社会人に比べると実社会での経験や人間関係の幅は限られており、それが敬語への意識や使用にも影響を与えているのではないかと考えられる。

ここでは、面接調査データをもとに日本人大学生の敬語に対する意識を検討し、それをふまえて、コミュニケーション行動として敬語使用を研究する上での視点を提案する。

2. 調査の概要

日本人大学生を対象に、2006～2007年に秋田、東京、大阪で社会言語学的面接調査を行った^注。質問のテーマに「ことばの使い分け」が含まれており、そこで得られた88名(女子42名、男子46名)のコメントを今回の考察対象とする。

3. 面接調査回答に見る大学生の敬語コミュニケーション

「『この時とこの時では自分が話し方を変えていた』と思うのはどんな時か」と質問した際、秋田と大阪では方言と共通語の使い分けへの言及もあったが、全体では大部分の回答者が敬語の使用を挙げていた。日本語話者の多くがそうであろうが、大学生にとっても「話し方の違い」というと敬語を使うかどうかがまず想起されるようである。

以下、限られた回答者数ではあるが、大学生たちが誰に、どのような場で敬語を用い、敬語使用についてどのような戸惑いや思いを抱いているかを見ていきたい。

3.1 どのような相手にどのような敬語を使うのか

日常的に敬語を使う主な相手は、大学の先生、部活の先輩やOB・OG、学年が上の人、アルバイト(以下、バイト)の上司・先輩・顧客(来店者、診療所の患者、塾の保護者など)、就活で会う企業の人、初対面の就活生などということであった。敬語を使う判断をする要因としては、まず相手との関係、すなわち上下(年齢、学年、立場が上)と親疎(初対面)の関係を挙げる回答が多かった。自分が敬語を使うと同時に、逆に後輩などが敬語を使わなかった場合には「カチンとくる」「違和感がある」という発言もあった。

ただ、初対面でも同い年/同学年の場合は、初対面を優先して敬語(デス・マス)、同学年を優先して敬語なし(タメ口)と、どちらをとるかは人によって意見が分かれた。後者の考え方は、社会人と異なり、学年意識が強い学生の立場ならではの感覚と言えるかもしれない。前者のように初対面なら敬語という場合でも、頃合いを見て徐々にデス・マスからタメ口に移行していくという回答者が多かった。

また、場面も敬語使用の大きな要因となる。以下のような指摘もあった。

- （同じ年の初対面には）大学なら敬語を使わないが、バイトなら使う。
- 仕事やあらたまった公の場なのか、楽しいおしゃべりなのかで違う。
- バイトでお客様の耳に入るような時は、親しい同僚でも互いに敬語で話す。

どの程度の敬語を使っているかということでは、大学生にとって日常的な「敬語」はデス・マス（熊谷 2011）と考えられるが、バイトの接客時や就活場面では尊敬語や謙譲語も用いられる。ただし、尊敬語・謙譲語はバイトのマニュアル的フレーズ（「申し訳ございません」「少々お待ちいただけますか」など）の域にとどまる場合も少なくない。

敬語を使いつつも親しい感じを出すという調整も行われる。部活の親しい先輩や、バイトで常連の顧客と話す際などに用いられる手立てとして、「デス」でなく「ッス」を使う、「ニックネーム+さん/先輩」で呼びかける、自称詞を「オレ」にする、冗談を言う、「方言っぽい敬語」（ハル敬語など）を使うなどが挙げられていた。

3.2 どこで敬語を身につけたか

敬語を身につけた主な場は、家庭、学校（小・中・高の先生の指導）、部活（先輩や外部関係者との接触）、そしてバイト（上司の指導、マニュアル、先輩の模倣など）ということであった。その他、生け花などの習い事、会議や学会など公式な場も挙げられた。

これらの中でも、多くの大学生の敬語習得に貢献していると思われるのはバイトである。大学では教員や先輩との関係性や会話内容も一定の範囲におさまり、「学生である自分」としてだけ振る舞えばよい。しかしバイトでは仕事の立場が加わり、相手（顧客、上司、正規社員、先輩の同僚など）によって異なる丁寧さの敬語を使い分け、場面（勤務中か休憩時か）に応じて同じ相手にも話し方を変えるなど、複雑な選択が必要になる。また、飲食店や塾講師、受付業務など異なる業種での対人行動は、大学と比べ格段に多様で、緊張感も伴うものと考えられる。以下のようなコメントも見られた。

○大学に入って最初のバイトで厳しく言われた。「『すみません』はアウト」と言われてショックを受け、自分でも学び、敬語にもあらたまった感じ、くだけた感じがあると知り、人と幅広く接する中で使い分けられるよう努力した。

○（バイトは）敬語を使う場面が多くあり、間違いにも気づける。家庭や学校では正しいかどうか分からないまま使っている感じだが、バイトでは圧倒的にそれが分かる。これらが示すように、大学生にとってのバイトは、学生生活での敬語使用から社会人としての敬語使用への過渡的な実践の場を提供するものと言えるであろう。

3.3 敬語の使用に不安、戸惑いを感じることはあるか

「この相手にどうい話し方をしたらいいか迷った、困ったという経験はあるか」という質問をした際にも、敬語使用をめぐる経験談が多く出た。日本語を母語とする大学生も、敬語には少なからず問題を感じるようである。

まず、デス・マス以上の敬語の知識や運用力の不安が挙げられた。就活で尊敬語と謙譲語を間違えそうになった、バイトで接客時にマニュアルにない質問を突然されて敬語がし

どろもどろになったなどである。「こちら（箱）にドーナツ、お入りになっていますので」「（くじを）お引き取りください」などバイトで見聞きした誤用も紹介されていた。

また、敬語を使うかどうかで迷う、困るという状況が挙げられた。たとえば、立場と年齢にねじれがある場合（バイトの先輩が高校生だった、二浪した同級生がいるなど）、バイト先に友人が客として来た、親しい先輩に「敬語はいらない」と言われたなどの場合も、敬語の有無や調整に悩む。これらはいわば、年上か後輩か、店員か友人か、後輩か仲良しかなど、相手に対する自分の立場として異なる二つのものが併存し、どちらにことばを合わせるかというジレンマである。実際には、個々人の考える優先順位（経験が上の人や仕事の場では敬語、仲が良ければタメ口など）でことばを選んでいくことになる。

敬語の知識への不安は、大学生が社会に出て運用を重ねる中で軽減されていくことが予想される。しかし、複数の立場が衝突し、「今ここでどうということばを使うか」と迷いながら判断せざるを得ない場面は、生涯を通じて誰にでも起こり得るものであろう。

3.4 敬語についてどう思うか

敬語やことばの使い分けを肯定的にとらえる意見には、「立場関係や場の雰囲気を示す上で必要」「多様なニュアンスを表せる」など、対人コミュニケーション上の働きを評価したものが多かった。大学に入ってからことばの使い分けに肯定的になったという回答者もいた。接する相手の多様化やバイトの開始などが契機となったのかもしれない。また、敬語の運用力が就活などで役立つといった、社会で評価される資質への言及もあった。

一方、否定的意見の大部分が、「敬語は相手との間に壁／距離をつくる」というものであった。「敬語は面倒で自分が無理している気がする」という意見もあった。親しさや自然さが敬語によって阻害されるという感覚がうかがえる。

両面に言及した意見には、以下のようなものがあった。

- 使い分けせずにすめば楽だと思うが、自分が年下から敬語を使われなかったらイヤだ。
- 煩雑で疲れるが、日本の文化でもあるし、深みも感じる。

4. コミュニケーション行動としての敬語：研究の方向性

最後に、日本人大学生の調査結果から得た示唆をもとに、コミュニケーション行動としての敬語の研究に向けていくつかの提案を試みたい。

<敬語コミュニケーションの複合性の重視>

従来、敬語（使用）の研究や議論では、つまるところ「どの語形を使うか」に焦点が集中しがちであった。大学生たちが「敬語は壁をつくり、親しみがこもらない」というイメージを抱く一因もそこにあるのではないかと考えられる。

コミュニケーションは、言語・パラ言語・非言語的要素によって複合的に作り上げられていくものである。敬語を使いながらも親しい感じを込めるという回答もあったように、ことばは敬語形でも、声や口調、視線や表情、笑い、冗談の使用などによって多様な色合いが生まれる。スタイルシフトもある。そうした実際のやりとりの姿を示して、敬語の固

定的なイメージを変えていくことは重要であろう。そのためには、会話の音声・映像データの分析も活用し、敬語使用の多層的な姿をより明らかにしていくことが必要と考える。

<敬語使用に影響する要因：日々の具体的なコミュニケーション場面への着目>

一般に敬語使用に関わる要因は「上下」「親疎」「場のあらたまり」と言われる。しかし実際のコミュニケーションでは、年齢と立場のねじれ、公私のせめぎ合い、脇の聞き手の存在など、一筋縄ではいかない場面に話し手は直面する。また、相手の意向への配慮（「敬語だと相手もイヤだろうから」と考えて年上の同級生にタメ口で話すなど）、社会的な常識・期待なども敬語の使用・不使用に影響を与えたと考えられる。

人々の考え方や社会の価値観も日々変化・多様化している。たとえば、SNS の普及で、不特定多数の相手に語りかける際にデス・マスを使うかという感覚も変わってきているだろう。人が何をどう勘案・判断し、いつどのような敬語を使っているかという傾向を現在に即してとらえ直すことは、社会言語学的にも非常に興味深い課題ではないだろうか。

<敬語コミュニケーションにおける方言的要素の役割>

調査で、敬語の堅苦しさや距離感（滝浦 2005）を軽減する方策として方言的要素が挙げられていた。親しいくつろいだ会話で使われる仲間うちのことばである方言は、敬語による発話をやわらげる。仮に共通語形の敬語であっても、方言アクセントで話されることでニュアンスが豊かになり、印象も違ってくるであろう。

従来、日本語研究において「敬語」と「方言」は別個のトピックとして扱われ、接点としても方言敬語の語形や文法の研究が主であったと思われる。しかし、実際のコミュニケーションにおいて方言がポジティブ・ポライトネス（ブラウン&レヴィンソン 2011）として敬語使用に質的变化をもたらすことを考えると、敬語と方言の両者を視野に入れた待遇行動研究の可能性と必要性が立ち現れてくる。

以上、コミュニケーションとしての敬語を研究していく上での提案を行った。従来の知見の蓄積に加え、さらなる敬語コミュニケーション研究の発展が期待される。

注. 平成 18～20 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「三者面接調査における回答者間相互作用のバリエーションに関する研究」（課題番号 18520346 研究代表者：熊谷智子）の補助を受けたものである。

【参考文献】

- 熊谷智子（2011）「敬語のイメージの世代差 —大学生の「です・ます」への意識を中心に—」『待遇コミュニケーション研究』第 8 号 pp.17-32
- 滝浦真人（2005）『日本の敬語論 —ポライトネス理論からの再検討—』大修館書店
- ブラウン, P.&レヴィンソン, S.C.(著)、田中典子(監訳)（2011）『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社

日本語にひそむジェンダー —無意識を意識化するために—

加藤恵梨(愛知教育大学)、佐竹久仁子(姫路独協大学)、遠藤織枝(にほんごの会)

趣旨説明

私たちが普段目にする日本語にはジェンダーバイアスがひそんでおり、人々に気づかれることなく、長年使い続けられているものも多い。しかし、日常使うことばは人々が潜在的に持っている考え方に大きな影響を与えることから、ことばの中の男女の不平等は社会における男女の不平等に結びつくと考えられる。

メディアや辞書を対象にした日本語の性差別語、性差別表現についての批判や異議申し立てが行われるようになったのは、1980年代なかばから1990年代にかけてのことである(田中1984、ことばと女を考える会1985、遠藤1987、メディアの中の性差別を考える会1993、上野他編1996など)。それから約半世紀、新聞などの表現ガイドラインではジェンダー平等が意識されるようになり、1997年の男女雇用機会均等法の改正以降、職業名は性別を問わない名称が用いられるようになりといった変化はみられるものの、積極的にことばを非性差別的なものへと変革していこうという動きはにぶい。日本社会は男女平等の面で国際的に大きく後れをとっているが(2022年のWEFジェンダーギャップ指数は世界146か国中116位)、その背後には性別役割分業意識の根強さがある。これは性差別的なことばの問題とも無関係ではないだろう。

本ワークショップでは、まず、以下の3つの発表をとおして、日常生活では見逃されがちな日本語のジェンダーバイアスを指摘する。

- ・新聞で用いられる表現「女性／男性でも」「女性／男性特有(の)」「女性／男性ならではの(の)」「女性／男性にありがち」に注目した調査・分析
- ・国語辞書の語義説明にひそんでいる人の基準を男とする〈人=男〉イデオロギーの指摘
- ・長年歌い継がれてきた文化庁選定百選の歌の歌詞の用語と表現についてのジェンダーの視点からの分析

そして、これら3つの発表をふまえて、日本語にひそむジェンダーについて意識化することの重要性を参加者とともに議論し考える。

参考文献

- 上野千鶴子+メディアの中の性差別を考える会編(1996)『きつと変えられる性差別語—私たちのガイドライン』三省堂
- 遠藤織枝(1987)『気になることば』南雲堂
- ことばと女を考える会(1985)『国語辞典にみる女性差別』三一書房
- 田中和子(1984)「新聞にみる構造化された性差別表現」磯村英一・福岡安則編『マスコミと差別語問題』明石書店、pp.179-201
- メディアの中の性差別を考える会(1993)『メディアに描かれる女性像—新聞をめぐる』桂書房

新聞にひそむ「女らしさ／男らしさ」

加藤 恵梨

1. 本発表の目的

本発表は、近年「女らしさ」や「男らしさ」が人々にどのように捉えられているのかを新聞を調査資料として考察することを目的とする。具体的には、朝日新聞・AERA・週刊朝日の記事検索ができるデータベース「朝日新聞クロスサーチ」（表1では「朝日」と）、読売新聞の記事検索ができるデータベース「ヨミダス歴史館」（表1では「読売」）を用い、2017年1月1日から2022年12月31日において、一般的によく使われる「女性／男性でも」「女性／男性特有(の)」「女性／男性ならではの(の)」「女性／男性にありがち」という表現に注目して分析を行う。

2. ジェンダーバイアスが感じられる表現の数

まず、ジェンダーバイアスが感じられる表現の出現数¹を調べると、次の表1のようであった。

表 ジェンダーバイアスが感じられる表現の数

	女(性)でも		男(性)でも		女性特有(の)		男性特有(の)		女性ならではの		男(性)ならではの		女性にありがち		男(性)にありがち	
	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売	朝日	読売
2017年	23	34	10	15	4	3	0	0	27	1	3	0	1	0	0	0
2018年	27	36	8	12	4	0	0	0	23	0	2	3	0	0	0	1
2019年	25	40	7	8	3	1	3	1	29	0	0	2	0	0	0	0
2020年	16	24	3	5	1	1	0	0	8	0	0	1	0	0	1	0
2021年	19	25	8	4	4	1	1	0	10	5	0	0	0	0	0	0
2022年	26	23	11	3	8	3	1	1	10	10	1	0	0	1	4	1
合計	136	182	47	47	24	9	5	2	107	16	6	6	1	1	5	2

「女性／男性にありがち」を除き、「女性～」という表現のほうが「男性～」という表現よりも多く使われている。このことから、女性に関する表現のほうが男性に関する表現よりもジェンダーバイアスが強いと考えられる。

3. 新聞にひそむ「女らしさ」

はじめに、新聞にひそむ「女らしさ」について述べる。次の(1)の「女性でもぺろりと食べられる」という表現から女性は大食いではないこと、また(2)の「女性でも食べやすい一口サイズ」という表現から女性は大口を開けて食べないというステレオタイプがあることが窺える。

- (1) 分厚い卵焼き、塩もみしたキュウリをマヨネーズであえたものを3枚のパンで挟んであり、食感は「ふわふわ」で「シャキシャキ」。ボリューム満点だがあっさりしていて、女性でもぺろりと食べられる。（読売新聞、2018.10.5、朝刊）
- (2) 何回も試作を重ねて試食会を開き、女性でも食べやすい一口サイズであんこを餅で挟むかわいい形にしました。（朝日新聞、2021.4.2、朝刊）

また、(3)の「女性でも飲みやすく、フルーティーでのご越しのよい酒にしよう」という表現から、

女性は一般的な日本酒は好まず、フルーティーな飲み物が好きであるという考えや、(4)の「女性でも、『飲む人』は依存症になりうる」という表現から、女性は(男性ほどお酒を大量に飲まない)のでアルコール依存症になりにくいという意識が書き手の中にあることが分かる。

- (3) 長年にわたって飲み続けてもらえる日本酒にするために、女性でも飲みやすく、フルーティーでのど越しのよい酒にしようと考え、(後略)。(読売新聞、2017.05.31、朝刊)
- (4) とにかく同調圧力で飲まない、ストレス解消のために飲まないことだ。若者や女性でも、「飲む人」は依存症になりうることを知る必要がある。(朝日新聞、2022.5.20、夕刊)

さらに、(5)に「消防隊が使う直径65ミリホースに比べて細く、高齢者や女性でも扱いやすい」、(6)に「栽培は女性でもできる」とあるように、女性は男性のように力がなく、重い物を持ったり、重労働をしたりするのは難しいと考えていることが窺える記述が見られる。

- (5) 市は初期消火の態勢を強化しようと、約400カ所の消火栓の近くに直径40ミリのホースなどが入った赤いボックスを設置した。消防隊が使う直径65ミリホースに比べて細く、高齢者や女性でも扱いやすいという。(朝日新聞、2019.12.23、朝刊)
- (6) 高齢化の影響で、丹波栗の栽培をやめる農家も出てきている。丹波栗っこ会では「栽培は女性でもできる。一本でも栗があれば、切らずに栽培してほしい」と、栽培技術の講習会やレシピ開発などをしてきた。(朝日新聞、2019.11.27、朝刊)

それ以外にも、男性が多く活躍している分野に女性が加わった際には、(7)から(9)のように、「女性特有の気づきや配慮」「女性ならではの視点／感性」が求められる。

- (7) 静岡県消防保安課によると、県内の消防団員は、2021年4月現在、1万8093人。うち女性団員は396人だった。(中略)性別を問わず活躍が期待される一方で、避難所での女性や子どもへの対応などで女性特有の気づきや配慮が大きな力になっているという。(朝日新聞、2022.6.1、朝刊)
- (8) 72年続く横審で、女性委員は過去1人だけ。「意識はしませんけれど、女性ならではの視点、おかみさんの視点はあります」(朝日新聞、2022.7.12、朝刊)
- (9) 農業女子の輪を広げ、女性ならではの感性で新しい風を吹き込みたい。(朝日新聞、2017.1.22、朝刊)

このように、女性と男性では気づきや配慮、視点、感性が異なるということが前提となっている記述があり、またそれらが女性自身から発せられているものが多く見られるが、それらが何であるのか、気づきや配慮、視点が男女で本当に異なるのかについて疑問を感じる。

武知(2017: 1070)は、「女性活躍という旗振りのもと、行政や企業、メディアにおいて、『女性ならではの視点を活かすことは、企業にとって極めて重要で(内閣府 HP)』『女性ならではの

視点・発想を活かした活躍(企業 HP)』のように、『女性ならではの視点を活かして』は、女性を賛美し励ますフレーズとして多用されている」ことについて、「男女は本質的に異なり相互補完的存在であるという信念を強化する、好意的セクシズムの側面も含んではいないだろうか」と述べている。悪意のあるものと比べ、好意にもとづくステレオタイプの発言は気づかれにくく、アンコンシャス・バイアスになりやすい。このような表現に注意を向け、使い方が適切であるのかについて考え、議論していくことが必要である。

4. 新聞にひそむ「男らしさ」

続いて、「男らしさ」について述べる。2 節の表1で示したように、「男性でも／特有の／ならではの」という表現は、「女性～」に比べて使用が少ない。

3 節で、男性が多く活躍している分野に女性加わった際には、「女性特有の気づきや配慮」「女性ならではの視点／感性」が求められると述べたが、女性が多く活躍している分野に男性が加わる場合にもやはり、次の(10)のように、それまでとは異なる「男性ならではの違いや新しさ」を男性が出すことが求められている。その多くは(11)のように、「重い荷物の上げ下げなど」といった力仕事である。このことから、男性は力持ちであると考えられていることが分かる。

(10) 昨年2月の試験で師範に合格した奈良市の写真家(中略)は「華道界は女性が多いので、男性ならではの違いや新しさを出せるようお願いを込めて生けた」と話した。

(読売新聞、2018.1.8、朝刊)

(11) 同社のCA約160人のうち男性は9人。同社の企画担当者は「CAは女性というイメージがあるが、重い荷物の上げ下げなど、男性ならではのサービスもある。この機会に仕事ぶりを見てほしい」と話している。(読売新聞、2018.5.19、朝刊)

また、次の(12)に「大人の男性でもゆったりとくつろげる」とあるように(大人の)男性は体が大きく、背が高いため、次の(13)にあるように背が低い男性は一般的にファッションを楽しむことができないといったステレオタイプが窺える記述も見られる。

(12) キャンプ用ベッド「DOD ハンペンインザスカイ」(ビーズ、参考価格税別2万4000円)厚さ5センチまで膨らむエアマットが弾力感を生む。幅78センチ、長さ190センチで大人の男性でもゆったりとくつろげる。(読売新聞、2019.8.8、朝刊)

(13) 身長が低い男性でもファッションを楽しみたい。(朝日新聞、2022.5.13、朝刊)

その一方で男性は美容には無頓着で、次の(14)のように眉毛を手入れしたり、(15)のように日焼け止めを塗ったりすることはないと思われる。

(14) やはり男性でも、少しも手入れをしていない眉毛は、だらしない印象に

(週刊朝日、2017.10.6)

(15) 皮膚がんは、紫外線が主な原因と言われているため、男性でも日焼け止めを塗るなどして予防に努めてください。（読売新聞、2018.2.4、朝刊）

さらに、(16)に「料理初心者や男性でも気軽にできるレシピ」とあるように、男性は料理を作るのがあまり得意ではなく、また(17)のようにボリュームのあるものを好むと考えられていることが分かる。

(16) 料理初心者や男性でも気軽にできるレシピが人気だ。（読売新聞、2019.5.6、朝刊）

(17) 「グリルチキンサンド」は、鶏肉やゆで卵など5種類の具材が挟んである。男性でも食べ応えがありそうだ。（読売新聞、2018.3.7、朝刊）

加えて、(18)のように男性は一般的に女性よりも経済力があるという考えや、(19)のように男性は権力主義者であるという考えが読み取れる記述もある。

(18) 非正規の単身者は男性でも経済的に困窮する恐れが高いのですが、正社員率が高いので女性ほど問題化しません。（朝日新聞、2021.10.31、朝刊）

(19) 男性にありがちなのは「話すことが権力の行使になり快感になる。そうしてしまいがち」と岡本さんはみている。男性は潜在的にヒエラルキー（階層制）のなかで競争し、肩書がないとコミュニケーションができない人が少なくないという。（週刊朝日、2022.6.17）

5. おわりに

男女平等の世の中になりつつあると言われ、新聞でも差別用語の不使用など見直しが進んでいる部分もある。しかし、「でも」「ならでは」のような付属語では意識化されにくいのか、現代においてもジェンダーバイアスがあることが窺える。上で述べたような実態を意識化し、人々が無意識に抱いている日本（語）社会における女性／男性についてのステレオタイプを改める必要があると考える。

注記

1 同一内容の記事が他の版に使われている場合があるが、それは1として数える。

参考文献

武知優子(2017)「『女性ならではの視点を活かしてがんばってください』は肯定的に受け止められるか」『日本心理学会大会発表論文集』81、p.1070

使用したアプリケーション

朝日新聞クロスサーチ

<https://xsearch.asahi.com/>

ヨミダス歴史館

<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>

1. はじめに

ことばと女を考える会『国語辞典にみる女性差別』（三一書房）が出版されたのは1985年のことである。同書は、1979年の現代日本語研究会『ことば』創刊号掲載の遠藤織枝論文「女性を表わすことば」をきっかけにおこなわれた共同研究「辞書にみる女性」（1980年『ことば』2号）をもとにつくられた。そこでは、女や男に関する語、その語義説明、用例にあらわれる女や男の様相などの検証をとおして、国語辞書に女性蔑視、男性優位の記述があふれていることが明らかにされている。当時は「ジェンダー」という語はまだ一般的ではなかったが、これは「ジェンダーの視点」からの国語辞書批判の書であったといえる。それから40年近くたち、当時と比べると近年の国語辞書では語の採録や語義説明、用例に関する性差別性への配慮の必要性についてはかなり意識されるようになったといえる。ただし、その姿勢が徹底されているとまではいえず、辞書による違いも大きい。また、おそらくまったく気づかれていない問題として、人の基準を男とするイデオロギー（〈人=男〉イデオロギー）による語義説明が変わらずある。

本発表では、国語辞書の〈人=男〉イデオロギーがどのようなものかを示し、ワークショップでの議論の材料としたい。とりあげる辞書は、2020年前後に新版が刊行された以下の5種の小型国語辞書である（（ ）内は本稿での略称）。

- ・岩波書店 2019『岩波国語辞典第8版』（『岩波』）
- ・三省堂 2020『新明解国語辞典第8版』（『新解』）
- ・三省堂 2021『三省堂国語辞典第8版』（『三国』）
- ・大修館書店 2021『明鏡国語辞典第3版』（『明鏡』）
- ・小学館 2022『新選国語辞典第10版』（『新選』）

2. 国語辞書にひそむ〈人=男〉イデオロギー

2.1 〈人=男〉イデオロギーによる語彙

〈人=男〉イデオロギーは、「男が人を代表する」「女は例外的に人に含まれることもある」として人の基準を男とする考えかたであるが、言語現象としては以下のa・bのようにあらわれる。

a. 男は人一般を意味する語であらわされるが、女は必ず女であることが示される。

語彙では、たとえば、「少年、青年、王、僧」などは両性を含む一般的な意味で用いられることもあるが、具体的な人を指しているばあいには男を指す。女のばあいは「少女、娘、女王、尼、尼僧」などと女であることが明示される。

b. 男を意味する語は人一般を代表するが、女を意味する語は女しか指示しない。

語彙では、たとえば、「兄弟、父兄、オービー、ヒーロー」などは男を指すはずの語で

あるが、総称的に女を含んで使われる。一方、それらの対語である「姉妹、母姉、オージー、ヒロイン」は常に女しか意味しない。

2.2 「少年、青年、王、僧」「兄弟、父兄、オービー、ヒーロー」の語釈

α、βの例にあげた「少年、青年、王、僧」「兄弟、父兄、オービー、ヒーロー」は〈人=男〉イデオロギーと切り離すことのできない意味をになった語であるといえる。これらの語の意味が国語辞書でどのように説明されているかみてみよう。以下に簡単に各辞書の語釈の特徴をまとめた。

- ・【少年】：『三国』『明鏡』は〈男〉の意を別ブランチで立てる。『新解』では〈男〉としたうえで「広義では少女を含む」と注記。『岩波』は「特に男子」、『新選』は「特に年のわかい男子」と記す。
- ・【青年】：『三国』は「男の人」とし「広くは、男女をふくむ」と注記。『岩波』は「特に男性」と記す。『明鏡』は「特に男性に限っていう場合もある」と注記。『新解』『新選』は性別情報なし。
- ・【王】（キングの意について）：『新解』は「狭義では、男性の君主、つまりキングを指す」と注記。他は性別情報なし。
- ・【僧】：『三国』は「～（男の）人」とする。他は性別情報なし。
- ・【兄弟】（親族の意について）：『三国』は〈男〉の意（兄と弟）を別ブランチで立てる。他は性別情報なし。
- ・【父兄】：『三国』は、はじめに「＝父や兄」と原義を示し、保護者の意で使われたのは以前のことで説明。『岩波』『新選』は父や兄の意とし、「父兄会」について現在は「保護者会」とする。『新解』『明鏡』は父や兄の意と保護者の意を注記なく示す。
- ・【オービー】：『三国』のみ〈男〉とする。他は性別情報なし。
- ・【ヒーロー】：物語の主人公としてはどの辞書も〈男〉とする。他の意味ブランチでは「英雄、勇士、勇者」などとされるが、これらの語の語釈はどの辞書でも〈男〉とはされていない（執筆者は〈男〉のつもりかもしれない）。活躍した男の意については、『三国』のみ〈男〉とするが、他は性別情報なし。

「少年、青年、王、僧」は〈人〉を指すこともあれば〈男〉を指すこともある語であるが、「青年、王、僧」については〈男〉の意味を示さない辞書がある。語釈で〈男〉とされていないということは、そのままうけとればその語は常に性別にかかわらず〈人〉を指すことになるはずである。しかし、たとえば、『新解』で「壮丁」「プレーボーイ（用例の説明）」は「～青年」と説明され、『三国』などで「王妃」は「王のきさき」、『岩波』などで「僧尼」は「僧とあま」とされるが、これらの「青年、王、僧」が指すのは〈男〉である。ここでは、〈人=男〉が当然視されている。

「兄弟、父兄、オービー、ヒーロー」は英語の man と同様の問題をはらむ語である。特に「父兄」については、近年は保護者の意で使用することは避けられるようになった。『三国』ではそれがわかる語義説明のしかたがされているが、『新解』『明鏡』ではそのことはまったく無視されている。他の3語については『三国』以外は性別情報〈男〉には触れず〈人〉として定義しており、〈男〉を〈人〉とすることへの問題意識は薄いといわざるをえない。

2.3 「マン」について

英語では1960年代なかば以降のフェミニズムによる言語改革運動により、現在では man の総称的使用についての性差別性は周知のこととなり、man ことばは使われなくなった。このことは、日本語の「マン」の語釈にどう影響しているだろうか。

『岩波』は「成人した男。広くは、(性別にかかわらず)人。(略)」とし、〈男〉の意をまず示している。そして、「「チェアマン」「ファイアマン」などには女性もいるからとの理由で、「チェアパーソン」「ファイアパーソン」などの称が米英で行われ出し、日本にも入った。」と注記を加えている。『三国』は「～(男の)人」とし、『明鏡』(「①人。②男性。③(略)」)と『新選』(「人。男。(略)」)はまず〈人〉の意味を示す。『新解』は「人。」としか示していない。また、『三国』以外では職業名などにつくものについては単に〈人〉としている。日本語でも近年は「～マン」は男に用いるという意識がもたれるようになっており、そのことを示す必要があるだろう。〈人〉の意しか示さない『新解』は論外である。

なお、議長の意の「チェアマン」については、どの辞書も「チェアパーソン」あるいは「チェアパーソン」を本見出しにしている。そして、『新解』以外は「性差別を避けた～言い換え語」(『岩波』)「性差をなくす言い方」(『新選』)などのように「チェアマン」の総称的使用が問題であることがわかるような付記を加えている。こうした記述態度は「マン」の語釈にも生かすべきであろう。『新解』はただ「「チェアマン」に代わる語」と付記するだけで、「マン」の語釈同様、語の性差別性に関する感度がにぶい。

2.4 〈男〉を指示対象とする語の語釈

国語辞書には、たとえば、つぎのような語義説明がある(下線は発表者による)。

- ・【兄弟子】自分より先に、同じ師についていた人。先輩でし。(『新選』)
- ・【学兄】同じ学問をしている友人を尊敬して言う語。(『岩波』)
- ・【男衆】①(略)②(略)③役者の付き人。(『新解』)
- ・【親父】①(略)②(略)③飲食店などの主人。④職場のかしら。ボス。(『三国』)
- ・【好々爺】やさしくて人のよい老人。(『明鏡』)
- ・【小倅】①若い者をあなどって言う語。②(略)(『岩波』)
- ・【車夫】人力車をひく人。くるまひき。くるまや。(『三国』)

- ・【書生】①（略）②他家に寄食して、家事を手伝いながら勉強する人。（『明鏡』）
- ・【チョンガー】独身者のこと。（『新選』）
- ・【マスター】①商店・酒場などの主人。②（略）③（略）（『新解』）

こうした定義を文字どおりにうけとるならば、いずれの語も女を含むことになる。しかし、これらの語が指すのは男のみであることを、わたしたちは経験と知識から判断できる。このように男のみが指示対象であることが明らかな語でも、それが示されていない例はめずらしくない。辞書をひくとき、わたしたちはしばしば「〈人〉は〈男〉である」という解釈実践を強いられているのである。

一方、女を指す語はけっしてこのような説明のしかたはされず、常に〈女〉として定義されている。この語は男も指すのだろうかなどと考える必要はまったくない。たとえば、対称的にみえる「兄^{けい}」と「姉^し」が『岩波』では、「兄^{けい}」の呼称としての用法を「友だちや少し目上の者などを尊敬や親しみの気持をこめて呼ぶ語。」とされるのに対し、「姉^し」は「女性に対する親称また敬称。」である。先輩格をいう「兄貴」と「姉貴」は、『明鏡』では「兄貴」は「親しい仲間内や芸人・職人・やくざなどの間で、先輩格の人を親しんで言う語」、「姉貴」は「遊び人、やくざなどの間で、先輩格の女性を親しんでいう語」とされる。また、歴史的な地位や身分をあらわす語についても、女のばあいはかならずその性に言及がある（「腰元、下仕え、中臈、典侍、年寄、内侍」）のに対して、男のばあいはやはりそれが示されない（「足軽、家老、年寄、奉行、用人、老中」）。七福神のうち、「弁財天」は「女神」とされるが、他の「恵比寿、大黒天」などは〈男〉であることには触れられない。

国語辞書の性別カテゴリー情報の記述態度は指示対象が女か男かで異なり、そこには〈人＝男〉イデオロギーが深く浸透している。〈男〉を指示対象とする語が無頓着に〈人〉として定義されているのである。もちろんどの辞書でも〈男〉とされている語はあるが、どの辞書でも〈男〉とされていない語もあり（上の例では「兄弟子、車夫」）、また、同じ語でも辞書によって性別カテゴリー情報〈男〉の記述があったりなかったりするというものもある。

厳密に意味を定義していると思われる辞書で、〈人〉が本当に〈人〉であるのか、すなわち女も含まれるのか、実はあいまいであるにもかかわらず、それがあいまいだとして問題になることはない。辞書の使用者は使用者で、「〈人〉といえばそれは男にとってよい」「女であれば〈女〉と明示されるはずだ」という、社会で支配的な〈人＝男〉イデオロギーによる解釈実践のルールに従って辞書の記述を解釈するからである。そして、そのルールはもちろん通用し、それがまた〈人＝男〉イデオロギーを再生産することになる。

文化庁選定「日本の歌百選」にみるジェンダー

遠藤 織枝

はじめに

2006 年秋、文化庁は、親子で歌い伝えられるような日本の歌の募集を行った。文化庁刊行の『一親から子、子から孫へ—親子で歌いつごう日本の歌百選』(以下「文化庁(2007)」とする)によると、6671 通、895 曲の応募があり、その中から、当時の文化庁長官や、小中学校の校長、声楽家、作詞家など 11 名の選考委員が 101 曲を選び「親子で歌いつごう日本の歌百選」(以下「百選」)として選定した。歌の応募者は、性別では女性が 73%、男性は 27%と圧倒的に女性が多く、年代別では、60 代 が最も多く 26.0%で、50 代以上が 63.2%を占めていた。つまり、「百選」の歌を推挙した人の多くは、50 代以上の女性たちであった。

「百選」の内訳は、①「あの町この町」のような童謡が 36 曲、②「仰げば尊し」など文部省が戦前に選んだ小学中学唱歌が約 35 曲、③「いい日旅立ち」など戦後に作られて人気を博した歌約 27 曲、④「通りゃんせ」のような古謡が 3 曲であった。

明治以来脈々と歌い継がれて、また将来へ歌い続けようという歌の数々には、それぞれの時代の社会意識とジェンダーが反映されていると思われる。本稿は、文化庁(2007)に掲載された歌の歌詞の用語と表現を分析しながらそこに潜むジェンダーの実態を明らかにしようとするものである。以下、①歌詞の用語の中の親族呼称や人称詞を拾いあげて登場する人物の性差をみる、②それらの人物像の描かれ方から性による偏りをみる、③更に歌の中で使われる用語や慣用表現で性差の特徴的なものを拾い出す、の方法によって考察を行う。

なお、101 曲の歌の中で「とんぼのめがね」「さくらさくら」など上記性差に関する用語が一切使われていない 19 曲は考察の対象から外し、82 曲の歌についてみていく。歌によって、「お母さん」と「おかあさん」など同じ語の表記が異なるものが多いが、本稿では同一語としてまとめてひらがなで記す。歌詞から引用する時は、文字使用・句読点・改行など文化庁(2007)の表記に従う(改行は「/」で示した)。引用の後に()で曲名を示す。

1. 「百選」に登場する人物

対象とする 82 曲の中に歌われる人物をすべて拾い上げて、まず、親族呼称と人称詞を性別でまとめて表にし、次にその他の人物のすべてを性別に分けてみた。表は親族呼称と人称詞による人物の出現数を性別に示したものである。同じ親族呼称の語でも、歌により「お母さん・かあさん/父さん・おとう/姉さま・ねえさん」など語形も表記もさまざまであるが、本表では、「おかあさん・おとうさん・おじいさん・ねえさん・にいさん・ぼうや」の語と表記で代表させる。また、親族呼称として一般的な母と父を述べるときは「母」「父」とする。また、人称詞には「わたし」「われ」など両性を指す語が出現するが、本表では歌詞の内容から性別を判断してどちらかに入れた。

表 親族呼称と人称詞別の登場人物数

	女性		男性		総称	不明	
親族呼称	おかあさん	36	おとうさん	11	ちちはは	3	
	ねえさん	3	にいさん	3			
	嫁	4	おじいさん	8			
			ぼうや	5			
人称詞	わたし	16	ぼく	13			
			ぼくら	13			
			われ	6			
			われら	1			
			わが～	7			
	あなた	2	あなた	2		あなた	8
	きみ	2	きみ	4		汝	1
			お前	1			
					みんな	25	

その他の人物は以下のようなものである(数字は出現数。数字を記していないものは出現数1)。

〔女性〕

あの子 2、あの娘 5、お姫様、おもり、女の子、恋人
この子、可愛い娘、早乙女、姐や

〔男性〕

王子様、あの子、少年、よい子

〔性別不明〕

赤ちゃん7、異人さん3、神様、**クラス仲間**、**高校3年生 3**、子供4、恋人
生徒2、**先生 2**、旅人3、友だち(友がき・友)6、**～する人 5**

歌に登場する人物像では、種類も頻度も性別不明の人物が多いが、女性では、「おもり」「姐や」など、昔の貧しい境遇の人物も登場する。男性は4例しか出てこない。

1-1 親族呼称「母と父」

「百選」の中で歌われる人物中最も多く登場するのは、「母」に関する語であった。「かあさんの歌」など14曲の歌に登場し、合計36語が収集できた。それに対する「父」に関する語は11語で、8曲の中で使われ、「母」の3分の1にも及んでいなかった。

これらの「母」と「父」はどのような人物として登場しているか。

「母」に関する語で、最も多く使われるのが「母さん、僕のを貸しましょうか」(雨降り)のような呼びかけ語で9例あった。つまり、母自身が何かをするのではなく、だれかから呼びかけられる人物としての母である。「母」が主語になって何かをする歌もあるが、それらは「かあさんが夜なべをして手袋を編んで」(かあさんの歌)、「かあさんが蛇の目でおおかえ」(雨降り)のように、母自身のための行為ではない。また、「母」の属性として歌われるのは、「根雪をとかす大地のような」(四季の歌)と、心広い大地のような母もいるが、これは例外的な存在で、多くは、「やさしいかあさん」(おうま)、「おかあさんはいいにおい」(おかあさん)、「母さん白髪がありますね」(肩たたき)、「此頃 涙脆くなった母が/庭先でひとつ咳をする/突然涙こぼし『元気とど』/何度も 何度もくりかえす母」(秋桜(コスモス))など、やさしくていいにおいがする「母」、もう老境に入って庇護をうけるような「母」である

「父」の方は、登場数は少ないが、「おおきい まごいは お父さん」(こいのぼり)、「このゆびパ

パ/ふとっちょパパ」(おはなしゆびさん)と、「父」が大きい人物であることを歌い、「岩をくだく波のような」「心強き人」(四季の歌)で、「父が教えてくれた歌」(いい日旅立ち)と、恩恵を与えてくれた父を歌っている。

量的には「母」が優勢であるが、質的には、「父」が大きく強く積極的な人物であるのに対して、「母」のほとんどはやさしいが庇護される消極的な人物という差が明確であった。

1-2 人称詞「わたしとぼく」

「わたし」と「ぼく」だけの比較では、16 語対 13 語で、「わたし」がやや多いが、男性の人称詞には「ぼく」の複数形「ぼくら」や「われ」「わが」など 27 語が出現するので、人称詞としては男性人称詞の方が圧倒的に多い。

「わたし」と「ぼく」の使われ方では、「わたし」の方では「私がママよ」(こんにちは赤ちゃん)、「生きてみます 私なりに」(秋桜)のような、主体性を持った「わたし」が半数を占めているのに対して、「ぼく」は、「ぼくの血しお」(手のひらを太陽に)、「ぼくの恋人」(四季の歌)のような「の」格の用法が半数以上になっていて、主格の用法は少ない。

「ぼく」には複数形の「ぼくら」で使われる例が多く、その用法にはジェンダーから見て大きな問題がある。「ぼくら」が、単に、「ぼく」の複数形ではない用法が多いことである。

[1] 僕ら人間は/どうして/こうも比べたがる? (世界に一つだけの花)

[2] ぼくらはみんな生きている (手のひらを太陽に)

[3] ぼくら/フォークダンスの 手を取れば/甘く匂うよ 黒髪が (高校三年生)

[1]では、「僕ら人間はどうして…」と、「僕ら」を「人間」と言い換えていて、「僕ら」=人間全体の関係である。[2]も、「ぼくらはみんな」と「ぼくら」と「みんな」が同義語として使われている。[3]では、「ぼくら」は男子高校生の「ぼくら」と、フォークダンスの相手である「黒髪」の匂う女子高校生を指している。男性一人称詞の複数形が、「人間」全体を指し、「みんな」を指し、男女高校生を指しているのである。

男性人称詞とされる「ぼくら」が女性も含む人間全体を指すのは、中村(1995:11-37)で述べられているとおり、英語の he/man が人間全体をさす男性中心主義の用法と同じである。

少年の自称詞「ぼく」に対応する少女のそれは「わたし/あたし」だが、「わたし」は成人男性の人称詞でもある。「わたし」の複数形の「わたしら」が人間全体を指す場合もある。

[4] 私は生き直すことができない。しかし私らは生き直すことができる。(大江 2013:310)のような「私ら」である。これは「わたし」が女性男性の一人称詞で、その複数形として人間全体を指しているのだから当然といえる。

少女期に「ぼく」を自称詞とする少女は多いが、周囲からの禁止や制約により、成人するにつれ「ぼく」は使わなく/使えなくなる。この制約を取り除いて女性の「ぼく」使用が認められるようになれば、「ぼくら」の人間全体を指す用法に矛盾がなくなるのであるが。

2. 動作行為を表す語の性差

2-1 「嫁ぐ」に関する語

[5] お嫁にゆくときゃ/誰とゆく (雨降りお月さん)

[6] お嫁にいらした 姉さまに/よく似た官女の 白い顔 (うれしいひなまつり)

[7] 十五で、姐やは、/嫁にゆき、/お里の、たよりも、/たえはてた。(赤とんぼ)

[8] 明日嫁ぐ私に「苦勞はしても/笑い話に時が変えるよ/心配いらぬ」と笑った

(秋桜(コスモス))

[9] きれいな花嫁やってきた/その日も動いていた (大きな古時計)

[5][6][7]は「嫁にゆく」のバリエーションで、[6]は「ゆく」の敬語形である。[8]は、句の形の「嫁に行く」と同義の動詞。[9]は「花嫁が来た」のだが、実家から「嫁に行った」女性が婚家に「嫁に来た」ということである。嫁に行く側と嫁を迎える側の違いであるが、結婚する女性が実家から婚家へ移動することでは変わらない。戦前の家父長制時代の、女性が相手の家に入り、その家のものになるという結婚の姿を現す表現である。現憲法では、結婚は 2 人の合意のもと、親の家を出て新しい戸籍を作って独立するのであるから、「嫁に行く/来る」ことは実際にはありえない。そのため、すでに古くから「嫁に行く」は、「嫁をもらう」などとともに差別的表現として避けるように提唱されてきている¹⁾。こうした歌の中で歌い継がれることで、旧制度の結婚観が温存されていく。とくに[6]の歌は、幼稚園保育園の年中行事であるひな祭りには必ず歌われる。この歌を口ずさむたびに「お嫁にゆく」が美化され、ひとつの憧れとして幼い女兒に植え付けられていくとしたら、その影響力は大きいものがある。

2-2 学に励み立身出世を目指す歌

中国の故事「螢雪の功」を歌いこんだ歌が 3 曲ある。

[10] 橘^{たちばな}のかおるのきばの窓近く/螢とびかい、おこたり^{いさま}諫むる 夏は来ぬ (夏は来ぬ)

[11] ほたるのひかり、まどのゆき/書^{かき}よむつき日、かさねつつ (螢の光)

[12] 朝ゆう なれにし、まなびの窓。/ほたるのともし火、つむ白雪。(あおげば尊し)

[10]は、厳しい学びの途上で怠け心がでてしまう、その緩む心を、螢をみて昔の中国の学者が灯油が買えなくて螢を集めて明かりにしたという故事を思い、身を引き締めよというもの。[11][12]は、その故事をひいて、学びの月日が容易なものではなかったことを振り返っている。そうした修業を経て志を果たし、身を立て名をあげるよう励ます歌もある。

[13] 身を立て 名をあげ、やよ はげめよ。(あおげば尊し)

[14] こころざしをはたして、/いつの日にか帰らん、(故郷)

こうした学問にはげみ、立身出世をもとめるのは、戦前では男の領域とされていた。戦前の中等教育で使われた修身教科書にはその性差が明らかに示されている。男子中学生用の井上哲次郎の『中学修身教科書巻一』の第三章は「修学に関する心得」で、その第一節の題は「立志」である。まさに志を立てることが男子の修学の第一歩なのであった。

[15] 学問は、先づ志を立つるを以て本とす。志とは心の向ふ所を云ふ。故に志を立たざれば、学ぶと雖も、成ることなし。古人も志あるものは、其の事遂に成るといひ、又志の立つは、学の半なりといへり。(中略) 志は勇猛にして、柔弱なかるべからず(中略) 故に学問は、志に由りて成り、志は勇猛なるに由りて、其の目的を遂ぐるものなり。(pp.20-21)

一方小学校を終えた女子が進む高等女学校では、同じ井上による『女子修身教科書巻一』が使われ、その第一編の「生徒心得」には「立志」はなく、「品格・淑徳」が重んじられた。

[16] 此の学校に入れる女子は、其の知識を広め、其の品格を高め、将来淑徳ある婦人として、世に立たんことを心掛くべし。(p.2)

第三編で男子教科書と同様の「修学に関する心得」の項が設けられ、その第一章の題は「志操を堅くすべき事」で、「立志」とは全く別の「志操」(守って変えない志。堅いみさお(『広辞苑 第七版』)、つまり「操」を固く守ることが第一とされ、以下のように説かれた。

[17] 何事を企つるにも、何業を始むるにも、其の志操を堅固に保つべきこと、最も肝要なり。(p.20)

何よりもまず「志操を堅固」にすることであった。男子に対する教育と女子に対する教育が根本的に異なっていた。その結果歌い継がれてきた歌の[10]から[14]に引用したような歌詞は、男子が目標として立て、男子の意識を鼓舞し激励するためのものであった。

「百選」に選ばれた「故郷」は、2011年3月の東日本大震災と原発事故以降、特に被災した人を慰め励ます催しなどで多く歌われ、国民歌謡とされるほどになっている。そのゆるやかな哀愁を帯びたメロディは、歌う人・聞く人の心を潤し、癒しに誘う。ひとときにせよ、人々の心を結び合わせる。しかし、2番の「志を果たしていつの日にか帰らん」の歌詞は、女性の目からすれば、それほど甘美なものではない。1番の「兎追いし」も「小鮒釣りし」も少年の楽しみで、おそらくそのとき少女は家事か子守をさせられていたであろう。少女は志を持つことも許されず、ほとんどは上級学校に進むことも許されず、出世して帰る兄や弟を待つか、近在に「お嫁にゆかされ」ていたかであろう。

おわりに

文化庁が選定した「百選」は、ジェンダーの目からみると、親と子がむつまじく歌いあえる懐かしい歌とばかりは言い切れない、辛く悲しい歌も数多く含まれているのである。

注記

- 1) 読売新聞 1975/9/24によると、市川房枝ら「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女性たちの会」の女性たちが、NHK に女性差別の語をなくすよう申し入れをしていて、その中で「嫁に行く、もらう」は「結婚する」に改めるよう要望している。

参考文献

井上哲治郎(1902)『中学修身教科書巻一』金港堂

井上哲治郎(1903)『女子修身教科書巻一』金港堂

大江健三郎(2013)『^{イン・レイト・スタイル}晩年様式集』講談社

中村桃子(1995)『ことばとフェミニズム』勁草書房

文化庁編(2007)『一親から子、子から孫へ—親子で歌いつごう日本の歌百選』東京書籍

『広辞苑 第七版』岩波書店(2018)

日本語学会2023年度春季大会 ワークショップ

『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築と公開

おぎそ としのぶ 小木曾 智信	こんどう あすこ 近藤 明日子	たかはし ゆうた 高橋 雄太	まぶち ようこ 間淵 洋子
国立国語研究所	東京大学	明治大学	和洋女子大学

はじめに：ワークショップの趣旨

『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC: Showa-Heisei Corpus of written Japanese)は、科研費 基盤研究 (A)「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」(19H00531)によって2019年から開発を進めてきた日本語コーパスである。これまでに国語研が開発し公開を行っている日本語の書き言葉のコーパスとして、代表性を持つ現代語の書き言葉のコーパスである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)と上代から近代までを通時的にカバーする『日本語歴史コーパス』(CHJ)がある。前者は主に2001~2005年を中心とする時期の現代語、後者は明治以降では概ね1925年まで(国語教科書のみ1947年まで)を対象としている。そのため両者の間の1930年代から1990年代の資料が欠けており、コーパスによって近現代の通時的な調査を行うことができなかった。そこで、SHCではこのギャップを埋め、さらに2013年までをカバーすることで現代語の確立過程を追うことができるコーパスとすることを目標に設計・構築を行ってきた。収録データは、当該期間に広く読まれた主要な刊行物である総合雑誌・新聞・ベストセラー書籍とし、「太陽コーパス」以来の雑誌コーパスに倣って8年おきに収録した。テキストにはBCCWJ・CHJと同様の短単位に基づく形態論情報を付与し、相互に比較が可能なものとした。構築にあたっては、改正された著作権法(デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定の整備)に基づき、著作権処理を行うことなく構築・公開を行っている。SHCの公開についてはBCCWJ・CHJと同様にオンラインのコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して利用可能にするとともに、語彙表や統計データを公開する。本ワークショップではこのコーパスの設計・開発の経緯、公開方法について解説し、活用方法について論ずる。

『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築・公開と権利処理

おぎそとしのぶ 智信 (国立国語研究所)

はじめに：コーパス構築と著作権処理

『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)は、『日本語歴史コーパス』収録の雑誌と現代の間をつなぐ、昭和・平成期の資料をコーパスにしようとする試みである。このような現代語のコーパスの構築において、従来は収録対象となる資料の著者の許諾が必要とされ、これが極めて大きな負担となっていた。前川(2009)は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の構築時の著作権処理について次のように述べる。

BCCWJでは、書籍サンプルだけで約25000件の著作権処理を行う必要があるのだが、2006年の12月以来、本稿執筆時点までの約30月間に約16000件について著作権者に連絡をとり、そのうち約10000件から利用許諾を得ることができた。この間の経費は研究員の人件費まで含めれば単年度で1000万円を大幅に超える水準にある。著作権処理のコストが現代語コーパス構築における最大のあい路といわれる所以である。

この金額は、本コーパスの構築を行ったJSPS科研費・基盤研究(A)19H00531「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」(SHC科研)の年間予算のほぼ全てに相当する額である。SHCのサンプル数をBCCWJのそれと単純比較することはできないが、多数の雑誌記事を収録していることから、要する費用はこれを大きく下回ることはないと思われる。すなわち、まともな権利処理を行えば本コーパスを構築することは不可能であった。

昭和・平成期の資料をコーパスにすることの必要性は強く感じつつも、著作権処理コストの点で行うことができなかつたが、その状況を変えたのが平成30年の著作権法改正である。ここでは、「デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定の整備」として法改正が行われた(著作権法第30条の4、第47条の4及び第47条の5関係)。文化庁著作権課(2019)は、下記のようにコーパスで日本語研究を行う事例を挙げて、これが権利制限と対象となることを示している。

問14 日本語の表記の在り方に関する研究の過程においてある単語の送り仮名等の表記の方法の変遷を調査するために、特定の単語の表記の仕方に着目した研究の素材として著作物を複製する行為は、権利制限の対象となるか。

日本語の表記の在り方に関する研究は、特定の技術の開発や実用化を目的としない基礎研究であるが、当該研究の過程である単語の送り仮名等の表記の方法の変遷を調査するために、特定の単語の表記の仕方に着目した研究の素材として著作物を複製する行為は、あくまで研究の素材として著作物を利用するものであり、当該著作物の視聴等を通じて、視聴者等の知的・精神的欲求を満たすという効用を得ることに向けら

れた行為ではないものと考えられることから、著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない行為であると考えられる。

これは著作権法改正の審議段階における関係者の働きかけを¹反映したものであると思われる、コーパス構築の道を拓くものであった。SHC 科研はこの著作権法改正を受けて 2018 年中に計画され、令和元年度に採択され、SHC の構築に着手した。

『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築・公開と著作権

SHC のようなコーパスを構築することについては上述の通り「著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない行為」として、権利者の許諾を得なくとも問題ないことと考えられる。

一方で、こうして作られるコーパスの「公開」については、その著作物の利用行為が「軽微」であるか否かが問われることとなる。国語研のコーパス検索サービス「中納言」は、例示される所在検索サービスないしは情報解析サービスの一種であると考えられるが、いずれにしても原文を表示するにあたっては、原文の利用が軽微利用にあたる必要があるとされる。この条件を満たすため、SHC 中納言では原文の表示される文脈長を、前後 20 語～30 語までに絞ることとした。BCCWJ では前後文脈の長さを最大で 500 語まで設定可能としていたが、SHC では最大で 30 語に絞った。

一般の記事についてはこれで「著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない」範囲に絞り込むことができると考えられる。しかし、一部の例ではこれでも、著作物の全体が含まれてしまい、「表現された思想又は感情の享受を目的」とすることが可能となる場合がありうる。具体的には、ごく短い記事、例えば短歌や俳句などの全文が前後 30 語内に含まれてしまうことによる。

このような事例を排除するために、SHC の構築にあたっては、雑誌や新聞の投書欄等、短歌・俳句からなるサンプルについては公開対象から外すことで対処した。コーパスのサンプルとしてとられた記事全体として外すことのできるものはサンプル単位で除外し、本文の一部としてとられている短歌・俳句についてはこれを伏せ字にして除外した。

『昭和・平成書き言葉コーパス』の公開と個人情報保護

著作権の問題とは別に、コーパスのサンプルとして採用されたテキスト中の個人情報の問題がある。SHC が対象とした雑誌・ベストセラー書籍・新聞については、いずれも広く観光されたものであり、今日の眼で見たときの個人情報保護の必要性は必ずしも高くない。しかし、当時の記事における被害者や被疑者について、今日的には公開することが適当で

¹たとえば、文化審議会著作権分科会 法制問題小委員会（2008 年 7 月 25 日）前川 喜久雄（独立行政法人国立国語研究所 研究開発部門／文科省特定領域研究「日本語コーパス」代表者）「コーパス構築と著作権」を参照されたい。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/chosakuken/hosei/h20_05/shiryo1_2.html

あると倭認められない個人名や住所等の情報が含まれている。そこで、コーパスの公開にあたり、これらのテキストについては伏せ字化を行い、検索対象のテキストから除外した。そのうえで、本文の前後 30 歩をコーパス検索結果として表示することとした。

以上のコーパス公開の方針に関しては、高樹町法律事務所の小林利明弁護士の確認の下で検討し、コーパスの本文の公開は適法に行っている。なお、権利者からの問題指摘については、コーパスの公開ページから意見を募っており、問題が生じた場合にはすぐに対処可能な状態とした。

おわりに

SHC のようにコーパスの現著者の権利処理を行わないで公開する試みは、これが初めてのものである。制限があるとは言え、コーパス公開が行えるようになったことは、言語研究の面はもちろん、自然言語処理や様々な方面での活用が期待される。SHC の公開を一つの機会に、今後様々な言語研究に利用可能なコーパスが構築されることを願うものである。

参考文献

前川喜久雄 (2009) 「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築」『人工知能学会誌』2009 年 24 巻 5 号 p. 616-622, https://doi.org/10.11517/jjsai.24.5_616

文化庁著作権課 (2019) 「デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定に関する基本的な考え方」(著作権法第 30 条の 4, 第 47 条の 4 及び第 47 条の 5 関係)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/hokaisei/h30_hokaisei/pdf/r1406693_17.pdf

『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌の構築

こんどう あすこ
近藤 明日子 (東京大学)

1. はじめに

本稿では、『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌(以下、「SHC 雑誌」と呼ぶ)について、まずその設計の要点を解説し、次に延べ語数から見る「SHC 雑誌」の資料特性について、国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』(短単位データ 1.2)(以下、「CHJ 明治・大正編 I 雑誌」と呼ぶ)と比較して述べる。

2. 「SHC 雑誌」の設計の概要

「SHC 雑誌」は、「CHJ 明治・大正編 I 雑誌」に接続して使用することで、明治期から平成期までの約 150 年間の書き言葉の変化を追うことができるコーパスとするため、その設計を主に「CHJ 明治・大正編 I 雑誌」に準拠し、一部『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)も参照して構築した¹。コーパス検索アプリケーション「中納言」から利用することで、語の検索を行い、目的の語とその前後文脈とともに多様なアノテーションを検索結果として入手し、研究に利用することができる。

収録対象資料として昭和・平成期を代表する月刊総合雑誌『中央公論』『文芸春秋』の 2 誌を選定し、1933・1941・1949・1957 年刊の『中央公論』と 1965・1973・1981・1989・1997・2005・2013 年刊の『文芸春秋』、8 年おき計 11 カ年を収録対象刊年とし、各年の通常号 12 冊、計 132 冊の全文テキスト²を収録した。

コーパスのテキストは原本に基づき電子化を行った。使用した文字集合は JIS の文字コード規格(JIS X 0213: 2012)に準拠し、集合外の文字については集合内の代用字や Unicode 文字を用いてできるかぎり入力する方針をとった。

誤植(誤字・脱字・衍字)と見られる文字については校訂を行ったうえでコーパステキストを作成した。「中納言」の検索結果では、校訂テキストとともに校訂前の原本に近いテキストを表示し、校訂箇所を確認できるようにした。

また、個人情報保護の観点から、公人・著名人を除く、事件や事故の加害者・被害者の氏名・年齢・住所等を表すテキストに対して、作業の可能な範囲で文字数分の■に置き換える伏せ字処理を行った。

以上のように作成したコーパステキストに言語研究に有用なアノテーションを付与し、1 記事=1 サンプルとして分割してコーパスに収録した。アノテーションは「中納言」によるコーパスの検索結果の各列に表示される(表 1)。

¹ 「SHC 雑誌」の設計の詳細については近藤(2023 予定)を参照のこと。

² ただし、①目次、②奥付、③広告、④付録、⑤図表、⑥俳句・短歌等の短い作品を主に掲載する記事等はコーパス収録対象外とした。

表1 「SHC 雑誌」の「中納言」の検索結果に表示されるアノテーション列名

アノテーション分類	アノテーション列名
コーパス情報	時代名、サブコーパス名、サンプル ID、開始位置、連番、コア、層、主本文
形態論情報	前文脈、キー、後文脈、原文 KWIC、語彙素 ID、語彙素読み、語彙素、語彙素細分類、語形、語形代表表記、品詞、活用型、活用形、書字形、仮名形出現形、発音形出現形、語種、原文文字列、振り仮名
本文情報	本文種別
作品情報	ジャンル、作品名、成立年、巻名等
作者情報	作者名
底本情報	底本、ページ番号、出版社

表1 にあげたアノテーションのうち、注意すべきものについて以下に述べる。

形態論情報は形態素解析により付与した。使用した形態素解析用辞書は、1933～1957 年の 4 か年分は「旧仮名口語 UniDic」、1965～2013 年の 7 か年分は「現代語 UniDic」である。UniDic の語の単位である短単位に対する形態論情報を付与しており、BCCWJ 等で付与する長単位に対する形態論情報は付与していない。形態素解析結果に対して可能な範囲で人手による確認・修正を行った。その結果、形態論情報の精度（適合率）は 11 か年全体では約 97.0%となっている。刊年ごとに見ると、1933・1941 年が約 95.5%、1949～2005 年が約 97.0～98.0%、2013 年が約 96.5%と、古い刊年と新しい刊年の精度が低くなっている。これは、コーパス構築に使用した時点での「旧仮名口語 UniDic」や「現代語 UniDic」が、それぞれ 1933・1941 年と 2013 年のテキストに特有の語が未登録である等の理由で、該当年代のテキストの形態素解析精度が高くなかったことを反映しているものである。

「ジャンル」はサンプル単位で付与し、「非文芸」「文芸/小説」「文芸/戯曲」「文芸/詩歌」の 4 分類とした。「CHJ 明治・大正編 I 雑誌」では雑誌によっては「非文芸」「文芸」の 2 分類のみのアノテーションしか付与されていなかったものを、本コーパスでは「文芸」のなかを「小説」「戯曲」「詩歌」に細分類し、利用しやすいものとした。

「本文種別」は短単位ごとに付与し、「地の文」「会話」「引用」の 3 分類とした。ただし、3 分類したのはジャンルが「文芸/小説」「文芸/戯曲」「文芸/詩歌」のサンプルである。ジャンルが「非文芸」のサンプルは本文種別をすべて「地の文」としており、地の文から会話・引用部分を区別することはしていない。

3. 延べ語数から見る「SHC 雑誌」の資料特性

「SHC 雑誌」の刊年別のサンプル数・延べ語数（記号類・未知語類を除く）を表 2 に示す³。これによれば、「SHC 雑誌」は全体でサンプル数 1 万、延べ語数 2736 万語を収録し、

³ なお、表 2・図 1 にあげるサンプル数・延べ語数の集計数は、本稿執筆時点で入手可能な 2023 年 3 月公開の試験公開版データに基づいたものであり、2023 年 5 月公開予定のバージョンのデータとは異なることに注意が必要である。

「CHJ 明治・大正編 I 雑誌」の 1272 万語（近藤 2021: 80）の 2 倍以上の規模のコーパスであることが分かる。各年の延べ語数は 1949 年を除けば 202 万～328 万語、平均 263 万語であるが、1949 年は政府の出版用紙割当による頁数制限のため、延べ語数が 102 万語と特に少なくなっている。

次に、各刊年の延べ語数におけるジャンル割合を図 1 に示す。小説・戯曲をあわせた文芸ジャンルのサンプルの延べ語数が各年の総延べ語数に占める割合は 1933 年が 26%と最も多い。これは「CHJ 明治・大正編 I 雑誌」において文芸ジャンルの割合が経年で増加し、最も新しい『太陽』1917 年・1925 年で 20%と最大になる（近藤 2021: 81: 図 3-1、女性雑誌は除く）という変化に続くものと見られ、大正・昭和初期は前後の年代と比較して多くの文芸作品が総合雑誌に掲載された時期であったことが分かる。その後、文芸ジャンルの割合は減少し、1989 年以降は 9～10%になる。

4. おわりに

以上、『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌の設計の概要と延べ語数からみる資料特性について述べた。「SHC 雑誌」の構築により、「CHJ 明治・大正編 I 雑誌」とあわせて使用することで、近現代の書き言葉の通時的研究が発展することを期待したい。また、コーパスの延べ語数やその中でのジャンル割合は刊行年により大きく異なる場合があることも明らかになった。コーパス利用の際は留意したい。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 19H00531 による研究成果の一部である。

参考文献

国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（短単位データ 1.2）

https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi

近藤明日子（2021）『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』勉誠出版

近藤明日子（2023 予定）『『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌 解説書』

参考 URL

UniDic <https://unidic.ninjal.ac.jp/>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>

「中納言」 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

表 2 SHC 雑誌のサンプル数・延べ語数

雑誌	刊年	サンプル数	延べ語数
中央公論	1933	641	3,283,701
中央公論	1941	474	2,447,675
中央公論	1949	215	1,015,499
中央公論	1957	768	3,132,011
文芸春秋	1965	1,181	2,024,927
文芸春秋	1973	798	2,322,490
文芸春秋	1981	908	2,656,361
文芸春秋	1989	1,283	2,742,676
文芸春秋	1997	1,062	2,540,351
文芸春秋	2005	1,314	2,521,535
文芸春秋	2013	1,321	2,676,674
計		9,965	27,363,900

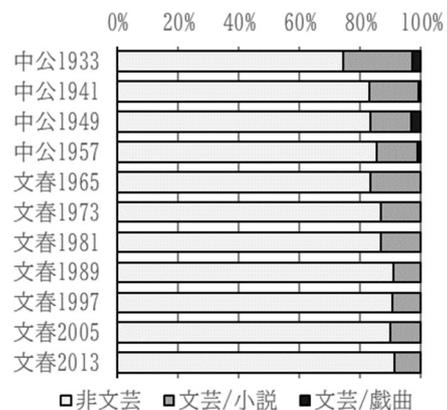


図 1 SHC 雑誌の延べ語数のジャンル割合

SHC ベストセラー書籍の構築

高橋雄太（明治大学）

1 「SHC ベストセラー書籍」の設計

「SHC ベストセラー書籍」は、昭和期から平成期にかけて世間に広く読まれた書籍を対象に、通時的に言語の変化を捉えられるように設計したコーパスである。新聞や雑誌のように継続的に発行される媒体と異なり、読者が選択的に求めて接した言語資料であり、各時代の読者の需要を色濃く反映した資料群といえる。

本コーパスでは、1933・1941・1949・1957・1965・1973・1981・1989・1997・2005・2013年の8年おき、計11か年のベストセラー書籍を対象にコーパスを構築した。SHC ベストセラー書籍は、ジャンル間比較ができるようにSHC新聞の収録語数に合わせて設計し、旧字体中心の1933年から1949年は各年20万語前後、1957年以降は各年約40万語前後の規模で構築した。次の表1は、「SHC ベストセラー書籍」の年別の採用作品数と短単位数の一覧である。

表1 「SHC ベストセラー書籍」の年別採用作品数と短単位数

収録年	採用作品数	短単位数 (記号込・万)	短単位数 (記号抜・万)
1933(昭和8)年	11	20.2	17.9
1941(昭和16)年	25	26.4	23.0
1949(昭和24)年	26	31.1	27.3
1957(昭和32)年	41	52.3	45.7
1965(昭和40)年	21	43.0	37.4
1973(昭和48)年	23	39.8	34.4
1981(昭和56)年	8	34.6	29.7
1989年(昭和64/平成元年)	13	36.5	31.6
1997(平成9)年	9	35.2	30.7
2005(平成17)年	16	37.3	31.5
2013(平成25)年	16	41.2	35.5
計	209	397.6	344.7

本コーパスを含め、SHCのサブコーパスはすべて短単位のみの実装であり、長単位は未実装である。本コーパスは全編が非コアデータ（部分的には人手修正が入るが形態素解析の結果をそのまま残したデータセット）での公開であり、部分的に誤解析例が検出されることを予め承知の上利用されたい。2023年3月計測時のベストセラー書籍サブコーパスの形態論情報の合致率は96.5%である。

2 収録作品の選定

収録対象とする資料は、1933年から1973年までは国立国語研究所国語辞典編集準備室(1984)の収録対象年に掲載されている全作品を選定し、1981年以降は「年間ベストセラーアーカイブ」(トーハン)や『出版年鑑』(出版ニュース社)を参照して上位20位までの書籍を選定した。これにより1933年から2013年までで計259組の書籍を収集した。

このうち、イラストや写真、図表を中心とする書籍(写真集、図鑑、ゲーム攻略本、地図、コミック、レシピ本など)はテキストから文脈が読み取りにくくコーパスの用例検索に向かないため、特殊な文字列が中心となる書籍(1949年『解析精義』、2005年『電車男』など)は形態論情報の付与が困難であるため、コーパスの構築対象外とした。

なお、ベストセラー書籍は近年では昨11月下旬から当年の11月下旬を収録対象とすることが多い兼ね合いで、前年に刊行された作品群を含む場合があるほか、刊行から時間を経てベストセラーとなる作品存在する。これらのことから、本コーパスでは収録対象年よりは2年以内に発表・刊行された作品を収録対象とした。これにより、古典作品類や全集類、初版本から出版社を変えて刊行された作品などをコーパス構築対象外とした。

また、同一年に同一著者の作品が多数収録された場合には、年につき2作品まで採用することとした。売り上げ部数が判明している作品については売り上げ部数の多いものから採用し、判明していない作品については可能な限り出版社やシリーズが異なる作品から採用した(例:1973年の遠藤周作氏の『ぐうたら愛情学』(講談社)、『死海のほとり』(新潮社)を採用し、『ぐうたら交友録』(講談社)は不採用とした)。このほか、『ノルウェイの森(上・下)』や『少年H(上・下)』『下天の夢(1-4)』のように複数巻がセットでベストセラーに収録された場合には、最初の巻を採用した。

以上の基準で選定した210冊の書籍を対象に、コーパスを構築した。

3 サンプリング

本コーパスでは、各書籍からランダムサンプリングによるテキスト採集を行った。具体的には、各書籍のコーパステキスト収録対象とする本文のページ(内表紙や目次、広告、奥付などを除いたページ)のうち、無作為に抽出したページをランダムサンプリング起点として設定し、その起点のページの前後で、事前に定めた作品あたりの収録規模に合わせて、章や節などのある程度の文章のまとまりを確保した上でコーパステキストを採集した。作品あたりの収録規模は、旧字体中心の1933年から1949年までは約30万字、1957年以降は約60万字程度の規模になるように定め、例えば、1933年には11の収録対象作品があるが、30万字を分割して一作品あたり2.73万字の規模になるように採集した。

このサンプリング基準によると、41作品とベストセラーの採用作品数の多い1957年の作品あたりの収録規模は14600字程度となり、反対に8作品と採用作品数の少ない1981年は作品あたりの収録規模は75000字程度となる。作品の総ページ中の採用ページ率は最も高いもので1981年『なんとなくクリスタル』など5冊の100%で、最も低いもので1949年『郷土』の4.2%であった。全作品の平均は27.3%であり、ほとんどの作品では全編を収

録していないため、用例採集の際にはその点を考慮して利用されたい。なお、作品ごとの採用率については、高橋（2023）に底本の情報とともに一覧を示してある。

4 ベストセラー書籍の変遷

「ベストセラー書籍」にはジャンル情報として、国立国会図書館の日本十進分類表（NDC）の1桁目が「9 文学」かそれ以外かによって「文芸」と「非文芸」の2種類の情報を付与しているほか、著者情報の一つとして性別の情報を付与している。次の図1はジャンル別の短単位数の変遷を、図2は著者の性別の変遷を示した¹。

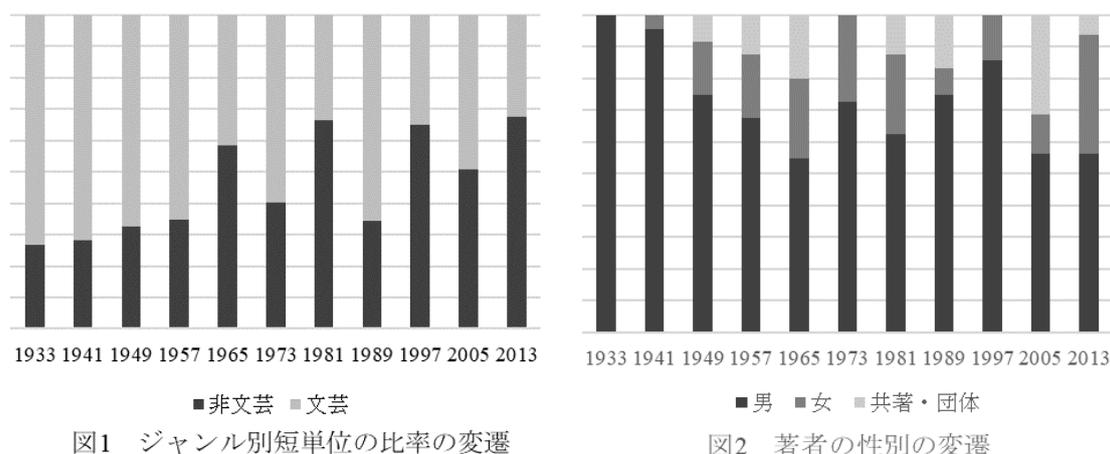


図1 ジャンル別短単位の比率の変遷

図2 著者の性別の変遷

図1や図2はあくまで本コーパスに採用された書籍の範囲内の数値、図1についてはサンプリングされた範囲内の数値であることへの留意が必要だが、図1をみると、1933年の段階では文芸作品が中心であったところから、徐々に非文芸にベストセラーの中心、言い換えれば読者の興味関心の中心が移っていったとみてとれる。また、図2をみると、1933年の段階では男性による単著が中心であったが、1949年ごろから女性による著書や共著・団体による著書も増加し、ベストセラー書籍の多様化の様相がみてとれる。

参考文献

- 国立国語研究所国語辞典編集準備室（1984）『用例採集のためのベストセラー目録』国語辞典編集準備資料4
- 出版ニュース社出版年鑑編集部『出版年鑑』出版ニュース社
- 高橋雄太（2023）「『昭和・平成書き言葉コーパス ベストセラー書籍』（短単位バージョン1.0）概説書」（2023年4月公開予定）
- トーハン「年間ベストセラーアーカイブ」 <https://www.tohan.jp/bestsellers/past.html>

¹ 共著作品や団体や企業名が著者にあげられている作品は、「共著・団体」にまとめた。翻訳作品は原作者の性別を参照した。複数の作品を採用した著者は、同一年においてまとめて1として集計した。

『昭和・平成書き言葉コーパス』新聞の構築

まぶち ようこ
間淵 洋子

(和洋女子大学)

1. はじめに

SHC 新聞は、国立国語研究所 (2023) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編V新聞』(短単位データ 0.8) (以下、CHJ「明治・大正編V新聞」と呼ぶ) と BCCWJ「出版サブコーパス新聞」とを接続しながら、戦前から戦後、さらに現在にかけての公共的な書き言葉の変化を捉えることができる資料として設計したコーパスである。本発表では、SHC 新聞の設計とデータ概要を示し、その資料特性と研究利用における利点と留意点を、実例やデータを示しながら述べる。

2. コーパスの設計と構築

SHC 新聞は、1895・1901・1909・1917・1925 年とほぼ 8 年おき 5 か年の『読売新聞』からサンプルを抽出した「明治・大正編V新聞」と同様に、『読売新聞』を対象として、1933・1941・1949・1957・1965・1973・1981・1989・1997・2005・2013 年の 8 年おき計 11 か年からデータを収録することとした。各年からの収録対象のサンプリングにおいては、1 か年につき原則として 5 月 2 日、11 月 2 日の二日分の朝刊 1 冊のテキストを取得した「明治・大正編V新聞」を拡張し、より多くのデータ量を確保することを目的に、奇数月 2 日の朝刊 1 冊を対象とした¹。なお、テキストの収録範囲は、「明治・大正編V新聞」に倣い、広告記事および固有名詞(人名・地名)や数値の羅列を中心とする記事(叙任・辞令、スポーツの試合結果・株式の取引結果など)と、図表や挿絵の中のテキスト、それらのキャプションなどに相当する文書要素を除外した全文とした。

コーパス用テキストは、原本や画像から本行のみを入力して作成した(ルビや振り仮名はデータ化しない)。原文の文字列については、Unicode を文字セットとして JIS 規格による包摂等を行わなかった。Unicode 外字は「■(下駄記号、U+3013)」で代替した。原文に対して、①濁点無表記の仮名は濁点付き仮名に変換、②踊り字は繰り返す文字列に変換、③誤植と考えられる箇所は訂正後の文字列に変換、等の校訂を行い作成しているが、校訂前のテキストの情報もアノテーションとして残し、参照することができる。ページごとまたは記事ごとにファイル分割して形態論情報を付加し、このファイルを「1 サンプル」とした。

なお、著作権上の問題から、短歌や俳句、子供の詩など、極端に単語数の少ない記事については、これを公開対象外としたほか、個人情報保護の観点から、事件や事故の加害・被害者名等について、可能な可能な範囲で伏せ字処理(文字毎に「■」に置換)を行い公開対象外としたため、これらについては検索することができず、検索結果にも現れない。

¹ 1号の分量が極端に少ない年は、2日の号に続く号も収録対象とした。また、2日が休刊の場合は続く号を収録対象とした。具体の収録対象日は、間淵(2023)を参照されたい。

3. データ概要

表1に、SHC新聞に収録した各年のデータ量を掲出する。

表1に示した通り、各年の収録語数（短単位数。以下同様）は、10万語から40万語とばらつきがある。特に、前半の1933年から1957年までのデータは10～15万語と少なく、1965以降のデータでは30～40万語と前半のデータに対して2～4倍程度の開きがあり、この収録語数の差は、1日分の朝刊（新聞1冊分）の構成によるものである²。

表1 「SHC新聞」の年別データ量

収録年	短単位数 (記号込・万)	短単位数 (記号除・万)	サンプル 数(約)	単位
1933	14.2	12.9	50	ページ
1941	16.0	14.7	40	ページ
1949	12.9	11.8	30	ページ
1957	11.4	10.1	50	ページ
1965	33.7	29.3	580	記事
1973	46.3	40.2	1,060	記事
1981	43.8	37.5	1,060	記事
1989	40.5	34.7	1,010	記事
1997	33.6	28.8	840	記事
2005	49.4	42.4	1,500	記事
2013	41.2	35.4	1,150	記事
計	342.8	297.8	7,460	

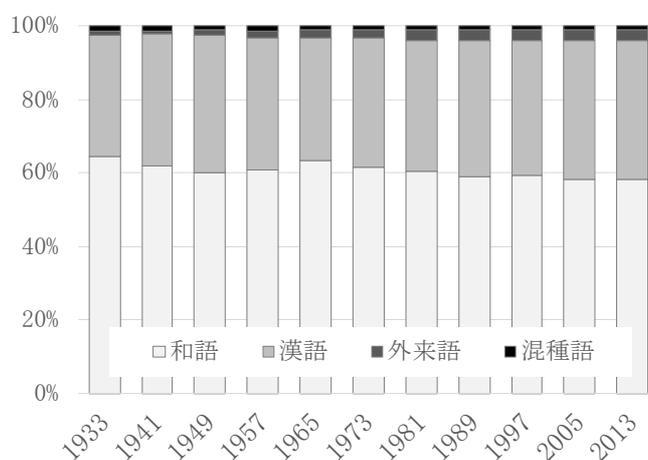


図1 SHC新聞の年別語種構成

4. 資料性と研究利用における利点

「SHC新聞」の、SHCの他のサブコーパスと比較した際の資料の特異性は、「新聞」と

² 前半は4ページから16ページ程度で構成（戦後の用紙不足により1949年は2ページ）、1965年以降の新聞では24ページから多いものでは40ページを超える（いずれも広告ページを含む）紙面で構成されている。

いうメディアにおける無個性性と公共性にある。統制的で規範性を意識した文章における文法、語彙、表記、文体といったものを観察するのに好適なデータであると言える。

SHC が収録対象とする 1933 年から 2013 年の 80 年間には、戦時、戦後、バブル、情報化といった時代の激動とそれに伴う言語変化が含まれている。例えば、言語政策と、それに伴う新聞の文体・表記改革（読売新聞社編 1994 等）といったトピックについて、その実態を具に知ることができる点は、本コーパスの特長の一つと言える。

表2 表記改革の変遷

	1933	1941	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
「國」新字率	1%	1%	98%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
「聯合」書き換え率	0%	0%	100%	100%	100%	100%	99%	99%	98%	98%	98%
「迄」平仮名率	76%	88%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

5. 利用における留意点

「SHC 新聞」を利用する際の、大きな問題点・留意点として、2 節に示した、①発行年による収録語数の差、②サンプル単位が一部のみ異なる点、③文字セットが他のコーパスや SHC の他のサブコーパスと非整合である点が挙げられる。

①に関しては、特に経年変化を捉えようとする際、検索結果の粗頻度を用いて多寡を論じることができないため、年ごとの総語数に対する調整頻度を用いて分析をする必要がある。②に関しては、サンプルの単位が統一されていないため、サンプルを単位とした集計・分析ができない。年を単位とした経年変化分析、「SHC 新聞」全体を利用した他のコーパス・サブコーパスとのメディア・媒体比較等に利用が制限される。③に関しては、文字セットが異なることで、単純な書字形の比較・集計ができない。比較の際には、対応関係にある包摂字体に読み替えた上で検討する必要がある³。

6. おわりに

本発表では、SHC 新聞の設計とデータ概要、資料特性、研究利用における利点と留意点について述べた。SHC の他のサブコーパスとの不整合や問題点については、今後改良を検討したい。

謝辞

本発表は JSPS 科研費 19H00531 による研究成果の一部である。

参考文献

- 国立国語研究所 (2023) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 V 新聞』(短単位データ 0.8)
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shinbun
 間淵洋子 (2023 予定) 『『昭和・平成書き言葉コーパス』新聞 概説書』。
 読売新聞社編 (1994) 『読売新聞百二十年史』読売新聞社、東京。

³ 比較する際に必要となる文字の対応関係（包摂関係）の一覧は、間淵 (2023) を参照されたい。

日本語学会2023年度春季大会 シンポジウム

情報技術と大規模テキスト資源がひらく日本語史研究

パネリスト

大川 孔明 (日本学術振興会)

青池 亨 (国立国会図書館)

古宮 嘉那子 (東京農工大学)

企画担当

小木曾 智信 (国立国語研究所)

北崎 勇帆 (高知大学)

趣旨

日本語の歴史研究では比較的早い時期から研究者によるコンピューターの利用が進められ、情報技術の発達とともに進化・深化を続けてきた。1980年代にはすでに古典資料の電子テキスト化の先駆的な取り組みが行われていたが、1990年代にはテキストデータ利用が一般化し、1992年の国語学会（現日本語学会）の春季大会のテーマ発表では「国語研究資料の「電子化」とその利用」が取り上げられている。2000年代になると『太陽コーパス』などの構造化されたテキストコーパスが公開され、2010年代には『日本語歴史コーパス』などの形態論情報付きのコーパスの利用が広まった。この間、データ形式も高度化し、データの規模が拡大するにつれて、その構築や活用に必要とされる技術もそれに応じて高度化してきた。

そして今日、深層学習に支えられる自然言語処理技術の発達により、日本語史研究に利用可能なデータや技術が一段と発達している。データの面では、国立国会図書館（NDL）が2021年度に、その時点で国立国会図書館デジタルコレクションから提供していたほぼ全ての明治期以降に刊行された活字のデジタル化資料約247万点（2億2300万画像）を、資料の読み取りに最適化したOCRでテキスト化する事業を実施するとともに、明治期以降の活字資料に対応したOCR（NDLOCR）の開発も行い、オープンソース（CC BY 4.0）で公開した。これらの成果物のうち、著作権保護期間の満了した図書資料28万点から作成した巨大なテキストデータについては、次世代デジタルライブラリー（<https://lab.ndl.go.jp/dl/>）を通じてダウンロード可能となっている。また、国立国会図書館デジタルコレクションでの全文検索やNDL Ngram Viewer（<https://lab.ndl.go.jp/ngramviewer/>）を通じて、ブラウザ上からも利用できる。このように、テキスト資源として利用可能なデータの規模がここ数年で飛躍的に大きくなっている。

また、自然言語処理の分野では深層学習の出現により、単語の意味を分散表現という低次

元の密なベクトルで数値化して扱うことが可能になった。その後、ニューラルネットワークの構造の改良により、単語ごとの意味ベクトルだけではなく、出現する文脈に応じた意味ベクトルを得て、語の多義性を考慮した意味の計算ができるようになった。さらに現在では、大規模言語資源から作成した事前学習モデルによって、さまざまなタスクを同じモデルの微調整によって解くことができるようになってきている。これらの知見を利用し、歴史的な資料を対象とした言葉の意味の判定システムや、言葉の意味の通時的な変化の解析システム、また古文から現代文への翻訳などの成果を上げつつある。

本シンポジウムでは、コーパスを活用した日本語史研究に取り組む若手研究者と、国立国会図書館で大規模データの構築・公開を進める図書館情報の研究者、そして深層学習技術を用いた古文の解析に取り組む自然言語処理の研究者をパネリストに迎え、それぞれの分野での知見をご発表いただく。

構成

趣旨説明

講演 1 大川孔明「日本語史研究におけるコーパス利用の現在地」

講演 1 へのコメント

講演 2 青池亨「日本語資料に対する国立国会図書館の OCR 関連事業と成果物の活用」

講演 2 へのコメント

講演 3 古宮嘉那子「近代以前の日本語を対象にした自然言語処理の紹介」

講演 3 へのコメント

休憩

パネルディスカッション・総括

①参加者コミュニケーション用サービス (Slido)

<https://app.sli.do/event/j9TYoexyyUSt4Y1jFqPqDN>

②質問・コメント投稿用フォーム (Microsoft Forms)

<https://forms.office.com/r/QCjKVjKA5F>



日本語史研究におけるコーパス利用の現在地

おおかわこうめい
大川孔明（日本学術振興会）

1. はじめに

日本語の歴史について研究するにあたって、コーパスは非常に有用なツールである。特に国立国語研究所の設計した『日本語歴史コーパス』（CHJ）が普及して以降、その価値はより顕著なものとなっている。たとえば、複数作品で特定の単語の使用例を収集しようと考えたとき、索引を用いる場合は、個々の作品ごとに索引にあたり、そのうえで個別の用例を調べる必要があったが、コーパスではそれを瞬時に終えることができる。それだけでも十分に有益なものと言えるのだが、コーパス利用はそこにとどまらない。また、コーパスならではとも言える研究方法も散見され、これによって、さまざまな事情から従来は難しかった日本語史上の問題を解決できるようになってきている。したがって、コーパスは、単なる高速用例検索ツールにとどまらない利便性を持つと言えよう。では、具体的にどのような有用なのか。

本発表では、これまでに行われてきたコーパスを利用した日本語史研究について、具体的な事例を取り上げつつ、コーパスの利用価値について言及し、そのうえで今後考えられ得るコーパスの利用法について、その私見をいくつか述べたい。

2. コーパスと日本語史研究

2.1 コーパスの概要

コーパスの価値について述べるにあたって、まずは現在広く利用されている CHJ を中心として、コーパスというツールの概要について押さえておきたい。

コーパスは、「言語の実態を過不足なく反映させるべく計画的に収集した大規模な言語データ」（『日本語学大辞典』山崎誠氏執筆「コーパス」、pp.377-378.）である。広義には、電子化されたテキストデータの集合体を指すことが多く^{注1}、たとえば新聞記事データ集や『新潮文庫の100冊』（CD-ROM版）などもその一種である。

一方で、日本語学においてより馴染みのあるのは狭義のコーパスで、単なる電子テキストの集合というだけでなく、形態論情報のような、何らかのアノテーションを付与された形式のものを指す。昨今広く普及している CHJ がそれにあたる。CHJ で付与されるアノテーションは多岐にわたり、語彙素や品詞、活用形といった基本的な形態論情報に加え、本文種別、文体等の本文情報、ジャンル、成立年等の作品情報などが挙げられる。

また、収録資料の均衡性・代表性もコーパス設計の上で重要な位置を占める。CHJ は通時コーパスという位置づけで、日本語の歴史を調査するために用いられるという目的を持つ。したがって、上代から近代にかけて、各時代の代表的な資料が満遍なく収録されている^{注2}。

2.2 コーパスの性質と恩恵

コーパスのもっとも単純かつ有用な点は、膨大なデータを対象に、一度に一瞬で検索でき

るその速度と言えらる。これは、単に用例を素早く収集できるというだけのことではない。本節では、コーパス利用によって研究上の広がりやどのように見られたのか、その事例を交えて紹介する。

① 個別の語に関する研究

岡崎友子（2022）は、コーパス開発以前でも、前・後接語との関係を見ながら、対象とする語を分析する方法は行われてきたが、開発以降、そのような手法を用いる研究が増えたと述べる。これは、単なる索引機能にとどまらず、対象前後（直前直後に限らない）の要素も含めて収集・分析可能であることで実現した、コーパスが得意とするものと言える。

富岡宏太（2017）は、中古和文を対象として、助詞カシの意味と用法について、終止形終止の例とカシの下接する例とにおける、助動詞の分布の違いから検討を行った。その結果、1. カシの上接句が、事実そのものも、事実であると確信しうるだけの根拠も他者と共有できない事柄を表すもの（非共有事項）に限られること、2. カシは非共有事項を表す句に下接し、「擬似的不定化」という意味を担い、自らの見解とは異なる可能性を認めるような発話態度を表すことを明らかにした。また、3. カシが下接しやすい助動詞の種類は、1や2と対応していること、4. カシの意味を擬似的不定化と考えると、他の活用形や、助詞ゾにカシが下接した例の説明もしやすく、先行研究との関係についても、説明が容易になることも併せて指摘した。

岡崎（2022）も述べる通り、「もし、コーパスが無ければこのような比較は、用例の抽出と分類にあまりにも手間がかかり過ぎて成すのが難しいものであった」ことは想像に難くない。文法に限らず、個別の語にアノテーションが付与されたことによって検索条件が複雑化し、それによって旧来難しかった検討方法も容易に選択できるようになった。個別の語を対象とした複雑な検索が可能というコーパスの性質によって、文法史・語史研究の分析観点がより深化したと言えそうである。

またそれと同時に、指定条件が正しければ数え間違えがないという点も重要である。その正確性を以って、本論文をより信頼できるものへと高めたとも言えよう。

② マクロな語彙・文体計量研究

個別的な要素に着目し、用例を収集する上記の使い方がある一方で、マクロな視点からの用例収集・分析というのもコーパスの得意とするところである。

大川孔明（2020）は、言語資料の叙述方法、あるいは位相などに関連する「叙述語」（ここでは、形容詞、形容動詞、副詞を対象とした）を指標として、CHJ 平安時代編Ⅰ、鎌倉時代編Ⅰ・Ⅱの収録作品を対象に、多変量解析（コレスポンデンス分析、クラスター分析）を用いて平安鎌倉時代の文学作品の文体が類型的にどのように位置づけられるのかについて検討した。その結果、平安鎌倉時代の文学作品は、叙述語によって和漢の文体対立とジャンル文体の2軸から分類でき、物語日記-和文体型（『源氏物語』など）、物語日記-漢文訓読文寄りの文体型（『今昔物語集』など）、紀行文和歌集型（『十六夜日記』など）、強紀行文和歌

集型（『海道記』）の4類型に分けられることを明らかにした。この結果は、特定文体の特有語・特徴語とされるような、文体差を強く反映している語だけでなく、多くの語に当該文体の「らしさ」が備わっていることを具体的に示すものである。

富岡（2017）と比べて非常にシンプルな検索条件（品詞指定のみ）だが、本論文では、大量の用例（数万語単位）を収集し、語ごとに述べ語数を素早く正確に集計することが求められる。また、本論文は計量的な手続きを取っている。コーパスと計量的手法の相性は非常に良く、特に今回のように大規模な調査が必要な場合はコーパスが無ければ研究自体が難しい。さらに、類型的文体研究の性質上、可能な限り多くの作品を対象にして網羅的に検討を行うことが望ましい。それはCHJを利用することによって実現可能で、類型的文体の位置づけを正確に行うことに繋がる。個別の語の比較を積み重ね、特定の言語事象について考察するという手段でなく、初めから語彙全体を対象にして検討ができるという点は、コーパスの大きく寄与するところであろう。

③ パラレルコーパスを利用した資料対照研究

用例収集以外にも、資料の性質という観点でコーパスをうまく利用した例もある。

田中牧郎・山元啓史（2014）は、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話6話のパラレルコーパスを作成し、『今昔物語集』から『宇治拾遺物語』、『宇治拾遺物語』から『今昔物語集』の双方向で語の対応付けを行った。その結果、相互に対応付けられたデータから、異なる語が対応する比率の高い語彙を抽出することで、硬い文体的価値を持つ語彙と、軟らかい文体的価値を持つ語彙とが特定された。抽出された双方の語彙について、同文説話全体（83話）の語の対応状況を分析したところ、同語が対応するか異語が対応するかの違いが、語の意味・用法によって決まる傾向があることや、その傾向が、文体的価値の硬軟の段階差に応じて層をなすように変わっていくことが解明できた。また、異語対応の場合に、他方の説話集で対応する語が特定の語に定まる場合があり、これは文体的な対立関係にある類義語と考えられることを指摘した。

文章の比較や語の文体的ルーツを辿るうえで、ある資料を、源流を同じくする、もしくは元となる資料と対照させるという方法は以前から散見される。しかしそれは、筆者が選択した対象の語が使用されているかどうか（もしくは置き換えられているか）という限定的な視点にとどまる。本論文は文章を対照させ、それぞれの資料で対応する語を抽出しており、より広い視点から、語彙の文体的価値を検討している。これは、同文説話内の語の対応関係が明瞭になってこそ行える研究であり、資料をコーパス化しなければ成り立たないものと言って差し支えなからう。

その他、N-gramを利用した探索的な研究、文の種類（地の文、会話文など）ごとの語彙研究など、コーパスの電子テキストという性質やアノテーションをうまく利用した研究が数多く見られる。紙幅の都合上、3例のみの紹介となってしまったが、大量の情報を素早く正確に処理する際にその強みを発揮することは、いずれの場合も共通する。

2.3 コーパス研究の課題

コーパスは便利なツールであることから、さまざまな研究において利用される。一方で、コーパス利用における注意点や、コーパス研究が苦手とするところも存在する。以下に、その具体例をいくつか挙げる。

① アノテーションへの依存

アノテーションは、コーパスを利用するうえでのメリットのひとつである一方で、既存規格のアノテーションが必ずしも自身の研究目的に即したものととは限らない。たとえば、CHJの接続詞は、中古・中世の接続詞について述べた京極興一・松井栄一（1973）に記載されるものと同じではない。後者を収集したい場合には単に検索キーの条件を「接続詞」とするだけでは不十分である。したがって、既存のアノテーションがどのようなかたちで付与されているのかを十分に理解したうえで、都度必要に応じた検索を心掛けることが求められる。

② 研究対象資料がコーパス化されていないといけない

現在、CHJには奈良時代から大正時代にかけて、多種多様な資料が収録されている。とはいえ、すべての歴史的な資料を収録しているわけではない。たとえば、収録作品のうちの『今昔物語集』は、天竺・震旦部にあたる巻1から巻10まではコーパス化されておらず、同資料を対象とした研究は本朝部と同様の環境で研究することは難しい状況にある。そのため、コーパス化されている資料とそうでない資料とで研究の進度や利用状況が異なる。

③ コーパス化のハードル

CHJに収録されていない資料を用いる場合、Web茶まめ、ChaSenなどの形態素解析器を使用してコーパスを自作することになる。出力データは概ね正確であるが、中にはおかしな解析結果の語が散見され、それらを目視で修正していく必要がある。修正方針は、CHJの形態論情報規程集を参照することになると思われるが、いささか複雑で、即座に応用できるとは限らない。また、形態論情報以外の、話者情報や文体情報などは、上記の解析器を用いても付与されないため、コーパス作成者自身が情報を付与する必要がある。これは、それほどまでにCHJのクオリティが高いということの裏返しでもあるのだが、コーパス化に際しての必要情報によっては多大な労力が求められるということでもある。また、コーパス化が完了したとしても、それを一般に公開できるかという別の問題も存在する。

④ 文字・表記研究に弱い

文法、語彙、文体など、さまざまな研究分野において大きな貢献を見せるコーパスであるが、現状、文字・表記研究においてはあまり利用されていない。これは、古典資料をコーパス化するにあたって、文字情報を必ずしも正確に再現できるわけではないことに起因している。特に表記研究においては、当該字間の小さな違いが重要なことがあり、コーパスのみで研究を完結させるということは現状難しいように思われる^{注3}。

3. コーパスとこれからの日本語史研究

ここでは、現在のコーパス研究においてはあまり行われてきていない、もしくは日本語史研究において取り入れられていない点を含めて、今後の日本語史研究において、どのようにコーパスを利用していけばよいか、その可能性についていくつかの提案をしたい⁴。

① 語彙史研究

語彙をマクロに捉えることがコーパスの得意とするところであることは、既に述べたとおりである。先般述べた点は文体と語彙との関係性に関したものであるが、計量的な手続きを取ることで、位相差や時代差についてもマクロな視点からの比較が容易となる。

近藤明日子(2021)は、近代書き言葉の一人称代名詞の体系と変化の実態について検討し、その際に、計量的な手続きを取り、近代における一人称代名詞の使用実態を把握している。本著は単に一人称代名詞の体系を共時的に捉えるのではなく、一人称代名詞の使用実態がどのように移り変わったのかという点もマクロに把握している。近藤(2021)と同様の、コーパスを用いた計量的な方法は、品詞という単位だけにとどまらず、さまざまな特徴を持つ要素の体系的かつ通時的な研究でも通用するものと思われる。

② 異本比較

2.2節にて、パラレルコーパスを用いた研究について言及したが、同一資料の異本も同様のかたちで比較することができる。太刀岡勇氣(2014)は、『和泉式部日記』の複数異本間の関係性と別資料(『更級日記』)との比較を計量的に行い、異本間と別資料間とでどのような言語的特徴の差が表れるのかについて言及した。同様の異本比較は、『源氏物語』や『平家物語』などで行うことも可能であり、各写本の特徴や当該写本の系統についての検討も期待できる。

③ 深層学習

深層学習については、本シンポジウムのパネリストである古宮氏をご紹介くださるので、あまり踏み込んで言及はしないが、word2vecを利用した近藤泰弘(2022a)、単語分散表現を利用して語の意味変化をマクロに捉えた相田太一(2022)などで示されるように、今後の日本語史研究への貢献が期待される。

4. おわりに

コーパス研究は、いまだ発展の余地の多く残る分野である。それはコーパスそのものの課題の場合もあれば、活用方法の開拓という場合もある。ただ、上で述べたように、既に多くの日本語史研究において重要な役割を担っていることは紛れもない事実である。今後、コーパスがより有効に活用され、これまでに難しかった日本語史上の問題の解決やコーパスを利用することで新たな疑問が捉えられるようになることを期待したい。

注

- 注1 必ずしも電子化されている必要はないが、現在「コーパス」という術語を使用する場合、一般的に電子化されていることを前提としている。本発表においても、「コーパス」という術語を用いる際には、電子コーパスを指すこととする。
- 注2 資料性に関しても、たとえば平安時代であれば仮名文学資料、訓点資料、明治・大正時代であれば雑誌、新聞、近代小説などが収録されており、特徴の差異に配慮した選択がなされている。
- 注3 菅野倫匡（2021）などが文字史研究におけるコーパス利用の例として挙げられるが、それほど多いわけではない。
- 注4 歴史コーパスの今後の可能性については、近藤泰弘（2022b）、橋本行洋（2022）などにおいても言及されているので、こちらも参照されたい。

参考文献

- 相田太一（2022）「単語分散表現の結合学習による通時的な単語の意味変化の検出」『「現代語の意味の変化に対する計量的・統計力学的アプローチ」シンポジウム』統計数理研究所・国立国語研究所主催
- 大川孔明（2020）「叙述語から見た平安鎌倉時代の文学作品の文体類型」『計量国語学』32-6 pp.331-345.
- 岡崎友子（2022）「コーパスによる中古・中世語の研究」青木博史・岡崎友子・小木曾智信（編）『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房 pp.3-18.
- 菅野倫匡（2021）「語種の観点から見る漢字含有率の安定要因—芥川賞作品の分析を通して—」『計量国語学』32-8 pp.479-495.
- 京極興一・松井栄一（1973）「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院 pp.90-136.
- 近藤明日子（2021）『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』勉誠出版
- 近藤泰弘（2022a）「「意味の語形変化」をめぐって」『ことばの波止場』Vol.11 国立国語研究所 <https://kotobaken.jp/digest/11/d-11-11/>（2023年3月26日確認）
- 近藤泰弘（2022b）「中古語の資料とコーパス」青木博史・岡崎友子・小木曾智信（編）『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房 pp.19-33.
- 太刀岡勇氣（2014）「中古日記文学の計量国語学的分析と異本間の関係性の客観分析—『和泉式部日記』と『更級日記』を題材に—」『計量国語学』29-6 pp.187-210.
- 田中牧郎・山元啓史（2014）『「今昔物語集」と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応—語の文体的価値の記述—』『日本語の研究』10-1 pp.16-31.
- 富岡宏太（2017）「中古和文の助詞カシ」『日本語の研究』13-4 pp.68-84.
- 橋本行洋（2022）「近代語の資料とコーパス」田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信（編）『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房 pp.23-47.

日本語資料に対する国立国会図書館の OCR 関連事業と成果物の活用

国立国会図書館電子情報部電子情報企画課次世代システム開発研究室 青池亨

1. はじめに

機械学習技術の進展を受けて、近年の光学文字認識（OCR：Optical Character Recognition）の性能は飛躍的な向上を遂げた。OCR を用いたデジタル化資料の高品質なテキスト化と、OCR テキストデータを利用した全文検索サービスの拡充は、資料を用いて行われ調査研究活動の場において、効率化や省力化の観点で大きな可能性を秘めている。

2021 年度、国立国会図書館（NDL）は、2020 年度補正予算（第 3 号）を用いたデジタル化事業の一環として、外部委託による OCR 関連事業を実施した。本稿の前半ではこの事業について詳説するとともに、2022 年 12 月に国立国会図書館デジタルコレクションにおいて提供を開始した全文検索機能等、事業の大きな目的であった NDL のサービスとの関係について説明する。

また、NDL 電子情報部電子情報企画課次世代システム開発研究室（次世代室）は、先進情報技術を応用した新しい図書館サービスの実現をミッションとする部署である。次世代室では、OCR 関連事業の目的である全文検索機能の実現といった当初想定していた成果を超えて、更なる図書館サービスの利便性向上のため、事業の成果物を応用した実験サービスを NDL 職員自らが開発して提供している。本稿の後半では、既に一般向けに公開した「プラス α 」の実験サービスについて紹介する。

2. 2021 年度の OCR 関連事業について

本事業は、NDL が当時提供していた明治期以降に出版された活字の日本語のデジタル化資料ほぼ全て約 247 万点を OCR によってテキスト化する「OCR テキスト化事業」と、今後 NDL がデジタル化する資料のテキスト化に利用する OCR そのものを開発する「OCR 処理プログラム研究開発事業」という 2 つの事業を外部委託にて並行して実施したものである。本項では、事業の背景を説明した後、それぞれの事業について説明する。

2.1. 事業の背景

2020 年末時点で NDL においてデジタル化が完了し、国立国会図書館デジタルコレクションから提供を行っていた資料の内訳は図書資料約 97 万点、雑誌資料約 132 万点、昭和 27 年までに発行された官報約 2 万点等であり、昭和半ば頃より前に出版された資料が半分近くを占めていた。これらの資料や今後 NDL がデジタル化する資料をテキスト化して全文検索等に活用するにあたり、人手による校正作業等の実施は大きなコストを要することから、OCR 処理によって得られたテキストデータをそのまま利用できることが必須の要件であった。

NDL のデジタル化資料をサンプリングして事前調査を実施したところ、既存の OCR ソフトウェアやクラウド OCR サービスは、出版年代が最近の刊行物に対しては極めて高い認識性能でテキスト化することができるが、出版年代が過去へと遡るにつれて、認識性能が大きく低下することが確認された。読み取りの誤り方を分析した結果、昭和半ば頃より前に出版された資料は、紙面のレイアウトが現在と大きく異なっていたり、現在の字体とは異なる旧字体等で記述されていたりすることが原因と推察でき、一般的な OCR サービスとしての需要の乏しさからこうした古い紙面の学習データの数量が不足しているために正しく読み取りできなかったものと考えられた。

これらの分析結果から、NDL のデジタル化資料を用いた学習用データセットを作成し、AI OCR に対して NDL のデジタル化資料に性能を最適化させることで、既存の OCR ソフトウェアやクラウド OCR サービスが不得意な古い資料のテキスト化精度を大きく改善できると考えた。そこで、「OCR テキスト化事業」では、既存の AI OCR を学習させて最適化することとし、また、「OCR 処理プログラム研究開発事業」では、機械学習技術を取り入れて NDL が自由に利用・カスタマイズ可能な OCR 開発することとした。

2.2. OCR テキスト化事業

OCR テキスト化事業では、2020 年末時点で国立国会図書館デジタルコレクション（NDL デジタルコレクション）から提供していたデジタル化済み資料のほぼすべて（約 247 万点、2.2 億画像）（表 1）について、既存の OCR を用いて全文テキスト化する作業を行った。

【表 1】 OCR テキスト化事業の対象資料内訳

コレクション名称	コレクション概要	資料概数（点）	画像数
雑誌	明治期以降に刊行された雑誌（刊行後5年以上経過したもの）	1,320,000	72,462,853
図書	明治期以降、1968年までに受け入れた図書、震災・災害関係資料の一部（1969年以降に受け入れたものを含む。）	973,000	137,728,493
博士論文	1990～2000年度に送付を受けた論文	149,000	12,449,873
官報	1883（明治16）年7月2日（創刊）～1952（昭和27）年4月30日に発行された官報	21,000	387,962
録音・映像関係資料-脚本	日本脚本アーカイブス推進コンソーシアムから寄贈された1980年以前の放送脚本（テレビ・ラジオ番組の脚本・台本）の一部	3,000	137,138
地図	明治期から昭和前期までに国内で刊行された地図資料	600	566
特殊デジタルコレクション-帝国図書館文書	国立国会図書館の源流の一つである帝国図書館の文書資料	200	27,838
(合計)		2,466,300	223,194,723

古い刊行年代の NDL のデジタル化資料に最適化させるため、OCR テキスト化事業では、事業の前半に受託者の保有する商用 OCR の改善作業を実施し、NDL が実施する性能試験に合格後、事業の後半で合格した OCR を用いてテキスト化作業を実施する、と二段階で実施した。データシートや報告書を含む事業の詳細説明については、次世代室が運営する NDL ラボのページ（https://lab.ndl.go.jp/data_set/ocr/r3_text/）から公開しているため、参照されたい。

OCR テキスト化事業における定量的な文字認識性能試験の方法について簡単に紹介する。出版年代及び資料の種類によって分類した 33 の評価区分のそれぞれについて、既存の複数

の商用 OCR（商用 OCR ソフトウェアやクラウド OCR サービス）によりサンプル資料のテキスト化を行って文字認識性能を評価し、各評価区分において最も高かった文字認識性能の値をそのまま目標値に採用することとした。文字認識性能試験の合格基準としては 33 区分のうち 30 区分以上においてこれらの目標値を上回ることを求めた。つまり、改善作業後に文字認識性能試験に合格するという事は、ほぼ全ての出版年代において主要な競合サービス以上の高い品質でテキスト化が行える文字認識性能を有しているということになる。今回の OCR テキスト化事業において改善作業を実施した OCR は、33 区分中 32 区分で目標値を上回った。なお下回った 1 区分は、1970 年代に刊行された雑誌で、目標値 0.98 に対して測定値 0.9721 と、0.0079 という僅差で達成できなかったものであり、当該区分が大きく認識性能を損なった結果ではなかった。1870 年以降に出版された評価対象の出版年代の資料に対し、F 値（適合率と再現率の調和平均）による評価において平均 0.968 という極めて高い認識性能を有しており、NDL が全文検索サービスに利用するうえで十分な品質に到達したと考えている。

改善作業後の OCR で作成した約 247 万点、2.2 億画像分のテキストデータは、2022 年 12 月にリニューアルした NDL デジタルコレクションの全文検索機能において利用提供を開始している。また、2023 年 3 月には視覚障害者等を対象として、全文テキストデータの提供が開始されている。

2.3. OCR 処理プログラム研究開発事業

OCR 処理プログラム研究開発事業では、単に今後 NDL がデジタル化する資料のテキスト化に利用する OCR の開発を目的とするだけでなく、OCR テキスト化事業のようにベースとなる商用 OCR が存在しないフルスクラッチな開発であることの利を生かして、利用する外部ライブラリのライセンスや権利処理についても重視し、寛容型のオープンソースソフトウェアとして NDL から公開できる成果物を求めたことが大きな特徴である。

データシートや報告書を含む事業の詳細説明については NDL ラボのページ (https://lab.ndl.go.jp/data_set/ocr/r3_software/) から公開しているためこちらも参照されたい。

OCR 処理プログラム研究開発事業における定量的な文字認識性能試験の方法について簡単に紹介する。「2.2. OCR テキスト化事業」において説明した手法と同様に、出版年代及び資料の種類によって分類した 33 の評価区分のそれぞれについて、既存の複数の商用 OCR の文字認識性能を評価し、各評価区分における F 値の中央値を目標値に採用することとした。中央値を利用したのは、個性的な資料等の外れ値の影響を軽減するためである。合格基準としては、既存の商用 OCR が近年の出版物に対してはほぼ正確なテキストデータを作成可能であることを考慮し、1970 年代以降に刊行された雑誌からなる 3 区分を除いた 30 区分においてこれらの目標値を上回ることを求めた。今回の OCR 処理プログラム研究開発事業において開発した OCR は、1990 年代に刊行された雑誌を除く 32 区分において目標値を上回った。1870 年以降に出版された評価対象の出版年代の資料に対し、F 値による評価にお

いて平均 0.954 という非常に高い認識性能を有しており、NDL が今後デジタル化資料のテキスト化に利用するうえで必要な品質に到達したと考えている。

開発した OCR は「NDLOCR」と名付けて、NDL ラボの GitHub アカウントから CC BY ライセンスで公開している (https://github.com/ndl-lab/ndlocr_cli)。開発に当たって NDL のデジタル化資料から作成した機械学習用データセットについても、著作権保護期間が満了した資料から作成したものについては「2.2. OCR テキスト化事業」において作成したデータセットと併せてパブリックドメイン扱いで公開している。

2021 年度の事業は実施期間が 1 年間に限られていたため、幅広い出版年代を満遍なく全文検索用途のテキスト化できる機能開発を優先した結果として、行同士の読み順序については正しく並べることができないことや、近年刊行された複雑なレイアウトの紙面等には商用 OCR と比較して文字認識性能が劣ることが課題として残った。

2022 年度はこれらの課題に対応し、視覚障害者等用の読み上げにより適したテキストデータを作成できるよう NDLOCR を改善する追加開発を実施した。追加開発後の NDLOCR についても近日公開する予定である。

3. OCR 関連事業の成果を活用した実験サービスについて

次世代室では、「2. 2021 年度の OCR 関連事業について」で紹介した外部委託による事業以外にも、内製による研究開発によって各種の実験サービスの提供を行っている。本稿では、OCR テキスト化事業の成果物を活用した実験サービスである「NDL Ngram Viewer」と、OCR 処理プログラム研究開発事業の成果物を二次利用した実験サービスである「次世代デジタルライブラリーにおける古典籍資料の全文検索機能」について紹介する。

3. 1. NDL Ngram Viewer

「2.2. OCR テキスト化事業」の成果物を利用した全文検索は、NDL デジタルコレクションにおける提供に 1 年程度先行して、次世代室が開発・運用している実験サービスである次世代デジタルライブラリーにおいて、著作権保護期間満了図書資料約 28 万点に限定した形で試験的な機能提供を開始していた。

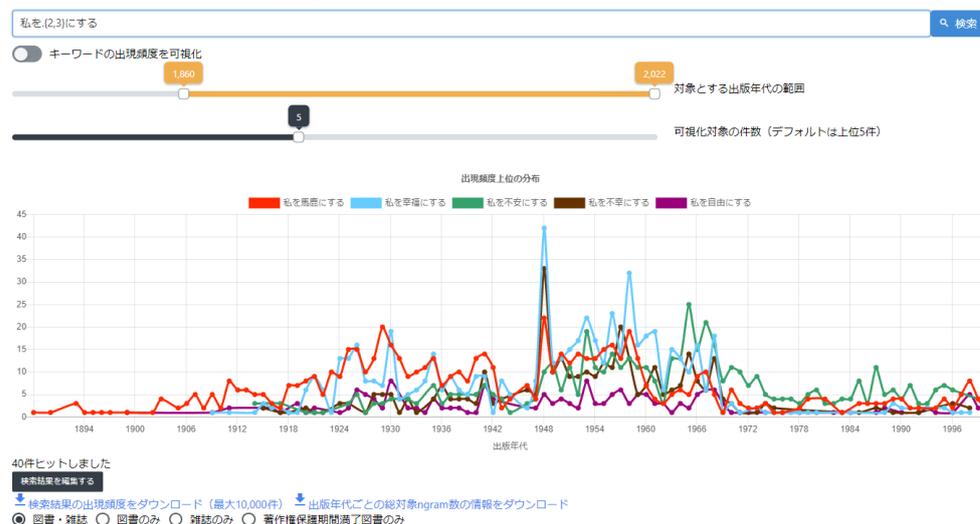
この先行的な試みの中で、検索時にヒットする情報が大幅に増加したことで、調べたい対象と関係が薄いノイズとなる情報も増え、利用者が必要とする資料が埋もれてしまうという新たな課題も浮かび上がっていた。具体的な例としては、キーワード検索において数千件ヒットした検索結果から必要な資料を人の目で確認して選抜することは多大な労力を要し、現実的ではないことや、逆に表記ゆれへの考慮が不十分なために本文検索にヒットせずに必要な資料を見落としてしまうことが挙げられる。

次世代室は、こうした課題を一定程度緩和するための道具作りにはニーズがあると判断し、利用者の労力を抑えて大量の情報から効率的に目的の資料に辿りつけるよう、膨大な情報の中から必要な検索条件に「当たり」をつけることのできる手段を提供することを企図し

て、全文検索サービスとは別に、検索結果の可視化ときめ細かな検索クエリのチューニングをインタラクティブに繰り返せるような実験サービスの開発を行った。

2022年5月に公開したこの実験サービスは、NDL Ngram Viewer と称し、Google Books Ngram Viewer に着想を得た日本語版 ngram viewer であり、テキストデータを対象として語句の出現頻度・比率を出版年代の時系列で可視化できる機能を有する。公開当初は著作権保護期間が満了した図書 28 万点を対象としたものだったが、2023 年 1 月に範囲を拡大し、「2.2. OCR テキスト化事業」において作成した図書資料約 97 万点、雑誌資料約 132 万点のテキストデータを対象にしている。

また、Google Books Ngram Viewer が対応していない日本語資料のテキストデータを扱うに当たって、先に述べた日本語特有の表記ゆれを束ねて探索できるよう、正規表現検索をサポートしている点に特色がある（図 1）。開発に当たって実施した分析や講じた工夫については、発表資料「日本語資料の全文テキストデータ分析ツール NDL Ngram Viewer の開発について」（<https://lab.ndl.go.jp/pdf/about/jinmoncon2022.pdf>）を参照されたい。



【図 1】正規表現「私を.{2,3}にする」をクエリとして出現頻度を可視化した結果

3.2. 次世代デジタルライブラリーにおける古典籍資料の全文検索機能

江戸期以前の和古書や清代以前の漢籍等、デジタル化済みの古典籍資料約 8 万点については、くずし字や異体字、変体仮名等が使われており、一般的な OCR では読み取りが困難な資料が多く含まれるため、ここまで述べた OCR 事業においてはテキスト化の対象としていなかった。

古典籍資料を対象とした OCR の先行研究としては KuroNet がある。またユーザが撮影した個々の古典籍資料の画像を判読するアプリケーションとしては「miwo」や「ふみのは」が存在する。これらは提供元が運用するサーバ上に画像を送信し、読み取り結果であるテキストデータを受信する形式のサービスだが、NDL のように多くの古典籍資料を保有する機関は、大量の画像に対してテキスト化処理を行う必要があることから、既存のアプリケーシ

ョンを利用する形では全文検索サービスの実現が困難であった。

そこで大量の古典籍資料画像に対して高速にテキスト化処理を行い、古典籍資料の全文検索サービスを提供するため、古典籍資料のための OCR の開発を行った。開発にあたって NDLOCR のソースコードや手法を利用し、かつ、これまで次世代室で実施してきた調査研究活動の成果と組み合わせて、これにオープンなライセンスで公開されている既存の翻刻データ等の古典籍資料に係るプロジェクトのデータ資源を加工して利用している。2022 年に開発したこの OCR は、「NDL 古典籍 OCR」の名称で NDL ラボの GitHub アカウントから公開している (https://github.com/ndl-lab/ndlkotenocr_cli)。また、古典籍資料を翻刻するクラウドソーシングプラットフォームである「みんなで翻刻」が CC BY SA ライセンスで提供している「みんなで翻刻データ」を加工して作成した機械学習用データセットについても、「OCR 学習用データセット (みんなで翻刻)」と名付けて CC BY SA ライセンスで公開している (<https://github.com/ndl-lab/ndl-minhon-ocrdataset>)。

開発した NDL 古典籍 OCR を活用することで、デジタル化済みの古典籍資料約 8 万点全件について 2023 年 1 月に OCR テキストデータの作成を完了し、次世代デジタルライブラリーにおいて古典籍資料 8 万点の全文検索機能及び OCR テキストデータのダウンロード機能の提供を開始した。また、次世代デジタルライブラリーでは、OCR テキストデータを行単位で原画像上に重ね合わせて表示する機能についても提供しており、OCR 結果の正確性の確認や、資料読解の補助として利用することができる。

4. おわりに

本稿で説明した通り、2021 年以降、NDL は外部委託による OCR 関連事業や実験サービスの内製開発を通して、提供する日本語のデジタル化資料のアクセス可能性を高めるために多くの情熱と労力をかけてきた。本稿が、パワーアップした NDL のサービスに対する日本語研究者への周知のきっかけとなり、研究内容を一層高度化するための一助となれば幸いである。

参考文献

Michel, Jean-Baptiste, et al. "Quantitative analysis of culture using millions of digitized books." *Science* 331.6014 (2011): 176-182.

青池亨. "日本語資料の全文テキストデータ分析ツール NDL Ngram Viewer の開発について." *じんもんこん 2022 論文集* (2022): 79-84.

Clanuwat, Tarin, Alex Lamb, and Asanobu Kitamoto. "KuroNet: Pre-modern Japanese Kuzushiji Character Recognition with Deep Learning." 2019 International Conference on Document Analysis and Recognition (ICDAR). (2019): 607-614.

青池亨. "古典籍資料をテキスト化する OCR の開発及び全文検索サービスの実験的提供." *情報処理学会第 85 回全国大会*(2022)

近代以前の日本語を対象にした自然言語処理の紹介

東京農工大学 古宮嘉那子*

概要

日本語歴史コーパスの整備が進むにつれて、これを利用した自然言語処理の研究が進みつつある。主に、語義曖昧性解消と機械翻訳を中心に、近代以前の日本語を対象とした自然言語処理の研究を紹介する。

1. はじめに

自然言語処理の研究には言語資源が必要である。自然言語処理の技術は、統計的または確率的処理から、ベクトル空間モデルと機械学習へ、さらにその中でも深層学習 (deep learning) へと進化を遂げてきた。これらの技術の進化は、必要とする言語資源のデータ量も増大させた。そのため、この技術の進化はまさに、入手可能な言語資源の量が増えたために可能になったものであると言える。

その一方で、性能の良いシステムを作るためには、処理の対象となる分野または領域 (domain) のコーパスを利用することが重要性であることが強く認識されるようになった。これに伴い、古くは主に新聞を対象とすることが多かったが、ニュース記事や Twitter などの SNS、金融関係文書など、多様なコーパスが構築されるようになってきた。こうした時代に、日本語歴史コーパス (CHJ) (国立国語研究所 2022) の構築が行われ、ついに昨今では、近代以前の日本語を対象とした自然言語処理が可能になっている。

実は、現代語以外の言語資源を対象とした自然言語処理は、古くは「新たな文書が生成される可能性がほとんどないため、システムを作成するまでもなく、エキスパートが人手ですべてに注釈をつければよい」という考え方をする研究者も多く、注目されてこなかった。しかし、すべての近代以前の日本語文書に対して、人手で注釈をつける手間も決して無視できないことから、現在では近代以前の日本語を対象とした自然言語処理の研究の意義が見直されていると筆者は考える。

本稿では、近代以前の日本語を対象とした自然言語処理の研究を、筆者の研究室で行った語義曖昧性解消と機械翻訳を中心に紹介する。

2. 近代以前の日本語を対象とした語義曖昧性解消

語義曖昧性解消とは、文中の多義語の語義 (意味) を一意に決定するタスクである。例えば、「この手を使おう」という文における「手」は「体の一部」ではなく、「方法」という意味である。「手」は多義語であり、語義曖昧性解消では、その意味を文脈から一意に決定する。語義は、辞書が与えられることで定義される。以降、本稿では『分類語彙表増補改訂版』

* kkomiya@go.tuat.ac.jp

(国立国語研究所 2004)を利用した。一般的に実験では、コーパスに人手で語義をアノテーションした語義タグ付きコーパスを用意し、その一部、例えば9割を機械学習に用いて予測システムを作り（正確には、機械学習を利用する場合、この学習用のデータの一部を機械学習のパラメータをチューニングするために利用することが多い）、残りの1割の語義をどの程度正確に当てられるかを見る。自然言語処理の研究では、特定のコーパスのタグ付けを行うことよりも、よりよい技術を開発すること自体が研究の目的となる。そのためには、自動的な答え合わせを行うことで、様々な技術の性能を比較する必要がある。そこで、語義タグ付きコーパスの一部をテストに使うて答え合わせを行い、その正確性を競うことで、よりよい技術かどうかを評価するのが一般的である。

語義曖昧性解消は主に、コーパス中に頻出する見出し語のみを対象とした *lexical sample task* と、コーパス中の全単語を対象とする *all-words word sense disambiguation* (*all-words WSD*) の二種類に大別される。語義曖昧性解消は、機械学習を用い、基本的には見出し語ごとに語義の判別システムを作成する。機械学習には大量の用例を必要とするため、もともとは十分な学習用データを確保できる *lexical sample task* しか解けなかった。しかし、技術の進歩により、より実用的な用途が期待される *all-words WSD* のシステムも研究されるようになった。

また、語義は、コーパスの分野によってその出現分布が異なる。例えば「開く」の語義は、ブログでは「(箱などを)開ける」などの意味が多いが、国会白書では「(会議を)開催する」の意味が増える。機械学習は学習用のデータに依存して結果を変えるため、例えば学習にブログを使い、国会白書の語義を予測しようとするすると正解率が著しく下がる。このため、ある分野のコーパスで機械学習を行ったシステムを利用して別の分野のコーパスを対象とした処理を行う際、正解率を落とさないように工夫する技術の研究が盛んになった。これらの技術を領域適応 (*domain adaptation*) 技術と呼ぶ。もともとは、同じ現代語同士で、異なる分野間の適応を目的としていたが、この技術を使えば、コーパスの分野間の違いではなく、時代間の違いによるシステムの性能悪化を防ぐことができると期待された。特に、近代以前の日本語のコーパスの整備は、現代の日本語のコーパスに比べると遅かったため、筆者の研究室では、現代の日本語のコーパスで機械学習を行い、この領域適応技術を用いて、近代以前の日本語に適応するという「通時適応」を行うことで語義曖昧性解消を行うこととした。

(Tanabe et al., 2018) は語義曖昧性解消の論文ではないが、関連した研究であるため紹介する。この論文は、筆者の研究室の卒業研究をまとめたものである。CHJの五作品(竹取物語、方丈記、徒然草、土佐日記、虎明本)中に現れる語義の種類を(1)辞書に載っていないもの、(2)辞書には載っているが、現代ではその見出し語がその語義を持たないもの、(3)辞書に載っていて、なおかつ現代でもその意味で使っているという表記があるもの、の三種類に分けるシステムを作成したという報告である。本論文を含め、近代以前の日本語の語義曖昧性解消には分類語彙表番号を付与した『日本語歴史コーパス』データ(浅原

ら, 2022) を利用した。分類器にはサポートベクターマシン (support vector machine, SVM) を利用し、機械学習の手掛かりとなる素性には、単語の出現形、発音、読みなどの基本素性と、深層学習によって計算される単語ベクトルである Word2Vec を使用し、基本素性の種類や、Word2Vec (Mikolov et al., 2013) のベクトル長を変えてより正確な分類ができる素性の組み合わせを探した。Word2Vec とは、単語の意味を、深層学習を用いて、見出し語ごとにベクトルとして表現する技術である。これにより、単語ごとの意味的な近さが数値的に測れるようになった。結論として、基本素性はすべて利用の上、200 次元の Word2Vec を利用した際の分類の正解率が最もよかったと報告している。

(Komiya et al., 2022a) では、同じく CHJ を用いて語義曖昧性解消の Lexical Sample Task の通時適応を行った。現代文のコーパスとしては現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) (Maekawa et al., 2014) を利用し、分類器には SVM、素性には Word2Vec を用いた。Word2Vec は語義タグのないデータを利用して作成できるため、近代以前の日本語用には小学館コーパスから、現代の日本語用には国語研ウェブコーパス (NWJC) から作成した。機械学習に利用する用例を(1)BCCWJ と CHJ の両方のものを利用する場合(2)BCCWJ のみを利用する場合(3)CHJ のみを利用する場合の三タイプについて検証し、なおかつ素性を(a) 小学館新編日本古典文学全集から作成したもの、(b)NWJC (Asahara et al. 2014) から作成したもの (NWJC2Vec) (新納ら, 2017)、(c)上記(a)を BCCWJ で fine-tuning したものの、(d)上記(b)を CHJ で一括に fine-tuning したものの、(e) 上記(b)を CHJ で現代から時代をさかのぼる順に fine-tuning したものの五種類を試した。ここで、fine-tuning とは、深層学習を行う際に、すでに学習されたパラメータを初期値として設定しておき、別の、一般的にはテストデータに近い用例集合でパラメータの微調整を行うという技術である。その結果、(3)CHJ のみを利用し、(c) 小学館コーパスから作成した Word2Vec を BCCWJ で fine-tuning した素性を利用する場合が最もよいことが分かった。ただし、CHJ だけを利用してシステムに比べて、正解率のマクロ平均 (見出し語ごとの平均) は超えることができたが、マイクロ平均 (出現ごとの平均) は超えられなかったため、Word2Vec とその fine-tuning を利用した通時適応技術の貢献は部分的であった。

(Komiya et al. 2022b) では、同じく CHJ を用いて語義曖昧性解消の Lexical Sample Task の通時適応を行った。Word2Vec の fine-tuning と SVM の代わりに、現代の日本語により学習された Bidirectional Encoder Representation from Transformer (BERT) (Devlin et al. 2019) モデルを CHJ で fine-tuning した結果、CHJ だけを利用したシステムの正解率を大幅に上回ることを報告している。BERT とは、Google の研究チームによって発表された革新的な技術であり、これまでと比較にならないほどの大規模な言語資源を利用し、アノテーターを必要としない、単語の穴あき部分の予測タスクと、次の文の予測タスクを利用して言語構造をパラメータに落とし込んだ、事前学習済みモデルである。これを初期値に利用して、それぞれのシステムに合うように fine-tuning することで、様々なシステムの性能を格段に押し上げた。本研究では、現代の日本語で学習された BERT を CHJ で fine-tuning すること

で、近代以前の日本語の語義曖昧性解消の通時適応が達成されたと言える。また、データ量が多い設定においては、文書分類タスクとのマルチタスク学習を行うことでさらに正解率が上がることを示した。すべての単語について、初期値に前の単語で学習したパラメータを初期値に使う手法についても実験を行ったが、こちらは有効ではなかったことについても報告している。

(浅田, 古宮, 2023) では、同じく現代の日本語の BERT を CHJ で fine-tuning することで今度は all-words WSD の実験を行った。こちらも 84%以上という高い正解率を示している。ただし、学習データの少ない単語については、正解率が低いことから、辞書の第一語義などを決め打ちで答える手法と併用することで、さらなる正解率の向上の可能性がある。今後、最もよく知られた第一語義か否かを判別するシステムなどに応用できるのではないかと考えている。

3. 近代以前の日本語を対象とした機械翻訳

機械翻訳は、自然言語処理の研究のうちこの 10 年間に最も研究が進んだ分野のひとつである。1 節で書いたように、自然言語処理の研究は、統計的または確率的処理から、ベクトル空間モデルと機械学習へ、さらにその中でも深層学習へと進化を遂げてきた。機械翻訳はこれを象徴する研究分野であったと言える。統計的処理を用いた統計的機械翻訳の時代から、深層学習を用いた機械翻訳(ニューラル機械翻訳)へと発展し、その深層学習の技術も、Long Short Term Memory (LSTM) というモデルから、Transformer、さらに 2 節で説明した BERT に代表される事前学習済みモデルの利用へと進化した。ただし翻訳は文を入力として文に変換する処理であり、これは暗号化部分(エンコーダ)と復号化部分(デコーダ)を必要とする。そのため、エンコーダ部分のみに特化して学習している BERT ではなく、両方を備えて学習している Text-To-Text Transfer Transformer (T5)(Raffael et al., 2020) や BART (Lewis et al., 2020) と呼ばれるモデルを利用するほうが直感的である。大抵の機械翻訳の研究では、英語から日本語など、現代の言語間の翻訳が多いが、近代以前の日本語を現代の日本語に翻訳する機械翻訳の研究も存在する。

(星野ら, 2014) は統計的機械翻訳を用いて、近代以前の日本語を現代の日本語に翻訳するシステムを作成している。この論文は小学館コーパスの原文と訳文を対照コーパスとみなして対訳データを作成し、翻訳を行った。

(Takaku et al., 2020) は(星野ら, 2014) に倣って行った筆者の研究室の学生の卒業研究をまとめたものである。本論文では、LSTM を利用して近代以前の日本語を現代の日本語に翻訳する機械翻訳の研究を行った。この論文では、LSTM の入力となる単語分散表現を、大規模単言語コーパスで事前学習して初期化する手法をとった。本手法は、十分な規模の平行コーパスがない言語対において、翻訳モデルの性能を向上させるために行われる手法である。また、この際、現代の日本語で事前学習したのち、近代から古代に向けて時代順に fine-tuning する手法についても実験を行った。時代順に fine-tuning した手法は、一括の fine-tuning

の結果を越したが、ニューラル機械翻訳では、学習に必要なデータが膨大であることが知られており、限られた言語資源しか入手できない近代以前の日本語の翻訳の精度自体は、(星野ら, 2014) を超すことができなかった。

(白井, 古宮, 2023) は大規模事前学習モデルである T5 を利用し、学習データの不足という問題を解決しようとした論文である。この論文では、逆翻訳という技術を用いてさらなる翻訳性能の改善も試みている。その結果、逆翻訳は有効ではなかったものの、T5 により、(星野ら, 2014) に迫る近代以前の日本語の翻訳性能が得られることを示した。

4. おわりに

本論文では、近代以前の日本語を対象にした自然言語処理について、語義曖昧性解消と機械翻訳のタスクを中心に紹介した。そのほか、筆者の知る CHJ を利用した研究として、東京都立大学小町研究室の (相田ら, 2020) (Kobayashi et al., 2021) (Aida et al., 2021) (Inoue et al., 2022)(井上ら, 2022)などがある。これらは、単語の意味が通時的にどのように変化してきたかを検出する研究であり、BERT や PMI ベースの手法など様々な手法が提案されている。

参考文献

- 国立国語研究所 (2022). 『日本語歴史コーパス』.
- 国立国語研究所 (編) (2004). 『分類語彙表増補改訂版』 大日本図書.
- Aya Tanabe, Kanako Komiya, Masayuki Asahara, Minoru Sasaki and Hiroyuki Shinnou (2018). “Detecting Unknown Word Senses in Contemporary Japanese Dictionary from Corpus of Historical Japanese.” JADH 2018, pp. 169-170,.
- 浅原 正幸, 池上 尚, 鈴木 泰, 市村太郎, 近藤 明日子, 加藤 祥, 山崎 誠 (2022). 「分類語彙表番号を付与した『日本語歴史コーパス』データ」 日本語学会 2022 年度春季大会, pp. 103-108
- Mikolov, T., Chen, K., Corrado, G. and Dean, J. (2013). “Efficient Estimation of Word Representations in Vector Space.” ICLR Workshop paper.
- Kanako Komiya, Aya Tanabe, Hiroyuki Shinnou (2022a). “Diachronic Domain Adaptation of Word Sense Disambiguation for Corpus of Historical Japanese Using Word Embeddings.” NINJAL Research Papers, vol. 23, pp. 29-57.
- Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den (2014). “Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese.” Language Resources and Evaluation, 48, pp. 345-371.
- Asahara, Masayuki, Kikuo Maekawa, Mizuho Imada, Sachi Kato and Hikari Konishi (2014) Archiving and analysing techniques of the ultra-large-scale web-based corpus project of NINJAL, Japan. Alexandria: The Journal of National and International Library and Information Issues 25 (1-2): 129-148.
- 新納 浩幸, 浅原 正幸, 古宮 嘉那子, 佐々木 稔 (2017). nwjc2vec: 国語研日本語ウェブコーパス

- から構築した単語の分散表現データ, 自然言語処理, Vol. 24, No. 5, pp. 705-720.
- Kanako Komiya, Nagi Oki and Masayuki Asahara (2022b). “Word Sense Disambiguation of Corpus of Historical Japanese Using Japanese BERT Trained with Contemporary Texts.” PACLIC 2022.
- Devlin, Jacob Ming-Wei Chang, Kenton Lee and Kristina Toutanova (2019) BERT: Pre-training of deep bidirectional transformers for language understanding. Proceedings of the 2019 Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies (NAACL-HLT 2019), 4171–4186.
- 浅田宗磨, 古宮嘉那子(2023).日本語歴史コーパスの All-words WSD, 言語処理学会第 29 回年次大会.
- Colin Raffel, Noam Shazeer, Adam Roberts, Katherine Lee, Sharan Narang, Michael Matena, Yanqi Zhou, Wei Li, Peter J Liu, et al (2020) . “Exploring the limits of transfer learning with a unified text-to-text transformer.” J. Mach. Learn. Res., Vol. 21, No. 140, pp. 1–67.
- Mike Lewis, Yinhan Liu, Naman Goyal, Marjan Ghazvininejad, Abdelrahman Mohamed, Omer Levy, Veselin Stoyanov, Luke Zettlemoyer (2020) . “BART: Denoising Sequence-to-Sequence Pre-training for Natural Language Generation, Translation, and Comprehension.” ACL 2020, pp. 7871-7880.
- 星野 翔, 宮尾 祐介, 大橋 駿介, 相澤 彰子, 横野 光 (2014) . 対照コーパスを用いた古文の現代語機械翻訳, 言語処理学会第 20 回年次大会, pp. 816-819.
- Masashi Takaku, Tosho Hirasawa, Mamoru Komachi, Kanako Komiya (2020). “Neural Machine Translation from Historical Japanese to Contemporary Japanese Using Diachronically Domain-Adapted Word Embeddings.” PACLIC 2020, pp. 534–541.
- 白井久生, 古宮嘉那子 (2023). T5 を用いた古文から現代文への翻訳, 言語処理学会第 29 回年次大会.
- 相田太一, 小町守, 小木曾智信, 高村大也, 坂田綾香, 小山慎介, 持橋大地 (2020). 単語分散表現の結合学習による単語の意味の通時的変化の分析. 言語処理学会第 26 回年次大会.
- Kazuma Kobayashi, Taichi Aida and Mamoru Komachi (2021). Analyzing Semantic Changes in Japanese Words Using BERT. In Proceedings of the 35th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 2021), pp. 273-283.
- Taichi Aida, Mamoru Komachi, Toshinobu Ogiso, Hiroya Takamura, Daichi Mochihashi (2021). A Comprehensive Analysis of PMI-based Models for Measuring Semantic Differences. In Proceedings of the 35th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 2021), pp. 21-31.
- Seiichi Inoue, Mamoru Komachi, Toshinobu Ogiso, Hiroya Takamura and Daichi Mochihashi (2022). Infinite SCAN: An Infinite Model of Diachronic Semantic Change. The 2022 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (EMNLP 2022).
- 井上誠一, 小町守, 小木曾智信, 高村大也, 持橋大地 (2022). ガウス確率場による単語の意味変化と語義数の同時推定. 言語処理学会第 28 回年次大会.

日本語学会2023年度春季大会予稿集

発行日（ウェブ公開日）：2023年4月28日

大会会期：2023年5月20日・21日

〔大会企画運営委員会〕

石黒圭（委員長） 庵功雄（副委員長） 池上尚 大田垣仁 太田陽子 小木曾智信（副委員長）
苅宿紀子 北崎勇帆 鴻野知暁 坂井美日 澤村美幸 田中祐輔 田中啓行（委員長補佐）
中川奈津子 松浦年男 宮澤太聡（委員長補佐） 李婷

〔大会実行委員会〕

澤田淳（実行委員長） *庵功雄 *石黒圭 遠藤佳那子 大江元貴 ***岡田一祐 *小木曾智信
*田中啓行 *田中祐輔 **野間純平 三樹陽介 *宮澤太聡 ***村山実和子 **八木下孝雄
**山田昌裕

（*大会企画運営委員兼任， **事務局委員兼任， ***広報委員兼任）